

スーパーグローバルハイスクール(SGH) 取組事例集



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN



筑波大学
University of Tsukuba



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

文部科学省が平成 26 年度より開始したスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業では、グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、様々な国際舞台で活躍できる人材の育成を掲げ、SGH 指定校 123 校における質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進めてきました。

2018 年 6 月 29 日には、「平成 30 年度第 1 回スーパーグローバルハイスクール連絡協議会・連絡会*」が開催され、SGH 関係者が一堂に会し、交流を深めました。本書はその分科会において指定校から発表された内容を中心にとりまとめたものです。

単なる英語力の強化に留まらない、より汎用的な能力の育成を目指すために、多くの指定校において、教科横断的なカリキュラム開発や海外研修を含めた体験的な学習など、先進的な取り組みが意欲的に実施されています。

その多様な成果を広く共有するために本書が活用され、SGH 事業や日本のグローバル教育の一層の充実が図られることを期待しています。

*連絡会の詳細についてはHPをご覧ください。 <http://www.sghc.jp/>

筑波大学副学長：附属学校教育局教育長 茂呂雄二

目 次

はじめに i

第一部 カリキュラム研究開発事例集

〔平成 26 年度指定校〕

北海道登別明日中等教育学校	1
宮城県仙台二華中学校・高等学校	3
群馬県立中央中等教育学校	5
早稲田大学高等学院	7
品川女子学院	9
横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	11
福井県立高志高等学校	13
長野県長野高等学校	15
立命館高等学校	17
徳島県立城東高等学校	19

〔平成 27 年度指定校〕

秋田県立秋田南高等学校	21
福島県立ふたば未来学園高等学校	23
千葉県立成田国際高等学校	25
東京工業大学附属科学技術高等学校	27
石川県立金沢泉丘高等学校	29
大阪府立豊中高等学校	31
関西学院千里国際高等部	33
関西創価高等学校	35
神戸大学附属中等教育学校	37
兵庫県立兵庫高等学校	39
島根県立隠岐島前高等学校	41

広島大学附属福山中・高等学校	43
広島県立広島中学校・広島高等学校	45
高知県立高知西高等学校	47

第二部 先進事例集

〔平成 26 年度指定校〕

筑波大学附属坂戸高等学校	49
渋谷教育学園渋谷高等学校	53
玉川学園高等部・中学部	57
お茶の水女子大学附属高等学校	61
筑波大学附属高等学校	65
神奈川県立横浜国際高等学校	69
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校	73
愛知県立旭丘高等学校	77
名城大学附属高等学校	81
立命館宇治中学校・高等学校	85
神戸市立葺合高等学校	89
島根県立出雲高等学校	93
広島女学院中学高等学校	97

〔平成 27 年度指定校〕

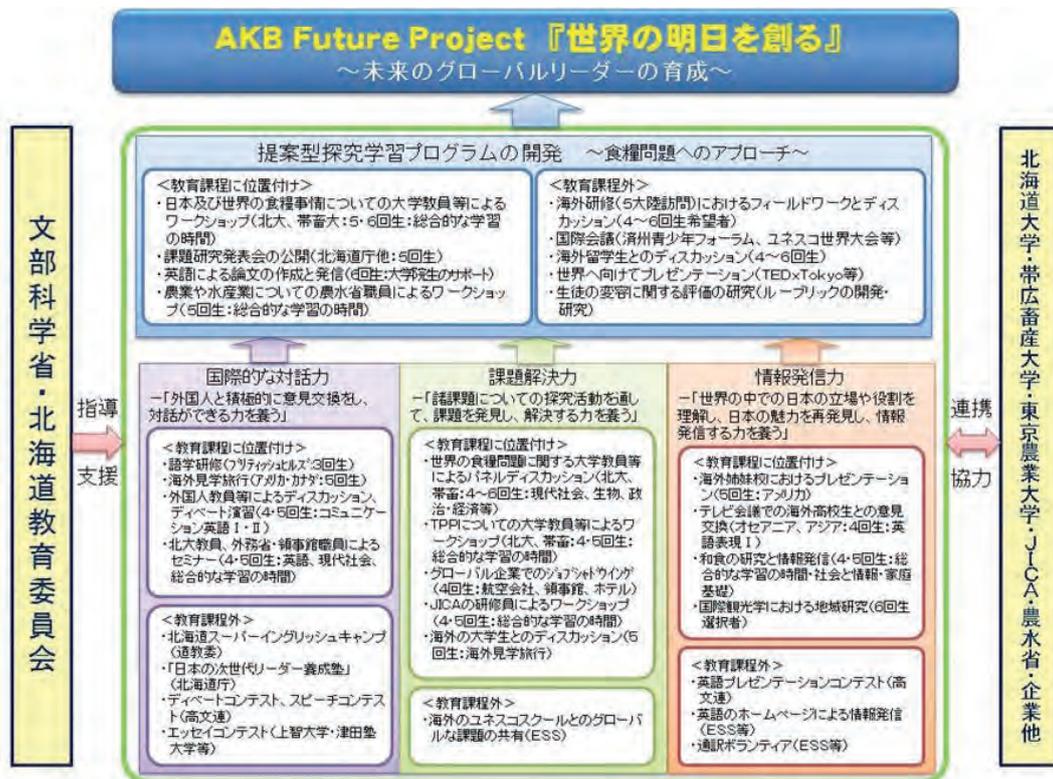
仙台白百合学園中学・高等学校	101
東京学芸大学附属国際中等教育学校	105
長野県上田高等学校	109
名古屋大学教育学部附属中・高等学校	113
京都府立鳥羽高等学校	117
大阪教育大学附属高等学校平野校舎	121
愛媛大学附属高等学校	125
中村学園女子高等学校	129
長崎県立長崎東高等学校	133

北海道登別明日中等教育学校

AKB Future Project 『世界の明日を創る』 ～未来のグローバルリーダーの育成～

【構想の概要】

新たな時代を築く有為な人材の育成を目指し、これまでの国際理解教育等の教育活動を基盤として、グローバル・リーダーとして求められる資質能力である「国際的な対話力」、「課題解決力」、「情報発信力」を育成するとともに、地域（北海道）や世界の食糧問題についての探究型学習に取り組むことにより、経済や環境、産業（主に農業）、地域振興など多面的、多角的な分野・領域から物事を考察する力を育成する。フィールドワーク（調査研究等）やディスカッション・交流活動等を実施することにより、日本人としての自覚（アイデンティティ）や誇りをもつとともに、国際的視野を広げ、将来、国際的に活躍し貢献しようとする人材の育成を図る。



単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
4回生	国語総合		国語表現	現代社会	数学Ⅰ	数学Ⅱ	数学A	物理基礎	化学基礎	生物基礎	体育	保健	芸術Ⅰ	英語Ⅰ	コミュニケーション	英語表現Ⅰ	SG社会と情報	総合的な学習	LHR													
5回生	現代文B	古典B	世界史A	物理基礎	体育	保健	英語Ⅱ	コミュニケーション	英語表現Ⅱ	SG家庭基礎	選択Ⅰ	選択Ⅱ	選択Ⅲ	選択Ⅳ	選択Ⅴ	総合的な学習	LHR															
6回生	現代文B	古典B	英語Ⅲ	コミュニケーション	英語表現Ⅱ	体育	選択A	選択B	選択C	選択D	選択E1	選択E2	総合的な学習	LHR																		

*「SG社会と情報」及び「SG家庭基礎」を中心として、課題研究を実施している。対象生徒は全校生徒。

課題研究の取組

4・5回生で実施している本校の課題研究の大テーマは食糧問題である。北海道



は日本の食糧基地であるという地域性や、生徒がテーマ設定をするにあたり、アプローチの方法が多様であるなどの理由からだ。

課題研究は、学校設定科目「SG社会と情報」及び「SG家庭基礎」を中心として、2単位のうち、60%程度の時間を課題研究の時間とし、4～5名のグループで研究を進めている。研究の進捗状況により、グループで話し合う時間を確保するため、集中週間として、2時間連続を2日間設定するなど弾力的に運用している。

課題研究グループが決定すると、各グループに1名の教員をアドバイザーとして配置し、論理の展開や研究の進め方などについてアドバイスをする。校長も含めて全教員がアドバイザーとして、普段は接点のない生徒や、専門外のことをテーマにしている生徒の研究を担当することもある。このように、全教員が課題研究を指導することで、生徒が身に付けている能力や、不足している能力などへの理解を深めることにもつながっている。研究は1年単位で、ポスターセッションによる発表及びレポート提出を課している。また、発表資料やレポート作成は、構成を統一するよう生徒を指導している。

ルーブリックの作成と各教科との関連

本校の構想では、「国際的な対話力」「課題解決力」「情報発信力」を育成するとしている。ルーブリックを活用することにより、課題研究を中心とした探究活動で身に付ける力を、教員だけでなく生徒にも明確に示すことができる。

資質・能力の育成に関しては、各教科と関連を図った指導が欠かせないことから、ルーブリックの実践のため校内研修を実施し、各教科で研究授業をするなど積極的に活用した。さらに英語科では、6年間のプレゼンテーションルーブリックを作成した。ルーブリックは、主としてパフォーマンス評価で活用される項目が多いため、昨年度から、目指す生徒像について議論を始めており、今後その資質・能力

に関するルーブリックを作成する予定である。現在のルーブリックを包括するものと位置付けている。

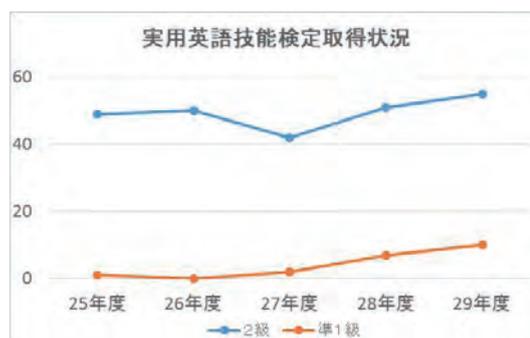
他に、教科との関連を明確にするために、全教科のシラバスに、食糧問題に関わる單元には「食糧」、言語活動に重点を置く單元には「言語」というマークを付けている。

英語に関する取組

海外フィールドワーク、テレビ会議システムによる海外の学校との交流、後期生対象のイングリッシュキャンプなど、英語



に関連する取組として、外部との交流の機会を増やしたことにより、コミュニケーション力やプレゼンテーションスキルが向上し、英検も2級や準1級と、上位級の取得人数が増加している。



今後の研究課題

6年間で、系統的に指導し、生徒に確実に力を付けることが課題である。そのため、生徒のテーマに関連するトピックの基礎的な知識は、各教科と関連を図った指導をしていくなど、各教科等横断的な視点で教育課程を改善する必要がある。さらに、教育課程を見直し、批判的思考力、情報処理能力などの資質・能力についても年次段階ごとに育成を図っていく必要がある。今後は、各教科で1年次～6年次でどのような能力が育成されるかを洗い出し、教科等を横断して整理していく。



宮城県仙台二華中学校・高等学校

北上川／東北地方、メコン川／東南アジアをフィールドとした世界の水問題解決への取組

【構想の概要】

年に2回、6～10名の高校生が、東南アジアの農村、漁村、山村を訪問し、現地住民へのインタビューから水問題を発見し、現地の人々が自らの手で解決できる方法を考える一連のプログラム。現在高校2年生44名、3年生14名（年度によって変わる）が5つのプロジェクトに挑んでいる。

本校生徒は、3年間で最大8単位の課題研究という授業を履修することができ、この間に課題研究、フィールドワーク、言語活動が一体となった取り組みによって、「適切な世界観」、「共感する力」など5つの資質・能力を育成することを目標としている。

最も進んでいる雨水グループでは、実際に現地で雨水収集システムを貧困家庭に取り付け、試行錯誤しながら自分たちでお金を出して購入し、維持できるシステム作りを目指している。

SGHの指定が切れる平成31年度以降も外部資金を調達しながらこれまでの活動をほぼ全面的に継続する予定である。



単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	合計
躍動期	高1年一貫生	国語総合			世界史A		現代社会		数学I	数学A	数学II	物理基礎	生物基礎	保健	体育	音楽I 美術I 書道I	シヨン英語I	コミュニケーション	英語表現I	家庭基礎	SGH課題研究I	LHR	35													
	高2年文系	現代文B	古典B	日本史B	地理B	倫理	数学II	数学B	数学α	化学基礎	地学基礎	化学基礎	保健	体育	シヨン英語II	コミュニケーション	英語表現II	SGH課題研究II A	LHR	35																
	高2年理系	現代文B	古典B	日本史B	地理B	数学II	数学B	数学III	化学基礎	地学基礎	化学	物理	保健	体育	シヨン英語II	コミュニケーション	英語表現II	SGH課題研究II A	LHR	35																
飛翔期	高3年文系	現代文B	古典B	日本史研究 地理研究 倫政研究	数学研究β	生物学活用	化学活用	世界史B	政経	倫政研究	体育	シヨン英語III	コミュニケーション	英語表現II	SGH課題研究	LHR	35																			
	高3年理系	現代文B	古典B	日本史研究 地理研究 倫政研究	数学III	数学研究γ	物理学活用	地球科学活用	古典A 音楽II 美術II	英語研究 フードデザイン	現代文研究 音楽専門 美術専門	シヨン英語III	コミュニケーション	英語表現II	SGH課題研究	LHR	35																			

徹底的な現場主義（フィールドワーク）

日本でいくら予備調査をして問題を「発見」していても、現地の人の話を聞くと全然問題と感じていないことが多々あった。そこで、本校では現地で住民に直接インタビューを行うことから始めることにした。

これまでに、フィールドワークを行ったのは、タイ6地域、カンボジア1地域、ラオス1地域、ベトナム1地域の4か国9地域である。主に、山村、農村、漁村をまわって、民家を直接訪問し、家族が抱えている水に関連する問題について1軒につき約1時間半の聞き取り調査を行った。

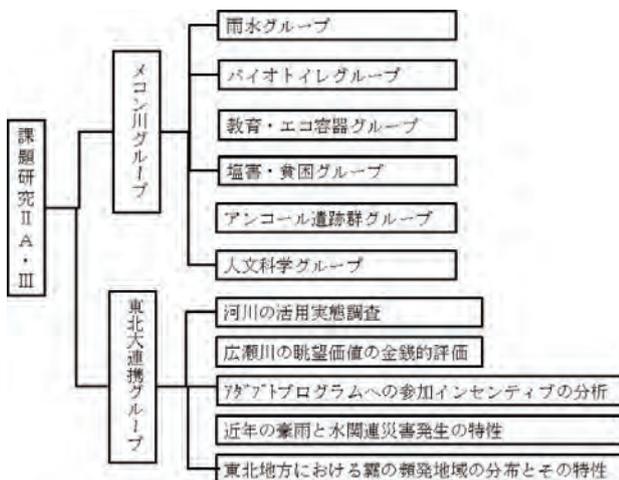
結核が多い地域でもあることから、「最近病気に罹った人はいますか」という問いから始めるなど、本校フィールドワーク独自のノウハウも生徒と一緒に蓄積し、「課題研究ガイドブック」として冊子にしている。



水問題「解決のための」取り組み

本校の課題研究の中心である課題研究ⅡAは、平成30年度44人の選択者がおり、34人のメコン川グループと10人の東北大連携グループに分かれる。メコン川グループでは、上記訪問地域の中から現在5つの（下の図の上から5つ）問題を解決しようと取り組んでいる。

各グループでは、現地住民や官公庁、NPOのスタッフからの聞き取り調査及び文献調査をもとに、その問題が生じるプロセスを構造化し、解決策を模索する。



生徒は現地住民のニーズを十分に考慮しながら、住民が自分たちの力だけでその問題が解決できる方法を考える。そして実際に現地で試行させてもらい、半年ごとに訪問するフィールドワークで改良を重ねていく。

下の写真はトンレサップ湖水上集落に雨どいとタンクを設置した様子である。生徒たちは現地で材料を買い求め、現地で工作を行い、実際に数軒の家庭に設置してきた。



成果の発表と普及

水問題は健康や安全に直結するため、常に我々の考えが間違っていないか細心の注意が必要である。

昨年度は2・3年生合わせて66名が10以上の国内外の学会、シンポジウム等で発表する機会を頂いた。ある工学系の学会では、「高校生が誰かのために一生懸命研究する姿を見て、研究の原点を見させてもらった」というお言葉で励ましていただいた。また、水問題はこれから一層深刻化すると予想されているので昨年度は6校の近隣の小中学校に啓蒙活動にも出かけた。

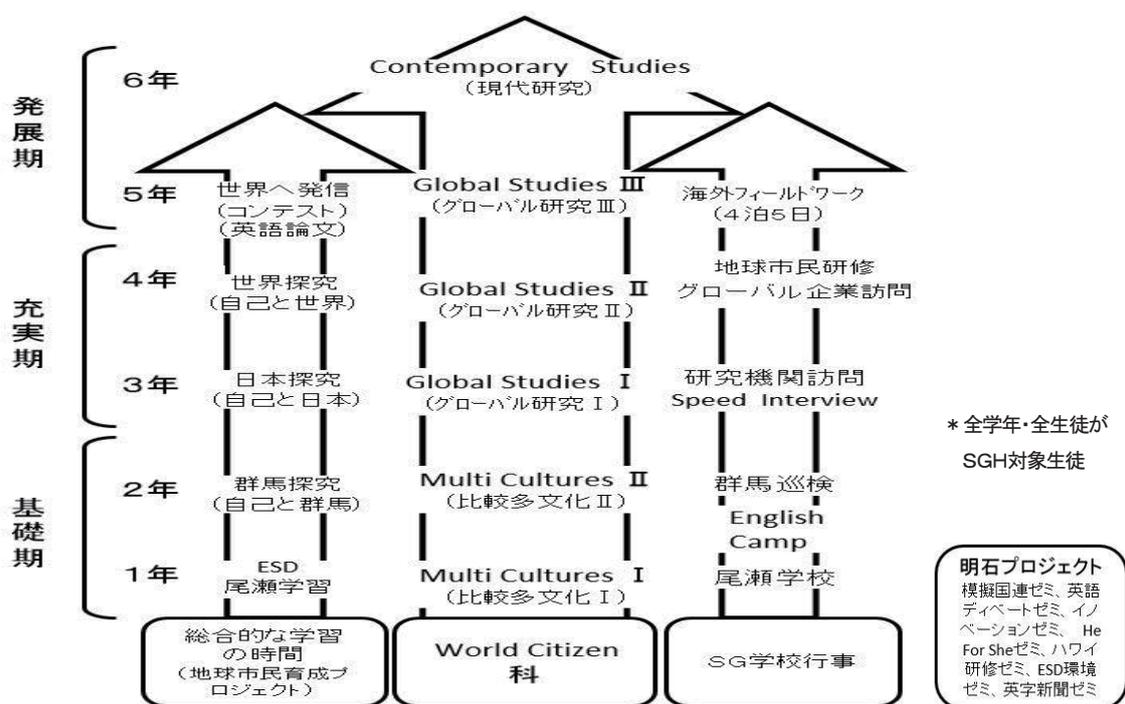


群馬県立中央中等教育学校

「地球市民としての日本人」の育成を土台とした グローバル・リーダー育成

【構想の概要】

現代の日本人に必要なグローバルな視野と多文化感覚、郷土意識を体験的に身に付け、国際的なコミュニケーションの手段として高度な英語運用能力を土台とし、グローバルな課題を旺盛な問題意識により発見し、それを粘り強いチャレンジ精神と創造的、探究的思考力で積極的に解決できるグローバル・リーダーを育成することを目的とする。



	0	5	10	15	20	25	30											
前期課程	1年	国語	社会	数学	理科	音美	体育	技術家庭	外国語	MCT	道徳	学活	総合					
	2年	国語	社会	数学	理科	音美	体育	技術家庭	外国語	MCT	道徳	学活	総合					
	3年	国語	社会	数学	理科	音美	体育	技術家庭	外国語	GSI	道徳	学活	総合					
後期課程	4年	国語総合	世史A	現社	数I	数II	数A	物理基礎	生物基礎	音楽または美術	体育	保	家庭	コミュニケーション英語I	EGOM I	GSI II	LHR	総合
	5年文系	現代文B	古典B	日史Bまたは地理B	世史探究	数学II	数学B	化学基礎	体育	保	情報	コミュニケーション英語II	EGOM II	GSI III	LHR	総合		
	6年文系	現代文B	古典B	地歴選択	地歴公民選択	数学、古典、英語選択	理科、英語選択	体育	コミュニケーション英語III	EGOM III	GS	LHR	総合					
	5年理系	現代文B	古典B	地理B	数学II	数III	数学B	物理または生物	化学基礎	体育	保	情報	コミュニケーション英語II	EGOM II	GSI III	LHR	総合	
6年理系	現代文B	古典B	地歴公民選択	数学III	数学探究	物理または生物	化学	体育	コミュニケーション英語III	EGOM III	GS	LHR	総合					

研究開発の4本柱

本校のSGHの取組で最も大きな特徴の1つは、全生徒及び全教員が関わる「地球市民育成プロジェクト（総合的な学習の時間）」及びWorld Citizen科（学校設定科目）を、スーパーグローバル（SG）学校行事、明石プロジェクト（課外ゼミ活動）と複合的に結びつけ、学校のあらゆる教育活動の場面においてグローバル人材育成の目標を意識した実践を行うことにある。

総合的な学習の時間においては、尾瀬→群馬→日本→世界という流れで、学年を追うごとに地元で生きる自分から視野を拡大していき、最終的には世界で生きる自己を見据えた上で、自らのメッセージを英語で世界に発信することを目指して個人研究を行う。World Citizen科においてはICT・統計資料活用基礎能力、多文化基礎理解に始まり、グローバルな社会意義を持つ幅広い8つの分野（国際事情・世界の宗教・国連活動・国際経済・グローバルビジネス・ESD・環境問題・比較文化）から生徒自らが自由に研究課題を設定し、グループ研究を行う。そしてこれらの課題研究活動を通して生徒が身に付けた資質・能力を、多様なSG学校行事や明石プロジェクトの活動において更に自発的・主体的な形で発揮させることで、グローバルリーダーの育成を図っている。

全員の学び合いによる創造性

課題研究の中心となる活動は、前期課程（1～3年）、後期課程（4～6年）を問わず一貫して実践している、生徒同士のディスカッションと発表会である。1時間の授業のほとんどを生徒同士のディスカッションの時間に充て、評価基準として共感・批判・指摘・提案の4つの視点を持ち、自分の能力に合わせて積極的にディスカッションする。この取組により、発表会の質疑応答では学年を超えて質の高い議論のやり取りができるようになった。

発表会は年間に校内だけでも8回以上開催（主に7月、9月、2月、3月）している。生徒は他学年の研究に触れることで、上級生の発表を聴いて具体的

な目標（ビジョン）を持てたり、下級生の発表に対して自身の経験から適切に助言ができたりするようになってきている。また、連携大学から多数の指導助言者を招聘し、専門的な指導も受ける機会となっ



ていることから、大学生や大学教員らの助言等を通して、将来の目標（ビジョン）を持つ機会となっている。

このように、教員に頼らず、生徒同士（同級生や他学年）や指導助言者とのディスカッションの機会をできるだけ多く設けるという指導方法により、「発見した課題の解決に際して明確なコンセプトや創造的なビジョンを示せる人材」の素養が備わりつつあると考えられ、県や全国のコンテストにおいても大きな賞を獲得するという形で着実に成果として表れてきている。

教科のSGH化への取組み

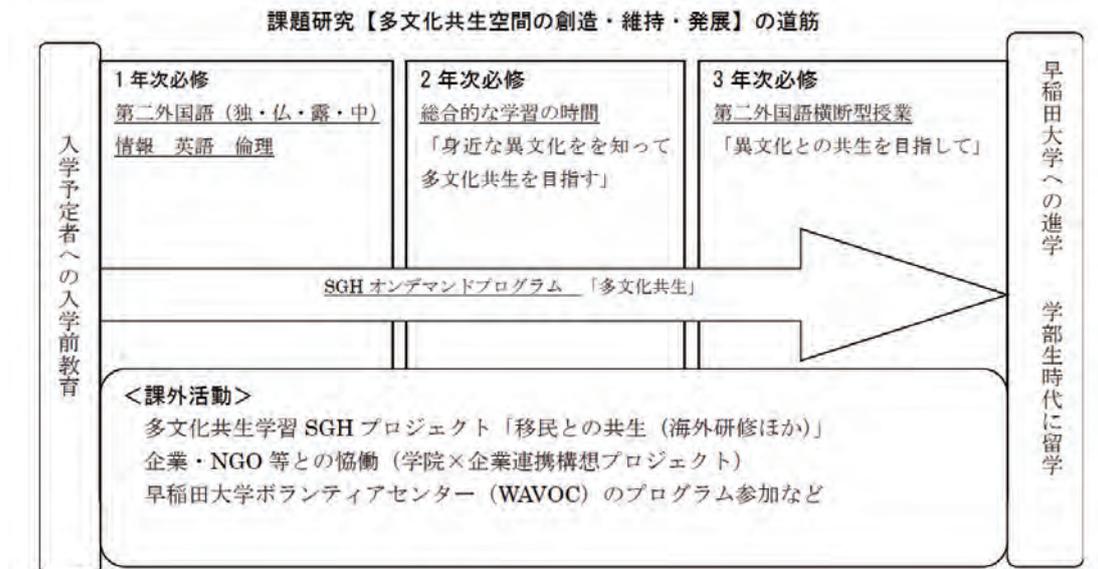
昨年度、本校のSGHを中心とする教育活動全体の成果を評価するためのツールとして、包括的なグローバル人材育成評価ルーブリックを作成した。ルーブリックは4つの領域、12の力、36の力の構成要素から成り、本校の教育目標の全体像を具体的に表現するものとなっている。本年度はルーブリックの運用の初期段階と位置づけ、育成目的の利用を重視して生徒の自己評価を実施するとともに、ルーブリック評価指標と教科の授業目標・活動の関連づけを行い、教科指導の中でグローバル人材育成をいかに実現していくかを探究するため、公開授業や情報・意見交換会を積極的に行っていく予定である。

多文化共生社会を創造する グローバルリーダー育成プログラム

多文化社会で自己を主張して集団的意思決定に関わりながら、集団に継続的に関与し続けるリーダーの育成

【構想の概要】

学内外における異文化との接触機会を増やし、学校が「異文化」や「多様性」を日常的に考えられるような、世界に開かれた多文化共生空間となること自体を課題研究のテーマとした。その課題研究を実施するために、「教科内の取組」「環境づくりと機会設定」「課外プロジェクト活動の充実・発展」という3つの分野で様々な研究開発単位（総合的な学習の時間、第二外国語の授業、大学との接続など）を実施した。多文化共生空間としての学校を維持・発展させるには、コミュニケーションの機会なくしてはありえず、引き続き母語・外国語を問わず「言語化」を重視した学校像を模索したい。



教育課程表

教科	1年次		2年次		3年次		教科	1年次		2年次		3年次	
	科目	単位	科目	単位	科目	単位		科目	単位	科目	単位	科目	単位
国語	国語総合 現代文	2	現代文B (前)	2	現代文B (後)	2	家庭	家庭基礎	2				
	国語総合 古典	2	古典B (前)	2	古典B (後)	1		情報	社会と情報 (前)	1	社会と情報 (後)	1	
地理歴史	世界史A	2					芸術	音楽 I・美術 I・書道 I	2				
公民	倫理	2			政治・経済	2		選択科目			文理コース別選択	8	文理コース別選択
数学	数学I	3	数学II (a)	2									自由選択科目2
	数学A	2	数学II (b)	2								大学準備講座2	2
理科	物理基礎	2	生物基礎	2			総合的な学習の時間			総合的な学習の時間	1	総合的な学習の時間	1
	化学基礎	2	地学基礎	2				ホームルーム	ホームルーム	1	ホームルーム	1	ホームルーム
保健体育	体育	2	体育	2	体育	3	合計			34		34	
	保健	1	保健	1									
外国語	コミュニケーション英語I (a)	2	コミュニケーション英語II (a)	2	コミュニケーション英語III (a)	1							
	コミュニケーション英語I (b)	1	コミュニケーション英語II (b)	1	コミュニケーション英語III (b)	2							
	英語表現I	2	英語表現II (前)	2	英語表現II (後)	2							
	ドイツ語I・フランス語I・ロシア語I・中国語I	3	ドイツ語II・フランス語II・ロシア語II・中国語II	3	ドイツ語III・フランス語III・ロシア語III・中国語III	2							

第二外国語教育を通じた異文化理解の促進

本校では、全生徒が英語だけでなく、フランス語・ドイツ語・中国語・ロシア語の4言語から選択した第二外国語を、高校1年生から3年間で最低8単位学習する。3年間クラス替えのないHRクラス自体が、語学選択によって決定されるため、日常生活・学習空間からその言語と文化に対する関心に結びつきやすい。そうした既存の環境をさらに積極的に推進するべく、第二外国語4言語で、従来の日常会話や文法学習を超え、異文化理解を意識したインタビューで利用できる発信型の教材を開発し、それに基づき授業を展開した。さらに、日本滞在中の4言語の母語話者にインタビューを行い、そこから文化的摩擦や共生への障害を浮き彫りにして、解決策を模索する「第二外国語(4言語)横断型プロジェクト授業」も開発した。これは言語別の授業内で実施するだけでなく、各言語の代表者が授業を通じて発見した問題点を学芸発表会の場で紹介し、学内外の生徒と共有している。これは、生徒自身が問題発見から解決を試みる実践であると同時に、言語ごとの垣根を超える「横断型学習」の実践ともなっている。

ロクワ高校との合同授業風景(高2仏語・2017年度)

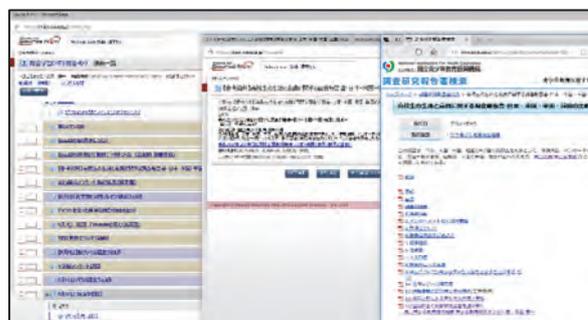


総合的な学習の時間を通じた課題研究

「総合的な学習の時間」では、学年を跨いで「自ら問いを立て、仮説をつくり、論証して、議論する力」をつけることを目指している。高校3年次は、早稲田大学13学部が守備範囲とする幅広い学術的関心に繋がるような「自分だけの問い」を立て、1万2000字程度の卒業論文を執筆する。その前段階である2年生の「総合的な学習の時間」では、緩やかな共通テーマを設定し、個人およびグループワ

ークで問いを立て、「仮説をつくり論証していく活動」を行う。1学期の共通テーマは「学院生の特徴」をテーマに、ローデータを基にしたクロス分析までを個人で行う。2学期は、「身近な異文化を知って多文化共生を目指す」をテーマとして、グループで課題解決に向けたプレゼンテーションまでを行う。3学期は課題発見解決型の4テーマを掲示し、小論文の指導を行う。高2総合の授業はどの段階においても、学内情報通信環境を用いた「ネット上での資料提供や課題提出」を積極的に行うようにした。その結果、9教科に跨る20名の教員が一定の枠組みの中で担当することが可能となっている。生徒ごとに多様な経験をしている学校において、カリキュラムの統合的な役割も負っている。

情報通信環境を用いた資料提供と課題提出



フィールドワークと体験に基づく言語化

課外活動として、複数のゼミ活動を構成要素とした「多文化共生学習SGHプロジェクト」を開発し、展開した。この活動に参加する生徒は、多文化共生を進める国内外の各都市でフィールドワークを実施し、少子高齢化問題や人口減少問題なども視野に、現実の課題に対するアプローチを考えてきた。これらの成果を学内外の生徒に展開するべく、ポスター発表や学内外の成果報告の場に積極的に参加してきた。同時に、仮説論証の材料としてのみフィールドワークを捉えるのではなく、そこで得られた体験を生徒自身の人生における動機付けに展開できるように、早稲田大学ボランティアセンター(WAVOC)の実施する授業「体験の言語化」プログラムとの接続を図り、生徒の経験を生徒自身の言葉で表現していく学習メソッドの開発も行った。母語・外国語を問わず「言語化」は、本テーマにおいて重要なキーワードとなった。

学校と社会が連携し、「起業マインド」を持つ 女性リーダーを育成する研究

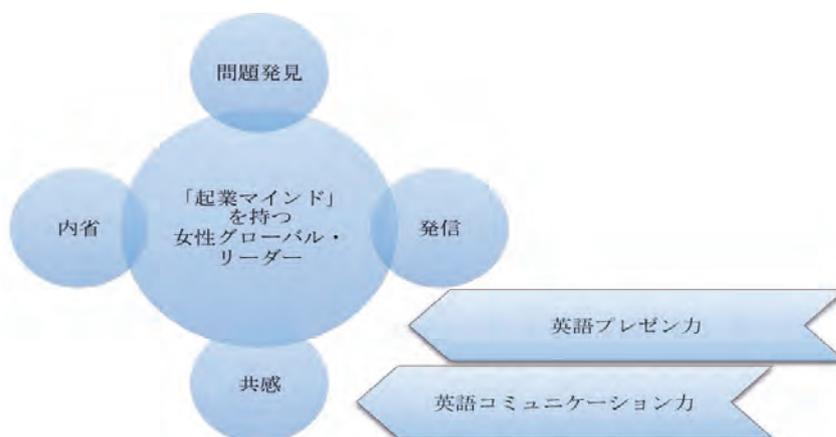
【構想の概要】

自ら社会の問題を発見し、多様な人を巻き込んで問題解決に一步を踏み出す人の育成を 目指し、6つの力（問題発見力・共感力・内省力・発信力・英語コミュニケーション力・英語プレゼン力）を身につけさせるために、有機的に関わる 4つの課題研究を生徒に 課す。いずれも学校外と連携し、生徒が主体的にチャレンジできる場を用意する。

【高等部カリキュラム】

1年	国語総合4	古典B2	世界史A2	現代社会2	数学I 3	数学A3	物理基礎2	化学基礎2	体育3	芸術I 1	コミュニケーション 英語I 3	英語表現 I 2	英語表現 II 2	社会と情報 2
2年(文)	現代文B3	古典B 3	世界史B3	日本史B3	倫理2	数学II3	数学B2	生物基礎2	体育2 保健1	芸術I 1	家庭基礎2 英語II 4	コミュニケーション 英語II 4	英語表現 II 2	
2年(理)	現代文B2	古典B2	地理B3	数学II 3	数学B3	生物基礎2	化学3	物理3/生物演習1 3	体育2 保健1	芸術I 1	家庭基礎2	コミュニケーション 英語II 4	英語表現 II 2	
3年(文)	現代文B4	古典A3	世界史5/日本史5	世界史演習2/日本史演習2		体育2	保健1	コミュニケーション英語III 4	英語表現II 2	英語演習2				
3年(理)	現代文B2	数学III・数学演習/数学I演習・数学II演習7		物理演習/生物/化学演習 3		物理演習II/生物演習II/化学演習II 4		体育2 保健1	コミュニケーション英語III 4	英語表現II 2				

【SGH対象生徒】高等部1～2年全員、3年希望者（2年目より、プログラムの一部を中等部3年全員で実施）



どのプロジェクトにおいても、学校外と連携して課題に取り組むように計画した。P1では、デザイン思考による問題発見力の基礎を学習した後、協力企業とのコラボレーション授業及び文化祭での発表で活用させ、深めるというサイクルを確立した。P2では、身近なところからリーダーシップを考察することから発展させ、グローバルな視点から考察を深められるように、SDGsの学習を組み込んだ（シンガポール・リーダーシップ研修の実施、SDGs特別講座等）。P3では、1学期末～2学期の高等部2年家庭基礎の授業において、自分の生活の中に解決すべき課題を発見し、解決への道筋をつけ、その成果を発表共有する問題解決型学習を実施した。なお、英語科との連携をより一層深め、英語でプレゼンテーションができるように、指導を行った。P4では、P1～P3の総まとめとして、文化祭における起業体験プログラムの実施、SBP主催のアイディア・プレゼンテーション大会や外部のビジネスプラン・コンテスト等に積極的に参加する機会の設定を行った。

【P1】デザイン思考の講座

高1の総合的な学習の時間（週1時間）に実施していたが、他の講座の基礎となる講座であるため、2年目より、中3に前倒して実施（道徳と2時間連続した時間割にして、前半は全体講義、後半は各クラスでグループワーク）。身近な事象から問題を発見させることを重視し、そこから、他者及び社会とのつながりを考えさせた。

担任教員に、デザイン思考に習熟した外部ファシリテーター（慶應義塾大学坂井直樹前教授の指導を受けた大学生、(株) CURIO SCHOOL 所属の大学生等）を加えることで、学習効果を高めると同時に、教員のファシリテーターとしての能力育成も企図した。

各班の成果は常にプレゼンテーションで発表・共有した。



【P2】リーダーシップ講座

「共感力」「内省力」を身につけることを目標として、高1の総合的な学習の時間に実施。学校行事等への自らの関わり方を吟味することで、クラスやチームにおいて実践できるリーダーシップの発揮の方法を、さらに、具体的な事例を通して、社会課題の解決にリーダーシップがどのように活かされているのかも学習した。

さらに、国際的な課題を自らの問題として認識させることを意図して、River Valley High School（シンガポール）のリーダーシップセミナーに選抜生徒を参加させるプログラムと、SDGsから自分の課題を選んで調査、考察し、英語で発表する希望者対象講座（学年と公民科、英語科との共同指導）を追加実施した。

【P3】家庭科 CBL

高2の家庭基礎2時間を連続授業で編成（全8週）。2時間連続の後半はもう1名の家庭科教員を配置し、ティーム・ティ칭を実施。各教科から立候補した19名の教員がメンターとして授業に参加し、各班の研究計画書とプレゼンリハーサルの

チェック、助言を行った。さらに、地歴科教員による「研究・調査の進め方」講義、英語科教員によるプレゼン指導も取り入れた。指導においては、一次情報の収集と課題解決へのAction Planの実施を重視した。

Kolbe Catholic College（オーストラリア）とは以下のような連携を実施した。

- ・萩原伸郎先生によるワークショップの実施。
- ・テーマに対する生徒の意見収集（メール等にて）。
- ・Kolbe Catholic CollegeのCBL Classでプレゼンテーションとディスカッションを行うオーストラリア研修（優秀2班、8名程度）の実施。



【P4】起業プランコンテスト等に参加

①起業体験プログラム

高1、高2の総合的な学習の時間と、9月の文化祭を活用して「企画立案→企業理念の確立→会社登記→株式発行→運営→決算→株主総会」という流れを体験的に学び、その過程で起業マインドの実践に取り組んだ。とくに、利潤の追求に終始することがないように理念（社会貢献意識）を重視して評価した。

運営面では、保護者、企業関係者にサポート委員として参画していただき、事業計画や会計処理への助言、最終審査について協力していただいた。

②「Business Solution」の授業

高1社会と情報（全10回）で、起業体験プログラムの振り返りを行った上で、各自がビジネスプランを立案した。外部のビジネスプランコンテストにつなげるとともに、高2での家庭科CBL、起業体験プログラムにも活かしていくことを意図している。

各生徒のプランの指導においては、(株)ワークスアプリケーションズの協力も得た。

③起業プランコンテストへの参加

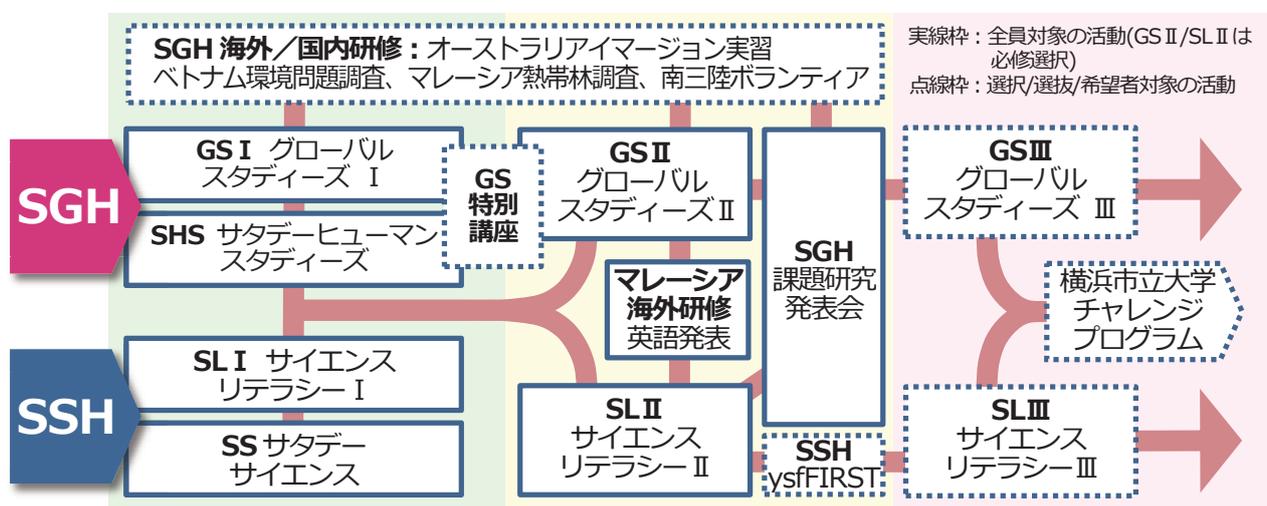
ソーシャル・ビジネス・アイデア・プレゼンテーション、ビジネス創造コンテスト（一般枠（社会人の部）で1名がオーディエンス賞を受賞し、中高生の部で1名が最優秀賞、1名が優秀賞に選出された）等、外部の起業プランコンテストに参加した。

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校

内外の多様な教育資源を活用した グローバル・リーダー教育の研究開発

【構想の概要】

- サイエンスの素養とコミュニケーション力を育成する本校の教育プログラムを前提とした「グローバル・リーダー育成に資する教育」の研究開発を行う。
- 横浜の地域性を生かすとともに、本校スーパーアドバイザー、科学技術顧問をはじめとする支援者・支援機関に加え、社会科学等の分野を専門とする研究者などの支援、協力を得て、研究開発を進める。
- グローバルスタディーズ（GS）運営委員会を中心とした全教職員による組織的な取り組みにより、グローバルスタディーズ、サタデーヒューマンスタディーズ、国内外の研修を柱とした「課題研究」を推進する。



単位数	1年次	2年次	3年次	
2	SL I	SL II / GS II	理数数学Ⅲ	
4	理数数学 I	理数数学 II	体育	
6		理数数学特論	現代文 B	
8	理数物理	理数理科 (物理・化学・生物・地学) から 2 科目	Reading Skills	
10	理数化学		Writing Skills	
12	理数生物			
14	理数情報			
16	現代社会 (GS I)	世界史 A	選択科目 (最大 20 単位) SLⅢ / GSⅢ (各 2 単位)	
18	芸術	日本史 A		
20	保健	家庭基礎		
22	保健	保健		
24	体育	体育		
26	国語総合	古典 B		現代文 B
28		コミュニケーション英語 I		
30	OCPD I	OCPD II		
32	LHR	LHR		LHR

※各学年 1 列を 2 単位分として表記しています。

※OCPD : Oral Communication for Presentation and Debate

1. GS II・SL IIでの課題研究活動に向けて

本校の生徒は2年次にGlobal Studies II (GS II) またはScience Literacy II (SL II) のいずれかを選択し、各自のテーマについて全員が課題研究を行う。

1年間の研究活動が有意義なものになるように、昨年度までは1年次のScience Literacy I (SL I)の授業で、テーマ設定の指導や助言を行ってきた。

2. SGH と SSH の連携に向けて

SGH 指定5年目となる今年度は、SGH と SSH の融合をテーマにGlobal Studies 担当者とScience Literacy 担当者が何度も話し合いを重ねた。その結果今年度1学期は、「SDGs を意識した課題研究テーマの設定」について、SSH のSL I とサタデーサイエンス (SS)、SGH のGS I とサタデーヒューマンスタディーズ (SHS) およびGS 特別講座を連携させ、以下のスケジュールで指導を進めている。



3. 「SDGs ×サイエンス」の取り組み(前半)

5月26日のSSでは、生徒は、課題研究テーマを設定する際に考えるべきポイントについての講演を聞き、翌週のSL Iで、グループに分かれて、実際にSDGsのゴールと科学の知識を組み合わせた研究テーマを設定した。

6月のGS Iでは、「清潔な水と衛生」をテーマとしたワークショップで、生徒は途上国の現状や先進国の食品ロスなどについて理解を深めた。



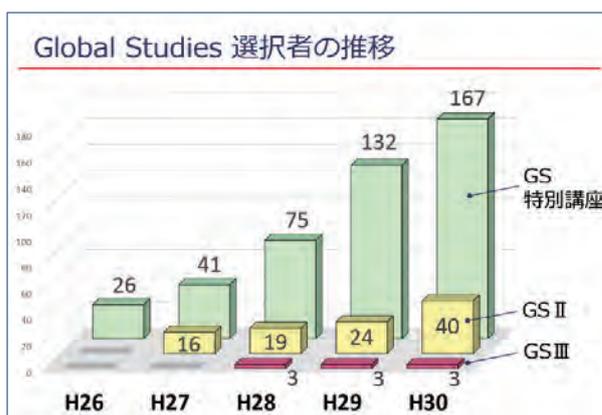
その後のGS 特別講座でも、SDGsに関する講義の後「ジェンダー」や「平和」などのテーマに分かれてグループディスカッションを行った。

4. 「SDGs ×サイエンス」の取り組み(後半)

6月23日のSSでは、前半の取り組みで生徒が設定した実際の研究テーマについて、優れている点や、再考すべき点などを全体で共有した。そして翌週のSL Iでは、SSで共有されたフィードバックを参考に、各グループがそれぞれの最終的なプランを決定し、プレゼンテーションを行った。

今後、7月のSHSでは、サイエンスの技術をグローバルな問題の解決に生かす企業の取り組みについて学び、生徒たちはGS Iの夏の課題につなげていく。

Global Studies の選択者もこの5年間で着実に増えている中(下表)、今後もSGH と SSH の活動のより良い連携について校内で議論を重ねていく。



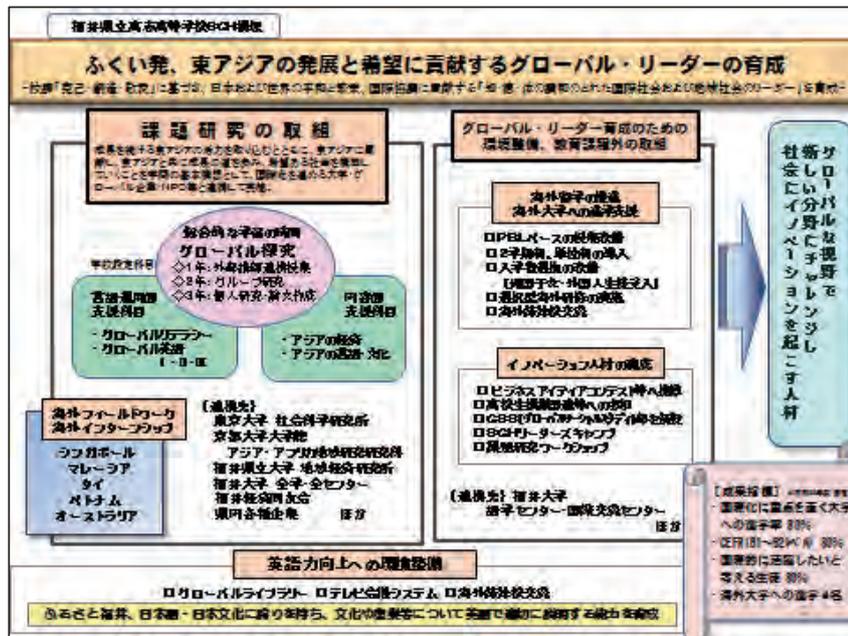
福井県立高志高等学校

ふくい発、東アジアの発展と希望に貢献する グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

本校の校訓「克己・創造・敬愛」に基づき、日本及び世界の平和と繁栄、国際協調に貢献する「知・徳・体の調和のとれた国際社会及び地域社会のリーダー」を育成する。

「克己（自律した）・創造（問題を解決できる）・敬愛（他者を理解し尊重する）」の校訓に基づき、「ふるさと福井、日本語・日本文化に誇りを持ち、グローバルな視野を持って新しい分野にチャレンジし、社会にイノベーションを起こす人」を育成すべきグローバル・リーダー像として掲げ、東アジア諸国の経済や生活文化等に関する課題研究を重視した教育課程の研究開発、英語力・グローバルマインド向上の取組、国際交流活動等により、地方の公立高等学校によるグローバル・リーダーシップ教育モデルを構築する。



【SGH・SSH学校設定科目等の比較】

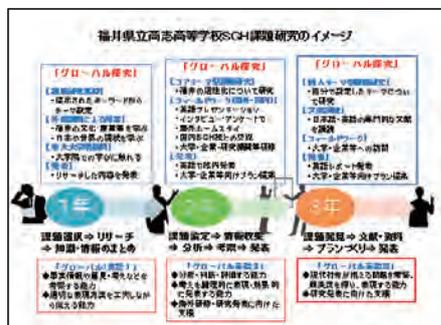
SGH科目名	単位数			目標・内容等	SSH対応科目
	1年	2年	3年		
グローバル探究	2	1	1	○1年次：連携授業 7時間1単元で課題探究の基本的なプロセスを学習 ○2年生：グループ別課題研究 ○3年生：個人研究	サイエンス探究
グローバルリテラシー	1			○日本の文化・産業等を説明する 国語力育成 ○情報の収集、分析、整理等の スキル養成	サイエンスリテラシー-国語
グローバル英語Ⅰ	3			○日本の文化・産業等を説明する 英語力育成 ○概要・要点把握、情報伝達の 英語力育成	サイエンスリテラシー-英語Ⅰ
グローバル英語Ⅱ		3		○情報・意見等を述べる英語力 の育成 ○社会科学的な内容の英文理解、 概要把握等	サイエンスリテラシー-英語Ⅱ
グローバル英語Ⅲ			3	○まよりのある英語で表現する 力の育成 ○社会問題、時事的なテーマの 英文理解、情報整理等	サイエンスリテラシー-英語Ⅲ
アジアの歴史・経済		1(選択)		○東アジアの歴史・経済・社会 等について学習	サイエンスリテラシー-国語
アジアの自然・文化		1(選択)		○東アジアの自然環境・生活文 化・工業等について学習	サイエンスリテラシー-国語

※本校では各学年80名がSGH対象生徒。それ以外の生徒（各学年約180名）が全員SSH対象生徒となる。また「アジアの歴史・経済」「アジアの自然・文化」は2年次の「グローバル探究」に必要な知識を補完する目的で実施する科目である。

課題研究について

本校では、1年次に課題研究の基本的なプロセスを学習するために、7時間を1単元とする授業を3ラウンド行っている。各ラウンドでは核となる3・4時間目に大学・企業等から講師を招いて「連携授業」を実施する。講師には事前に課題を提示してもらい、1・2時間目にその課題に取り組む。「連携授業」後の5・6・7時間目にまとめや事後リサーチおよびその発表を行う。

2年次にはグループによる通年型課題研究に取り組む。初期はテーマを限定せずに自由に課題研究を行ったため、テーマが広範囲になりすぎて研究が深まらなかった。そこで、指定3年目より福井大学および福井経済同友会の協力を受け、県内企業から出される課題に取り組み提案を行うビジネスチームと、東アジアの人々に希望と幸福を届ける課題研究を行うホープ&ハピネスチームの2チームを編成した。その結果、研究内容の深まりが見られるようになってきた。今年度は、これらを再編し、「世界に発信!! 高志高生が創る福井の未来」を核とした「コアテーマ型課題研究」に取り組んでいる。



プレゼン時に考案したお土産の試作品を配付

成果と課題について

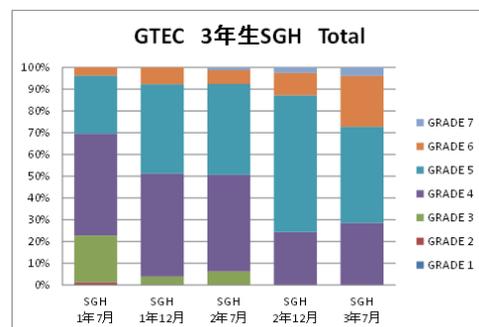
本校では成果を図るテストとして、「GPS - Academic」(思考力・表現力等) および「GTEC for STUDENTS」「GTEC Speaking Test」(英

語力) の受験を実施している。また、各種の能力の自己診断として「高志高生の意識・実態調査」を年2回行っている。

その結果を分析すると、本校生徒は「協同的思考力」および「創造的思考力」において全国平均を大きく上回るS評価を獲得している。特に「協同的思考力」においては本校受験者の約10%の生徒がS評価を得ており、「グローバル探究」におけるグループでの課題研究がこの結果につながっていると考えている。



また、平成29年度3年生SGH生のGTECの経年変化を見ると、3年次7月には約30%の生徒がトータルでグレード6以上となっており、着実に英語力が伸びていることが分かる。



27

一方で、講演会や発表会等で生徒からの質問などが少なく、積極性や質問力の面で課題が残る。また、既存の教科・科目におけるPBL型学習の導入による授業改善を行っているが、それによって生徒の意識がどのように変容したかの把握をすることも急務である。

グローバル・リーダーズ・キャンプ

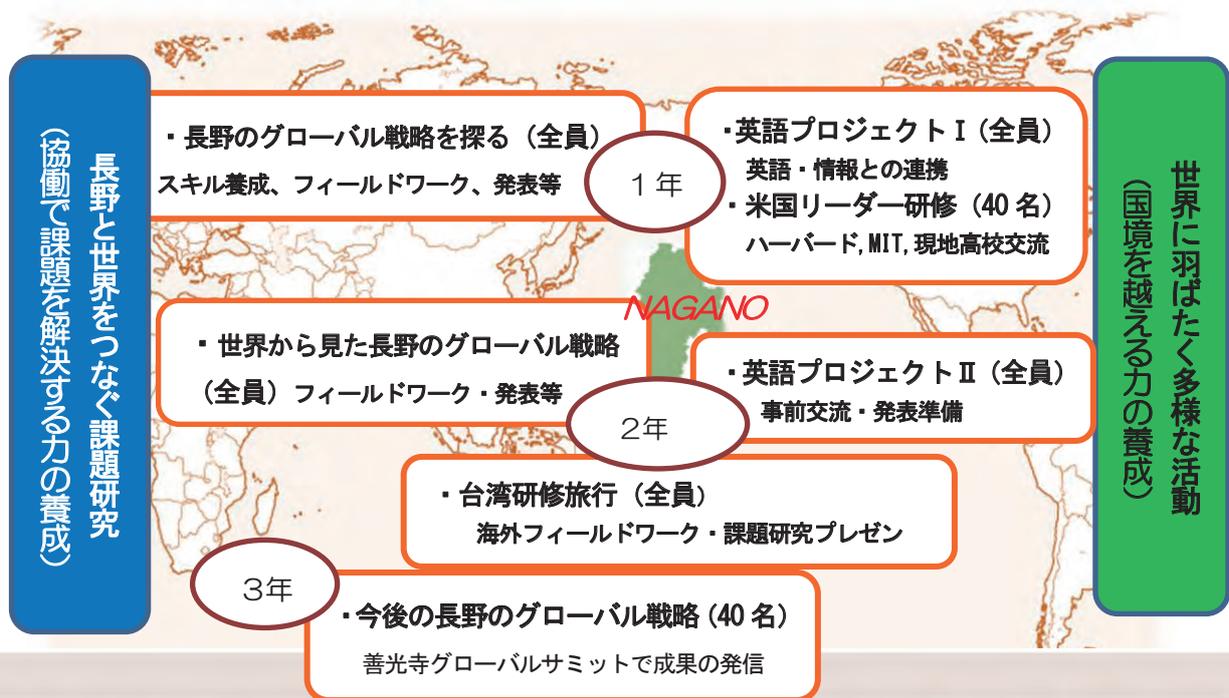
本校では海外の大学生をメンターに招き、英語を用いて様々なテーマについてディスカッションやプレゼンテーションを行う活動を県内外の高校とともに実施している。今年度は12月に実施を予定している。

長野県長野高等学校

観光を核にした国際都市 NAGANO を担う グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

普通科の生徒全員が取り組む探究活動を導入し、グローバル・リーダーに求められる論理的思考力及び発信力の育成をはかる教育課程を研究開発した。学校設定教科「SGH」を設け、総合的な学習の時間を「長野のグローバル戦略を探る」等に編成し、長野の地域力も含めた学校の持つリソースを活かして、活動の成果を発信する国際的な機会を設けた。



【教育課程】

1学年ではクラスでの授業を原則に、英数国を中心として基礎的な学力の定着を目指します。2学年からは希望進路にあわせて文系と理系に分かれての授業が始まります。3学年では選択する科目の時間が増え、進路実現を目指します。また、1学年からSGHに関わる科目に取り組み、世界的な視野での思考力や探究力を養います。

*平成28年度入学生用教育課程表。数字は単位時間数(50分換算の授業時間数/週)を示す。

学年	国語総合	世界史A	現代社会	数学I	数学II	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	芸術	英語I	英語表現I	家庭基礎	SGH	総合的な学習の時間	H
1学年	5	2	1	4	1	1	2	2	2	1	2	3	2	2	1	1	1
2学年	現代文B 2	体育 2	保健 1	芸術 1	英語II 4	英語表現II 2	古典B 4		地歴B (世B・日B・地Bから2科目)			数学II 4	数学B 1	地学基礎 2	SGH 1	総合的な学習の時間 1	H
							古典B 3	地歴3 (日B・地Bから1科目)	数学II 4	数学III 2	数学B 1	物理基礎 2	化学 2	理科2 (生・地から1科目)	総合的な学習の時間 1	R	
3学年	体育 3	英語III 4	英語表現II 2	現代文B 3	古典B 3	地歴・公民6 (世・日・地・倫・政から2科目)			数学A 3	数学B 3	理科基礎探究4 (化・生・地から2科目)		芸術1	総合的な学習の時間 1	H		
				現代文B 2	古典B 2	地歴・公民3 (日・地・倫・政から1科目)	数学II 2	数学A 3	数学B 3	化学 4	理科4 (物・生から1科目)	総合的な学習の時間 1	R				

日課表

	通常の日課	木
1時限	8:35~ 9:30	8:35~ 9:30
2時限	9:40~10:35	9:40~10:35
3時限	10:45~11:40	10:45~11:40
4時限	11:50~12:45	11:50~12:45
昼休み	12:45~13:25	12:45~13:25
HR	13:30~13:40	13:30~13:40
5時限	13:50~14:45	14:25~15:20
6時限	14:55~15:50	15:30~16:25
清掃	15:50~16:05	16:25~16:40

*A週・B週の時間割があります。
*B週日は7時限があります。

全校生徒が探究型学習を実践～2コマ連続「総合」と学校設定科目「英プロ」 通年実施で可能に

長野高校では、SGH 指定翌年の平成 27 年度から、1, 2 年生対象で 2 コマ連続、110 分の総合的な学習の授業を隔週で行っている（長野のグローバル戦略を探る・世界から見た長野のグローバル戦略）全校生徒対象の課題研究実践を目指す授業である。通常の時間割に 2 コマ連続の総合授業を取り入れることで、まとまった時間が確保され、1 回の授業で、「協働的な学び」に基づいたプログラムと「探究的学習」を実践するプログラムを連動させた授業が展開できる。例えば、前半でプレストとディスカッション、後半で PC を使ったりサーチとワークシート作成といった効果的な組み合わせである。本校が個人、グループの両方の課題研究を深めていく特徴が出せるのも 2 コマ連続授業の賜である。

さらに全員必修の学校設定科目「英語プロジェクトⅠ、Ⅱ」（通称「英プロ」）は、情報の授業内容を踏まえつつ、英語での発信力を育成するプログラムである。海外の高校生との共有スライドを用いたプレゼンテーション共同制作を通じて、グローバル社会での ICT を有効活用した協働性を体験的に学ぶ。ALT・グローバル講師（県独自採用）、英語科職員で企画する。積極的な交流姿勢を育成し、海外とのインターネット交流と訪問交流を後押ししている。これは、主体性の育成にも役割を果たしている。

授業と連動して主体性育成の場を提供する

長野高校の SGH 活動は「社会に対する主体性」の育成を目指している。そこで、主体的に関わりたくなる「場」の提供が重要になる。

課題研究の情報収集として実施しているフィールドワークがこの「場」にあたる。1 年次 11 月（終日）2 年次 6 月（半日）7 月（終日）の 3 回を保証している。長野高校では、総合的な学習の時間の授業内に、生徒達が自ら訪問場所を探し、アポイントをとり、質問内容を考え研究に活かしていく。教員は、締め切り設定、トラブル対応というマネジメント、相談を必要とする生徒への助言という、生徒の主体的な活動のサポートにまわる。ここでは、全職員により組織される班担当制度が機能している。そして、何より、「長野」（県及び市）というコミュ

ニティーの持つ社会教育への情熱と寛容さに支えられている。

台湾での発表活動も主体的に関わりたくなる「場」の提供である。11 月に 4 泊 5 日、学年全員 280 人で行う台湾研修旅行では、台湾・高雄市教育局の全面協力の下、7 クラスが現地の 7 高級中学を訪問交流する。生徒達の主体性を引き出す企画である。教員側は現地との調整に加え、「1 対 1 パートナー」「交流グループ」を作り、それぞれが連絡を取り合えるような環境を提供する。相手校には、長野高校が主導する形での発表することを認めてもらった上で、生徒同士が話して、部屋ごとの発表の形式を決める。このプロセスを「英プロ」で行う。このように、グローバルなプロジェクトに主体的に関わる場を生徒に提供する。



独自のプログラム・教材開発と成果の普及

集中的にスキル養成を行うため、1 年生については、夏季特編授業等を活用して、短期集中プログラム「インタビュー実践」を行う。講師を呼んでインタビューを行う 1 日とその前後の準備と振り返りの授業で構成される学習である。このプログラムは、大幅にカリキュラムを変更できない学校でも、課題研究導入に使えると思われる。

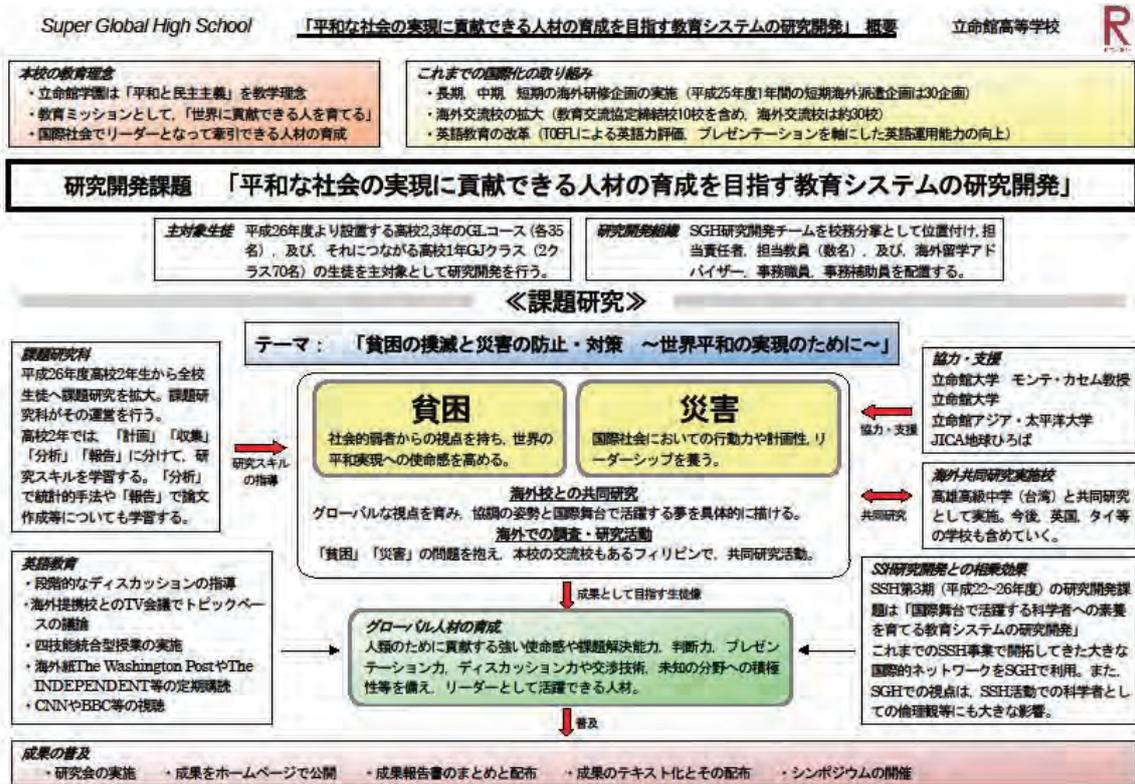
主に 2 年次から始める海外研修の発表準備は、課題研究のテーマを台湾でのプレゼンに落とし込み、英語による討論を体験する。そして帰国後、実体験をエビデンス化する所までを一連の流れとしている。長野県では、本校の海外研修を参考に台湾で交流を行う高校が増えてきた。これからも情報教育と英語を組み合わせることで他校においても実践が可能なプログラムを開発していきたいと考えている。

立命館高等学校

平和な社会の実現に貢献できる人材の育成を目指す 教育システムの研究開発

【構想の概要】

世界平和の実現を目指す使命感と諸問題に真摯に目を向け考察できる力をもって、リーダーシップを発揮し世界に貢献できる人材を輩出することを目指す。また、国際的な共同課題研究を推進していくための具体的手法を研究開発したい。そして、有効な教材や教育手段を明らかにし、それらを教育システムとして構築したい。



コア	高校1年	国語総合	世界史A	政治・経済 (現代社会解釈)	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	芸術I	体育	保健	コミュニケーション 英語I	英語 プレゼンテーション	社会 情報	総合	H R																				
CE	高校2年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
	高校3年	国語表現	古典B	日本史A (日本近代史)	数学II	数学B	地学基礎	芸術II	体育	保健	英語2A	英語2B	家庭基礎	文社特講I	高大連携I	課題研究	H R																			
SS	高校2年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
	高校3年	現代文B	古典B	地歴選択 地理B 日本史B 世界史B	倫理	数学3	理科選択 化学 生物 地学	体育	英語3A (演習含む)	英語3B	文社特講II	高大連携II	課題研究	H R																						
GL	高校2年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
	高校3年	国語表現	古典B	日本史A (日本近代史)	数学II	数学B	地学基礎	芸術II	体育	保健	英語2A	英語ディスカッションI	グローバルイングリッシュI	家庭基礎	現代社会システム	文化研究	国際比較	課題研究	H R																	

課題研究の指導、校内での成果共有の方法、教科間の連携について

2014年度より課題研究科（教科制）を立ち上げ、毎週の定例会議を設定して情報共有や研修に努めている。様々な教科教員が協働して取り組むことで全体への波及効果を生んでいる。また、課題研究活動とSGH各研修を結びつけて展開。さらに、長年のSSH課題研究指導の実績を活かしながら展開。生徒は2年・3年で各1単位を履修。3年の9月に校内生および外部教育関係者を招き中間発表会、1月に最終発表会を実施。グローバルイシューに関わる講演会や実地研修を経て、卒業時には成果論文を提出（GLコース生は英語論文）。研修については事前事後学習を重視し、学校説明会・全校集会・学年集会・クラス集会等で発表の機会を設け、自身の体験を言語化し伝える工夫をすることを通して、広く知見を共有している。

校務分掌の一つに「SGH推進機構」を設置し、週1回時間割の中に会議を設定。メンバーは教科の枠を越えて英語科、社会科、数学科、事務職員、副校長で計14名。また、各教科授業においてグローバルイシューを意識的に取り上げ、多角的に学習する等の工夫をすることでSGH活動を意識して実施している。

高大連携、他校への普及について

週に一度高校生が立命館大学に赴き、大学授業・AP科目を受講（単位認定）。国際関係学等について大学生とともに講義やゼミで学ぶ。また、大学から講師を招いた講演会やワークショップ等様々な取り組みを共同で展開している。立命館アジア太平洋大学からは留学中の国際学生を招き、ディスカッション等を展開。さらに、立命館大学生組織と連携してSDGsに関わるレクチャーやディスカッション等、高校生のキャリア形成に資する取り組みもおこなっている。

特色ある取り組み、SSHとの棲み分け・相乗効果について

SSH（2002～）、SGH（2014～）指定校。小中高大院一貫校。豊富な国際交流の機会（中高海外研修派遣人数877名、受入れ578名 2017年度実績）。RSGF（Rits Super Global Forum）は2014年度より実施し、2017年度は10か国14校が参加。

JSSF（Japan Super Science Fair）は2003年度より実施し、2017年度は25か国49校が参加。



RSGFでは、それまでの各実地研修と密接に結びついた課題研究活動の成果を披露するだけではなく、期間中海外生徒との長時間に渡るディスカッション等を経てアウフヘーベンされるプロセスを重視し展開している。また、フォーラムでの結論や提言・事後アクションの取り組みなどへと繋げることで、単なるイベント主義に陥ることのないように留意して実施している。

国際フォーラムの企画や運営をはじめとする知見、海外校とのネットワーク等についてはSSHの実績を活用。社会科学系のフォーラムを待望されていた他校や、潜在的な需要の掘り起こし等の契機にもなっている。SGHでのディスカッション・メソッドとその結論のありかたは、研究発表を主とするSSHの活動にも好影響を与えている。さらに、11月をInternational Novemberと銘打ち上記フォーラムやフェアを開催することで本校が国際交流の場となっている。

教育システムの制度設計としては、他に校内に「国際センター」を設置し、効果的な研修のあり方や生徒の動きを確認しながら事業の重複などの調整をはかることができている。



徳島県立城東高等学校

四国徳島発・人類の健康と環境に貢献する グローバルリーダーの在り方について

【構想の概要】

グローバルリーダーに求められる資質を探究していくにあたり、「四国徳島発・グローバル企業の創造戦略について」を研究テーマに、県内に拠点・本社が置かれているグローバル企業（大塚製薬、日亜化学工業）や大学（大阪大学、徳島大学）と連携し、5つのスーパーグローバルプログラム（以下、SGプログラム）を実施する。

自分たちが考える「グローバル戦略」「グローバルブランド」「CSR活動」や、グローバル化が世界に与えた社会的・経済的・政治的影響から予測する今後の世界の潮流等について、「課題研究」を希望別にグループに分かれて行う。人類の健康増進と環境保全の観点からも考察、発信していくため、大学・留学生等からサポートを受けて研究に取り組む。本校が主催するSGH発表会のほか、県内外での発表の場において発信することをおとし、持続可能な社会の発展に貢献するグローバルリーダーに必要な態度や素養を習得する。



＜平成30年度入学生 教育課程＞

※1年次の「21世紀」は21世紀を生きる、「CE」はCurrent English、「GH」はGlobal Healthです。

学年	科目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33		
1年	人文社会	国語	現代社会	21世紀	英語	CE	数学	化学基礎	体育	GH	芸術	家庭	情報	保健	英語																					
	文理	国語	現代社会	英語	数学	化学基礎	地学基礎	体育	GH	芸術	家庭	情報	保健	英語																						
	数理	国語	現代社会	英語	数学	物理基礎	生物基礎	体育	GH	芸術	家庭	情報	保健	英語																						
2年	人文社会	国語	世界史B	日本史B	英語	数学	生物基礎	地学基礎	体育	保健	情報	グローバル																								
	文理(文系)	国語	地理歴史	英語	数学	生物基礎	地学基礎	体育	保健	情報	グローバル																									
	文理(理系)	国語	地理歴史	英語	数学	化学	物理基礎・物理	生物基礎	体育	保健	情報	グローバル																								
3年	人文社会	国語	世界史B	日本史B	公民	英語	数学	生物探究	体育	保健	情報	グローバル																								
	文理(文系)	国語	地理歴史	公民	英語	数学	生物探究	体育	保健	情報	グローバル																									
	文理(理系)	国語	地理歴史	英語	数学	化学	物理	生物	体育	保健	情報	グローバル																								

全学年がSGH対象生徒、特に人文社会コースに学校設定科目(SGH科目)を配置。

※赤字が学校設定科目。
1年の「21世紀」は「21世紀を生きる」
「CE」は「Current English」「GH」は「Global Health」

本校のSGH事業は、5つのSGプログラムを進め、課題研究を実施、その成果を発信した。

SGプログラムについて

1. スーパーグローバル講座 academic

大阪大学大学院国際公共政策研究科・徳島大学との連携による講演・講義・ワークショップ・課題研究のサポートを中心とした、大学の講師陣による講座の開講
 2. スーパーグローバル講座 professional

県内に本社を置くグローバル企業、大塚製薬・日亜化学工業と連携して実施する講演、企業研修・国際機関訪問及びインターンシップ等の実施
 3. グローバルリーダー育成メソッドⅠ in school
 - 1) 学校設定科目（対象生徒）
 - a) 「21世紀を生きる（公民科）」
 - b) 「Current English（外国語科）」
（以上1学年人文社会コース26名）
 - c) 「Global Health（保健体育科）」（1学年321名）
 - d) 「クエスト（Quest：総合的な学習の時間）」
 - 1学年（321名）：企業訪問・職業ガイダンス等を通じた自己理解及びSG講座
 - 2学年（324名）：課題研究の実践
 - 3学年（272名）：テーマ研究・ディスカッション・ディベート及び小論文演習
 - e) 「グローバルリーダー論Ⅰ」（2学年人文社会コース37名）：英語でのディスカッション、プレゼンテーション、ミニディベート等
 - f) 「グローバルリーダー論Ⅱ」（3学年人文社会コース40名）：課題研究を英語でプレゼンテーション、英語論文作成等
 - 2) 英語運用能力の育成
 - a) TOEIC 全員受検、
 - b) CAN-DOリストによるパフォーマンステスト
 - c) Essay Contestの実施
 - d) 英検などの受験対策指導等
4. グローバルリーダー育成メソッドⅡ home

中央省庁（外務省・文部科学省等）や国内の国際機関（FAO,JICA,WHO等）を訪問しての調査・研究

5. グローバルリーダー育成メソッドⅢ abroad

フランス研修（姉妹校交流）・インドネシア研修による海外での調査・研究。特に、大塚製薬海外拠点・工場等での調査・研究、インターンシップ、小学校での環境啓発活動及び現地高校生との共同研究等 GL abroadにおける、フランス姉妹校での「環境問題」のディスカッションや、大塚製薬の海外拠点インドネシアでのインターンシップやCSR活動の経験等は、本校の研究課題テーマに沿った取組であり、その成果は「課題研究」での発表へとつながった。



課題研究について

1. 課題研究の実践（2学年324名）
 - a) マインドマップによるテーマ設定（参考文献「学びの技」玉川大学出版部、2014）
 - b) 論題設定に関する徳島大学教授による講演（計2回）
 - c) 徳島大学教授陣からの課題研究指導（計3回）
2. 成果発表
 - a) SGH課題研究発表会（参加は1・2学年645名・学校関係者、発表は2学年代表班10班・海外研修班）及び生徒論文「叡智の扉」発行
 - b) SGH発表会（参加は全学年人文社会コース102名・学校関係者、発表は3学年人文社会コース代表班4班・海外研修班）及び生徒論文「English Research Paper」(英語) 発行
学校設定科目の取組を「クエスト」の中核に置き、全学年・全校生徒の「課題研究」の取組が英語発表へと深化した。今後も、「健康」と「環境」をキーワードに高校生が考える「四国徳島発・グローバル戦略」等の提案ができるよう、改めて「グローバル人材とは」「生徒にどんな力を付けたいか」を学校全体で検討し取り組みたい。

秋田県立秋田南高等学校

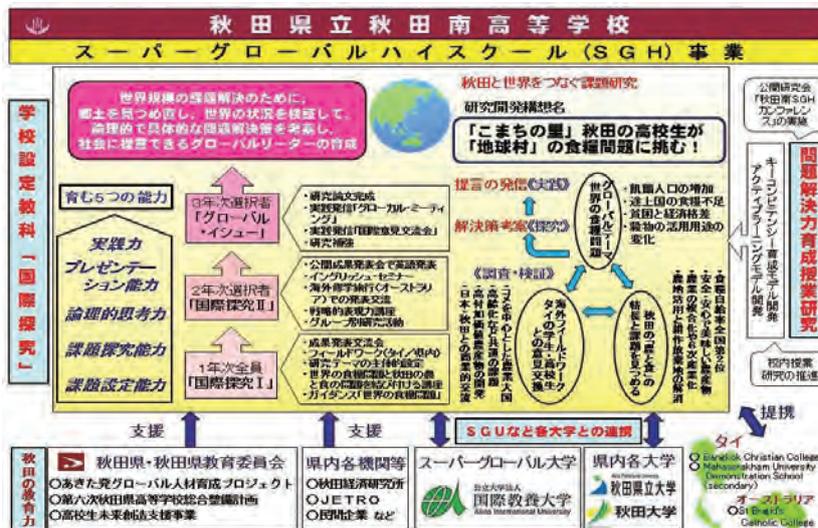
「こまちの里」秋田の高校生が「地球村」の食糧問題に挑む！

【構想の概要】

本校は、平成28年度より中高一貫教育校として新しく生まれ変わり、その基本理念として「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」を掲げている。この基本理念は、SGH事業の趣旨とも合致しているところである。

本校が育成を目指す「グローバルリーダー」とは、グローバルな視点から世界と郷土を見つめ直し、それらの課題を論理的に考察し、解決策を考えるとともに、社会に向けて発信や提言をしていくことができる人間である。具体的には「課題設定能力」、「課題探究能力」、「論理的思考力」、「プレゼンテーション能力」、「実践力」の5つの能力と捉えている。

こうした資質・能力を磨き、身に付けていくため、本校のSGH事業では、国内外の大学・高校や研究機関・企業等と連携しながら、問題解決力を育成するための授業研究・カリキュラム開発と、生徒の探究的な学習である課題研究を行っている。特に課題研究では、学校設定教科「国際探究」を設定し、郷土や日本の課題と、世界規模の問題を結び付けるグローバルなテーマとして、秋田の地域特性を生かしながら、「世界の食糧問題の解決」を掲げている。



平成30年度入学生 教育課程表

	普通科理系												普通科文系											
学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1年	共通SGHあり	国語総合	現社	数学Ⅰ	数Ⅱ	数A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	芸術Ⅰ	家庭基礎	社会と情報	英語表現Ⅰ	英語Ⅰ									
2年	SGHあり	現代文	古典	歴史A/日本史	歴史B/世界史	数学Ⅱ	数学Ⅲ	数B	物理基礎	化学	物理/生物	体育	保健	英語表現Ⅱ	英語Ⅱ									
3年	SGHあり	現代文	古典	歴史B/日本史/地理B	数学Ⅲ	探究数学(学校設定科目)	化学	物理/生物	体育	英語表現Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ	英語Ⅲ

※「G.I.」は「グローバル・イシュー」(学校設定科目)の略。

課題研究：学校設定教科「国際探究」

- 学校設定教科として実施し、グローバルリーダーに必要な5つの能力を育成する。



- 高1「国際探究Ⅰ」は、全員が履修。「課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という探究のプロセスを一通り経験する。講座やフィールドワークを通して世界や地域の課題を発見し、その要因・背景を分析して解決策を考察する。論理的な思考を重視した探究と発表の機会を全員に設定。
- 高2「国際探究Ⅱ」は選択科目。グループは再編。秋田県立大学の教員との連携指導で専門性を深める。英語プレゼン発表では、どう表現すれば自分たちの考えが伝わるかを熟考し、表現力を磨く。
- 高3「グローバル・イシュー」は2年次からの研究を継続（前期のみ）。研究成果の発信と実践、社会貢献を目指す。市役所やJA、企業経営者など社会人への発信と意見交換を通して実践力を育む。

学年	学校設定科目	対象	校内指導者	外部指導者	フィールドワーク	発表等
3年	グローバル・イシュー 1クラス コミュニケーションを重視	選択	学年部教員 6名 ・9Hクラス担任1 ・9Hクラス副担任1 ・他クラス副担任3 ・学年主任1	大学(研究協力) 国際教養大、秋田県立大、 市・企業等(意見交換) 秋田市役所、JA、民間 企業等	自主的FW	意見交換(6~8月) 研究論文(9月)
2年	国際探究Ⅱ 1クラス コミュニケーションを重視	選択	学年部教員 9名 ・9Hクラス担任2 ・9Hクラス副担任2 ・他クラス副担任4 ・学年主任1	大学(研究協力) 秋田県立大(過半数担任指導)、 国際教養大、 企業・研究機関(プレゼン指導FW)	班別FW、 海外修学旅行(シドニー 5泊6日)	英語プレゼン発表(10月) 研究論文(2月)
1年	国際探究Ⅰ 各クラス 現1・総合を重視	全員	学年部教員 13名 ・各クラス担任6 ・各クラス副担任6 ・学年主任1	大学(講義・講座) 国際教養大、秋田大、秋田 県立大、 企業・研究機関(講義・講 義・プレゼン指導FW) 秋田経済研究社、JICA、商 業銀行	県内FW、 海外FW(タイ 5泊6日)	レポート(9月) プレゼン発表 (英語/日本語)、 海外修学(2月)

- 指導体制は、学年部職員を中心に配置し、多様な教科の教員が関わる形とする。
- 時間割は3学年とも同じコマに設定し、配置教員数を確保するとともに、異学年交流（上級生による支援や下級生への成果普及等）もしやすい形に。
- 研究グループは、個人の研究したいテーマに基づいて編成する。原則4～5名（最大6名）。
- 各種講座やFWはSGU国際教養大学・秋田県立大学等、多数の大学や公的機関、民間企業と連携。
- タイ海外FWの事前・事後指導については、連携

校（BCC、DMSU）とのSkype交流や、訪問先である国連WFPの日本協会による講座等を実施。

- 学校設定教科のため、評定評価を行う。毎時間の振り返り記述を、評価規準を基に3段階で評価。



教科・科目でのSGHの取組

- 秋田大学教職大学院と連携した教員研修。
- 高大接続改革に向けた、思考力・判断力・表現力を育成する指導の研究。
- 協働的な活動の場や表現活動を取り入れた、探究的・SGH的な授業を各教科で日常的に実践。
- ICT活用(単焦点プロジェクター15台、Classi)
- 公開授業研究会の実施(平成30年度は10/26開催)

成果と課題

成果

○ 生徒の変容

- 主体性や行動力、表現力、コミュニケーション力、英語力の向上。
- 海外大学や難関大AO等、SGHの成果を活かした進学が増加。
- 外部大会の実績（SGH甲子園、Global Link Singapore等）

○ 教員の意識変容と授業改善の推進

- 多くの教員が成果を実感し、取組の全体化が進んでいる。
- 課題研究や探究的学習の指導力が年々向上している。

○ 外部機関との連携

- 年々連携機関が増加し、学校の財産となっている。
- 生徒が社会とのつながりを意識し、外に出て行くように。
- 卒業生による協力体制を整備。

課題

△ 課題研究の質的向上

- 表現力に加えて論理性や新規性を高める指導方法の改善。
- 情報検索や情報分析等、探究スキルの指導の充実。

△ 課題研究カリキュラムの持続可能なモデル化

- 予算措置が終了したとしても継続できる事業の工夫。
- ポートフォリオ評価を含めた評価方法の研究推進。
- 職員の多忙化解消につなげる工夫。

△ SGHの一層の全体化

- SGHの成果を、対象外生徒へさらに浸透させる工夫。
- 探究的学習を取り入れた授業研究のさらなる推進。

福島県立ふたば未来学園高等学校

原子力災害からの復興を果たす グローバル・リーダーの育成

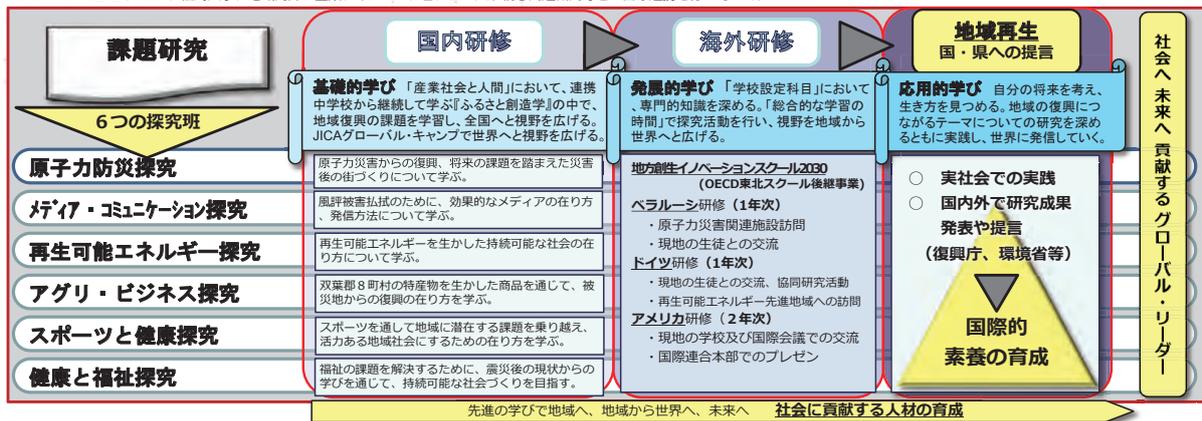
【構想の概要】

本校は平成 27 年 4 月、福島第一原子力発電所の事故による避難から帰還した福島県双葉郡広野町に開校した。双葉郡の復興は 30 ～ 40 年かかるとも言われる厳しい状況にあることを踏まえ、「解のない課題」を乗り越える力を身に付けた「変革者」の育成を目指している。「産業社会と人間（1 年次 2 単位）」「未来創造探究（総合学習 2、3 年次各 3 単位）」をカリキュラム全体の軸と位置づけ、全生徒が実社会における課題解決の実践に取り組む。また、探究の一環として代表生徒が海外研修を実施し、福島の問題とグローバルな課題を重ね合わせて思考できるリーダーとしての資質能力を育成している。

■ 構想全体像

◆ 目的：社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、福島県の復興に寄与するグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。

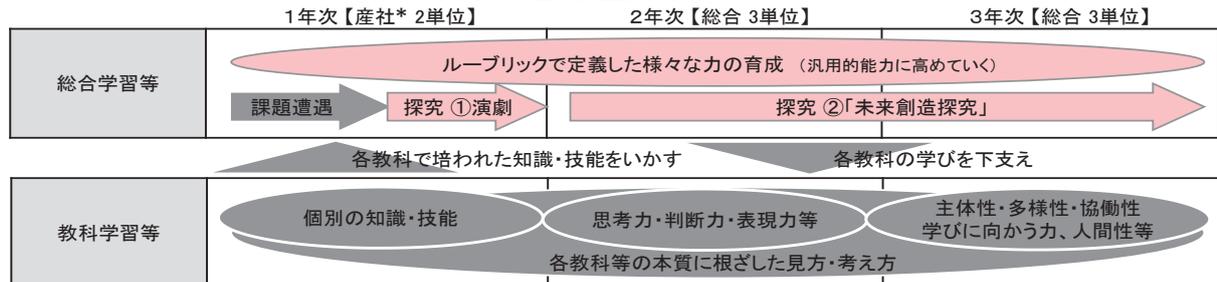
- 地域、国内から海外へと視野を広げるとともに、未来創造のために実践を通して学んでいく。
- OECD、JICA、福島大学、地域内外の企業、イノベーションコースト構想関連機関等との密な連携を行っていく。



■ 教育課程表（H30 入学生）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
1年次	国語総合		数学I			コミュニケーション英語I		体育		保健		音楽I 美術I 書道I		家庭基礎		化学基礎		現代社会		生物基礎		社会と情報		産業社会と人間		進路に応じた選択科目		LHR					
2年次	体育		保健		地学基礎 物理基礎 生物基礎		世界史A 日本史A		コミュニケーション英語II		未来創造探究		進路に応じた選択科目															LHR					
3年次	体育		未来創造探究		進路に応じた選択科目																											LHR	

■ 総合的な学習の時間等を軸としたカリキュラム全体の構造



*「産業社会と人間」

ループリック起点の教育課程編成

本校では育成する資質・能力を、知識、スキル、人間性、メタ認知力という4つのカテゴリー10項目5段階に整理し、これを基盤としてカリキュラムを編成している。ループリックで定義された資質能力は、各教科の学習のみで培われる知識・技能には収まらない、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力である。実社会における横断的・総合的な問題解決に主体的に取り組み、様々な挑戦や失敗の経験も積まなければ身に付かない。そこで、カリキュラム全体で汎用的能力に高めていくための軸となる時間が必要となった。3年間の高校生活を貫いて、生徒たち自身が実社会や自身の将来と向き合いながら試行錯誤する時間である。本校では総合学習等の合計8単位をカリキュラムの軸として位置づけた。

各教科で身に付けた個別の知識や技能が、この探究で発揮されることによって、他の知識や技能と関連付けられ体系化されながら身に付き、ひいては生涯にわたり活用できるような物事の深い理解や方法の熟達に至ることを目指している。逆に、カリキュラム全体の軸となる探究があるからこそ、各教科の学習の意欲が喚起され、各教科の学習活動が確かに下支えされていく。総合学習と各教科のつながりを意図的に生み出すことで、より深い学習となる相互作用を期待している。

生徒たちの探究学習の概要

1年次では、原発事故の影響に直面している地域の様々な課題をフィールドワークで調査し、課題の構造を分析し、演劇の台本という形で整理して演じる。その際、避難先から帰還した人と今も避難を続ける人、廃炉に取り組む東京電力と地域住民等の「立場の違いによって捉え方が違い、複雑すぎて簡単には解決できない課題」等の、地域が抱える核心的な課題に子供たちが直面することを意識している。

その後、1年次に見つめた地域課題を踏まえ、2・3年次では「未来創造探究」と題した総合学習6単位で、いくつかの探究班（テーマ）に分かれて、課題解決の探究と実践に取り組む。テーマは、例え

ば原子力災害からの復興を目指す町づくりや、風評や風化対策に取り組む情報発信等である。その際、単なる研究では無く、実社会での「実践」を通して、汎用的能力を培うことを目指している。

また、この探究のプロセスと関連させた複数回の海外研修を設定している。例えば2年次においては、米国ニューヨークの国連本部を訪問し、国連本部職員や、各国の同世代と意見交換を行う。自身が取り組む地域課題解決の探究内容と、取り組みから見出した世界への提言を発信するとともに、福島の問題と世界における難民を巡るフェイクニュースなど、福島と世界の課題を重ね合わせて意見交換を行い、持続可能な世界実現の課題意識を深め、さらに探究活動を深めていく構造となっている。

探究を支える体制

本校では全教員がいずれかの年次の探究を担当する体制をとり、全校体制で指導にあたっている。未来創造探究においては、探究内容やプロセスは基本的には生徒たちの主体的な活動を重視しているが、効果的に深い学びを創造していくためのツールとして「未来創造探究ノート」を開発し、ワークシート等をそれぞれが活用できる環境を整えている。また、NPOカタリバと連携し、約7名のNPO職員や大学生インターンが常駐し、探究学習に伴走している。

成果と課題

本校においてはループリックで定義した資質・能力について半年ごとに生徒たちが自己評価を行っている。3年間を通じて生徒たちの成長が確認されるとともに、進路にも確実に結びついている。

これまでの研究開発を通じた成果として、①探究の学習効果の実証、②探究と結びついた新しいタイプの海外研修プログラム開発、③カリキュラムと教材の開発、④ループリックを起点としたカリキュラム・マネジメントの先行実施、⑤学校と社会の協働による教育体制構築が為されたことがあげられる。

一方で、探究の質の改善によるさらに深い学びの実現や、ループリックによる評価方法の改善や評価結果の活用が課題であり、引き続き取り組んでいく。

千葉県立成田国際高等学校

成田発！ 2020年に向けてアジアとの共生を担うグローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

アジア諸国・地域の人々と互いを尊重しつつ、平和的・健康的な生活を営みながら、協働してアジア全体、ひいては世界の持続的発展に貢献できるグローバル・リーダーの育成することを目的とし、以下の7つの資質・能力を育成する。

- ①課題発見・問題解決能力 ②論理的思考力 ③コラボレーション能力 ④コミュニケーション能力
- ⑤具体的な解決を図る企画力 ⑥異文化の対する受容性 ⑦日本文化理解と発信力



●教育課程表(普通科・国際科の全生徒が「GS 課題研究基礎(1年次)」 「GS 課題研究発展(2年次)」を履修する。

【国際科の教育課程表】

第1年次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32				
	国際総合		世界史B		数学I		数学A		化学基礎		生物基礎		体育		保健		芸術I		総合英語		グローバル・イングリッシュ		GS 課題研究基礎		GS 課題研究基礎		GS 課題研究基礎		GS 課題研究基礎		GS 課題研究基礎		GS 課題研究基礎			
第2年次	現代文B		古典基礎		4単位選択(4)		理科基礎(2)		体育		保健		家庭基礎		情報の科学		総合英語		イングリッシュ・コミュニケーション		1群選択(2)		2群選択(2)		3群選択(2)		4群選択(2)		5群選択(2)		6群選択(2)		7群選択(2)			
					日本史B 数学II		物理基礎 地学基礎														数学B ディベート フランス語I 中国語I 韓国語I 芸術文化 GS時事英語		地理A 音楽II 書道II ディベート 連続 フランス語I		中国語I 韓国語I GS時事英語		中国語II 韓国語II GS日本文化 GS連続		L H R		L H R		L H R			
第3年次	現代文B		古典B		倫理		政治・経済		体育		総合英語		異文化理解		3群選択(4)		4群選択(2)		5群選択(2)		6群選択(2)		7群選択(2)		8群選択(2)		9群選択(2)		10群選択(2)		11群選択(2)		12群選択(2)		13群選択(2)	
															地理B 探究世界史 探究日本史 物理 化学 生物 地学		探究政治・経済 探究数学IA ライフスポーツ 音楽III 美術一般 書道一般		言語表現 探究政治・経済 音楽III 美術II 書道II ディスカッション		言語表現 探究政治・経済 音楽III 美術II 書道II ディスカッション		言語表現 探究政治・経済 音楽III 美術II 書道II ディスカッション		言語表現 探究政治・経済 音楽III 美術II 書道II ディスカッション		言語表現 探究政治・経済 音楽III 美術II 書道II ディスカッション		言語表現 探究政治・経済 音楽III 美術II 書道II ディスカッション		L H R		L H R		L H R	

ロールプレイ教材の開発（1年次）

「ペナン島とグローバル化～進むべき未来を考える」（6月に各クラスにて実施）。マレーシアのペナン島の未来について、工業化、リゾート開発、ジョージタウンの世界遺産認定、伝統的な漁村等の側面から考えた。グループが6つの立場（①大資本、②飲食チェーン店、③ペナン・ヘリテージ・トラスト [NGO]、④零細漁民、⑤地域住民⑥政策委員会）になりきり、利害関係について議論を行うものである。社会問題について多角的に考え、それぞれの立場から相手に分かりやすく伝えることを目的とした。事前ガイダンスの際には、教員によるデモンストレーションも行った。



教員デモンストレーション

教室でのロールプレイの様子

国内フィールドワーク（1年次）

生徒全員が参加する国内フィールドワークは、多文化共生、観光、教育、環境の各テーマに基づく8コースを設定している（9月に実施）。国内フィールドワークの事前に研究グループの編成を行い、事後のミニポスターによる報告を経て、10月より本格的な研究活動が始動する。

	目的・方面
①	行政機関とインターナショナルスクール（新宿・幕張）
②	NPOと大使館施設を訪問する（四ッ谷・千葉）
③	在日ムスリムコミュニティを訪問する（代々木上原・柏）
④	観光客に街頭インタビュー（浅草）
⑤	農園リゾートで観光の新形態を探る（香取）
⑥	地域活性化の方法、環境と観光の両立を探る（鴨川）
⑦	足尾銅山で公害の歴史や環境NPOの活動を学ぶ（足尾）
⑧	東京湾で生物多様性・環境問題を考える（船橋・青海）



マレーシア海外フィールドワーク（2年次）

○滞在地 クアラルンプール、ペナン州
○主な訪問先（9泊10日）

クアラルンプール および近郊	地方部公立学校（SMK Sungai Pelek）	ブルーモスク
	都市部私立学校（Seri Cahaya School）	商業施設（AEON Mall Shah Alam）
	市内フィールドワーク（B&Sプログラム）	
ペナン	自然環境漁業調査（鳥類保護区）	民泊体験（スンガイ・アチェ村）
	沿岸漁民福利協会(PIFWA)	植林センター
	観光開発調査（ペナン・ジョージタウン市内フィールドワーク）	
	観光地調査（ガーニープラザ）	



開発公社にて

ペナン消費者協会にインタビュー

校内発表会（主なもの）

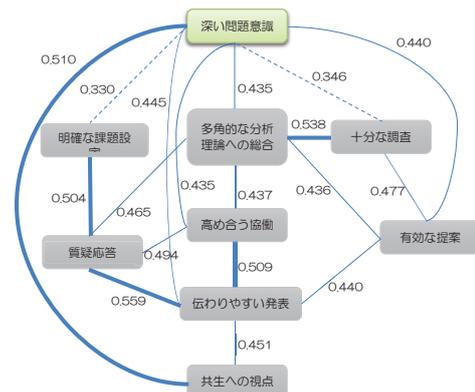
①中間発表会 [1年次2月]、②ポスターセッション [2年次9月]、③校内発表会 [2年次12月]、④SGH研究発表大会 [1月]（代表グループのみ）。

生徒の自己評価

2年次最終論文の提出後に、2年間の課題研究の成果について、ループリック自己評価票により4段階で評価をさせた。集計結果は次の通りである（4が高評価）。

資質・能力	観点	4	3	2	1	4&3	2&1	平均値
課題発見能力	深い問題意識	18%	57%	23%	2%	75%	25%	2.92
	明確な課題設定	21%	50%	28%	2%	70%	30%	2.89
論理的思考力	十分な調査	8%	42%	48%	2%	50%	50%	2.56
	多角的な分析・統合	10%	59%	30%	2%	69%	31%	2.77
コラボレーション能力	互いを高め合う協働	25%	48%	22%	4%	73%	27%	2.94
コミュニケーション能力	伝わりやすい発表	15%	57%	27%	1%	72%	28%	2.86
	議論を深める質疑応答	7%	43%	42%	8%	50%	50%	2.49
企画力（問題解決）	有効な提案	8%	57%	33%	2%	64%	36%	2.70
異文化受容性	共生への視点	17%	66%	15%	2%	83%	17%	2.98

また、下図は、集計結果から各項目間の相関係数を求め、値の高いものを図示したものである。



東京工業大学附属科学技術高等学校

科学技術系素養を持つ グローバルテクニカルリーダーの育成

【構想の概要】

多様化する国際社会で活躍するリーダーとしての資質と能力を身につけ、地政学的な基礎知識を元にリスクを回避できる“グローバルテクニカルリーダー”の育成を図る。その際、高大連携教育を大幅に増強し、高大を貫くグローバル人材の育成を目指し、求められる資質と能力を提案すると共に、実現のための新科目「グローバル社会と技術」「グローバル社会と技術・応用」および「SGH課題研究」を軸とした育成プログラムを開発・実践し、成果を普及する。

本校の問題解決メソッド

(社会課題を解決したい)



本校の教育課程



グローバル・リーダー育成プログラム

我々の社会には、多くの課題が存在する。しかも、国際化の進展がめざましく、グローバルな視野に立ち、社会課題に取り組む必要がある。今日、科学者・技術者の多くは、国際的に活躍する企業の中で働いており、技術面を極めるだけでなく、時にはリーダーとしての活躍を期待される。そこで本校では、科学技術高校という特性を生かし、科学技術系素養を持つ人材をグローバル・リーダーに育成するプログラムを開発している。

本校では、問題解決に当たっては、社会課題を解決するための縦の流れ、そしてそれぞれの段階を満たすための横の流れによるメソッドが必要であると考えた。なかでも、横の流れに着目して、それぞれの段階に対応する新科目を開発した。また、旗艦となる活動として、生徒をフィリピン・マレーシアに派遣し、地政学的観点から、エネルギー・環境問題について調査し、現地の高校生とディスカッションする海外調査研修を行っている。また、高大連携教育を増強し、東京工業大学教員による特別講義、著名人を招き問題解決の手法を学ぶグローバル・リーダー育成講演会などを実施している。



「いい質問をする」ために講師に駆け寄る生徒たち

開発科目と本校の問題解決メソッド

社会課題の解決に至る糸口を見つけるためには、社会科学・自然科学・人文科学と言ったあらゆる観点からの解決方法を探る必要がある。この点が、いままでの科学技術高校での取り組みやSSHでの取

り組みと大きく異なる点である。

〔目標を設定〕－科目「グローバル社会と技術」

一般に、社会課題そのものを知ることが解決の第一歩となる。情報を収集し、使える知識に加工し、まとめる。この部分を担うのが「グローバル社会と技術」である。7テーマについて、7人の教員によりオムニバス形式の授業を運営し、問題解決手法を体験する。情報モラルのような情意的問題をも取り上げ、最終的には英語で自説を発信する。そのためネイティブの教員を雇用している。また、特別講義・講演会・フィールドワークを実施し、興味の喚起・情報収集・処理の方法などを学ぶ。

〔複数案〕－科目「グローバル社会と技術・応用」

ここでは、情報収集に必要な地政学的知識と英語力の増強を図りながら、「課題研究への通」と称するミニ課題研究をシミュレーションする。提案できる案は複数案となり、それを吟味するに当たって、安全性や実現性といった制約条件に照らし、合理的判断を行いながら、案を絞っていく。この部分を担うのが、「グローバル社会と技術・応用」である。地政学的知識の強化には、地理歴史科教員、英語力に関しては、前述のネイティブ教員によるプレゼンテーション発表活動、「課題研究への通」では、各分野に分かれた指導を行っている。

〔案を決定〕－科目「SGH課題研究」

すべての活動が課題研究ではあるが、ここでは提案が自然科学による解決を求めている場合、実験やものづくりにより、有効性や実現性を実証し、提案の正しさを立証する。さらに、できたものを使ってもらいインタビューするといった出口の活動を活性化させる。これが〔合意形成〕といえる。

新しいグローバル・リーダーを目指して

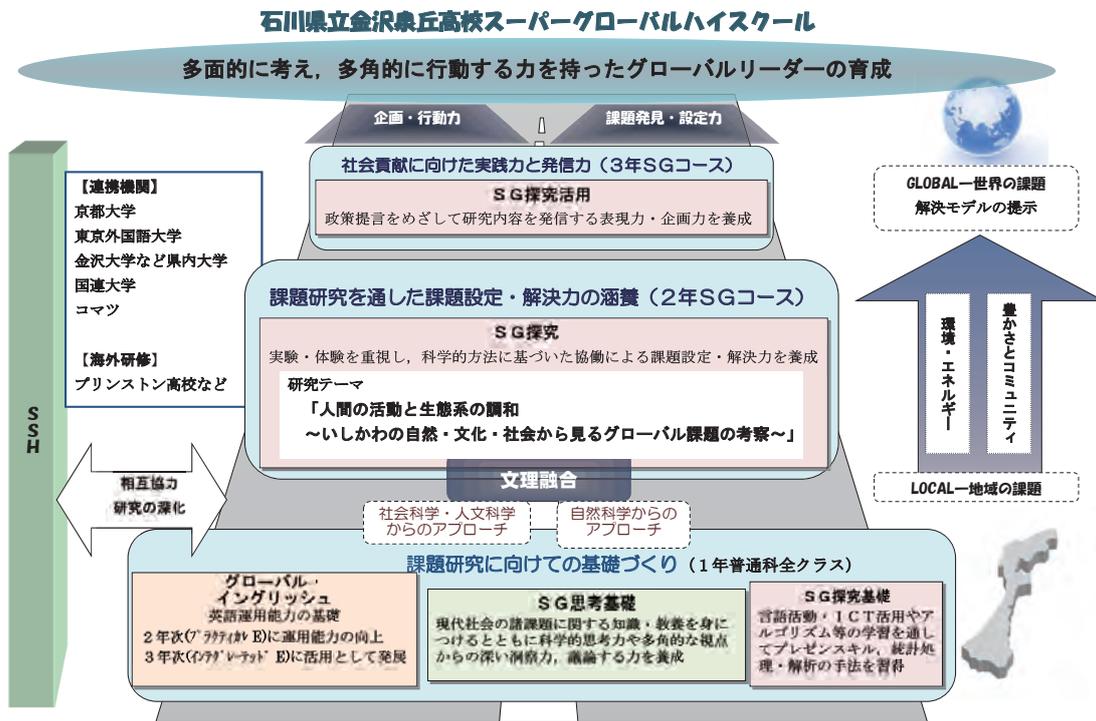
本校のSGHでの取り組みでは、ものづくりや実験の過程で生まれる問題解決を扱うのではなく、あくまでも、社会課題の問題解決を行う過程において、その有効性や実現性を検証するために実験やプロトタイプ製作を行う。このメソッドを何回も回しながら、生徒は問題解決手法を身につけていく。この成果は、関東甲信越静地区課題研究発表会などで金賞2/銀賞2を受賞し、広く認められつつある。

石川県立金沢泉丘高等学校

多面的に考え、多角的に行動する力を持った グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

グローバル社会に対応する基盤となる国際的素養や探究スキル等の習得、スーパーグローバル大学やグローバル企業等との連携、国内フィールドワーク、海外成果発表等の体験、文理融合を意識した学習の取組等を通し、課題発見力・主体的解決力を向上させ、グローバル・リーダーに必要な力や資質を育成する。



■ 1週間の授業時間数（平成29年度入学者に適用する教育課程）

	0	5	10	15	20	25	30	33	34		
1年	普通科	国語 5	地歴 2	数学 6	理科 2	保健体育 3	芸術 2	英語 6	家庭 2	情報 SG教養 3	総合 8+4
	理数科	国語 5	地歴公民 2	数学 7	理科 5	保健体育 2	芸術	英語 6	情報 人間科学 2	21世紀 総合 8+4	
2年	SG(文型)	国語 6	地歴 6	数学 6	理科 4	保健体育 3	英語 6	総合 2	ホーム		
	SG(理型)	国語 5	地歴 3	数学 6	理科 8	保健体育 3	英語 6	総合 2	ホーム		
	普通(文型)	国語 6	地歴 6	数学 6	理科 4	保健体育 4	英語 6	総合 8+4			
	普通(理型)	国語 5	地歴 3	数学 6	理科 8	保健体育 4	英語 6	総合 8+4			
	理数科	国語 5	地歴 3	数学 6	理科 5	保健体育 2	芸術	英語 6	人間 21世紀 総合 8+4		
3年	SG(文型)	国語 5	地歴公民 7	数学 7	理科 4	保健体育 3	英語 6	総合 8+4			
	SG(理型)	国語 5	地歴 3	数学 7	理科 8	保健体育 3	英語 6	総合 8+4			
	普通(文型)	国語 6	地歴公民 7	数学 6	理科 4	保健体育 3	英語 6	総合 8+4			
	普通(理型)	国語 5	地歴 3	数学 7	理科 8	保健体育 3	英語 6	総合 8+4			
	理数科	国語 5	地歴 3	数学 7	理科 8	保健体育 3	英語 6	総合 8+4			

探究型学習を軸とした新たなカリキュラム開発

課題研究において、「課題発見→仮説→調査・実験による実証→データ分析→考察→新たな課題発見」の学習サイクルにもとづくプログラムを開発してきた。その中で生徒は、探究型のスキル、すなわち「課題発見力」「論理的思考力・表現力」「情報収集力・分析力」「ディスカッション力」を着実に獲得してきたと見ている。

1年次には、課題研究に向けての基礎づくりとして、プレゼンテーションのスキルや統計学に基づいたPPDACによる課題解決の手法を身につけるプログラムを展開し、2年次の課題研究につなげている。SGコースの課題研究においては、グループで協働の力を養いながら、フィールドワークを通じた実証的な研究を行わせている。最終的には、口頭発表、ポスター発表、論文といった表現方法をすべて体験させ、日本語での論理的思考力や表現力を磨く機会を与えている。3年次には、これまで進めてきた研究を再度グローバルな視点でとらえ直した上で、英語による発表を行う。

1年から3年までを通じたデザインにより、系統立ったカリキュラムとなり、その間に何度もアウトプットの機会を取り入れることで、「失敗」を次につなげ、「成長」へと発展させるものとしている。

課題研究の過程で、様々な体験が生徒の自己肯定感を高めてきたことは、年2回実施しているアンケートからうかがうことができるが、中でもフィールドワークの環境を整え推奨したことにより、「主体的行動力」の項目が飛躍的に向上したことは特筆



に値する(グラフ)。このことは、ややもすると社会と切り離された中で完結していた従来の学校教育のあり方に対して、社会とのつながりを踏まえた「社会に開かれた教育課程」の必要性を裏づけるものといえよう。

文理融合プログラムの開発

本校ではグローバルリーダーの育成の理念として、文理の枠を超えて、複数の学問分野を俯瞰・統合し、問題解決をはかる力を涵養することを掲げた。

そのためにも、SGコースは文型・理型が混在するクラスとした上で、課題研究においても必ず文型・理型の生徒が協働で研究を進めるようにしている。社会問題の解決を本校の課題研究のテーマとしているが、そこに実験や統計等の理系的手法を用いるように促し、多面的に考え多角的に行動することを追求させている。

また、1年次においては、学校設定科目「SG思考基礎」で、公民・理科のチームティーチングにより、教科横断的な探究活動を実施している。テーマも、環境・エネルギー問題、SDGsと科学技術といった、文理両方の知見が求められるものを扱っており、「文理融合」のプログラムとして普通科全生徒に両分野を俯瞰する力の重要性を学ばせている。

教員の組織的取組と変化

新しいカリキュラム開発にあたり、SGHプロジェクトチームを編成、この中でプログラムの具体化や検証など様々なことについて議論、提案を行ってきた。また、全学年で取り組む課題研究での担任・副担任の協働、公民科と理科の教員でも教材やプログラム作成を進めた「SG思考基礎」など、専門性を有した高校教員が、その教科・科目の壁を取り払って、育成すべき生徒の力について議論しながらベクトル合わせをする機会が生まれたことは、この研究開発の大きな成果といえよう。



大阪府立豊中高等学校

「多様性」と「文化」を掛け橋にして 世界を牽引する人材を育成する

【構想の概要】

本校は、豊かな感性と幅広い教養を身につけた、社会に貢献する志を持つ、知識基盤社会をリードする人材を育成することをめざしている。そのような中で、欧米文化とともに世界の大きな潮流でもあるイスラム文化（中でも日本との繋がりの深いトルコやインドネシアのムスリム）を通して、日本文化とのつながりから新たなビジネス・スタンダードを創造できる人材育成プログラムを開発する。欧米中心の「グローバルスタンダード」を超えた新たなパラダイムを構築し、日本経済再生の鍵を握るイスラムでのビジネスモデルを創造できるグローバルリーダーを育てていく。



◎平成29年度入学生教育課程（平成30年度入学生は文理学科のみ）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	
1年普通科	国語総合		現社	数学Ⅰ	数学A		物理基礎	化学基礎	生物基礎	体育	保健	芸術Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅰ	英語表現Ⅰ	家庭基礎	社会と情報	HR																				
1年文理学科	国語総合		現社	★理数数学Ⅰ				★SS理数物理	★SS理数化学	★SS理数生物	体育	保健	芸術Ⅰ	★総合英語			家庭基礎	★SS情報基礎	HR																		
2年普通科文系	現代文B	古典B	世界史B	日本史A・地理Bから1科目選択		数学Ⅱ	数学B	地学基礎	体育	保健	芸術Ⅱ	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	社会と情報	HR	総合	公立大阪大学																				
2年文理学科文科	現代文B	古典B	世界史B	日本史A・地理Bから1科目選択		★理数数学Ⅱ		地学基礎	体育	保健	芸術Ⅱ	★異文化理解	★英語表現	★SS情報研究Ⅰ	HR	総合	公立大阪大学																				
2年文理学科理科	現代文B	古典B	世界史A	地理A	★理数数学Ⅱ			★SS理数物理 ★SS理数生物から1科目選択	★SS理数化学	体育	保健	★異文化理解	★英語表現	★SS情報研究Ⅰ	HR	総合	公立大阪大学																				
2年普通科理系	現代文B	古典B	世界史A	地理A	数学Ⅱ	数学B	物理・生物から1科目選択	化学	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	社会と情報	HR	総合	公立大阪大学																					
3年普通科文系	現代文B	古典B	国語演習	世界史研究・日本史研究・地理研究倫理政経から2科目選択				数学演習	化学基礎演習、生物基礎演習、地学基礎演習から2科目選択		体育	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅲ	HR	総合	★SS研究発表特論																					
3年文理学科文科	現代文B	古典B	国語演習	★世界史詳論・日本史詳論・地理詳論公民リテラシーから2科目選択				数学演習	化学基礎演習、生物基礎演習、地学基礎演習から2科目選択		体育	★英語理解	★英語表現	HR	★SS情報Ⅱ	総合	★SS演習Ⅱ																				
3年文理学科理科	現代文B	古典B	世B・日B・地B・倫政から1科目選択	★理数数学特論			★SS理数物理 ★SS理数生物から1科目選択	★SS理数化学	体育	★英語理解	★英語表現	HR	★SS情報Ⅱ	総合	★SS演習Ⅱ																						
3年普通科理系	現代文B	古典B	世B・日B・地B・倫理政経から1科目選択	数学Ⅲ・数学演習から1科目選択		物理・生物から1科目選択	化学	体育	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅲ	HR	総合	★SS研究発表特論																								

学校設定科目「課題研究基礎」「課題研究 I」「課題研究 II」の実施（平成 30 年度）

① 1 年生「課題研究基礎」週 1 時間 360 名対象

1 年生は SSH 生、SGH 生が共に同じカリキュラムを履修する。1 学期は情報リテラシー、2 学期からは探究活動入門講座及び、グループでの調べ学習、3 学期は留学生との交流会で調べた内容を英語によるプレゼンテーション、2 年生の研究発表会の聴講や先行研究の調査を行う。

② 2 年生「課題研究 I」月曜 6・7 限 文理学科 SGH コース 82 名 SSH コース 78 名対象

2 年生は SGH 生と SSH 生を分けて講座を開講する。「課題研究基礎」の学習を発展させ、SGH 生に対しては、4 観点からグループで研究を進める（図 i）。生徒の自主性を尊重し、1 学期は課題設定や研究手法の学習、2 学期からは中間発表に向けた調査・研究活動（FW の実施）、3 学期は課題研究発表会で口頭発表・ポスター発表形式でプレゼンテーション、個人で論文作成を行う。課題研究発表会は、SGH 生、SSH 生合同で開催する。

③ 3 年生「課題研究 II」月曜 7 限 文理学科

160 名対象

3 年生は SGH 生、SSH 生が共に同じカリキュラムを履修する。論理的文章の書き方ワークショップを通して 2 年生で執筆した個人論文のブラッシュアップ、2 年生課題研究の TA を行う。また個々の希望進路に応じて、研究の継続・発展や、SGH 対象公募推薦入試の準備も行う。

（図 i）

4 観点	テーマ
Vision1	「フェアトレード」で生産者の立場に立つビジネスを展開する
Vision2	「地球環境問題（再生可能エネルギーの活用）」を学び、生活者の立場に立つビジネスを展開する
Vision3	日本とイスラーム諸国の探究から、イスラーム社会へのソーシャルビジネス・プランを提案する
Vision4	日本とイスラームから創造する新たなスタンダードについて比較文化的視点からビジネスを提案する



Vision1 フェアトレード コヒー販売



イスラーム高校との交流

教科連携プログラム

① 4 技能統合型の英語力養成

3 年間の英語科での授業を通して、4 技能をバランスよく養成し、授業で学んだことを実践できる場が課題研究となるように連携している。

- ・ TOEFL 仕様の授業（2・3 学年文理学科生対象）
- ・ 総合英語（1 年文理学科生対象）
- ・ 異文化理解（2 年文理学科生対象）
- ・ コミュニケーション英語 II（2 年普通科生対象）
- ・ 英語理解（3 年文理学科生対象）
- ・ コミュニケーション英語 III（3 年普通科生対象）

② グローバルな視点に立った教養及び分析力の養成

多くの生徒がイスラームを軸にした研究を行うため、地歴・公民科、国語科、家庭科の授業で基礎的な教養を培い、研究に生かしている。

- ・ イスラーム文化の探究：国語総合（1・2 年対象）
- ・ イスラーム社会の探究：現代社会（1 年対象）
- ・ イスラーム歴史の探究：世界史 A・B（2 年対象）
- ・ イスラームの衣食住の探究：家庭基礎（1 年対象）

希望者対象「スーパーグローバルセミナー」「豊高グローバルスタディーズ」の実施

① 1・2 年生対象「スーパーグローバルセミナー」

90 分・6 回講座 土曜実施

論理的な思考力を養成する講座「論図の教室」を 1・2 年生対象に実施している。大学の教授にきていただき、思考手順パターンのレクチャーを受けた後で、身近なテーマで実践・練習を繰り返し、思考力を深めていく。

また、「即興型英語ディベート」講座も実施している。要点を書いたメモを頼りに、割り当てられた一定の時間内で、自力で話さなければならない環境をつくり、積極的に参加する姿勢や自身の考えを発信する力を育てていく。

② 1・2 年生対象「豊高グローバルスタディーズ」毎週火・木曜放課後

クラブ活動のような形で、英語での「プレゼンテーション・レシテーション・ディベート」力を育成し、外部プログラムや発表会へ積極的に参加している。

関西学院千里国際高等部

高い国際通用性を有する レジリエンスに富むグローバルリーダー育成

【構想の概要】

- 本校創立以来展開してきた探究型学習の進化形である「知の探究」「リサーチとフィールドスタディ」という科目を新設し、SGU 関西学院大学との高大連携、フィールドスタディなどを通じて課題研究を進め、その成果を研究論文にまとめ発表するプログラムを開発・実践し、高い国際通用性を有するレジリエンスに富むグローバルリーダーを育成する。
- 文部科学省委託「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」における本校の成果を踏まえつつ、世界水準の学びとして日本語 DP による IB ディプロマ及びサーティフィケート取得を可能とした教育プログラムを開発・実践する。
- 全校生徒が SGH 対象生徒である。

スクールミッション

Informed, caring, creative individuals contributing to a global community
知識と思いやりを持ち、創造力を駆使して世界に貢献する個人を育む。

高等部のテーマは「レジリエンスに富むグローバルリーダーとしての自覚」

- ・ 自己自身への深い理解：リフレクション
- ・ 他者との確かなコミュニケーションを築く力：発表・ピアレビュー
- ・ 課題・状況を肯定的にとらえ未来を展望する力：グローバル課題への挑戦
- ・ 課題解決に真摯に取り組む力：一年間の個人での課題研究継続



教育課程表(一部)

(2018年度以降入学生、全ての教科においてSGHとの関連はあるが、中心的に関わりのある部分のみを抜粋した。)

教科	科目	単位数	
		必修	選択
総合的な学習の時間	以下から選択必修	2	1~3
	SGH	2	
	キケンズ総合・基道	(1)	1
	文化研究	(1)	1~
	高大連携科目・他	(1~3)	1~3

※ 卒業認定単位 74 単位

※ () は教科内での選択必修科目

教育課程表や時間割上の工夫

SGH 関連科目に限らず、本校は学期完結制を導入し、生徒個別の興味に対応できる仕組み作りをしている。夏季・秋期どちらに開催のフィールドスタディを選択しても、その直後の学期に論文を書く科目（「リサーチとフィールドスタディ」「課題研究論文」）が複数開講されているため、最善の時期に履修が可能になっている。また、英語で論文を書くことを希望する生徒に対応した「リサーチとフィールドスタディE」も選択可能になっている。

教員側の視点からみても、フィールドスタディの開催時期を夏季・秋期と分散させることで、教員の業務のバランスを調整でき、多様な教員が企画引率へ参画しやすくなっている。

生徒の授業登録により、IB 科目は IB Physics（日本語）、IB English（英語）の Certificate を得ることが可能になる。IBDP Candidate になることも可能な仕組み作りを行なっている。

学校設定教科・科目の設定と運用

総合探究科の科目として表 1 に示した 4 種を設定している。担当教員の所属については同表の通りである。いずれも SGH 主任がリーダーシップをとっており、「知の探究」以外では SGH 主任が毎年の校内ヒアリングの結果まとめたカリキュラム・標準指導案を基に議論し、その都度発展させながら、各担当教員の得意分野を生かして運用している。論文評価は生徒も自己評価するループリックで行われ、調整のための会議も持たれる。「知の探究」では、年度始めに担当全員で過年度を振り返り目標設定をし、カリキュラムデザインを行っている。

表 1. 学校設定科目・活動と担当教員所属内訳

学校設定科目・活動	担当教員所属 (2017 年度)
知の探究 (科目)	SGH、英語 Native、理科、国語
フィールドスタディ (活動)	SGH、社会、保健体育、情報、英語、理科、司書
フィールドスタディ J/E (科目)	SGH、司書、理科、社会、英語 Native (E)
課題研究論文 (科目)	SGH、国語、司書、英語

教科間の連携・意識

SGH に関する事柄を担当する SGH 委員会は管理職、教務部長 / 数学、司書、SGH 主任、事務職 2 名で構成されている。教科間の連携は週次授業担当者会議で行われるほか、2018 年度から「総合探究科」に所属する社会・国語・情報・SGH の教員で学年を超えた探究型学習授業間の連携を図っている。

また、全ての常勤教員が、生徒の課題研究を支援する「メンター」となるため、スキル向上のためメンターワークショップを開催して、課題研究で用いる教科書を共有することにより、各教科の授業で課題研究に関わるスキルを養う機会を模索し、可能な限り実施をしている。特に、元々レポート課題を出していた科目は比較的早期に連携が可能になった。

成果や課題とエビデンス

成果としては、本校の特性を生かしたカリキュラムや、全ての教員が課題研究支援に寄与できる体制ができたことが挙げられる。一方で、課題研究には生徒の発達段階に合わせたきめ細やかな指導が必要であり、その点は今後も課題である。また、本体制の効率を上げていくことも求められている。ここで鍵となるのが、レジリエンス研究である。生徒のレジリエンスの変化を見るため、心理学的尺度を組み合わせ、エビデンスとなるデータ（量・質）を収集して年次報告をしているが、その活用方法を更に具体化していくことは今後の課題と言える。

高大連携・他校への普及・特色ある取り組み

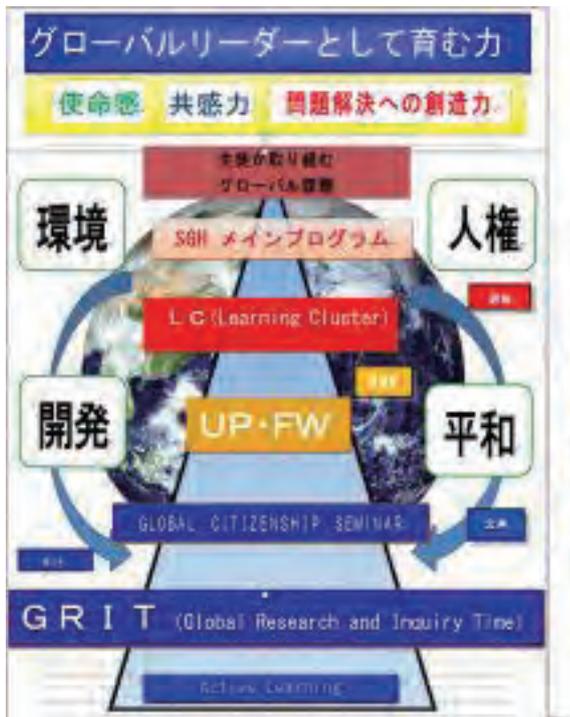
高大連携は SGU 関西学院大学を中心になされ、フィールドスタディ前に生徒全員が大学教員の専門を生かした講義を受けたり、大学生のゼミとの合同ゼミに参加したりするなど、様々な機会を提供している。普及は、成果報告会、他校も参加する発表会などへの参加を通して行っている。また、特色ある取り組みにもなるが、併設の関西学院大阪インターナショナルスクールの教員と調整し、本校の生徒が小学生に発表について教えたり、逆に小学生のポスター発表会に参加したりする機会も生まれている。

関西創価高等学校

TRY 人（じん）の郷・交野から 平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム

【構想の概要】

Active Learning の土台の上に、国連が提起している地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての使命感・共感力・問題解決への創造力を育む教育活動を高大連携して開発する。



2018年度 関西創価高等学校教育課程表 (2018年度入学生 4.6期生以降)

＜新課程＞ 教科	科目	標準 単位	文系		理系		文系		理系		文系		理系	
			1年	2年	12年	12年	13年	13年	15年	15年	15年	15年		
英語	国際総合	4	4											
	現代文I	4		3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	
	古典I	4		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
倫理・歴史	世界史A	2												
	世界史B	4		4	2	5	2							
	日本史B	4		4				4						
公民	地理I	4	4											
	倫理 政治・経済	2						2	2	2	2	2	2	
数学	数学I	3	3											
	数学II	4		4	4	3	5			3				
	数学III	2												
	数学A	2												
	数学B	2			2	2	3		3					
理科	数学演習	2		1				1		1	2		1	
	物理基礎	2		2	2	2	2							
	物理	4		2	2	2	2			2		2		
	化学基礎	2		2	2	2	2			2		2		
	化学	4		2	2	2	2			2		2		
保健体育	生物基礎	2		2	2	2	2			2		2		
	生物	4		2	2	2	2			2		2		
	体育	7-8	2	2	2	2	2			2		2		
芸術	音楽I	2												
	美術I	2												
	書道I	2												
外国語	コミュニケーション英語I	3	3											
	コミュニケーション英語II	4		4	4	4				4		4		
	コミュニケーション英語III	4												
	英語表現I	2												
	英語表現II	4		2	2	2	2			2		2		
家庭	家庭基礎	2		2	2	2	2							
	社会と情報	2		2				2	2	2	2	2		
総合	合計	29	29	29	31	31	29	29	29	29	29	29		
合計	3-6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
LHR	0-5	0-3	0-1	0-3	0-1	0-3	0-3	0-3	0-3	0-3	0-3	0-3		
総計	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34		

2018年度 関西創価高等学校教育課程表 (2016年度入学生 4.4期生 2017年度入学生 4.6期生)

＜新課程＞ 教科	科目	標準 単位	文系		理系		文系		理系		文系		理系	
			1年	2年	12年	12年	13年	13年	15年	15年	15年	15年		
英語	国際総合	4	4											
	現代文I	4		3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	
	古典I	4		2	2	2	2	2	2	2	2	2		
倫理・歴史	世界史A	2												
	世界史B	4		4	2	5	2							
	日本史B	4		4				4						
公民	地理I	4	4											
	倫理 政治・経済	2						2	2	2	2	2		
数学	数学I	3	3											
	数学II	4		4	4	3	5			3				
	数学III	2												
	数学A	2												
	数学B	2			2	2	3		3					
理科	数学演習	2		1				1		1	2		1	
	物理基礎	2		2	2	2	2							
	物理	4		2	2	2	2			2		2		
	化学基礎	2		2	2	2	2			2		2		
	化学	4		2	2	2	2			2		2		
保健体育	生物基礎	2		2	2	2	2			2		2		
	生物	4		2	2	2	2			2		2		
	体育	7-8	2	2	2	2	2			2		2		
芸術	音楽I	2												
	美術I	2												
	書道I	2												
外国語	コミュニケーション英語I	3	3											
	コミュニケーション英語II	4		4	4	4				4		4		
	コミュニケーション英語III	4												
	Total English I	3												
	Total English II	4		2	2	2	2			2		2		
家庭	家庭基礎	2		2	2	2	2							
	社会と情報	2		2				2	2	2	2	2		
総合	合計	29	29	29	31	31	29	29	29	29	29	29		
合計	3-6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
LHR	0-5	0-3	0-1	0-3	0-1	0-3	0-3	0-3	0-3	0-3	0-3	0-3		
総計	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34	31-34		

※ 2年次・3年次文系の科目は学校選択としてどちらか一方を履修することになります。
 ※ 2年次の物理は、物理基礎の学習を終えた後に学習します。
 ※ 学校指定科目は、「グローバル基礎探究Ⅰ」「グローバル基礎探究Ⅱ」「グローバル基礎探究Ⅲ」「グローバル基礎探究Ⅳ」「グローバル基礎探究Ⅴ」「グローバル基礎探究Ⅵ」「グローバル基礎探究Ⅶ」「グローバル基礎探究Ⅷ」から選択することが出来ます。
 ※ 英語表現Ⅰ・Ⅱの内容を各科目としてTotal EnglishⅠ・Ⅱ・Ⅲを行っておりましたが、履修の内容がよりわかりやすくなるよう、英語表現Ⅰ・Ⅱとして行います。
 ※ 英語表現Ⅰは、2年次で履修します。文系は標準単位の4単位ですが、理系、受験文系、国際文系は、3単位となり、標準単位の3単位となります。理系、受験文系は、数学・理科の単位確保のための、受験文系は、数学演習・英語演習の単位確保のための措置です。

※ 2年次・3年次文系の科目は学校選択としてどちらか一方を履修することになります。
 ※ 2年次の物理は、物理基礎の学習を終えた後に学習します。
 ※ 学校指定科目は、「グローバル基礎探究Ⅰ」「グローバル基礎探究Ⅱ」「グローバル基礎探究Ⅲ」「グローバル基礎探究Ⅳ」「グローバル基礎探究Ⅴ」「グローバル基礎探究Ⅵ」「グローバル基礎探究Ⅶ」「グローバル基礎探究Ⅷ」から選択することが出来ます。

探究型総合学習 GRIT

全校生徒を対象に、全教員で運営する、探究型総合学習。このGRITはGlobal Research and Inquiry Time「地球的な調査と探究の時間」という意味で、世界の各地で起こるグローバルイシューについて、SDGsを達成するために「環境・開発・人権・平和」の四分野から学び探究する。登校する土曜日の時間を使って行う。

1年次は「グローバルイシューとの出会い」をテーマに、知識のインプットとディスカッションを中心としたプログラム。「環境・開発・人権・平和」についての基礎的な知識の習得と、ジグソー法やポスターツアーなどのAL（主体的で対話的な深い学び）の様々な方法を身につけさせる。



2年次は「グローバルイシューとの戦い」をテーマに、全生徒がSDGsに関係する「環境・開発・人権・平和」の4分野からトピックをチームで選んで探究活動を行う。全チームが高大連携する創価大学において、専門分野の大学教授に探究成果と提言のプレゼン発表を行う。また、それぞれの研究をポスターにまとめ、一堂に会しポスターセッションを行う。



3年次は「世界を一つにする力」をテーマに、合意形成の力を培う。その集大成として、2017年度は、3年生全員、92ヶ国で取り組んだ模擬国連で

「ゼロハンガーを目指す食料流通システムの構築」について総会を開催。アメリカフィールドワークでは、採択された決議を元国連事務次長のチョウドリ大使に直接提出。その模様は全校生徒にライブ中継され、チョウドリ大使からのアドバイスも全校生徒で共有された。また、高校3年生対象に、大学教員を招いての「アカデミック・ライティング講座」を3回行い、全員が探究したことを論文にまとめ、英語サマリーとして発信した。教科横断の取り組みとして、英語の授業で論文から英語サマリーの作成に取り組んだ。



University Partnership Class

希望者がGRITの学びを深めるためのプログラム。高大接続して行い、提携する大学・国際機関・企業等から深い知識を、直接双方向で学べる時間。毎週木曜日の7限目として行い、受講者には単位を付与する。2017年度は南カルフォルニア大学や京都大学の教授をはじめ25講座行った。



UP 高大接続プログラム

期	日付	講師	内容
1	4/20	ライオンズ	平和
2	4/27	創価大学	平和
3	5/5	創価大学	平和
4	4/13	創価大学	平和
5	4/20	創価大学	平和
6	4/27	創価大学	平和
7	4/20	創価大学	平和
8	5/14	創価大学	平和
9	5/14	創価大学	平和
10	5/14	創価大学	平和
11	4/27	創価大学	平和
12	4/27	創価大学	平和
13	4/27	創価大学	平和
14	10/26	大阪大学	人権
15	10/12	創価大学	人権
16	10/26	創価大学	人権
17	11/30	創価大学	人権
18	11/30	創価大学	人権
19	11/30	創価大学	人権
20	12/14	創価大学	人権
21	1/11	創価大学	人権
22	1/18	創価大学	人権
23	1/25	創価大学	人権
24	2/11	創価大学	人権
25	2/18	創価大学	人権

神戸大学附属中等教育学校

地球安全保障への提言を目指す 「グローバルキャリア人育成神戸モデル」

【構想の概要】

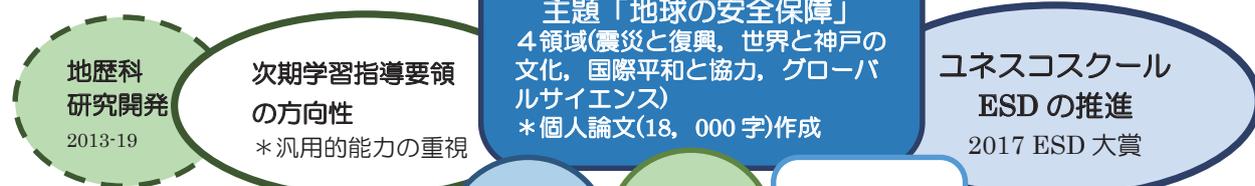
国立大学附属学校及びユネスコスクールとしての特色を活かした次の3点を核とする「グローバルキャリア人育成神戸モデル」の開発と実践

- ① 課題研究を核とする教科横断型体系的グローバル人材育成カリキュラムの開発
- ② 国内外での圧倒的なグローバルアクションプログラムの実施
- ③ 高大一体による実践を支える確かな調査研究の推進

I 育てたい生徒像 グローバルキャリア人

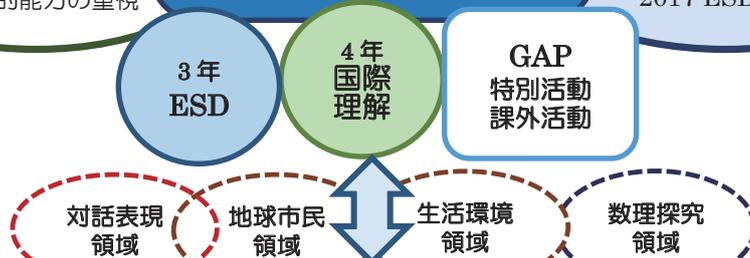
II 教科横断型カリキュラム

(1) コア (課題探究力育成の要)



(2) ブリッジ

(課題研究と教科をつなぐ)



(3) ブランチ/教科内探究

(教科学習との相乗効果)



III 教育課程表

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
総合	探究入門 2単位	探究入門 2単位	課題学習 2単位	課題研究Ⅰ(入門) 2単位	課題研究Ⅱ 1単位	課題研究Ⅲ 1単位
合科的			公民「ESD」 1単位	現社「国際理解」 1単位		
各教科	教科横断的・教科内の「探究学習」					
	基礎期		充実期(中高互換)		発展期	
特活	学校行事(文化祭, 宿泊行事)等を活用したグローバル・アクション・プログラム(GAP)					
課外	自主活動, 応募型研修, セミナー等を活用したグローバル・アクション・プログラム(GAP)					

1 教科横断的カリキュラムの構造

本校 SGH の研究主題は、SDGs（持続可能な開発目標）達成に向けた ESD を強く意識した「地球安全保障への提言を目指す『グローバルキャリア人育成神戸モデル』」である。研究主題の追究は、教科横断的な「課題研究」と教科学習の両立によって推進すべきと考え、次の三層構造によるカリキュラムを編成している。

(1) 課題探究力育成の要「課題研究」

前期課程（中学相当）の Kobe プロジェクト（グループ調べ学習）を基盤に、「課題研究」Ⅰ、Ⅱ、Ⅲでは、生徒の個人研究による 18,000 字以上の論文提出を義務付けている。下記 4 領域からさらに研究テーマを絞り込み、課題探究力の育成を図っている。

- A 震災・復興とリスクマネジメント
- B 国際都市「神戸」と世界の文化
- C 提言：国際紛争・対立から平和・協力へ
- D グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」

さらに、課題探究力を「見つける力（発見）」「調べる力（調査）」「まとめる力（概括）」「発表する力（発表）」及びすべての力につながる「考える力（思考）」に分節化すると共に、各「力」に対応したルーブリックを作成し、課題研究論文の評価規準・基準を明確にしている。

(2) 課題研究と教科をつなぐ仕組み

課題研究の円滑な遂行のためには、「地球の安全保障」に関する基本的な学習が必要であることから、本校では前期課程社会科・後期課程公民科の枠内に「ESD」「国際理解」（通称）を置き、一部合科的学習を導入して、課題研究と教科学習をつなぐ実践を試みている。

また、グローバル・アクション・プログラム（GAP）では、海外研修（米・越・台・英・カンボジア）、国内交流活動（海外交流協定校の受入れ、宮城研修他）、各種セミナー等 40 以上の事業を実施しており、課題研究を支える特別活動・課外活動における探究的取組に位置付けている。

(3) 教科学習との相乗効果

本校では、「カリキュラム・マネジメント」が強調される以前から、研究部及び各教科を中心に教育課程の検討を重ねてきた。

特に SGH 指定にあたっては、汎用的能力育成を視野に入れ、教科の教科教育目標を改訂し、次期学習指導要領の方向性にほぼ合致した取組を

行ってきた。教科内探究（主題）学習では、「課題探究力」育成を「思考力」と「実践力」をつなぐものとして、教科教育目標の中に位置付けている。実践的には、「地球の安全保障」に関連した探究（主題）学習を各教科（一部合科）で単元展開する機会が多い。また、前身校（附属住吉中学校）の協同学習の伝統を活かしつつ、「共創型対話（主体的・対話的で深い学び）」を重視した授業改革に取り組んでいる。

教科における探究（主題）学習の展開は課題研究に役立つと同時に、課題研究が教科における探究学習にも寄与しており、「相乗効果」が上がっていることが生徒・教師の意識調査等から読み取れる。

2 教科における探究的学習例

教科内における探究的な学習の例として、以下の実践例がある。また、複数教科科目が連携しながら同テーマの単元学習を並列実施する場合がある。

- 「国語総合」：総合単元「授業改革への提言」
- 「コミュニケーション英語Ⅰ」：仮想水、フードロス
- 「地理総合」：水資源、地域共同体
- 「歴史総合」：戦争回避不能地点
- 「現代社会」：移民問題、気候変動
- 「地学基礎」：気候変動 「生物基礎」：生物多様性
- 「保健」 & 「家庭基礎」：ヘルスプロモーション
- 「コミュニケーション英語Ⅰ」 & 「美術」：アートマイル（国際協働壁画制作）
- 「地学基礎」 & 「地理総合」 & 「コミュニケーション英語Ⅱ」：防災・減災・復興
- 「コミュニケーション英語Ⅲ」 & 「歴史総合」：ホロコースト & EU の成立
- 「体育」 & 「歴史総合」：地球課題とオリンピック
- 「情報の科学」：問題解決とコンピュータの活用、等

3 大学と連携した検証作業

本校 SGH と生徒の「グローバル意識」との相関については、神戸大学の石川慎一郎教授や林創准教授の協力を得て、テキストマイニングや批判的思考力テストを導入した独自の方法で評価・分析を行っている。検証では、SGH 事業がグローバル意識の育成に貢献していることはもとより、「課題研究と教科学力」及び「課題研究と批判的思考力」には、高い相関関係があることが判明している。詳しくは、本校『SGH 研究開発実施報告』（第 1 年次～第 3 年次）を参照されたい。

兵庫県立兵庫高等学校

“課題先進国” 日本を担い世界へはばたく 「未来の創造者」の育成

【構想の概要】

国際機関、行政機関、国内外の大学、企業等と連携し、“課題先進国”日本のこれまでの取組を包括的に学び、その経験を基盤に国内・海外研修を通して「持続可能な都市と環境」、「グローバル化と新産業モデル」、「健康環境リスクマネジメント～食と水の環境～」、「外国人の受入れと日本のグローバル化」の4つの文理融合型の課題研究に取り組んだ。これらのテーマのもと、グローバル社会が抱える様々な課題の解決に向けて、フィールドワークや実験を踏まえた政策提言や実践的活動を行い、その成果を論文やポスターにまとめ、各種発表会で発表し、論文集を作成した。また、研究成果をもとに海外の大学教授や高校生等と意見交換や共同研究を行った。これらの活動を通し、科学的思考力、自律的活動力、複眼的思考力、社会創造力を兼ね備えた「未来の創造者」を育成するための国際的、実践的な教育システムの研究開発を進めた。同時に、英語の総合的な運用能力の育成に努めた。

全校生徒 960 名の内、各学年創造科学科 40 名、普通科 40 名の合計 240 名を SGH 事業対象者としている。



平成29年度入学生(創造科学科) 選は枠内の科目を選択 ※は特定の期間で実施

学年	科目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	
1学年	国語総合	○																																			
	現代文A		○																																		
2学年	現代文B			○																																	
	現代文C				○																																
3学年	現代文D					○																															
	現代文E						○																														

備考 4)について、前期(9月)まで7限(基礎(10)11時+第14限(後期(10月9日)基礎研究(17時)4時)15限)で実施し、
 始業時刻は8:30 6限の日は14:55終了 7限の日は15:55終了
 次年度以降の教育課程は実施予定であり、今後変更される可能性があります

平成29年度入学生(普通科) 選は枠内の科目を選択 ※は特定の期間で実施

学年	科目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	
1学年	国語総合	○																																			
	現代文A		○																																		
2学年	現代文B			○																																	
	現代文C				○																																
3学年	現代文D					○																															
	現代文E						○																														

備考 自由選択科目は、グローバルリサーチ(グローバル・I・II)を履修し、
 グローバルリサーチ(普通科)の単位数合計は表の合計より、少なくとも1単位です
 始業時刻は8:30 6限の日は14:55終了 7限の日は15:55終了
 次年度以降の教育課程は実施予定であり、今後変更される可能性があります

本校では学校設定教科「創造」を活用して、SGH事業を展開している。

SGH対象者は創造科学科生各学年40名(推薦入試で選抜)、普通科生各学年40名(入学後に選抜)の3学年合計240名である。

創造科学科では1年生時に学校設定科目「創造基礎」(2単位)「RRE」(1単位)2年生時に「創造応用I」(文系・理系それぞれ3単位)3年生時に「創造応用II」(文系2単位・理系1単位)において、探究的な学習および課題研究を実施している。

普通科では「グローバルリサーチI～III」(各1単位)において同様の取り組みを行っている。

すべての学校設定科目は複数の教科の教員が担当し、教科横断的な内容を意識して実施している。

毎年、約25名の教員が教科「創造」を担当しており、「地歴・公民科」「英語科」は全員、「理科」「数学」の8割の教員が教科「創造」の探究的な学習および課題研究の指導に取り組んだ。また、必要に応じて「国語科」「保健体育科」「情報科」の教員もサポートを行っている。その結果、普通教科においても「現代社会」「生物基礎」をはじめとする科目で探究的な学習を取り入れ、主体的対話的で深い学びを実践している。

課題研究の実施の工夫

「創造基礎」では国際機関、行政機関、NPO等と連携している。H29年度に神戸市長田区と教育とまちづくり分野における連携協定を結び、本校生徒に対するサポート体制が整った。「創造応用」では兵庫県と大学との教育連携協定を活用し、大学教員、大学院生のサポートを受けながら実施している。特に本校は大阪大学大学院国際公共政策研究科とH25年度に教育連携協定を結んだ。

校内における成果の共有であるが、4月に「未来創造シンポジウム」を開催し、前年度の成果の発表会を実施している。加えて毎月「SGH通信」を発行し、全職員に配布している。

課題研究の評価については新たに本校独自のパフォーマンス評価表を作成し、生徒のスキルアップが明確にわかるように工夫した。

成果と課題

教科「創造」を受講している全生徒が研究ポスター、論文を作成した。校内だけでなく大学等で発表の機会を設け、毎年複数の生徒が表彰を受けている。

東京大学・京都大学をはじめとするスーパーグローバル大学の推薦・特色入試で課題研究の成果を活かすことができた。

H29年度には内閣官房主催「第1回薬剤耐性(AMR)対策普及活動表彰」の教育・研究分野で文部科学大臣賞を本校が受賞した。

このように本校の課題研究の取組が外部において高く評価され、進路実現にもつながっている。

生徒が身についたスキルや意識の変容についての評価は、上記のパフォーマンス評価とアンケートで測っている。

H29年度卒業生アンケートでSGH対象者の75.3%が大学在学中に留学を考え、64.8%が将来、仕事で国際的に活躍したいと考えている。

今後の課題は、推薦入試の対応としての職員の指導体制の確立と英語の4技能の向上である。

他校への成果普及

校外外において広く普及活動を行っている。主なものとして以下の2つのものがある。

・「高校生国際問題を考える日」

兵庫県教育委員会および本校の連携先である大阪大学、WHO神戸センターとの共催で本校が幹事校として実施。平成29年度は県内外の学校30校、約400名が参加。

・「大阪大学探究学習セミナー」

本校教員が講師を務め、毎年約50名の高校教員に成果を普及。

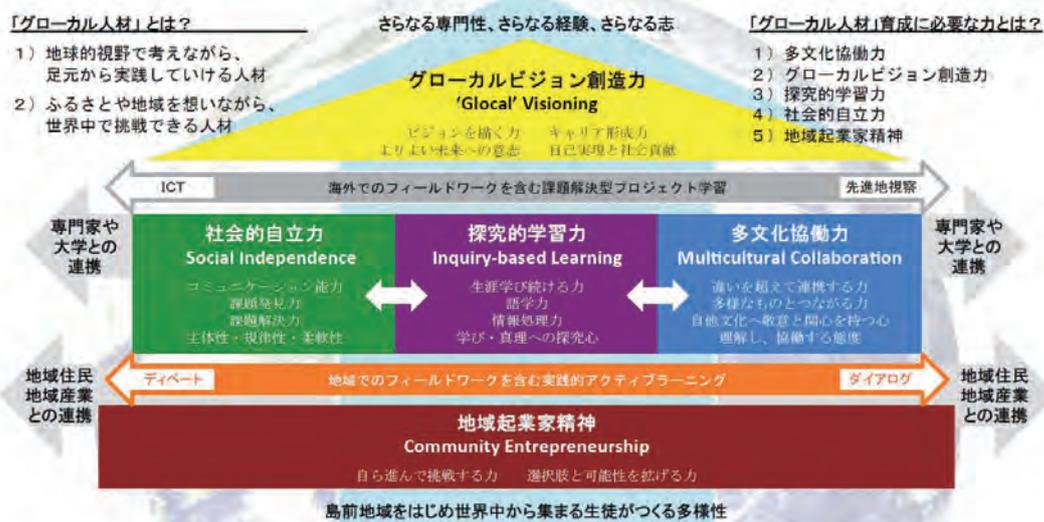
島根県立隠岐島前高等学校

離島発 グローバルな地域創生を実現する「グローバル人材」の育成

【構想の概要】

本校が目指すグローバル人材像は「地球的視野で考えながら、足元から実践していける人材」であり、同時に「ふるさとや地域を想いながら、世界中で実践者として活躍できる人材」、すなわち「グローバル人材」である。「グローバル人材」の育成には通常の教科に加えて、実際にフィールドに出て学べる機会をより多くつくり、グローバルとローカルの両方のセンスを体験的・実践的に学ぶ必要がある。そこで、課題研究テーマとして、隠岐島前地域に実在する課題でもあり、実際に地球と地域を結び付けて思考・実践できるテーマを設定し、グローバル人材に必要な力と位置づけている「多文化協働力」、「グローバルビジョン創造力」、「探究的学習力」、「社会的自立力」、「地域起業家精神」の基礎を3年間で構築することを目指している。

離島発 グローバルな地域創生を実現する「グローバル人材」の育成



「グローバル人材」を育成を支える7つの研究とは？

- 1) 地域起業家研究
- 2) 国民総幸福量研究
- 3) 教育を核とした地方創生研究
- 4) ジオパーク研究
- 5) 持続・継承可能性研究
- 6) “よそ者”活用研究
- 7) 人口減少コミュニティ研究

「グローバル人材」育成に必要な評価とは？

- 1) 「21世紀型スキル」の観点などを取り入れたルーブリックを用いて評価規準を明確にする
- 2) ポートフォリオやパフォーマンス課題などを用いた評価手法を新たに導入する

■教育課程表 (平成30年度入学生)

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1年	国語	公民	数学		理科		保健体育	芸術	外国語		特別		学総合的な時間	HR	国語総合	現代社会	数学Ⅰ	数学A	数学Ⅱ	生物基礎	化学基礎	体育	音楽Ⅰ 書道Ⅰ 工芸Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅰ	英語表現Ⅰ	地域生活学 (保健・家庭)						
	国語	特例・地歴	数学	選択A	理科	選択B	体育	外国語	特別	現代文B (α,β,γ)	古典B (α,β,γ)	①グローバルストーリーA ②グローバルストーリーB ③グローバルストーリーC ④グローバルストーリーD ⑤グローバルストーリーE ⑥グローバルストーリーF ⑦グローバルストーリーG ⑧グローバルストーリーH ⑨グローバルストーリーI ⑩グローバルストーリーJ ⑪グローバルストーリーK ⑫グローバルストーリーL ⑬グローバルストーリーM ⑭グローバルストーリーN ⑮グローバルストーリーO ⑯グローバルストーリーP ⑰グローバルストーリーQ ⑱グローバルストーリーR ⑳グローバルストーリーS ㉑グローバルストーリーT ㉒グローバルストーリーU ㉓グローバルストーリーV ㉔グローバルストーリーW ㉕グローバルストーリーX ㉖グローバルストーリーY ㉗グローバルストーリーZ			数学Ⅱ (α,β,γ)	①数学Ⅱ ②数学Ⅲ	科学と人間生活 生物 化学	①倫理 ②歴史学探究 ③情報処理 ④生活と福祉	コミュニケーション英語Ⅱ (α,β,γ)	英語表現Ⅱ (α,β,γ)	地域生活学 (保健・情報・総合的な学習の時間)											
2年	国語	特例・地歴	数学	理科	体育	外国語	特別	現代文B (α,β,γ)	古典B (α,β,γ)	①グローバルストーリーA ②グローバルストーリーB ③グローバルストーリーC ④グローバルストーリーD ⑤グローバルストーリーE ⑥グローバルストーリーF ⑦グローバルストーリーG ⑧グローバルストーリーH ⑨グローバルストーリーI ⑩グローバルストーリーJ ⑪グローバルストーリーK ⑫グローバルストーリーL ⑬グローバルストーリーM ⑭グローバルストーリーN ⑮グローバルストーリーO ⑯グローバルストーリーP ⑰グローバルストーリーQ ⑱グローバルストーリーR ⑳グローバルストーリーS ㉑グローバルストーリーT ㉒グローバルストーリーU ㉓グローバルストーリーV ㉔グローバルストーリーW ㉕グローバルストーリーX ㉖グローバルストーリーY ㉗グローバルストーリーZ	数学Ⅱ (α,β)	数学B (α,β)	物理基礎	①物理 ②生物	化学	体育	コミュニケーション英語Ⅱ (α,β,γ)	英語表現Ⅱ (α,β,γ)	地域生活学 (保健・情報・総合的な学習の時間)													
	国語	特例・地歴(選択C)	選択DE	選択F	選択GH	選択I	選択J	保健体育	外国語	総合的な学習の時間	現代文B (α,β,γ)	古典B (α,β,γ)	①数学Ⅱ ②数学Ⅲ	①数学探求A(α,β) ②数学探求B(α,β) ③数学探求C(α,β) ④数学探求D(α,β) ⑤数学探求E(α,β) ⑥数学探求F(α,β) ⑦数学探求G(α,β) ⑧数学探求H(α,β) ⑨数学探求I(α,β) ⑩数学探求J(α,β) ⑪数学探求K(α,β) ⑫数学探求L(α,β) ⑬数学探求M(α,β) ⑭数学探求N(α,β) ⑮数学探求O(α,β) ⑯数学探求P(α,β) ⑰数学探求Q(α,β) ⑱数学探求R(α,β) ⑲数学探求S(α,β) ⑳数学探求T(α,β) ㉑数学探求U(α,β) ㉒数学探求V(α,β) ㉓数学探求W(α,β) ㉔数学探求X(α,β) ㉕数学探求Y(α,β) ㉖数学探求Z(α,β)	①物理学 ②生物学	①物理 ②生物	①コミュニケーション英語Ⅲ (α,β,γ)	英語表現Ⅱ (α,β,γ)	総合的な学習の時間													
3年	国語	特例・地歴(選択C)	選択DE	選択F	選択GH	選択I	選択J	保健体育	外国語	総合的な学習の時間	現代文B (α,β,γ)	古典B (α,β,γ)	①数学Ⅱ ②数学Ⅲ	①数学探求A(α,β) ②数学探求B(α,β) ③数学探求C(α,β) ④数学探求D(α,β) ⑤数学探求E(α,β) ⑥数学探求F(α,β) ⑦数学探求G(α,β) ⑧数学探求H(α,β) ⑨数学探求I(α,β) ⑩数学探求J(α,β) ⑪数学探求K(α,β) ⑫数学探求L(α,β) ⑬数学探求M(α,β) ⑭数学探求N(α,β) ⑮数学探求O(α,β) ⑯数学探求P(α,β) ⑰数学探求Q(α,β) ⑱数学探求R(α,β) ⑲数学探求S(α,β) ⑳数学探求T(α,β) ㉑数学探求U(α,β) ㉒数学探求V(α,β) ㉓数学探求W(α,β) ㉔数学探求X(α,β) ㉕数学探求Y(α,β) ㉖数学探求Z(α,β)	①物理学 ②生物学	①物理 ②生物	①コミュニケーション英語Ⅲ (α,β,γ)	英語表現Ⅱ (α,β,γ)	総合的な学習の時間													
	国語	特例・地歴(選択C)	選択DE	選択F	選択GH	選択I	選択J	保健体育	外国語	総合的な学習の時間	現代文B (α,β,γ)	古典B (α,β,γ)	①数学Ⅱ ②数学Ⅲ	①数学探求A(α,β) ②数学探求B(α,β) ③数学探求C(α,β) ④数学探求D(α,β) ⑤数学探求E(α,β) ⑥数学探求F(α,β) ⑦数学探求G(α,β) ⑧数学探求H(α,β) ⑨数学探求I(α,β) ⑩数学探求J(α,β) ⑪数学探求K(α,β) ⑫数学探求L(α,β) ⑬数学探求M(α,β) ⑭数学探求N(α,β) ⑮数学探求O(α,β) ⑯数学探求P(α,β) ⑰数学探求Q(α,β) ⑱数学探求R(α,β) ⑲数学探求S(α,β) ⑳数学探求T(α,β) ㉑数学探求U(α,β) ㉒数学探求V(α,β) ㉓数学探求W(α,β) ㉔数学探求X(α,β) ㉕数学探求Y(α,β) ㉖数学探求Z(α,β)	①物理学 ②生物学	①物理 ②生物	①コミュニケーション英語Ⅲ (α,β,γ)	英語表現Ⅱ (α,β,γ)	総合的な学習の時間													

総合的な学習の時間を軸とした探究

本校では SGH 以前より 1～3 年次において総合的な学習の時間「夢探究」を実施している。

夢探究 I (1 年次) は place - based learning と位置づけ、互いの個性や島前地域について理解を深め、地域で暮らす大人を講師に招いて地域課題について学び、チームビルディングや協働的探究学習の体験を積み基礎をつくる構成となっている。

夢探究 II (2 年次) は problem - based learning として同一のチーム (4 人) で約 1 年間、実在する課題解決の企画立案のみならず実践まで求める地域課題解決型の探究学習を行う。全校生徒の半数が島留学生という特徴を活かし、チームは地域内外出身の生徒が混ざり合うように構成し、「異なる視点や考え方を持つ他者」との協働を通じて、協働的・探究的学習を体験的に学ぶよう設計されている。11 月のシンガポール海外研修では現地大学生に対してプレゼンテーションを行い、フィードバックを得る機会を設けている。

夢探究 III (3 年次) は project - based learning として、個人の意志に基づくプロジェクトや進路探究の時間と位置づけている。地域を巻き込んだプロジェクトや進路情報の収集、学習計画立案、志望動機書や小論文の練習など、これから必要となる活動を自身で計画し、自律的に探究する時間としている。

学年部でのカリキュラム・マネジメントと教員の生徒への関わり方

これらの協働的探究学習は、各学年部 (10 名程度) を中心に進めており、キャリア教育主任とコーディネーターが複数で 3 学年を横断的・俯瞰的に関わっている。

授業時間割の中に打ち合わせの時間が設けられており、その週の授業の振り返りや生徒・チームの状況把握をした後、次回の授業にどのように反映させるか PDCA サイクルを高速で回している。教員のみならず社会人経験豊富なコーディネーターが関わることで学校外にある様々なリソースへのアクセスが可能になるだけでなく、生徒の幅広いニーズへの対応も可能となっている。

2 年次の協働的探究学習では、教員は極力生徒の活動を妨げないようにしている。たとえ課題設定がうまくいかずにチーム活動が滞っていたとしても助けを求められない限りは基本的には動かない。「困ったときこそ自分を開いて助けを求めに来てほしい」というメッセージは伝え続け、門戸を開いている。これは将来困ったときにこそ自分を開き、他人に頼ることを実践してもらいたいからに他ならない。

協働的探究学習と他教科のつながり

2 年次のシンガポールでの英語プレゼンテーションの際には情報科や英語科の協力を得て、効果的な英語プレゼンテーションの仕方などについて協働的探究学習と連携しながら活動を行うことで、フィードバックも得やすい体制を構築している。

その他の科目に関しても、学習者同士の学び合い (生物基礎・数学) や教科に関連した探究学習 (生物基礎探究・科学と人間生活)、論述形式試験問題の採用 (グローバルヒストリー) など、各科目が日常的に協働力や思考力の養成を軸に置いて、協働的探究学習との連動を意識した授業展開を実施している。同時に、探究学習の方法論や評価に係る教員研修を年に数回実施している。

取り組みを通しての成果・今後の課題

SGH に指定されてからの数年間は、まさに「社会に開かれた教育課程」を地域と協働しながら構築してきたことが最大の成果である。

とくに本校における協働的探究学習のスタイルを確立できたこと、また、それを複数教員で多面的に指導できる体制が構築できたことは成果と言える。

学習プログラムが地域から世界へと視点を移し、また地域に戻ってくるように設計されていることで地域社会や国際社会を比較したり、自分なりに貢献したいというビジョンの醸成にもつながっている。

課題としては、明確な評価を開発できていないことである。協働的探究学習のルーブリックは作成したが毎年改善が必要な状況であり、学年によってはピア・メンタリングで生徒が相互に評価する方が効果的なこともある。引き続き探究が必要である。

課題研究「グローバルプログラム」

当校のSGHは3本の柱からなる。中心の柱となるのは課題研究「グローバルプログラム」である。ここでは、経験や発達段階を考慮しながら、「総合的な学習の時間」を利用して、1年（中学1年）「研究を学ぶ」、2年（中学2年）「課題発見を学ぶ」、3年（中学3年）「主体的な学びを学ぶ」、4年（高校1年）「体験グローバル」と段階的に「研究の方法を学ぶ」ことを実践している。同じく4年では、新教科・科目である「課題研究への誘い／社会科学分野」、5年（高校2年）では「課題研究への誘い／数理情報科学分野」を実践し、「解決の技」の習得を目指す。最後に「研究の実践」として、「総合的な学習の時間」を利用して5年で「提言Ⅰ」「創造Ⅰ」、6年（高校3年）で「提言Ⅱ」「創造Ⅱ」に取り組む。このようにして効率的に「経験知」を蓄積することで、高次の知の総合化を図っている。4年の「体験グローバル」では地元にあるオンリーワン企業のご協力をいただき、講演・実地調査・海外研修での訪問などを実施し、各企業の講演から社会的課題を見出してグループ別の課題研究につなげていっている。この課題研究の指導には半数弱の教員が各グループの指導にあたっている。5年の「提言」では各自が自由に課題研究のテーマを設定し、個人で課題研究を進めている。この指導にも半数弱の教員が各生徒の指導にあたっている。これとは別に5年の「創造」を担当する教員もおり、4年・5年の総合的な学習の時間では、結果的にほぼすべての教員が課題研究を指導することとなっている。5年の「提言」では教員は自分の専門分野の課題研究を担当するとは限らず、専門知識を持つほかの先生方や校外の機関などの意見を聞く機会も多く生まれる。また、中学までの総合的な学習もまた多くの教科が関わっているので、必然的に総合的な学習の時間では各教科が横断的に取り組みを進めることとなっている。年度が進むごとに教員の課題研究の指導や知識もまた蓄積されており、その成果としては年度末

における生徒の論文集の質がずいぶん上がってきていることがあげられる。

既存の教科・新教科

2本目の柱は既存の教科・新教科での取り組みである。ここでは、認知スキル・社会スキルの伸長を目的として取り組みを進めている。3年では新教科・科目である「現代への視座／防災と資源・エネルギー」を実施し、身近な環境や生活の中にある課題を複眼的かつ批判的に分析・考察を進めている。5年の「現代への視座／クリティカルシンキング」では、現代社会の諸問題を扱う評論文を題材に多面的・総合的な思考と論理的な表現力の育成に取り組んでいる。5年の「現代への視座／グローバルコミュニケーション」では、英語を用いた議論や説得を主題とし、論理の誤謬や議論の方法、論理的にまとめる方法などを学んでいる。このように新教科では課題研究に必要な議論の方法やその基礎について学んでいる。また既存の教科においても、経験知蓄積プログラムである「グローバルプログラム」を意識した内容を取り入れた授業を随時実践している。

特別講座「スーパーグローバル」

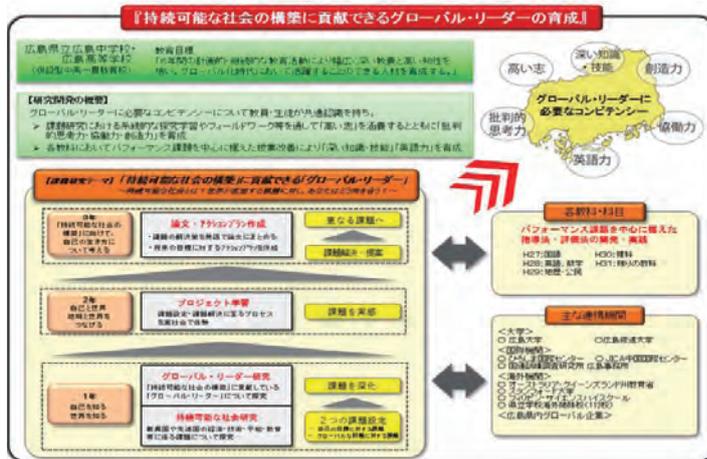
3本目の柱が特別講座「スーパーグローバル」である。ここでは合意形成能力の育成を目的として、授業以外の特別講座という形で取り組んでいる。「スーパーグローバル」の一つに、広島大学大学院国際協力研究科（IDEC）連携プログラムがある。IDECに在籍している留学生は将来母国で社会的課題の解決に向けて活躍する人材であり、それぞれの国が持つ課題を背景に研究している。これはその研究発表を元に生徒と留学生とが英語で議論し意見を交わすプログラムである。多様な観点に基づいて主張することの重要性を学ぶとともに、文化的背景や価値観の異なる集団の中で合意形成しようと努力する必要がある、大変有用なプログラムとなっている。その他に生徒が主催して模擬国連（国連カフェ）を実施したりもしている。

広島県立広島中学校・広島高等学校

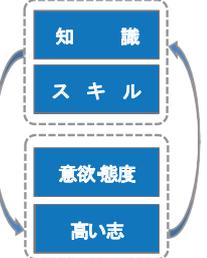
持続可能な社会の構築に貢献できる グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

研究開発の目的は、すべての人が“善く生きる”ことのできる持続可能な社会の構築に貢献したいという「高い志」を持ち、その実現のために、「広島」への深い理解・愛着を持ちながら、国内外の異なる文化的背景を持つ人々と協働して、新たな価値を創造できるグローバル・リーダーを育成することである。そのために、カリキュラム・指導法・評価法の開発、及び環境整備を行い、グローバル・リーダーに必要なコンピテンシーの育成に向けて、「課題研究」と各教科の「パフォーマンス課題」を関連させ、生徒の「汎用的能力」を育成する。また、パフォーマンス課題を用いた授業により「深い知識・技能」「英語力」を育成する。さらに「持続可能な社会の構築」をテーマに、多様な他者とのディスカッション、フィールドワーク等により、知識と実社会を結び付けながら探究するという課題研究を通して、「高い志」をはじめとするコンピテンシーを育成する。



【取組の基本的な考え方】
・コンピテンシーへの共通認識
↓
「課題研究」（汎用的能力）と
「パフォーマンス評価」
（知識・技能）を連携
コンピテンシー育成の好循環



SGH対象生徒
1年生 240名（学年全体240名）
2年生 80名（学年全体240名）
3年生 80名（学年全体240名）

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33			
第1学年	英語総合																																			
第2学年	現代文Ⅰ																																			
第3学年	現代文Ⅱ																																			

教育課程表や時間割上の工夫

本校では、高校2年次・3年次において、2クラス80名からなるグローバル・コースを設置し、将来グローバルリーダーとして活躍できる人材の育成を目指している。本コースでは「グローバル・エクスペリションⅠ・Ⅱ」やグローバル課題等について研究する「SGH課題研究①・②」を設置している。また、教科以外の活動では、ハワイ姉妹校留学、オーストラリア、フィリピン等で短期海外研修を行い、これらの学習をとおして、グローバル化時代に対応した力を育成することとしている。また、本校におけるSGH事業の方向性を決定する研究開発組織は、課題研究推進部が統括する4つのチームで編成され、毎週1回、週時程に位置付けた委員会において、協議を行い、研究の推進を担っている。

学校設定教科・科目

平成28年度から、高校2年次・3年次のグローバル・コースで、「英語表現Ⅱ」に代えてそれぞれ「グローバル・エクスペリションⅠ・Ⅱ」を実施している。この科目は、実践的なコミュニケーション能力を育成することで、海外や留学生とのワークショップを機能化させ、SGH課題研究①・②を深めることを目標としており、学習内容の深化を図るため、他教科での学習内容と関連付けながら進めている。なお、本校では生徒が個々に英語学習に取り組む動機づけとして、また、英語力を測る指標の一つとして、実用英語技能検定（英検）を受検することを推奨している。特に、グローバル・コースでは、高校2年生までに全員が英検2級を取得することを目標とし、さらに準1級への挑戦を薦めている。

実用英語技能検定 取得者数一覧

平成28年度当初の取得数							平成29年度当初の取得数								
	1	準1	準2	3	4	5	取得者数	1	準1	準2	3	4	5	取得者数	
高1	-	16	77	138	3	2	236	高1	-	25	97	107	2	231	
高2	-	3	77	111	35	3	230	高2	-	2	101	81	52	2	239
高3	-	8	95	88	59	1	231	高3	-	19	109	71	25	2	226
計	0	11	188	256	232	7	697	計	0	21	235	249	184	6	696
平成28年度第1回実用技能英語技能検定終了後							平成29年度第1回実用技能英語技能検定終了後								
	1	準1	準2	3	4	5	取得者数	1	準1	準2	3	4	5	取得者数	
高1	-	1	98	109	85	2	237	高1	-	1	40	110	81	-	232
高2	-	3	105	92	28	2	231	高2	-	2	118	74	43	2	239
高3	-	10	89	85	56	1	231	高3	-	29	114	57	24	2	226
計	0	14	242	266	169	5	699	計	0	32	270	241	148	4	696
平成28年度第2回実用技能英語技能検定終了後							平成29年度第2回実用技能英語技能検定終了後								
	1	準1	準2	3	4	5	取得者数	1	準1	準2	3	4	5	取得者数	
高1	-	1	70	104	60	2	239	高1	-	2	84	93	58	-	239
高2	-	6	107	88	28	2	232	高2	-	6	135	56	39	2	239
高3	-	11	100	64	56	1	231	高3	-	31	112	57	24	2	226
計	0	18	277	256	144	5	703	計	0	39	331	206	121	4	702
平成28年度第3回実用技能英語技能検定終了後							平成29年度第3回実用技能英語技能検定終了後								
	1	準1	準2	3	4	5	取得者数	1	準1	準2	3	4	5	取得者数	
高1	-	2	99	82	52	2	238	高1	-	4	109	82	43	-	238
高2	-	19	110	72	25	2	229	高2	-	16	147	40	34	2	239
高3	-	11	100	64	55	1	231	高3	-	31	112	57	24	2	226
計	0	32	309	218	132	5	698	計	0	51	388	179	101	4	703

SGH 課題研究

本校の課題研究は、高校1年次で「グローバル・リーダー研究」,「持続可能な社会研究」,高校2年次で「プロジェクト学習」,高校3年次で「論文・アクションプラン」と系統的なつながりをもっており、高校3年次に作成する卒業論文はSGH課題研究の集大成である。この取組により、生徒は自らの学びを客観的に捉え、相対的、批判的な視点を身に付けるとともに、自分の考えを理論的に説明する力を向上させている。また、昨年度からは、生徒に課題研究の要旨をまとめたパワーポイントを作成させるとともに、データベース化にも取り組んでいる。このことにより、生徒自身の課題研究に一貫性や継続性を持たせることができると同時に、学校全体としても「知の蓄積」を進めることができる。



発表者	課題研究テーマ
1	特別活動 (TORIKATSU) における合意形成と集団志向に関する探索的研究 ～フィンランドでの留学経験を踏まえた、協働性を育む「沈黙のマネジメントモデル」の開発～
2	回転運動に着目した走り幅跳びにおける踏切前2歩”長-短”の動作の重要性の証明
3	無常観を翻訳する ～日本独自の感性はグローバルになりえるのか～
4	動画解析による卓球のスイングにおける手首・肘の軌跡の計測 ～未経験者と経験者の比較を通して～
5	鏡による住宅用太陽光発電システムの効率化
6	広島県の高専学校における平和教育の在り方について ～アクティブラーニングを使用した授業の提案～
7	「顔組み」が記憶力にもたらすプラス効果の検証
8	Research on Colored Pictograms and their Interpretation

さらに、学校全体としても、課題研究と各教科の学びを結び付けることによりコンピテンシーベースの学びが実現できていると考えている。このことは、平成29年度SGH甲子園における最優賞受賞などのコンクール等での多数の受賞実績や東京大学の推薦入試合格（平成27年度入試1名、平成28年度入試2名、平成30年度入試2名）などに現れている。今後、課題研究を本校の幹としてさらに内容を充実させると同時に、社会性の充実にも取り組んでいく。そのために、SGHの取組と各教科等との関連を可視化したカリキュラム・マップにより統合された学校全体の教育活動を有機的に結び付け、学校全体で取組を進めていく。

高知県立高知西高等学校

「食を活かした地域創生」をテーマにした グローバル人材の育成

【構想の概要】

食に関する課題や地域活性化事例を収集・分析し、グローバルな視点から地域創生モデルを提案する取組を通して、課題発見力、創造的思考力、課題解決力を身に付けたグローバル人材を育成する。

探究活動「グローバル探究Ⅰ～Ⅲ」及び英語授業を中心に研究を進め、国内・海外でのリサーチ活動や国内外の生徒との討論等の高負荷の活動を課すことによって、課題を発見し、理解し、まとめ、その結果を日本語や英語で発信する力を養成する探究型カリキュラムを実施する。



* S G H事業対象生徒 1・2年…学年全員、3年…普通科「英語課題探究」選択者と英語科全員

【教育課程表 S G H事業に主に関係する教科】

	1年	2年	3年
普通科	グローバル探究Ⅰ(2単位) (総合的な学習の時間) 英語表現Ⅰ(3単位)	グローバル探究Ⅱ(2単位) (社会と情報の代替科目) 英語表現Ⅱ(2単位)	理型 グローバル探究Ⅲ(1単位) 文型 グローバル探究Ⅲ(1単位) (総合的な学習の時間) 英語課題探究(2単位) (学校設定科目・選択科目) 課題論文(1単位) (学校設定科目)
英語科	グローバル探究Ⅰ(2単位) (総合的な学習の時間) パワーイングリッシュⅠ (4単位)	グローバル探究Ⅱ(2単位) (社会と情報の代替科目) グローバルエデュケーションⅠ (2単位)	グローバル探究Ⅲ(1単位) (総合的な学習の時間) グローバルエデュケーションⅡ (2単位)

1 グローバル探究（全校生徒対象）

(1) 1年 グローバル探究Ⅰ

- ・サブテーマは「生産流通」「六次産業」「食と健康」「食と観光」、グループで地域創生策を提案。
- ・リサーチ活動…県内8地域や県外（大阪、東京）
- ・SWOT分析で高知県の強みと弱みを知る。
- ・大学生TA（Teaching Assistant）が10月以降ファシリテーター役として各クラスで活動。
- ・学年末の成果発表会で全グループによるポスターセッションを実施。



(2) 2年 グローバル探究Ⅱ

- ・グループで、SDGsからテーマを選び、大学教員の助言を受けつつ調査・探究を行う。
- ・6,000字程度のリサーチペーパー作成途中で、全体でのポスターセッションを実施し、改善を図る。代表グループは、成果発表会で発表する。

(3) 3年 グローバル探究Ⅲ

- ・主に2年次の探究課題を深化させ、個人でリサーチペーパーを書き、プレゼンテーションを行う。
- ・普通科文型では、国語の「課題論文」と連携し、より高い文章表現力も身に付ける。英語科ではグローバルエディケーションⅡと連携し、英語でのリサーチペーパー作成、プレゼンテーションを実施する。

2 主な英語授業の取組

(1) 1年次

多読及び多書活動に重点を置いている。多読活動では、進捗管理にオンラインシステムM-Readerを使用。

(2) 2年次

「食」に関する3つのサブテーマ、「食と信仰」「食とフェアトレード」「食と言語/習慣/文化」を設定し、英語を使つてのディベートやプレゼンテーションを実施。

(3) 3年次

英語科と普通科英語課題探究選択者は2年次のリ

サーチペーパーの内容をより深化させ、国際シンポジウム等国内外の大会で英語によるプレゼンテーションやポスターセッションを行う。

3 成果と課題

(1) 生徒の変容

- ・グローバル・リーダーとしての資質・力量の向上…t検定で検証
- ・3年間の探究活動により、創造的・論理的思考力、コミュニケーション力、積極性が向上



「グローバル・リンク・シンガポール」等の大会に出場、「高知家地方創生アイデアコンテスト」入賞
国公立大学AO・推薦入学受験者、合格者増加
・欠席数の減少（1年生 H27年度前後）
H25…752名、H26…631名、H27…378名

(2) 教職員の意識の向上

【SGH事業により伸ばした生徒の資質・能力】

	H29	H28	H27 (%)
コミュニケーション能力	78.0	85.7	35.3
リーダーシップ	42.4	31.0	10.3
主体性・積極性	51.7	54.8	23.5

(3) 研究開発成果の普及

- ・国際シンポジウムの開催



H30年度はオーストラリア提携高校生
と地域活性化案のディスカッション

- ・県内中学校に出向いての授業内容紹介（3年生）

(4) 課題

- ・グローバル探究の内容の精選。学年間の系統性の維持と円滑な接続。
- ・全校生徒が対象のため、リサーチペーパーの内容充実度に差がある。
- ・課題探究に必要な英語の語彙力の向上。
- ・目標と方法の共有に有効な担当者会の工夫。

筑波大学附属坂戸高等学校

先進的な総合学科を活かした持続可能な アセアン社会を創るグローバル人材の育成

【構想の概要】

全生徒に対する地球市民性醸成プログラム（1年次グローバルライフ、カナダ海外校外学習）の開発と、アセアン諸国と連携した2年間に及ぶ課題研究プログラムの開発（2年次T-GAP（グループ）、高校生国際ESDシンポジウム、国際フィールドワーク；3年次卒業研究（個人）、大学における研究指導）を行う。また、コミュニケーション能力向上のための英語+1か国語マスタープログラム（インドネシア語 講座）も実施する。

【平成30年度入学生 総合学科 教育課程表】

1年次				2年次				3年次			
	教科	科目	単位		教科	科目	単位		教科	科目	単位
必修 学校指定必修	国語	国語総合	4	必修 学校指定必修	地歴	世界史A	2	必修 学校指定必修	保健体育	体育	3
	地歴	日本史A	2		公民	現代社会	2		外国語	コミュニケーション英語Ⅲ	3
	数学	数学Ⅰ	3		理科	物理基礎	2			卒業研究	2
	理科	化学基礎	2		保健体育	体育	2	3年次必修科目数		3	
		生物基礎	2			保健	1	3年次学校指定必修科目数		5	
	保健体育	体育	2		芸術 (選択)	音楽Ⅰ		3年次選択科目数		21~22	
	保健体育	保健	1			美術Ⅰ	2	3年次教科科目履修単位数		29~30	
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3			書道Ⅰ		特別活動		1	
	学校指定必修	家庭	グローバルライフ		2	外国語	コミュニケーション英語Ⅱ	4	3年次総履修単位数		30~31
情報		社会と情報	2	2年次必修科目数		11					
数学		数学A	2	2年次学校指定必修科目数		4					
外国語		英語表現Ⅰ	2	2年次選択科目数		12					
	産業	産業社会と人間	2	2年次教科科目履修単位数		29					
1年次必修科目数			23	特別活動		1					
1年次学校指定必修科目数			6	総合的な学習の時間		2					
1年次教科科目履修単位数			29	2年次総履修単位数		32					
特別活動			1								
1年次総履修単位数			30								

2年次選択科目			
科目群	生物資源・環境科学	工学システム・情報科学	生活・人間科学
科目群	<指定(4単位)> 農と環境Ⅰ(2) 生物資源・環境科学実習Ⅰ(2)	<指定(2単位)> 工学情報実習Ⅰ(2) <選択(2単位)> 産業電子技術(2) プログラミング技術A(2)	<選択(4単位)> 福祉入門(2) 生活と福祉(2) パフォーマンスコミュニケーション(2) 生活デザインⅠ(2)
一般選択科目	現代文(2) 日本語表現(2) 古典Ⅰ(2)	世界遺産で学ぶ地理(2) 日本史B(4)	世界の思想(2) 数学Ⅱ(4) 数学B(2) 化学α(2) 原価計算(2)
	農業研究(4) 生活園芸(2) 製図(2)	アパレル入門(2) 調理科学(2)	子どもの発達と保育(2) 介護福祉基礎(2) ビジネスの基礎(2)
	ビジネススキル(2) マーケティング(2)	体育を科学する(2) 生物α(2)	工業数理基礎(2) グローバルライフプラス(2) P.S.(2)

3年次選択科目			
科目群	生物資源・環境科学	工学システム・情報科学	生活・人間科学
科目群	<指定(5単位)> 農と環境Ⅱ(2) 生物資源・環境科学実習Ⅱ(3)	<指定(3単位)> 工学情報実習Ⅱ(3) <選択(2単位)> 機械設計(2) プログラミング技術B(2)	<指定(1単位)> 人間科学(1) <選択(4単位)> 生活実習技術(2) 介護総合実習(2) 生活デザインⅡ(4)
一般選択科目	現代文(2) 現代文演習(2) 言語コミュニケーション(2) 古典Ⅱ(2)	古典に学ぶ(2) 表現演習(2) 地理B(4) 世界史B(4)	現代の政治経済(2) 数学Ⅲ(5)
	数学活用(2) 物理(4) 化学β(2) 生物β①②(4)	地学基礎(2) スポーツⅡ(2) 英語表現Ⅱ(4) 音楽Ⅱ(2) 美術Ⅱ(2)	野生生物入門(2) 農をよむ(2)
	エネルギー資源と環境(2) 食と農の科学(2) ICTハードウェア(2)	ものづくりデザイン(2) システムデザイン(2)	子ども文化(2) 服飾文化(2) 食文化(2) 福祉からみた生活(2)
	生活研究(2) 販売実践(4) 暮らしのナーと法律(2)	商業デザイン(2) ビジネスコミュニケーション(2)	マルチメディア(2) 比較文化論(2) Global Studies(2)
	ワールドビジネス(2) Discussion & Debate(2)		

※SGクラス1年次は、「グローバルパスポート」が必修

※上記以外に、時間外選択科目として「インドネシア語(1)」「国際フィールドワーク入門(2)」「国際フィールドワーク(2)」を開講

総合学科 20 年の経験を生かしたカリキュラム

総合学科日本初発校のひとつである本校は、すでに 20 年以上の課題研究（校内科目名：卒業研究）活動を実践してきた。このため、本校における SGH のカリキュラム開発は、総合学科 20 年に及ぶ実践をベースに、グローバル社会へ対応していくための開発を行ってきた。

具体的には、入試段階で「SG 入試」を実施し、1 学年 4 クラスのうち 1 クラスを「SG クラス」とし、SGH プログラムに中心的に取り組むこととした。ついで、1 年生では入学者全員がグローバルイシューに対する当事者性を高めるため、「グローバルライフ」（詳細は後述）および、カナダ校外学習を開発した。総合学科高校は、1 年生で「産業社会と人間」を全員が履修し、2・3 年次の時間割を自ら作るのが特徴である。1 年次でグローバルイシューに生徒全員が触れ、海外校外学習を経験することで、自己のキャリア選択に「グローバル」な視点が加わることを期待している。SG クラスは、英語を学ぶだけでなく、世界の言語の多様性を学ぶために「英語＋1 言語」をキーワードに、選択制のインドネシア語講座を開講することとした。また、SGH5 年経過後を見据え、平成 30 年度入学生から、SG クラスの生徒を対象とした「グローバルパスポート」（総合的学習の時間）を開講し、グローバル企業や社会起業分野で活躍している社会人、身近なロールモデルとしての卒業生や留学生との交流、社会問題の解決を具体的な形にしていくための第一歩として、ビジネスプランコンテストに参加することとしている。

2 年生では、「T-GAP（つくさかグローバルアクションプログラム）」を生徒全員が履修している。これは、グループ（1 チーム 4～5 名程度）により、各班でグローバルな社会課題を設定し、具体的にその解決活動に取り組むものである。SG クラスの生徒は、さらに「高校生国際 ESD シンポジウム」への参加を必須とし、国際会議の運営に携わることにしている。また、選択制の SGH 科目として「国際フィールドワーク」を開講し、実際に海外でインドネシアの高校生とフィールドワークを実施する機会を提供している。

3 年次では、全員が個人で課題を設定し「卒業研

究」に取り組んでいる。とくに、SG クラスでは「グローバルなキャリア選択」を将来にわたって実現するために、海外での就職を視野に入れた進路選択や留学を実現できるように促している。

「グローバルライフ」開発における教科間連携

SGH の主要な開発単位のひとつが、1 年生全員が履修する「グローバルライフ」である。これは、家庭科科目「家庭基礎」をベースとしつつ、複数の教科が連携して内容の開発と授業実践を行っている（平成 30 年度は、家庭科、地歴公民科、農業科の教員で授業を実施）。

日本がグローバル化した社会に対応していくためには、生徒全員がグローバルイシューに対して「当事者意識」を持つことが重要であると本校では考えている。一方で、グローバルな課題は自分とは関係ない、あるいは遠い世界で起こっていることと考えている生徒も多いと考えている。この仮説のもと、日常生活がすでに多くのグローバルイシューとつながっており（例えば、食品、化粧品、洗剤など日常生活で欠くことのできないものの多くが、熱帯で生産されているパーム油が用いられており、それが森林減少やそれにとまなう生物多様性の減少や地球温暖化の原因とつながっている等）、誰もがさけて通れる問題ではないと、身につまされながら当事者性を育成できる授業を開発している。その際に、複数の教科が連携することで授業内容に多様性を持たせ、効果があがるようにしている。本校では、2 年次 T-GAP、3 年次卒業研究（詳細は後述）で生徒自らが課題を設定して探究活動に取り組むが、テーマ設定のきっかけにグローバルライフをあげる生徒が複数おり、授業が効果をあげていると考えられる。

SDGs を軸とした各教科の見直し

各教科は、SGH 開発科目と有機的に連携が取れるように、SDGs との関連の中で学習内容の見直しや整理を進めている。例えば、保健の授業での学びを SDGs17 の目標で示したり、家庭科の学びを SDGs12 番の「作る責任、買う責任」の視点で見直している。学校設定教科「国際科」の「国際社会」の授業では、「学校 SDGs」を実践し、校内で身近にできる「SDGs 実現」に向けたスモールプロジェクトを実施している。農業科の授業では、

SDGs14、15番を実現するために地域レベルで実践できることを考え発表を行っている。このような形で、各教科での取り組みもSGHと有機的につながるように工夫している。

全員で取り組む課題研究

課題研究（校内名称：卒業研究）は、3年次の全員が個人テーマを設定して取り組んでいる。2年次の全員履修の「T-GAP」とあわせて、全員が2年間にわたって取り組んでいる。3年次での指導体制は16名の教員が1名当たり10名の生徒を担当し、ゼミ形式で運用している。さらに、担当教員だけでなく、全教員に相談できるようにしており、さらに外部連携も推奨している。このように、本校の課題研究は、生徒および教員が全員関わる形で運用されているのが特徴である。

管理機関と連携したエビデンスの収集と分析

SGHの成果に関するエビデンスの収集は、管理機関である筑波大学附属学校教育局（以下、局とする）と連携して実施している。具体的には、局の開発した「国際的資質尺度」により、全生徒の経年変化をとらえている。この尺度によるエビデンスの収集は、SGH以外の国際教育プログラムとの比較や、他のSGH校との比較も局との連携で可能となる。

また、SGH指定前後の英検取得者の推移も集計を行っている。指定前は英検2級の合格者は1ケタ台で推移していたが、指定後は、50名前後の合格者を出している。また、準1級合格者も複数出ており、英語の運用能力は確実に向上している。さらには、本校の特色のあるインドネシア語においても「インドネシア語検定D,E級」合格者が出ており、「英語+1か国語」が実現しつつある。

さらに、国立大学附属高校として、卒業生の動向も調査を始めており、SGH指定初年度の卒業生（2018年6月現在大学4年生。SGH国際フィールドワークに参加）では、日本語パートナーズ事業（国際交流基金の事業）で、アセアンの国で日本語教師として活躍を始めている生徒もでていいる。さらに、高校時代に、インドネシアやフィリピンの姉妹校へ1年間の海外留学に行く生徒もでていいる。「国際的資質尺度」や英検合格者の推移による量的変容を調査するとともに、卒業生を中心とした行動変容

をおっていく質的変容も今後、継続していきたい。

国際シンポジウムによる成果の普及

本校では、SGH指定前の2012年から「高校生国際ESDシンポジウム」を開催し、インドネシア、タイ、フィリピン等の国から高校生を招聘し、ESDをベースとした探究学習成果を共有する国際交流を継続している。SGH指定後には、このシンポジウムと合わせて、「全国SGH校生徒成果発表会」を開催し、毎年20校程度のSGH校が発表を行い、国内外の高校生が日ごろの学習成果を基にした交流を行う場所を提供している。課題研究のテーマは、各校で様々のため、発表に統一感を持たせることが難しい場合がある。また、海外の高校が参加する場合はなおさらである。そこで、本校のシンポジウムでは「SDGs」をキーワードに、各学校の探究活動の成果が、SDGsの17の目標のどれにあたるか（複数に該当する場合もある）を提示してもらい、持続可能な世界の構築のために、どの分野で貢献しているかを提示してもらっている。

2017年には新たなチャレンジとして、インドネシアの首都ジャカルタにおいて、インドネシア政府環境林業省の協力のもと、「第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング@ジャカルタ」を開催した。ここには、本校だけではなく、日本から中部大学春日丘高等学校、大阪府立泉北高等学校も参加し、SGH校が3校参加した。また、インドネシアから5校が参加し、SGHの成果を国内だけではなく、インドネシアにおいても普及をおこなった。本校は「オープンプラットフォームスクール」を目指しており、地域や世界の人々が国や地域、年代を超えて学びあう場所を提供することを目指している。



第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング@ジャカルタ
(2017年8月10日 於：インドネシア環境林業省)

これは、国立大学附属高等学校としての責務であるとも考えている。今後とも、本校のネットワークを生かしたSGHの成果普及に努めていきたい。

アセアンの大学との高大連携

本校は、管理機関である筑波大学、とくに大学の世界展開力事業である「AIMS (ASEAN International Mobility for Students)」と連携して、SGHプログラムを展開している。毎年、年に数回、筑波大学に留学しているアセアン各国の留学生が来校し、文化交流だけではなく、生徒のアセアンや日本との比較研究など探究活動に対して、英語によるやり取りの中、直接、フィードバックを得ることができている。

さらに、高大連携を国内の大学との連携にとどめず、筑波大学が国際連携協定を締結している、ボゴール農科大学、フィリピン大学、カセサート大学とも連携を進めている。海外における課題研究活動に関する支援を中心としているが、ボゴール農科大学附属高校では将来教職を希望している筑波大学生の「海外教育実習」を試行するなど、様々な分野における連携を進めている。



アセアン各国の留学生が参加したT-GAPポスターセッション

協働型「国際フィールドワーク」を国内外で

最後に、本校の特色ある取り組みの一つである、

インドネシアの姉妹校2校と実施している「協働型国際フィールドワーク」についてまとめる。

本校のSGHでは、申請当初からSDGsをキーワードとしている。SDGsでは、「先進国と途上国が普遍的に協働し目標を達成する」ことが述べられている。これまで先進国と開発途上国は、支援一被支援の文脈で語られることが多かったが、今後は、世界のパラダイムも大きく変化してくるであろう。現在の高校生が社会の中心として活躍するころには、人口減少や労働者人口の減少がさらに進んでいる日本は、まったく違った社会になることが予想される。本校の開発している協働型国際フィールドワークは、新たなパラダイムに対応できる生徒の育成をめざし、バックグラウンドの違う高校生が国や地域をこえチームを組んで実施している。現在は、インドネシアでインドネシアの高校生と連携して実施しているが、将来的にはフィリピンやタイで同様のフィールドワークを実施したり、複数の国の生徒が参加するフィールドワーク、さらにはインドネシアで実施しているフィールドワークを同じ枠組みで日本の農村部で実施できないかと考えている。このような多様な経験を高校段階で提供することで、次代を担うグローバル人材を育成できると考えている。SGH指定5年間で得た国内外のネットワークや経験を生かした新たな取り組みを今後も展開していきたい。



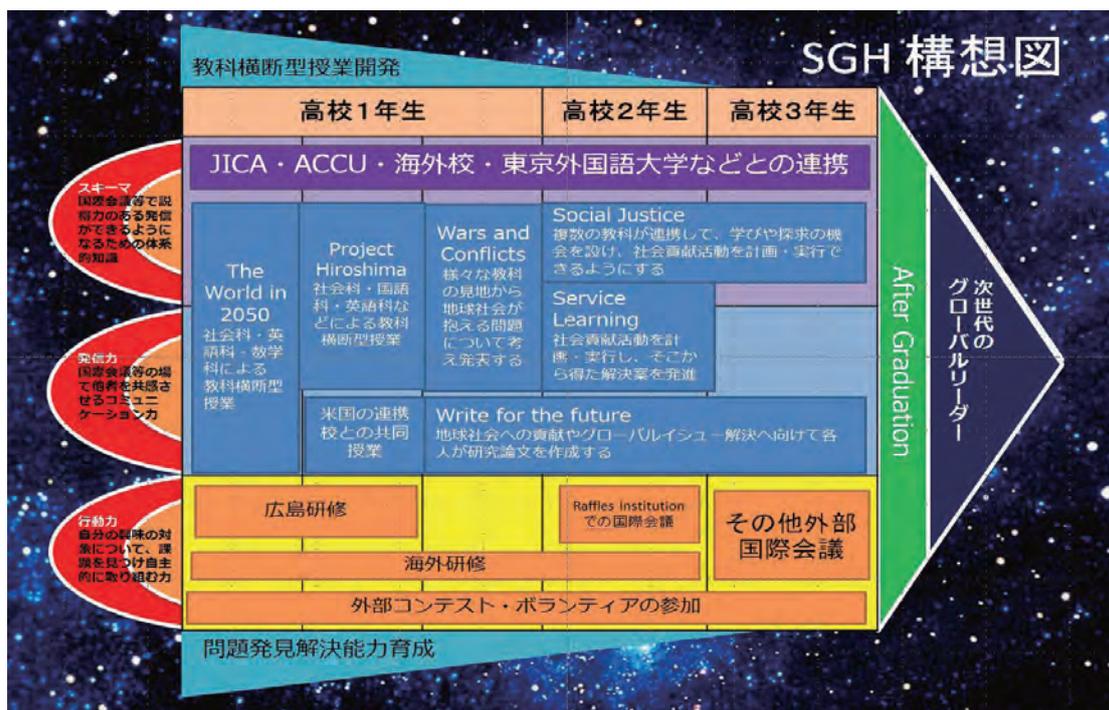
インドネシアの農村部で聞き取り調査を行う本校の生徒とインドネシア姉妹校の生徒（インドネシア西ジャワ州チボダス）

渋谷教育学園渋谷高等学校

探究型学習を、いかにして 「行動できるリーダーの育成」につなげるか

【構想の概要】

複数教科・科目から学ぶアプローチと、問題発見・解決型の活動を重視し、それにより知識の充実、発信意欲・技術の向上、交渉・連携しつつ行動する力の強化を図った。「人の安全保障」をテーマとした。



業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
The World in 2050 (高1)												
Project HIROSHIMA (高1)												
Wars and Conflict (高1)												
Social Justice (高2)												
Service Learning (高2)												
修学旅行プロジェクト (高2)												
Write for the Future (高3)												
高校生会議 (全学年)												
大学による評価会 (教職員)												
運営指導委員会 (教職員)												
報告書作成 (教職員)												

「グローバル・イシューに対する基礎的な知識の習得、自ら課題を発見する強い好奇心、ものごとを多角的に検証し課題を解決に導く思考力、コミュニケーション能力や行動力を備えた人材の育成」を目的、「海外の高校生との議論を通して自分自身について考え、新たな行動の動機付けにつなげることを」目標とし、全学年全生徒を対象に実施した。

実績の説明

本校におけるSGHは、全校生徒が参加する教科横断型自調自考授業を中心に、地球社会が抱えている課題（平和、人権、環境など）に取り組むことを基本とした。その探究活動を通じて、課題解決に向けての方策を考え実践できる力を身に付けるために、次のようなプロジェクトを実施した。

① The World in 2050

高校1年生対象・1学期。中学までの地理・歴史・公民の学習内容を「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ、『2050年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』を導入として用いた。また、昨今の緊張する世界情勢から、より多くの報道記事を教材として活用した。授業の中では、グローバル化する世界の中の日本、特に女性の人権と社会参加に関わる課題を取り上げ、よりよい社会を築くためにどのように行動していくのが良いか、互いに意見を述べ合い、考えを深めた。また、緊迫するアジア情勢を取り上げ、二国間の課題、多国間の課題の違いを理解し、問題解決の手法についてまとめた。少子高齢化やAIの進歩を取り上げ、その問題を自分との関わりで整理し、論点をまとめた。連携大学から海外の女性研究者を招き、その方を特別講師として授業を行った。（公民科）

公民科で学習したトピックに関する新聞・雑誌記事（英文）を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに、内容に関する更なる調査を行い、それをもとに、プレゼンテーションやディベートを行った後、エッセイとして完成させた。（英語科）

② Project Hiroshima

高校1年生対象・年間。広島への研修とその前後の期間に、戦争・紛争や平和についての価値観の文化間比較を通して、「人間の安全保障」について多角的に理解を深めると共に、英語を用いて「広島」を発信する方法を実践的に学び、海外校での発表の機会を設けた。

図書館の資料やインターネットを利用して、広島について調べ、その情報を精査し、発信力を高める授業を行った。（情報科・1学期）

戦後の安全保障政策の理想と現実の3つの視点

（投下容認派・核抑止派・核廃止派）から考察し、それぞれに立場を交換しながら、ディスカッションを行うことで、理解を深めた。また、ヒロシマ・ナガサキを出発点に現地でのフィールドワーク（ボランティアガイドを依頼した碑めぐりや語り部さんとの交流等を含む）を行い、ヒロシマに対する思いを理解し、自分たちに何が出来るかを考え、発表した。また、過去と現在をつなぐため、アジア地域における核保有の問題も取り上げ、将来にむけてどのように行動したいかと考える機会も設けた。（公民科・2学期）

連携校である St. Stephen's Episcopal School（以下 SSES）と連携し、現地での研修で学んだことをもとに、アメリカの高校生に広島を紹介する冊子をチームごとに英語で作成した。完成した作品をウェブサイトに掲載し、SSESの生徒たちの意見や評価を得た。また、ヒロシマが教育の場でどのようにとらえられているかを国ごとに調べ、それぞれの違いについてデータや資料をもとに意見を英語でまとめた。（英語科・2学期）

高い評価を得たチームは、実際に SSES を訪問し、直接プレゼンテーションを行い、交流した。また帰国後、校内で、フィードバックの機会を設けた。（英語科・3学期）

核兵器に関する文学作品「黒い雨」とハリウッド映画を取り上げ、現代日本における核兵器への意識を考察し、その表現方法の違いについて学んだ。（国語科・2学期）

③ Wars and Conflicts

高校1年生対象・3学期。平和に関する学びのまとめとして、地球社会が抱える諸問題のうち Wars and Conflicts をテーマとし、6つの教科分野からのアプローチ（政治・経済・現代社会的アプローチ、歴史・倫理的アプローチ、理科・数学的アプローチ、芸術的アプローチ、保健体育・家庭科的アプローチ、国語的アプローチ）から対処法を探った。クラス内で、アプローチごとにグループに分かれ、課題解決の方向性について、英語で意見をまとめ、発表する機会を設けるとともに、個人でのエッセイにまとめた。また関連する内容として、現代社会の存在するさまざまな Conflicts（主に途上国と先進国間のもの）について読み、考えを深めた。（英語科

3 学期)

④ Social Justice and Service Learning

高校 2 年生対象・年間。国際社会における様々な問題（人権・エネルギー・環境など）について家庭科・現代文・化学・生物・地理・世界史の授業で専門的に学び、それを英語の授業で統合し、発信した。今年度は、①児童労働、②水、③エネルギー政策、④イスラム、⑤生物多様性を取り上げた。（英語科年間）

また、各授業で学んだ諸問題に関係した社会貢献活動を各人で計画し、実行するプロジェクトを行った。実行したプロジェクトは、学内で報告し、検証する機会を設けた。（総合的な学習の時間・年間）

⑤ 修学旅行プロジェクト

高校 2 年生希望者対象（学年の 70%が参加）・2 学期。中国への修学旅行において、現地の高校生との交流事業を実施した。互いの文化を紹介する時間を生徒主体で行い、それぞれの文化的背景についての理解を深めた。また、1 対 1 での交流も重視し、英語でのコミュニケーションの機会を設けた。

⑥ Write for the Future

高校 3 年生対象・1 学期。これまでに学んだグローバル・イシューや地球社会への貢献に関する知識や経験をもとに、テーマを設定し論文を作成し、発表した。

⑦ 高校生会議

全学年希望者対象・SGH 最終年、年間。本校における SGH の取組の総仕上げとして、2018 年 7 月 24 日から 28 日まで、渋谷幕張高校と共催で国際高校生会議を行う。この会議では、五大大陸にまたがる世界 18 か国のトップ校から選抜された 107 名の高校生に日本の SGH 校の高校生 32 名も加わって、水資源問題という世界共通の大きな問題について考える。それぞれの学校が自国の抱える問題とそれに対する取り組みを互いに紹介し合ったり、首都圏の水関連施設の見学をしたりして現状を深く理解した後、将来に向けて地球規模で何ができるかを考察する。目的は、若者の視点による解決策を編み出すことである。この会議はシンガポールとオランダに

続き、日本が 3 回目の開催となるが、渋谷教育学園では、保護者の多大な協力もあり、外国人高校生全員がそれぞれ生徒の家庭にホームステイすることになった。また生徒主体の会議にしたいという思いから運営ボランティアを募集したところ、MC・施設見学でのガイド役・資料翻訳といった英語系の職種だけではなく、装飾などデザイン系の職種、誘導・設営・PC サポートなど縁の下の力と言える職種に至るまで 250 名を超える応募があった。運営に関わらない生徒に対しても水問題についての授業や会議の結果を共有する機会などを設け、全校での取り組みとする。

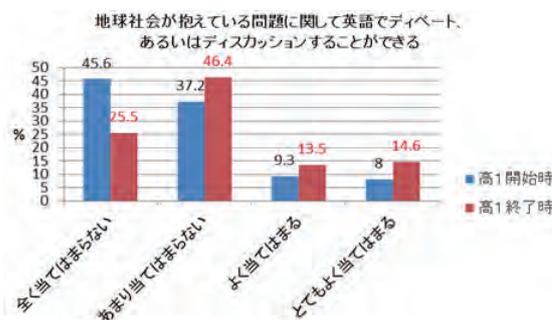
連携大学による協力

英語授業での生徒の討議や作成物への支援として、連携大学である東京外国語大学の大学院より TA として、留学生を招き、継続的にグループ討議に参加する機会を設けた。また、評価にも加わり、授業の進め方など多方面にわたり、指導・助言を得た。

アンケート（2018 年 3 月実施）分析

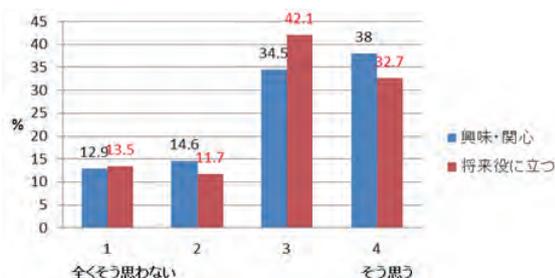
生徒には、①授業アンケート②SGH アンケートの 2 種類を実施し、その成果を分析した。

結果、多くの生徒が授業の成果として、英語運用力が身につけていると感じていた（図 1 参照）。



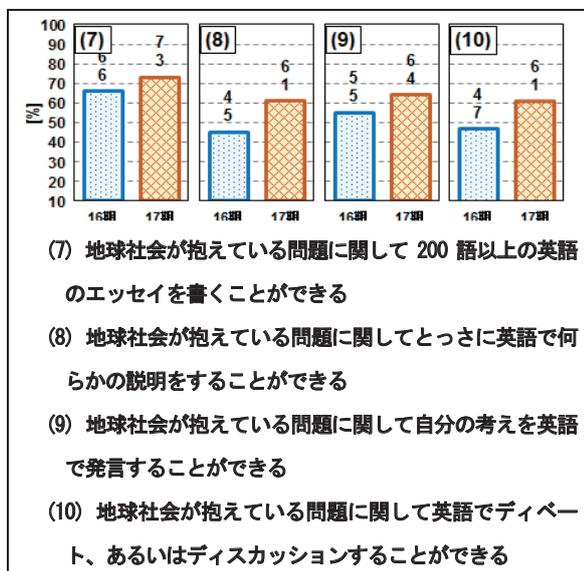
▲図 1 高校 1 年生（SGH 第 4 期生）英語運用に対する自信

また、東京外国語大学大学院の留学生による授業支援は、評価している生徒が多く、継続的な支援をすることで、活発な討議につながり、発信力の育成につながることを確認された（図 2 参照）。



▲図2 高校1年生 (SGH 第4期生) Hiroshima Brochure Project

SGH 1期生に比べ、2期生の方が、英語運用力に対して自信を持っている生徒、これまで学んだ知識やデータの活用力が将来有用であると考え、地球社会に貢献したいと考える生徒の割合が増えた (図3参照)。



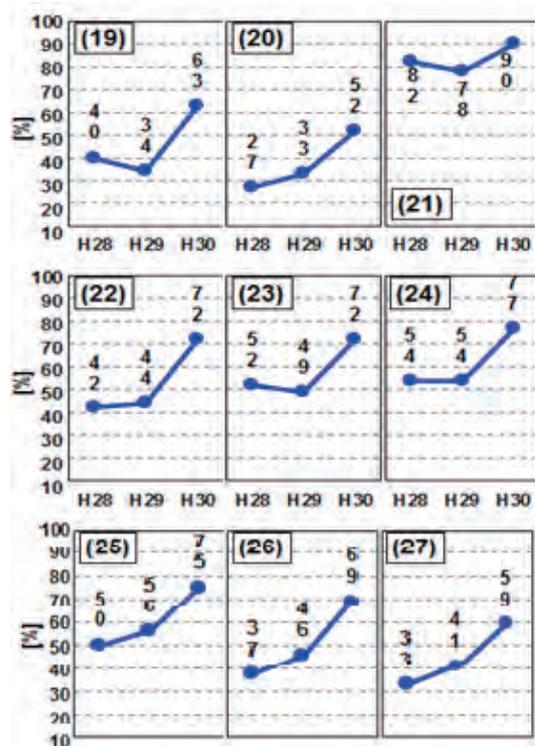
▲図3 SGH 第1、2期生 (高3次) 英語運用力についての自信

これは、この4年間に渡るSGH授業開発の中で、年々、教科の連携がスムーズになり、共有する内容が深まって、プログラムの精査が進んだ結果、学びの方向性がより明確に生徒へ伝わり、更に授業への意欲・理解が深まった結果であると考えられる。

第2期生の3年間における意識の変化を見ると、本校SGHが目指してきた「行動できるリーダーの育成」に関する取組みが、ある程度の成功を見たと考えられる。特に「自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい」と考える生徒は、2年連続で90%となり、生徒たちが様々な活動を通して、アイデンティティや興味関心を確立したことを

示し、自己肯定感を高めていながら、自己のキャリアに向き合っていることがうかがえる (図4参照)。

H28: 高1 修了時(H28.3), H29: 高2 修了時(H29.3)
H30: 高3 修了時(H30.3)



- (19) 時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (20) 海外の大学、または大学院で学んでみたい。
- (21) 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい。
- (22) 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい。
- (23) 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい。
- (24) 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい。
- (25) 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい。
- (26) グローバル・リーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい。
- (27) 海外の会社に対しプレゼンテーションを行ったり、あるいは国際会議で発言したい。

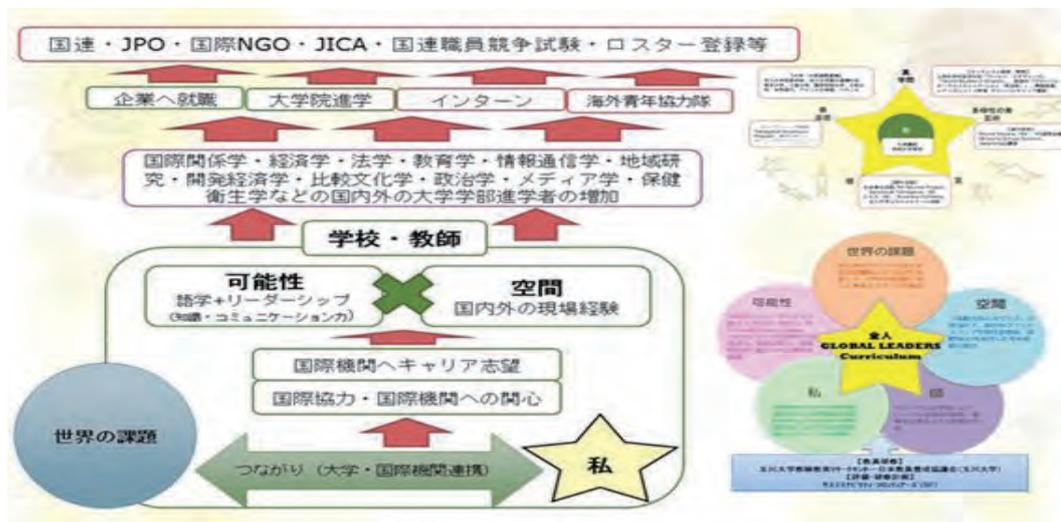
▲図4 SGH 第2期生 3年間における意識変化

玉川学園高等部・中学部

国際機関へキャリア選択できる 全人的リーダーの育成

【構想の概要】

長年、国際機関での日本人職員数が不足しているという社会問題へ対し、多くの国際機関が活動のフィールドとしている「貧困」「人権」「環境」「外交」「国際協力」という5分野を入口に、生徒が国際機関についての具体的なイメージを持った上で、個人テーマを掲げて研究発表することを通し、世界の諸問題へ関心を持ち、個人としての知識獲得、国際機関でも通用するコミュニケーションスキルの基礎を築いていく。



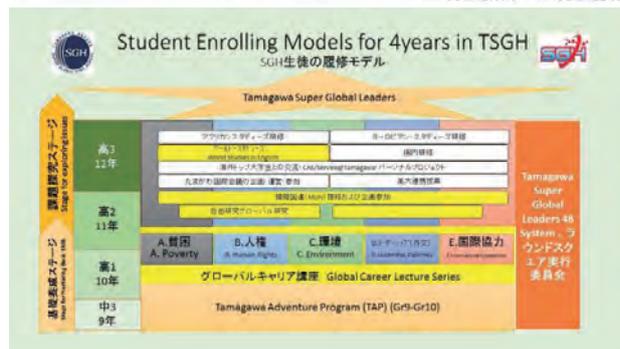
教育課程表 (ホリスティック・ラーニングコース)

<平成28年度入学生適用>

教科・科目	標準 単位数	第一学年			第二学年			第三学年			高大連携		
		共通	選択	自由 選択									
宗教 (礼拝)	**	1			1			1					
国語	国語総合	4	4					3			2		
	現代文A	2			2								
	古典A	2				2							
	古典B	2				2		3			2		
	国語演習	2					2	4			2		
地理歴史	世界史A	2		2				4			2		
	世界史B	2		2		3		4			2		
	日本史A	2		2				4			2		
	日本史B	2		2		3		4			2		
	地理A	2		2				4			2		
公民	倫理	2			2			4			2		
	政治・経済 ワールドスタディーズ	2			2			4			2		
数学	数学I	3	3					4			2		
	数学II	4						2			1		
	数学III	5			4			7					
	玉・数学III	2									4		
	数学A	2		2				2					
	数学B	2				2		2					
理科	玉・数学B	2									1		
	科学と人間生活	2						4			2		
	物理基礎	2	2			3					2		
	物理	2				3					2		
	化学基礎	2	2			3					2		
	化学	2				3					2		
体育	生物基礎	2				3					2		
	生物	2				3					2		
	SS1科学	2				4					2		
	SS1リサーチ科学	2			2~4			2~4			2		
	体育	7~8	3			3			2				
芸術	音楽I	2	1		1			1			1		
	美術I	2				3					2		
	美術II	2									2		
	美術III	2									2		
	C PMA CGD	2									2		

教科・科目	標準 単位数	第一学年			第二学年			第三学年			高大連携		
		共通	選択	自由 選択	共通	選択	自由 選択	共通	選択	自由 選択	共通	選択	自由 選択
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3										
	コミュニケーション英語Ⅱ	4			4				2			1	
	コミュニケーション英語Ⅲ	4						4					
	玉・コミュニケーション英語Ⅲ	2									2		
	英語表現Ⅰ	2	2						2				
	英語表現Ⅱ	4				2	3						
	英語会話	2							2			2	
英語セミナー	*							4			2		
英語演習	*							4			2		
家庭	家庭基礎	2	2										
情報	社会と情報	2	1		1				4		2		
	情報の科学	2							4		2		
総合的な学習の時間(自由研究)	3~6	2		2	2		2	1		2	1	1~2	
玉川大学連携	**											11	
特別活動(労作・E.村民)		(1)			(1)			(1)			(1)		
履修単位数合計		33~37			33~37			31~33			33~35		

*は学校設定科目、**は学校設定教科



教育課程表や時間割上の工夫

本学では SSH と IB を実施しているため、SGH としての新たなコース設定は困難であることから既存の科目や実践を生かして SGH の実践を行っている。中3～高3の各学年で SGH 関連授業と、異学年で複数年にわたり継続的に取り組める授業を設定。

■ SGH 関連授業

中3～高1：TAP 高2：英語会話

高3：ワールド・スタディーズ

■異学年で複数年にわたり継続的に取り組める授業

自由研究グローバル・スタディーズ、模擬国連

SGH 関連科目は、研究課題「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」の達成へ向けて多角的な生徒への働きかけにつながっており、その効果は各生徒による意識調査に表れている。

教科間の連携

SGH 実行委員会に所属する教諭は英語科、地歴公民科、数学科、理科、国語科、音楽科で構成されている。また SGH 成果として出版を予定しているハンドブック作成プロジェクトに関しても、英語科、地歴公民科、数学科、国語科、美術科で実践されている。

○模擬国連

中3～高3が履修できる自由選択科目として設定。「外交」分野に関して実践を通して理解し、研究する。国語科、英語科、理科、IB クラス社会科の教諭、専門アドバイザーが指導し、学際的な指導体制がとられている。異学年での活動、複数年の履修も可能である。

○ワールド・スタディーズ

公民科と英語科 ELF 教員によるチーム・ティーチングのアクティブ・ラーニング形式で実施しており、英語でも実施。課題研究テーマの貧困、人権、環境、外交、国際協力を総合的に探究する科目であるが、生徒意識調査からも高い成果が認められた。

指導方法の工夫

教科を問わず、基本アクティブ・ラーニング方式を採用しており、その実施科目は増加する傾向にある。また教職員向けの教員研修の機会も設けた。2015年度には本校 SGH 運営指導委員長 David

Selby 博士による教員向けワークショップ、模擬国連では教員向け研修会を毎年行っている。



成果と検証

各取組後には必ずマークシート形式のアンケートを実施し、生徒による評価を実施してデータを蓄積している。また第三者評価として2014、2016、2018年度にはイギリスの教育団体「Sustainability Frontiers」による評価を受けている。評価レポートは、各年度末の報告書へ掲載。

高大連携

SGH 指定以降、国内外の大学9校（うち SGU3校、海外大学2校）と海外大学に在籍する大学生による学生団体1団体と連携した。

■大学教員による SGH 研究課題を深めるためのサマーコース開設1校：立教大学（SGU）※立教大学教授陣による貧困、人権、外交分野をテーマとした英語で行われる3日間の連続講義を実施（2014～2016年度）

■グローバルキャリア講座の講師招聘実績6校：関西学院大（SGU）、東京外国語大（SGU）、政策研究大学院大、玉川大、東京工業大、駒沢大

■SGH 海外研修における訪問実績大学2校：ボツワナ国立大学（ボツワナ）、ヤゲヴォ大学（ポーランド）

■学生団体2団体：

GAKKO PROJECT、AIESEC JAPAN

SSH と SGH の連携

SSH と SGH の連携を深める取り組みは、2017年度より SSH/SGH 合同実行委員会の開催、SSH&SGH 合同生徒発表会を開催した。また2018年度に SSH は第3期目の指定を受け、SGH 「グローバルキャリア講座」の成功を参考として新規に昼に「サイエンスキャリア講座」を開催していくことを決めた。

特色ある取り組み

①グローバルキャリア講座

内閣府、外務省、日本赤十字社、JICAをはじめ、IMF、ILO等の国際機関、国際NGOより講師を招き、SGH研究課題5分野に関する講座を開講。

SGHの各実践の関連を強める媒体的講座が「グローバルキャリア講座」であり、大きな成果につながっている。任意参加であるTED方式のグローバルキャリア講座への平均参加数も55名から90名に164%の増加。(参考：2015年度生徒総数897名)。その後も平均約120名の生徒が任意参加している。

SGH対象生徒群において、「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」と考える生徒の割合が64.6%から80.5%へ、英語力はCEFRのB1、B2以上の生徒の割合が42.5%から47.8%へと向上しているデータが示された。SGH対象外生徒群においても、留学や海外研修へ行く生徒数が増加した。学年単位(年間2～4回)、TED方式(昼食時自由参加)、授業内実施(ワールド・スタディーズ、模擬国連)など多様な形態での実施が生徒の自主的参加を促す環境へとつながり、一定の効果を挙げたと考えられる。

IBクラスにおいても、SGHの諸活動へ参加を通して、パーソナル・プロジェクトやエクステンド・エッセイのテーマを設定し、課題研究を深めている生徒がみられる。

②自由選択科目「模擬国連」

中3～高3の自由選択科目。「外交」分野に関して毎年1つのテーマを定め、その問題を調査した上で、模擬国連の手法を使い、課題解決策を参加者全員で導き出す。グローバルな課題を各国の代表となって学ぶため高いコミュニケーション力と、会議は英語で行うため英語力が要求される。国語科、英語科、理科、IBクラス社会科の教諭、専門アドバイザーが指導し、学際的な指導体制がとられている。異学年での活動、複数年の履修も可能である。

③玉川学園スーパーグローバルリーダーズ(SGL)48認定制度

SGH関連イベント、語学検定、英語を使った各種コンテストへの応募や入賞、学内ホスト、高大連携企画参加などSGH関連活動へ参加した生徒へ難

易度に応じてポイントを付与している。各年度末にはポイント上位48位程度の生徒の表彰を実施。SGL48認定を目指してSGH関連活動へ参加する生徒も増加し、活動分野も多様化するようになってきており、生徒の動機付けには一定の効果がみられている。また大学入試等でも活用できるように一覧表をして出力することもでき、毎年10名程度の高3生が推薦入試の添付資料として活用している。

④ラウンド・スクエア(RS)実行委員会、たまたがわ国際会議の企画・運営・参加

RS担当教諭2名をSGH事務局が補佐する形で運営。生徒のリーダーシップを育むため、3日間の会議は生徒による自主企画の運営とした。2014年度も2015年度も、海外の大学生によって構成されるGAKKO PROJECTのメンバーを招へいし、リーダーシップに関するワークショップを英語で行った。2015年度は、ミレニアムプロミスジャパンとユニクロから講師を招き、勉強会を行い、2017年度は人権～LGBTをテーマに講師を招き学習会を行った。またユニクロの「服のカプロジェクト」には4年連続で参加しており、近隣の保育園にも協力を呼びかけ、例年50箱程度服を集めている。

⑤公民科選択科目「ワールド・スタディーズ」

SGH課題研究分野(貧困・人権・環境・外交・国際協力)等を総合的に学習し、理解を深める科目。英語科と連携し、ELF教員とのティーム・ティーチングで、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。また、英語による授業も行っている。

生徒に対するアンケート結果より、知識獲得のみならず、自己の行動変容への動機づけも見られ、高い成果が認められた。

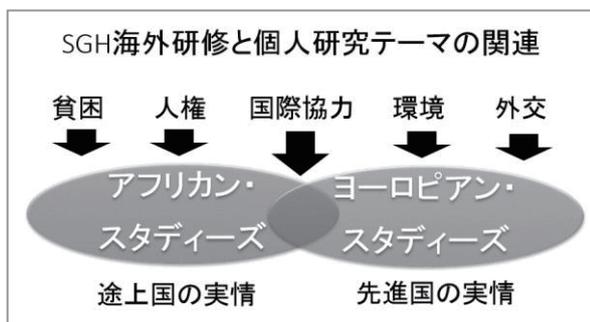
⑥2つの海外研修

アフリカン・スタディーズは、貧困、人権、国際協力分野の海外研修として位置づけ、ボツワナと南アフリカの高校や大学、スラムなどで実地研修した。

ヨーロッパ・スタディーズは、環境、外交、国際協力分野の海外研修として位置づけ、ドイツ、スイス、ポーランドで実地研修した。

海外研修実施後のアンケートでは、「国際機関の現場でのキャリアイメージ」「グローバルな課題に

対する具体的なイメージ」「国際機関・NGOでの仕事に興味を持っている」に関して、参加者全員が「強くそう思う」または「そう思う」と回答した。また英語力を伸ばしたいとの問いに対しては、参加者全員が「強くそう思う」と回答した。



効果と考察

「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」を研究開発課題に掲げ、実践を重ねてきた。その結果、生徒、教員、保護者においてそれぞれ効果が認められた。

■生徒

- ①国際的なキャリアを志望する生徒、国際機関が取り組んでいるグローバルな諸課題を理解し、自分との接点を感じている生徒数の増加がみられた。
- ②自主的に留学又は海外研修へ行く生徒数が増加した。
- ③ SGH 対象生徒群において、英語力の向上がみられた。生徒全体においても英語への学習意欲の向上がみられた。また IB コースのディプロマ (DP) 取得率が指定前よりも向上した。

SGH の活動へ参加した生徒の自主的に自己研鑽活動も行われた。例えば 2015 年 9 月に行われた「中高生のための国際機関キャリアフォーラム」後に、UNHCR 主催の難民映画祭へ運営ボランティアとして参加した 3 名の生徒がいた。2014 年度に海外研修「アフリカン・スタディーズ」に参加した生徒は、2015 年に国立オリンピック記念青少年総合センターで「APYC 高校生アフリカ委員会第 1 回会議」を主催。外務省のアフリカ担当者を招いて基調講演を実施した。自分たちで見聞きたアフリカの問題を高校生の視点から理解しようとする機会となった。また 2016 年の卒業生では大学在学中に国連ボランティア (UNV) へ選抜され、ジンバブエへ派遣された卒業生がいた。少しずつ成果の片鱗を垣間見る実践も報告されるようになってきた。

■教員

- ① SGH 指定以降、自分の授業などで何らかの変化があったと回答した教員が半数以上いた。
- ② SGH 指定以降、生徒のグローバルな課題に対する興味関心に変化が見られたと感じている教員が 92%にのぼった。
- ③ SGH 指定以降、生徒の進路選択に変化がみられたと感じている教員が 75%にのぼった。

■保護者

- ①保護者 (父母総会出席者 90 名) の 95%は、本学の SGH の教育的意義を理解している。
- ②保護者 (同上) の 90%は本学 SGH の取り組みを認識している。

今後の課題

①本学オリジナルな SGH 教材集 (Teacher's Handbook) の開発

5 年間の SGH の実践を通して様々なアクティビティを授業の内外で実践してきたが、現在、イギリスに本拠地を置く Sustainability Frontiers 監修の下、誰でも簡単に本学 SGH の研究 5 分野 (貧困・人権・環境・外交・国際協力) の教育実践が教室でできる事例集の開発を行っている。現在アクティビティのテストが各授業で進行しており、2019 ~ 2020 年度中の出版を目指している。

② SGH 終了後のレガシーの構築

SGH 終了後、どの実践を残し、深めていくのか、現在考察が始まっている。現時点では、グローバルキャリア講座、SGL48 ポイント制度、模擬国連、ラウンド・スクエア実行委員会等が有力候補であるが、校務分掌やどのように実施するかなど、形式や回数については今後議論を深めていく。

本学の研究テーマは、高校卒業や大学卒業後直ちに効果を測定できるような課題ではない。例えば国際公務員の多くは、大学院へ進学したり、企業でスキルを磨いたりして、転職をして、国連や国際 NGO で活躍している方々ばかりである。しかし、現時点での「SGH 研究の効果」を問うとするならば、高校卒業後に留学や海外研修へ参加した、国連の事務所でインターンをした、などといった経験を積んだ、あるいは積もうと思っている卒業生を地道に調査する形であると考えている。今後長い目で効果を測定する必要があると考えている。

お茶の水女子大学附属高等学校

女性の力をもっと世界に ～目指せ未来のグローバル・リーダー～

【構想の概要】

全校生徒を対象に、確かな基礎学力と幅広い教養を身に付け、グローバルな社会の諸課題を発見し、異なる文化的背景を持つ人々と協働して、それらを解決する能力を持つ生徒を育成するため、探究的な学習に取り組む「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ」、「持続可能な社会の探究Ⅱ」を柱とする教育課程の研究開発を行う。



教育課程表 (平成28～30年度入学生) はSGHカリキュラムの中心

教科	科目	1年		2年		3年	
		必修	選択	必修	選択	必修	選択
国語	国語総合	5		2		2	
	現代文B			3			
	古典						
	国語表現					2	
	古典A					2	
	古典B					2	
歴史	教養基礎「国語」I	1					
	教養基礎「国語」II		1				
	教養基礎「古典読書」A					2	
	教養基礎「古典読書」B					2	
	日本史A			2			
	世界史A			2			
地理	世界史B					4	
	地理					4	
公民	グローバル地理	2				3	
	地理演習					1	
数学	倫理	2				2	
	政治						
	公民演習						
	数学I	3					
	数学II		3				
	数学III					6	
理科	数A	2				2	
	数B		2			2	
	教養基礎「数学」I	1					
	教養基礎「数学」II		1				
	教養基礎「数学」III						2
	教養基礎「数学」IV						
家庭情報	物理学基礎		2			1	
	物理解					5	
総合的な学習の時間	化学基礎	2				1	
	文化					1	
外国語	グローバル地理						
	倫理	2					
	政治						
	公民演習						
	数学I	3					
	数学II		3				
芸術	数A	2				2	
	数B		2			2	
	教養基礎「数学」I	1					
	教養基礎「数学」II		1				
	教養基礎「数学」III						2
	教養基礎「数学」IV						
外国語	物理学基礎		2			1	
	物理解					5	
	化学基礎	2				1	
	文化					1	
	生物学基礎			2			
	地学基礎	2				5	
外国語	保健体育	2		2		3	
	体育	1		1			
	音楽I	2					
	音楽II		2				
	音楽III			2			2
	美術I	2					
外国語	美術II		2				
	美術III						2
	書道I	2					
	書道II		2				
	音楽表現	2		2		2	
	美術表現	2		2		2	
外国語	コミュニケーション英語I	4					
	コミュニケーション英語II		4				
	コミュニケーション英語III					2	
	英語表現I	1					
	英語表現II						2
	英語会話						2
家庭情報	教養基礎「英語」I	1					
	教養基礎「英語」II		1				
総合的な学習の時間	教養基礎「英語」III						2
	家庭総合	1	2		1		
総合的な学習の時間	社会と情報	2					
	持続可能な社会の探究Ⅰ		2				
総合的な学習の時間	持続可能な社会の探究Ⅱ					1	
	ホームルーム	1	1	1	1		
計		35		35		12	7~23

☆ ㊦印は同時に授業を行うことを示す。

3年間を見通した教育課程

本校では、教養教育の長い伝統と各教科・科目・総合的な学習の時間における探究的な学習活動の実績を活かし、全校生徒が3年間にわたり、教養教育をふまえた、探究的な学習によりグローバル人材としての資質・能力を培う教育課程の開発に取り組んだ。また、従来行ってきたお茶の水女子大学教員やNGO等の専門家による特別講義を、「グローバルな諸課題を解決する力を育てる」、「日本や世界の文化や現状、課題を知る機会を提供する」といった観点から整理・拡充し「グローバル講座」を設けた。

こうしたカリキュラムの実施は、本校の教員の力だけでは不可能であり、当初から、お茶の水女子大学を始めとする大学や研究機関、国際NGO、IBMをはじめとする多くの企業、イオン1%クラブをはじめとする公益財団法人等のご助力を得て実施しよう計画したが、実際には予定していた以上に多くの方々からのご支援を受けることができ、非常に充実した教育の実現が可能となった。ご協力くださった皆様に感謝したい。SGHとしての5年間は、既に高校生の学びの場が学校内にとどまらない社会に移行していることを強く実感する日々の連続であった。

グローバル地理

第1学年次のSGH科目は、地理教諭が担当する、地理歴史科の学校設定科目「グローバル地理」(2単位)である。これは、探究的な学習に必要な技能を身につけるとともに、グローバルな社会的諸課題を知り、その中から自分が解決したいと思える課題に出会うことをねらいとする科目である。1学期には、SGH指定以前には学年づくり・学級づくりを目的として実施していた5月の諏訪合宿を活用し「御田町フィールドワーク」を行い、その事前学習・事後学習を通して、探究的な学習に必要な技能を体験的に身につける学習を実施する。

2学期以降は資源・エネルギーや環境、ジェンダー、貧困、人権等のグローバルな諸課題を扱い、冬休み以降、それまでの学習をふまえて、次年度の「持続可能な社会の探究Ⅰ」で探究するテーマを設定させる。この時のテーマ設定の指導には「持続可能な社会の探究Ⅰ」担当教諭も関わっている。

お茶の水女子大学の協力による「図書館を活用した探究方法」「社会調査法」等の探究の技能に関する特別講義や、外部の専門家による「発展途上国の人口問題とジェンダー」「被災地で考える希望の再生」等の特別講義も、適宜実施している。

持続可能な社会の探究Ⅰ

第2学年次のSGH科目は、「総合的な学習の時間」を活用して行う「持続可能な社会の探究Ⅰ」(2単位)である。生徒たちは3領域7講座にわかれ、各自の設定したテーマについて、その解決策を「グローバル地理」により培った技能を用いて探究していく。

5月に実施する生徒主体のフィールドワークやその報告会、9月の文化祭における発信、11月の中間報告会、論文作成等の全講座共通の年間計画にそって、各講座の担当教諭が、所属する生徒の問題関心に応じて特別講義や校外学習をアレンジするとともに、生徒自身が計画した校外学習や成果発表にも取組ませ、主体的かつ深い学びの実現をめざしている。



東京大学医科学研究所へのフィールドワーク

講座の担当者は教科等の専門性を活かせるよう配置し(例えば「生命・医療・衛生」講座は生物担当教諭と保健体育科教諭、「経済発展と環境」は地理担当教諭と物理担当教諭)、お互いの強みを活かして充実した指導を行うとともに、担当者間の学びによる教員の変容を期待できる体制を構築した。

評価については相互評価や自己評価を取り入れたほか、講座担当者のみではなく、領域間で評価規準を共有しブラッシュアップを図った。2017年度からはお茶の水女子大学の半田智久教授の協力により、汎用型デジタルポートフォリオ「super alagin HS」の開発を進めている。

持続可能な社会の探究Ⅱ

第3学年次のSGH科目「持続可能な社会の探究Ⅱ」（1単位）では、「持続可能な社会の探究Ⅰ」における各自の探究学習の成果をクラスで共有した後、クラスごとに英字新聞を作成する活動を中心とする学習を行っている。編集委員を中心に、新聞の名称やテーマ、紙面割り等を話し合いながら英字新聞を作成する協働的な学びを通して、社会課題への理解を深め、英語力を鍛え、他者と協働して課題解決を進めることのできる資質・能力の涵養をめざしている。



英字新聞の作成に向けた話し合いの様子

英字新聞の作成は、読売新聞社（2016年度まではThe Japan Times）および英語教育協議会（ELEC）との提携によりグローバル教育センター（GEIC）が開発したプロジェクトに参加し進めている。本校では、英語科教諭、国語科教諭、数学科教諭、理科教諭がチームを組み「持続可能な社会の探究Ⅱ」の開発にあたり、英語科教諭が中心となり年間計画や評価規準の作成を進めてきたが、2018年度にはリーダーを国語科教諭に交代した。また、年間計画や評価規準の作成、進捗の調整、評価等は担当者の協議により進めるが、時間割は3人の教員がそれぞれ1クラスの指導を担当する形で組んでいる。このようにして、外部の資源を活用することにより、日頃の指導を英語科以外の教諭が担当しても、生徒に高度な英語活用力を身につける機会を提供することを可能にしている。

2017年度4月と1月に実施した意識調査では、「そのトピックについて知っていれば、まとまりのある英文が書ける」、「関心のあるトピックであれば、主張を明確に英語で述べられる」のそれぞれに肯定

的に回答した3年生の割合が前者では47.0%から62.2%に、後者では39.8%から51.3%に増えた。こうした大きな変化は他の学年では見られないため、「持続可能な社会の探究Ⅱ」における英語を用いた多角的な活動による成果であると考えている。

海外研修

2年生の希望者約30名を対象として、10月に台湾研修を実施している。他国の同世代との交流や議論を通してグローバルな意識を高めること、英語活用力向上の機会を提供すること、海外における情報収集等により探究的な学びを深めることをねらいとしており、ホームステイや台湾工商会訪問、第一線で活躍する女性の講演等のプログラムに加え、台湾大学の学生や台北第一女子高級中学の生徒と「持続可能な社会の探究Ⅰ」において探究しているテーマについて英語でディスカッションし、考察を深める機会を設け、探究的な学習の一環となるようプログラムを組んでいる。

参加者の選考にあたっては、英語活用力よりも研修に参加する目的が明確であること、探究的な学習の一環として台湾研修を活用する計画が立てられていることをより重視している。帰国後の調査では、例年8割程度の生徒が国際政治、外交、経済への関心が広がったと答えているほか、2017年度には約7割の生徒が「関心のあるテーマについて自主的・積極的に学ぶようになった」と答えており、台湾研修はグローバル人材として必要な資質を培う場として有効に機能していると考えている。

イオン・アジアユースリーダーズ

イオン・アジアユースリーダーズは、2010年からイオン1%クラブが実施してきた、アジアの数力国の高校生・大学生が参加し、異なる社会的・文化的背景を持つ同世代の若者が、英語を共通言語として、一つのテーマについて議論を重ね、問題解決力や自発的な行動力を高めるとともに、グローバル感覚や価値観の多様性を学ぶことを目的とするプログラムである。議論のテーマには「環境」や「食と健康」などグローバルな社会課題が選ばれてきた。

本校は2013年度よりアジアユースリーダーズへの生徒派遣を行ってきた。より多くの生徒に学びの機会を提供するため、台湾研修とアジアユースリー

ダースの両方に参加することは認めていない。

参加が認められた生徒には、SGH予算により外国人講師やお茶の水女子大学への留学生らによる英会話の補習を実施している。また、参加生徒（例年5名）同士で、プログラム参加に向けて必要な事前学習は何かを考え、開催国および参加国に関する基本情報や議論のテーマに関する学習計画を立て、情報収集や集めた情報の検討を行うよう指導している。7月にはイオン1%クラブ主催の日本からの参加校生徒が参加する勉強会に参加し、専門家のレクチャー等を通して学びを深めている。

実際にプログラムに参加した生徒の多くが、アジア各国の高校生達の英語力や積極性に圧倒されたと話している。しかし、その体験を通して、グローバル社会で生きるために必要な資質・能力に気づき、英語や様々な学びへの意欲を高め、より積極的にチャレンジする姿勢を身につけており、アジアユースリーダーズ参加の意義は非常に大きいと感じている。

参加生徒には11月には2年生、12月には1年生を対象とする報告会を行うことを義務づけ、アジアユースリーダーズへの参加を通して得た体験や考えを多くの生徒が共有できるようにしている。

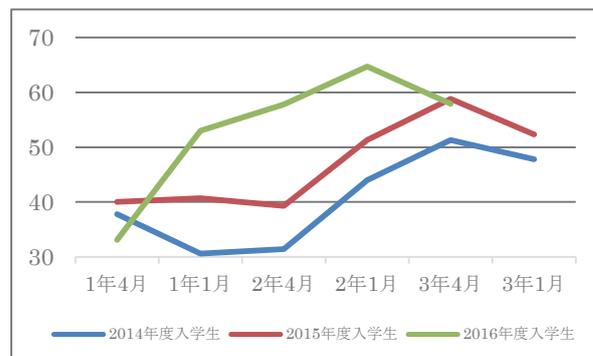
全校体制の構築

SGH事業に応募した時点では、研究部や地歴公民科を中心に、従来のカリキュラムを大きく変えないSGHカリキュラムを構想したが、実際に取組を始めるとそのカリキュラムでは、一部の生徒が探究課題を2つ抱えることになるなど、生徒の負担が大きい上に、探究を深めにくいといった問題があることに気づかされた。そのため、平成28年度に計画変更を申請して認められ、「総合的な学習の時間」の内容を一新して現在のSGHカリキュラムを編成するとともに、全ての教員がその専門性を活かす形で役割を担う全校体制によるSGH推進体制を整えた。

SGH事業については会議の場で報告し、その動きを全員が把握するほか、校内研修会等の活用によ

りそれぞれのグループの成果および課題を共有するとともに、質の向上に向けた意見交換を行い、より充実したカリキュラムをめざし日々改善を重ねている。

今後の展望



論理的思考力を伸ばしたいと答えた生徒の推移（％）

上の図は、年に2回実施している意識調査において、今後伸ばしたい力として「論理的思考力」を選択した生徒の割合が入学から卒業までの間にどのように推移したかを示したグラフである。グラフからは「持続可能な社会の探究Ⅰ」の活動を通して、論理的思考力の必要性を感じるようになる生徒が多いことが確認できる。「探究Ⅰ」に取り組む前に「論理的思考力」の必要性に気づき、それを伸ばすことができれば、より質の高い探究が可能になると考え、「グローバル地理」をはじめとするさまざまな教科目において、統計等のデータを適切に活用し論理的に思考を組み立てる力を育てることを意識した指導を実践した結果、2016年度には1年生のうちに論理的思考力を伸ばしたいと考える生徒が増えた。

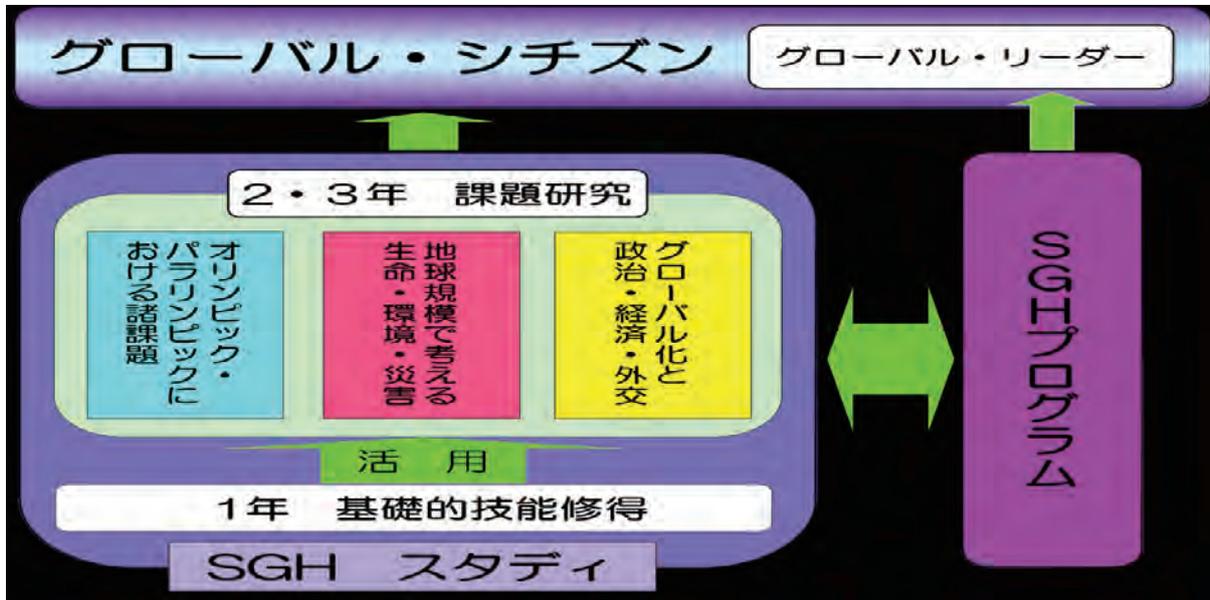
2017年12月にはGPS-Academicを振り返るグループワークにより論理的思考力を伸ばす取組を始めた。今後も早い段階から論理的思考を重視する意識を持たせ、質の高い探究的な学習を通して、論理的思考力を培うカリキュラムを維持・発展させていきたい。

筑波大学附属高等学校

小・中・高・大が連携した 課題解決によるグローバル人材の育成

【構想の概要】

全校生徒を対象とする。「SGH スタディ(課題解決学習)」と「SGH プログラム(海外派遣)」を2本柱とし、前者はグローバル・シチズンの育成を、後者は意欲的な生徒を対象に、グローバル・リーダーの育成を目指す。毎週土曜日を授業日とし、1学年は課題解決の為にスキルや知識を学ぶ授業を全員に課し、2、3学年では、得たスキルを使って、グループで課題研究に取り組み、解決法などを発表・提案する。海外派遣に於いては多数のプログラムを用意し、帰国後全生徒に還元できる仕組みを作る。



【教育課程】

1年	国語総合 4	古典 2	世界史A 2	地理A 2	数学I 3	数学A 2	生物基礎 3	体育 3	保健 1	芸術I 2	英語I 3	英語表現I 2	情報の科学 2	総合的学習SGH 1	ホームルーム 1												
計32単位(除ホームルーム)																											
2年	現代文B 2	古典B 2	日本史A 2	倫理 2	数学II 3	数学B 2	化学基礎 3	物理基礎 3	体育 2	保健 1	芸術II 2	英語II 3	英語表現II 2	家庭基礎 2	総合的学習SGH 1	ホームルーム 1	第一外国語 2										
※29+必選3(*第二外国語は特外) 計32単位(除ホームルーム)																											
3年	政治・経済 2	体育 2	英語III 3	英語表現II 2	現代文B+ 3	古典B 4	数学III 4	現代文B 2	古典B2 4	世界史B 4	日本史B 4	世界地理 2	総合社会 2	数学II 2	数学III 4	物理 4	化学 4	生物 4	生物特講 2	地学 4	地学特講 2	芸術III 2	クラフトデザイン 2	ITプレゼン 2	フードデザイン 2	総合的学習SGH 1	ホームルーム 1
自由選択(14単位まで)																											

3年次は、必修11+必修選択4+自由選択(4-14)(*第二外国語は選択内)(除ホームルーム)

※教育・研究上の都合により変更する場合があります。

SGHを通して伸ばしたい力

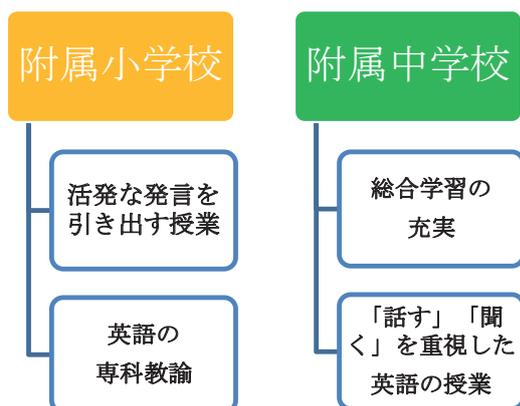
- (1) 専門性と教養
- (2) 問題解決力
- (3) コミュニケーション能力と
プレゼンテーション能力
- (4) 主体性と協調性
- (5) 異文化理解の柔軟性と
日本人としてのアイデンティティ
- (6) 高い語学力 (7) 議論する力
- (8) 地球規模の視点

2本の柱の相互作用



海外派遣は、課題研究をすることが主となる。帰国後は校内での報告会などを通じて、他の生徒への還元を義務付けている。

附属小・中学校の教育の伝統



本校は附属小・中との一貫教育ではないが、それぞれの出身者が三分の一ずつ在籍している。附属小・中・高・大での共同研究は「グローバル」である。

本校の過去の取り組み



長い歴史の中で、過去にも様々な課題研究授業が行われてきた。これらは何れも、授業に組み込まれて行われている。

全教員で関わる体制



※コーディネーター2名・指導助言者1名

全生徒及び全教員で関わるSGHとして、教員の組織も「SGH校内推進委員会」が中心となり、リードしている。週に1回、土曜日のSGHが終了後直ぐに定期的に会合を持ち全体像の把握に勤め、また、進捗状況の全教員での把握は、校内研究会、職員会議で都度行い、より良い取り組みを目指している。

「SGHスタディ（課題研究）」に関しては、1学年担当、2学年担当の横の連絡を密にし、毎週土曜日の内容確認を行いながら進めている。

「SGHプログラム（海外派遣）」は分掌としての国際部が進める。多数ある海外派遣の引率に関しては、教員の負担の公平性を重視し、希望以外は様々な配慮をしながら引率教員を決定し、管理職が委嘱する。海外派遣への生徒の希望が年々増加しており、その選考案の立案も国際部で行っている。

「SGH スタディ（課題解決学習）」

全生徒対象に、毎週土曜日「SGH」授業として実施

(1) 第1学年

【目標】

2、3年次のSGHスタディにおいて、原則としてグループでグローバルな課題を発見し、課題に関する調査・研究を行っている。議論をし、解決法を発表・提案。1年のSGHスタディではその為の準備として、8つの講座において、調査・研究で必要となるスキルや知識を獲得することを目標としている。

【概要】

- ☞ 毎週土曜日 3 時間目に実施
- ☞ 各HR教室、図書室、情報教室、物理実験室等
- ☞ 3時間×8講座 + 1時間（オリエンテーション）計 25 時間

【講座一覧】

講座	講座名	担当教諭
①	さまざまな情報収集の仕方・考え方	中村 光貴 (地理歴史科)
②	プレゼンテーションとその準備	山田 剛 (生物科)
③	グループでのアイデア発想	和田 肇 (美術科)
④	アカデミック・ライティング入門	大内 康宏 (国語科)
⑤	科学の考え方	小澤 啓 (物理科)
⑥	統計的な物の見方・考え方	矢野 一幸 (数学科)
⑦	データの収集	速水 高志 (情報科)
⑧	データの分析	山田 研也 (数学科)

【年間計画】（平成 28 年度 1 組の例 1 学年 6 学級）

4/16 オリエンテーション

ターム 1：4/23 ,30, 5/7 ④アカデミック・ライティング入門

ターム 2：5/14 ,21 ,28 ③グループでのアイデア発想

ターム 3：6/11 ,7/2 ,9 ①さまざまな情報収集の仕方考え方

ターム 4：9/3 , 17 ,24 ⑤科学の考え方

ターム 5：10/22, 29,11/5 ②プレゼンテーションとその準備

ターム 6：11/12 ,19 ,12/10 ⑥統計的な物の見方・考え方

ターム 7：1/14, 21, 28 ⑦データの収集

ターム 8：2/4, 18, 25 ⑧データの分析

※担当教員は、希望をして講座を開設。

(2) 第2, 3 学年

グループで、グローバルな課題を発見。課題に関する調査・研究を行い、議論をし解決法を発表・提案。

第1分野 オリリンピック・パラリンピックにおける諸課題（筑波大学の重点との関係）

第2分野 地球規模で考える生命・環境・災害

第3分野 グローバル化と政治・経済・外交

【概要】

☞ 毎週土曜日 3 時間目に実施（2 年）

☞ 毎週土曜日 3・4 時間目に実施（3 年）

【流れ】

- ① オリエンテーション
- ② SGH スタディのヒント(教員によるミニ講座)
- ③ 研究グループ作り → 研究活動
- ④ 中間報告会（2 年 1 月）
- ⑤ 最終発表会（3 年 7 月）
- ⑥ 優秀研究発表会（3 年 9 月）

1 年科学の考え方 1 年データの分析



2 年グループ研究

3 年優秀研究発表会



(3) 優秀研究校内表彰（28 年度の例）

最優秀賞（グランプリ）	2108「文京区ハザードマップを改訂せよ」
優秀賞	1004「東京オリンピックを見据えたインフォメーションアプリの開発」
同	3307「日本に対するイメージを元に日本の良さを伝える」
同	3106「性教育から考える同性愛への認識」
優良賞	1011「オリリンピズムの具現化」
同	2201「ゲル法によるカルサイト作成」
同	2204「防災教育のあるべき姿」
同	2304「周囲の色の変化による映像への没入感の違い」
同	3205「コンビニの海外進出促進のための『観光コンビニ』戦略」
同	3401「日本人の宗教観」
優秀賞（文庫調査部門）	2210「放射線と人類及び生態系」
同	3308「和紙の可能性」
優秀賞（フィールドワーク/実験部門）	2101「震災時における鉄道復旧のあり方」
優秀賞（プレゼンテーション部門）	3203「アジアにおける外食産業の海外進出の経営方針」
敢闘賞（日常的な研究活動に対して）	1005「シッティングバレーを広めたい」
同	2211「プラスチックが人間に与える影響」
同	3405「ユダヤ人はアイデンティティを失いつつあるのか」

※ 9月17日には、3学年「優秀研究発表会・表彰式」を学年で行い、SGH指導委員の先生方にご批評をいただきます。

また、2学年「SGH」の時間にも、優秀研究の発表を聞く機会を設けます。

「SGH プログラム（海外派遣）」

(1) 海外派遣実施概要

◎「日中高校生交流」（イオン1%クラブ主催）

- ・1, 2 学年 10～20 名
（相互交流・一部相互ホームステイ）
- ・選考：ホームステイ受け入れ可が優先
- ・訪日：7月初旬 8日間
- ・訪中：10月初旬 8日間
- ・費用：イオン1%クラブがすべて負担

◎「アジア太平洋青少年リーダーズサミット」

- ・2 学年 3 名 （シンガポール）
- ・選考：大学教授による英語ディスカッション
及び教育長面接。GTEC スコア。
（英語レベル 高）
- ・7月下旬 10日間
- ・費用：生徒負担 約12万円

◎国際学術シンポジウム（韓国）

- ・2 学年 3 名
- ・選考：大学教授による英語ディスカッション
及び教育長面接。GTEC スコア。
（英語レベル 高）
- ・7月下旬 5日間
- ・費用：生徒負担 約6万円

◎プリンスエドワードアイランド大学研修(カナダ)

- ・1, 2 学年 16 名
- ・選考：GTEC スコア参考（英語レベル中）
- ・8月下旬2週間
- ・費用：生徒負担 約50万円

◎HWA CHONG 校との短期留学(シンガポール)

- ・1, 2 学年 7 名 附属中学生 2 名
（相互交流・相互ホームステイ）
- ・選考：ホームステイ受け入れ可が優先
- ・訪日：5月下旬 10日間
- ・訪シ：3月下旬 10日間
- ・費用：生徒負担 約12万円

◎UBC グローバルリーダーズプログラム

（筑波大学附属学校教育局主催・カナダ）

- ・選考：附属学校教育局による（英語レベル 高）
- ・7～8月2週間2期 ・費用：約60万円

◎クーベルタン・ユースフォーラム（世界各地）

- ・2, 3 学年 3 名程度

- ・「クーベルタンスクール」が主催する隔年に1度の国際フォーラム。世界から120名程が参加。
- ・隔年8月下旬～
- ・費用：筑波大学が渡航費を負担
国際ピエール・ド・クーベルタン委員会が
宿泊費、食費を負担。



(2) 学校訪問受け入れ他

日常的に海外から多くの授業参観がある



(3) 海外派遣報告会

① 学年集会での報告



② 文化祭での報告



「SGH 活動の効果測定ツール開発」

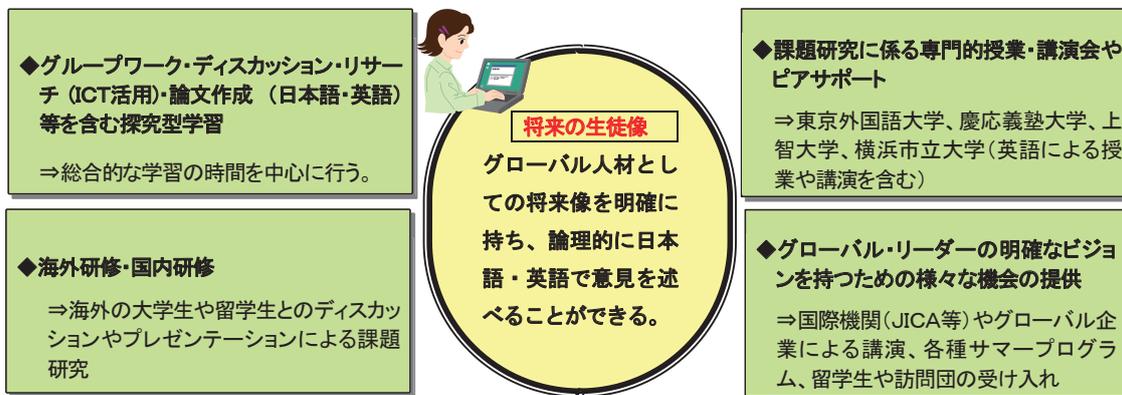
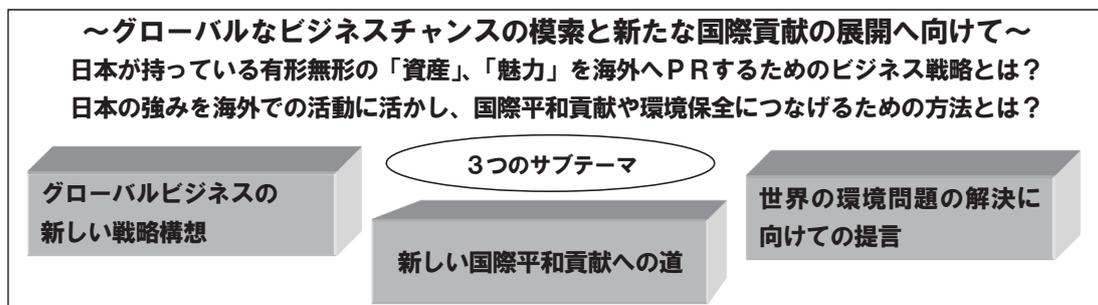
- ・平成29年度アセスメントツールを開発して実施。

神奈川県立横浜国際高等学校

気づき、考え、行動する グローバル・リーダー育成の戦略的プログラム

【構想の概要】

課題研究テーマ	「日本の強みを海外へ売り込む方法の研究」
目的	日本人としてのアイデンティティを持ち、グローバル社会の課題を認識し、問題解決能力を発揮して、解決策を論理的に発信し、成果を上げることができる人間的魅力に満ちたグローバル・リーダーを育成すること
対象生徒	平成 26 年度入学生 240 名（国際情報科）から年次進行で実施 現在国際情報科（3年次）、国際科（1・2年次生徒）595名全員がSGH対象



3年間の主な取組(単位制の専門高校・必修科目を中心に活動)

	4月～7月	8月～12月	1月～3月
1年次	◇総合的な学習の時間 (<Subject Research>テーマ選定のための学習)、◎総合英語、□現代社会		
	◇SGH講演会 ◎英語ディベート基礎 □社会問題グループワーク	◇SGH講演会、ブックレポート、ピアサポート ◎英語ディスカッション	◇課題研究テーマレポート □社会問題討論会 ◎英語ディベート
2年次	◇総合的な学習の時間 (Project Research<PR>・日本語論文の作成)、◎英語理解		
	◇調査分析と中間発表 ◎英語ディベート活動	◇調査・論文執筆、ピアサポート ◎英語ディベート実践	◇PR発表会、活動報告会 ◎英語ディベート実践
3年次	◇総合的な学習の時間 (Discussion&Research<DR>・英語論文の作成)、◎I C		
	◇DRテーマグループ内発表 ◎英語ライティング活動	◇英語論文作成・グループ内発表 ◎英語ディベート実践	◇報告書の作成 ◎英語ディベートまとめ

横浜国際高等学校 SGH の特徴

本校は平成 20 年度に単位制の国際情報科の専門高校として開校し、平成 29 年度より国際科と改編し、平成 31 年度には国際バカロレアコース（仮称）を開設する予定である。

本校の当初の教育目標である「社会のグローバル化に対応し、国際化・ICT化の進む日本社会、国際社会でリーダーとして活躍する人材を育成する。」という視点からSGH事業の取組を行っており、研究開発事業として科目開発を目ざした取組を全校生徒対象に行っている。

このSGH事業を円滑に実施するために、様々な教科の職員が集まる「SGH推進チーム」を編成し、毎週定例の会議を開催して、本校の取組の方向性を協議して進めている。

単位制の高等学校のため、全員が共通して履修する科目として「総合的な学習の時間」、「外国語（英語）」及び「現代社会」の科目を中心に3年間の系統的な指導を行うことにより、SGHの研究開発構想に沿った課題研究を生徒一人ひとりが行っている。卒業後はその研究活動を通して得た学習への取組を生かし、キャリア選択に結びつけている生徒が多く出ている。

教科指導を踏まえた中で、教科外の活動として海外スタディツアーの実施による課題研究の深化、生徒の自主的な委員会活動や個人的な活動のサポートをすることにより生徒が国内外に視野を広げているとSGH推進チームは分析している。

このような活動の実施に向けて、東京外国語大学や近隣の大学との連携を深め、運営指導委員や大学関係者などの外部有識者及び神奈川県教育委員会の指導・助言を受けながら生徒の探究力を伸ばす有意義な活動になるように方向性を確認しながら4年間の活動を終え、最終年度の取組を進めている。以上の内容について本校の取組について記述する。

「総合的な学習の時間」について

「総合的な学習の時間」を本校では、SR (Subject Research)、PR (Project Research)、DR (Discussion and Research) として3年間の系統的な指導を行っている。まず、2年次からの個人課題研究活動を進めるに当たり、テーマの設定が

非常に重要であると考えている。SGH講演会やワークショップ、ブックレポートなど一方的なアプローチではなく、振り返りの時間をきちんと確保して、理解を深め、生徒同士が意見交換をし、大学院生からの助言により自分自身のテーマに対する考えを深めることができている。

2年次では、各自のテーマに沿った研究を進め、生徒は日本語による論文（A4版20枚）を完成させ、さらに3年次では、研究を深化させ英語による論文（1200語以上）を完成させる。当初は、A4版5枚という指定で行っていたが、目標語数を設定することにより、より内容の深い論文を完成させることができている。

「総合的な学習の時間」の指導は、職員1名につき生徒10名から15名を担当する。全教科の職員が指導に当たっている。統一した指導ができるように毎月担当者会議を開催して、指導内容や指導方針について確認した上で行っている。評価の観点も生徒に提示して進めている。今年度は、ルーブリック評価表を完成させ、取組状況をより明確に客観的な評価を実施してその取組状況を年度末にまとめる。

外国語（英語）、現代社会の取組

生徒全員が共通で履修する科目である「総合英語」（1年次）「英語理解」（2年次）「インターナショナル コミュニケーション」（3年次）及び「現代社会」（1年次）で、年間を通した探究型学習、コミュニケーション活動を取り入れた授業を行っている。

特に外国語（英語）の授業では3年間を通した継続的な活動を実践としてディベート活動を行っている。ディベートを通して、社会の課題に対する関心を持ち、課題を分析し、論理的思考力・問題解決力を高めることができている。

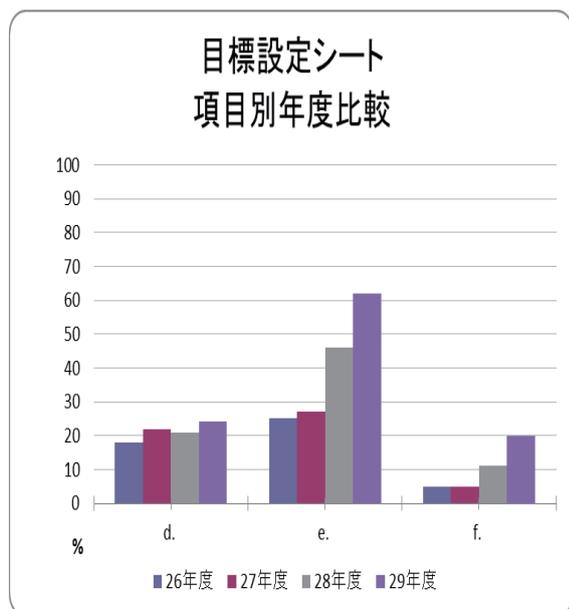
1年次は、教科書に関連したトピックを設定し、ディベートとはどのような活動かという基本的な内容を学びながら、学習内容の理解を深め、自分の意見を持ち、その意見を理解してもらえるようにグラフを用いるなど様々な工夫を自然とするようになる。また相手の意見を聞く姿勢も身に付いてくる。

2年次では、より論理的で説得力のある表現ができるように「ライティングスキルズ」という英文の表現力を高める授業と連携をとりながら、テーマ設

定もより一般的な論題にして議論を深めるようにしている。2年次は特に英語の伸びがめざましく本校卒業時の目標として掲げている「CEFRのB1～B2レベルの生徒の割合」は2年次でほぼ達成している。

3年次の授業では国内外の社会問題を取り上げて行う。生徒は、国内外の諸問題に対して知識と理解を深め、英語の表現力を高め、自分の意見を述べるコミュニケーション能力を伸ばす。さらに3年間のまとめとして、自分の考えを序論・本論・結論の形で英文で記述する力をつけることも目標としている。

評価については、定期テストでエッセイを記述することにより評価している。エッセイの評価項目は「内容」「構成」「英文の正確さ」「エッセイの独創性」の4観点である。



上記の表は英語力に関する本校の推移である。dは、「グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外における入賞者数」、eは「卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合」、fは「高校卒業時までに英検準1級以上を取得している生徒」でこの4年間の取組で英語4技能の力の伸びが顕著であることがわかる。

本校の英語指導方法については、公開授業を年間4回ほど開催して、他校の教職員が多く来校し、授業後は研究協議を通して授業改善を進めている。また、神奈川県教育課程説明会やグローバル教育の

説明会で本校の取組を説明し、県内の高等学校に周知している。

さらに「現代社会」では、時事問題も取り上げながら、地球環境問題や世界の政治制度など日本との比較をしながら、グループでまとめた内容を発表し合うなどお互いの視野を広げる活動を積み重ねている。

特色ある取組①（海外スタディツアー）

本校は「日本の強みを海外へ売り込む方法」という課題研究テーマを設定しているが、さらにサブテーマとして「グローバルビジネス」「国際平和貢献」「世界の環境問題」という3つのサブテーマを基に生徒は課題研究のテーマを設定している。その課題研究の一環として実施しているのが3方面への海外スタディツアーで、指定2年目の平成27年度から実施している。

現在訪問している国は、ベトナム、カンボジア、マレーシア（ボルネオ島）で、この訪問に当たり各方面10人ずつ選考された生徒たちは、4月下旬から現地を訪問する8月まで様々な事前学習を行って、訪問地域の理解を深めていく。実際に訪問した際には、現地企業の訪問・現地大学生徒のディスカッションなどSGHの課題研究テーマに沿った活動をする。帰国後は、各チームが共同して行う活動として文化祭におけるスタディツアーのコーナーの展示及び説明、全校生徒対象の活動報告会を行い、他の生徒や文化祭の見学者に周知することにより波及効果が見られている。さらには、チームごとに考えた事後活動として、校外への普及活動にも取り組んでいる。今までの取組としては、カンボジアに井戸を作るための募金活動や小学校や中学校での環境学習、地元横浜のフェアトレードショップマップ作成など積極的に取り組んでいる。

特色ある取組②（SGH生徒交流委員会）

指定2年目の平成27年度に、生徒の自主的な活動として希望生徒を対象にした生徒委員会が発足した。本校ではGSYという略称で呼んでおり、正式名称は“Global Students from YIS”である。

この生徒委員会の活動は大きく分けて2つある。1つ目は校内での定期的な活動で、毎週2回昼休みに集合してグループに分かれて社会問題について議

論し合う。2つ目は神奈川県内の他の指定校との交流会で、年間3～4回実施し、毎回テーマを決めてグループごとに分かれて議論、解決案の提示を行う。グループに分かれる際は、参加校生徒が均等に分かれるようにしている。

このような他校との交流はSGH事業によって始まった活動で、横への広がりという点で大変貴重であり、課題意識を高めることができている。

自主的な委員会活動であるが、平成29年度及び平成30年度は、1年次生の参加者が多い。入学前から学校説明会等で、本校がSGH指定校であることを知り、「学習だけでなくSGHの活動をしてみたい」ということが本校を志願する理由になっており、委員会への参加人数の増加に結びついていると考えられる。

高大連携について

本校は東京外国語大学と高大連携協定を結んでおり、SGH事業でも大学の視点から多くの助言を受けている。東京外国語大学だけではなく同じ神奈川県内にキャンパスのある慶應義塾大学や横浜市立大学とも指導・助言を受けながら活動を進めている。

連携大学の教授には、SGH講演会で、生徒に対して本校で直接語りかける機会を依頼している。また、1・2年次生徒を対象に「総合的な学習の時間」でピア・サポート（生徒一人ひとりが取り組んでいる研究について大学院生が助言したり、大学院生が自身の研究テーマについて話したりする企画）を実施している。生徒10名につき一人の大学院生の派遣を依頼しているため一度に20名ほどの大学院生が必要で、連携大学の協力を得ることによって実現している。

海外進学に向けた取組

卒業後の進路としては、国内の大学に進学する生徒がほとんどであるが、国内の大学にある学部では自身の専攻分野に該当する学部がないということで、

海外進学を目指す生徒もいる。

海外進学を目指す生徒が続いている要因として5点挙げることができる。1点目として、在校生の在学中の留学への支援体制ができている。海外の高校に1年間留学して現地での学習取組状況に応じて、留学という包括的な単位認定制度がある。このことを、説明会を通して、生徒に周知しており、毎年10名前後の生徒がこの制度を利用している。さらに夏季休業中及び春季休業中などを利用した短期の海外留学や海外大学へのキャンプなども紹介しており、香港大学のキャンプにも2年連続で参加している。

2点目として、第2外国語を全生徒が必履修で選択していて、海外で文化を学びながら、さらにその言語運用能力を伸ばすことを目指す生徒がいる。

3点目として、海外進学に向けた取組として、大使館や海外進学を支援している企業担当者による海外大学説明会を本校で、実施している。毎年100名を超える生徒・保護者が参加しており、進路選択の一つとして意識している家庭が多いことが分かる。

4点目として、本校卒業生で海外に進学した生徒に來校してもらい、在学生対象の説明会を行っている。在校生は、在学時の科目選択や出願に向けて必要な準備、受験に向けた学習内容など具体的な話を聞く機会となっている。

5点目として、SGHの活動における大学院生や企業関係者、大使館関係者の講演会や座談会を通して海外に視野を向けられるようになっている。特に、ここ数年、海外に進学した卒業生の中に、SGHの活動を通して大学での専攻分野が確定し、その探究のために海外進学を決断する生徒が続いていることから、SGH活動が生徒のキャリア形成にとって非常に効果的な活動であることが分かる。

以上をもって、本校のSGH取組についての報告とする。

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

北陸からイノベーションで世界を変える グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

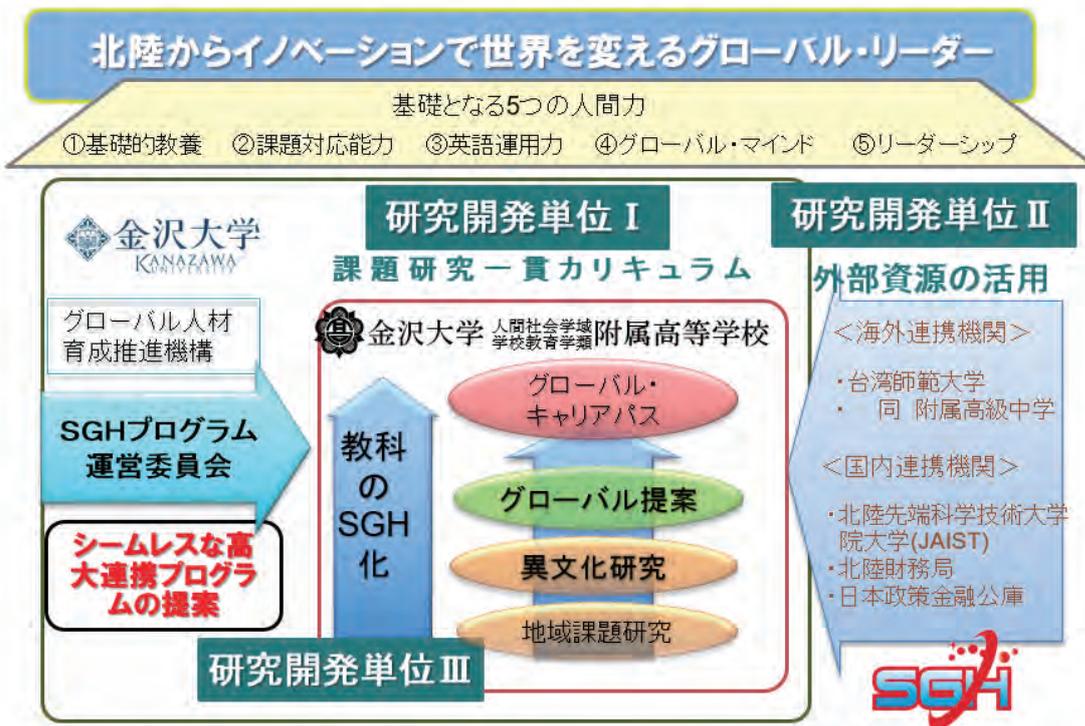
イノベーションを創生できるグローバル・リーダーを、地域から高大連携により育成するプログラムを、3つの研究開発単位から提案する。

Ⅰ：グローバル・リーダーとしての人間力を段階的・有機的に育成するため、「地域課題研究」「異文化研究」「グローバル提案」「グローバル・キャリアパス」の4つの課題研究の一貫カリキュラムを開発する。

Ⅱ：課題研究の質を高め、英語運用能力を養うため、金沢大学・北陸先端科学技術大学院大学、台湾師範大学および附属高級中学や北陸財務局、日本政策金融公庫などの外部資源の効果的な活用方法を研究開発する。

Ⅲ：グローバル・リーダーとして必要な基礎的教養や技能を高める授業内容と方法を研究開発し「教科のSGH化」を進めるためのコンピテンシーについて研究する。

これらの研究開発を通して、イノベーションを創生できる人間力を持つグローバル・リーダーを、北陸の地から高大連携により育成するプログラムを提案する。



【教育課程表】

一年生	国語(5)	世界史(2) 現社(2)	数学(6)	理(3)	英語(5)	保健(1) 体育(3)	芸術情報 HR(4)	総合(2)	合計 33 単位
二年生 (文系)	国語(5)	日本史(2) 地理(2)	数学(6)	理(3)	英語(6)	保・体(3)	芸術・家庭 HR(4)	総合(1)	合計 32 単位
(理系)	国語(5)	日 or 地(2)	数学(6)	理(3)	理(3)	英語(6)	保・体(3)	芸術・家庭 HR(4)	総合(1)
三年生 (文系)	国語(6)	地・公(4)	地・公(4)	数学(5)	理(2)	英語(6)	体育(3)	HR(1) 総合(1)	合計 32 単位
(理系)	国語(5)	地・公(4)	数学(6)	理(3)	理(4)	英語(6)	体育(3)	HR(1) 総合(1)	合計 33 単位

*各コース最大履修単位。

※本校は、全員がSGH対象生徒

本校の概要

本校は、科学技術の穎才教育機関として昭和20年1月に発足した特別科学学級を母体に、昭和22年に金沢高等師範学校附属中学校（旧制）として発足した。東京大学をはじめとする難関大学や医学部に進学する生徒が多く、卒業生は、公務員、医師・弁護士・研究者（大学教員）等の専門職、民間の研究部門、起業家など、様々な分野の第一線、国際社会の場で活躍している。

本校は、1学年3クラス120名余りの小規模校である。その半数強の生徒が附属中学校出身者、半数弱が石川県内中学校出身者で、県外中学校出身者も若干数通っている。「自主自律」の校風は本校創設以来のもので、生徒・教職員ともにこれに対する認識を共有している。多くの生徒は充実した学校生活を送っている。行事が盛んで、その運営は生徒自らが行っている。本校の常勤教員は校長・教頭・養護教諭を含めて23名で、意欲的に教育に取り組み、「総合的な学習の時間」および「教育課程外の取り組み」については、多くの成果を上げている。生徒の学校に対する満足度は高く、保護者の学校に対する信頼感も厚い。

高大連携について

SGH事業初年度以来、管理機関としての金沢大学は、全学組織である「グローバル人材育成推進機構」（機構長：学長）の下、本事業を推進するために設置した「SGH特区教育センター」（センター長：教育担当理事）並びにその中に設置された「SGHプログラム運営委員会」及び「運営指導委員会」を通じて本事業を推進してきた。

また、金沢大学の第2期中期目標期間において、大学と附属高等学校とが一体的・組織的にSGH事業を推進できるよう、平成27年度に中期計画を変更し、第3期中期目標期間においては、中期計画に「教育モデル校として、第2期中期目標期間において各校園が取り組んだ教育研究活動実績をもとに、（中略）高等学校におけるスーパーグローバルハイスクールカリキュラム研究等、特色ある先導的・実験的な教育活動を展開し、石川県教育委員会との連携により、その成果を地域に還元する。」と定める等、管理機関における重要な施策として位置付けて

いる。

上記の管理機関としての体制整備と併せて、本年度のSGH事業遂行に際し、金沢大学は主に以下の2点について支援に取り組んだ。

・財政的支援

SGH事業が円滑に推進できるよう、学長の強いリーダーシップのもと、補助金のほか金沢大学として年度当初から予算措置を行い、本年度も事業の実施に充填した。この予算は、補助金と併せて、本事業の一層の充実に役立てられた。

・人的支援

金沢大学が文理の枠を超えた幅広い研究者を擁する総合大学であることの強みと、50を超える国と地域から500名を数える留学生が学ぶ国際性豊かな大学である利点を生かし、以下のとおり人的支援を行った。

ア 「地域課題研究」への研究者の参画

「地域課題研究」については、金沢大学グローバル人材育成推進機構スーパーグローバルハイスクール特区教育センター長名で金沢大学各学域・研究科に協力を依頼する方式を確立し、本年度は人間社会研究域経済学経営学系人間社会研究域附属地域政策研究センター長が研究・指導助言を行った。

イ 「グローバル・ディスカッション」及び「グローバル提案」への留学生等の参加

金沢大学の2学域・2研究科及び留学生センターに所属する外国人留学生のべ62名及び国際機構に所属する外国人教員1名が、6回にわたるグローバル・ディスカッション（38人）及びグローバル提案（24人）に参加することで、語学という観点からの貢献だけではなく、外国人ならではの視点から討論を深化させるとともに、多様な文化に触れる機会を提供した。

このほか、外国人留学生の募集や事務手続きにあたっては、学生が所属する学域等を担当する本学教職員が直接関与することで、参加する外国人留学生等の負担を軽減するとともにスムーズな運営を可能とした。

本校の模擬国連

(1) 目的

「地域課題研究」「異文化研究」を通じて発見した課題は、世界にとっての課題でもある。「グローバ

ル提案」では、二か国ではなく、多くの国の立場に立って、多面的・多角的に世界全体の課題解決に向けて取り組んでいく。「異文化研究」で身に付けた調査のノウハウ、研究をする力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を更に高め、グローバル課題の解決案を作成する。そして“自分とは違う立場”になりきり、模擬国際会議を通して交渉し、“合意形成”“持続可能な独創的な提案”を最終的に世界に向け発信する。

様々な立場の考え方に触れ、合意形成の難しさを痛感し、自分たちの提案が現実的か、持続可能かを検証する。自分たちの提案を実現していくことを考える過程で、「世界に対して何をしなければいけないか、私は何ができるか、そのためにはどうしたらいいか」改めて自らの生き方・在り方を考えさせ、進路を見据える契機とする。

(2) 年間計画

- ・4～5月 各国ならびに参加国の状況調査
- ・6月～ 模擬国際会議DEMO①
- ・8～9月 参加国および論点を増やして、模擬国際会議DEMO②
- ・10月～11月 模擬国際会議本番
- ・11～1月 日本の立場から提案作成
- ・2月 英語でのポスターセッション

(3) 模擬国際会議の内容

- ・議題「Food Security」— How to Feed the World in 2050 —
- ・議場「Food and Agriculture Organization of the United Nations」
- ・参加国 12か国（6月以降は 19か国）

議題は4年間「食糧安全保障」で継続している。議題概説書はグローバル・クラスルーム日本委員会より使用許可を得て、過去の全日本高校生模擬国連大会のものを使用している。

(4) 本校の模擬国際会議の特徴

本校は生徒全員がSGH対象生徒なので、総合的な学習の時間の中で、2年生の生徒全員が会議に参加する。意欲の高い希望者だけで行うわけではないので、実施にはなかなか困難を伴う。模擬国連では

多くの形式と専門用語を使用するが、本校では、あえてそれらを使用していない。

議場はクラスごとであり、3～4人（6月以降は2～3人）で一国の大使になりきる。



(5) 評価について

評価は、ルーブリックを作成し、それに基づいた評価を行っている。

評価場面は、ポジションペーパーと会議での様子を中心に、複数の教員で行っている。評価の文面は、調査書のスペースの関係もあり、文章の内容を複数の中から選択して組み合わせで作成した、簡素なものとしている。

他教科とのつながり

模擬国際会議を行うにあたって、地理の時間を利用して食糧問題の基礎的な知識を学習している。また、現代文の授業で議題概説書を取り扱い、深く読み込ませることを徹底した。

他校への普及

平成30年1月27日（土）に、本校・金沢泉丘高校・金沢二水高校の三校生徒が集まり、課題研究合同発表会を本校体育館で実施した。各学校が課題研究の成果をポスターセッションで発表した。本校の2年生は、模擬国際会議を踏まえて、食糧安全保障における自国の提案を論理的に強化したものを英語で発表した。他校の生徒に対しての発表は緊張感もあり、他校の生徒からのアドバイスもあって、生徒たちにとっては、おおいに刺激となった取り組みであった。

今年度の改善点

今年度は、もっと多くの教員に関わってほしいということで、13人の教員が担当することとなった。時間割作成ではかなり無理を強いたと思うが、何とか実現できた。調べ学習の段階では、教員1人が1つの国を担当するので、クラスごとでの活動よりもクラスを越えた活動が多くなった。初めて担当する教員が多いのだが、「生徒と共に学ぶ」というスタンスで参加してもらい、それほど負担を感じさせないようにしている。

また、昨年度までは議長を教員が行っていたが、今年度は生徒が行うようにした。昨年、全国高校教育模擬国連大会に参加した生徒が議長となり、地理の教員の指導の下、議長団を構成して、体系的な運営を行うことができるようになった。



成果と課題

週1時間、徐々に学習内容も高度化する中で、全員の生徒が負担増にならず、充実した学びにするにはどうしたらよいか、試行錯誤の日々が続いた。し

かし、模擬国際会議で、生徒が積極的に各国の立場になりきり、活発に交渉・合意形成をしている姿を見て、この試行錯誤が無駄ではなかったことを実感できた。放課後や学校外で自主的に延長戦をする生徒も多い。この活動がどれだけ彼らにとって充実したものか感じられる行動である。

しかし、模擬国際会議を3年間実施してきたが、未だ課題は多い。「食糧安全保障会議 2050年に餓死者をゼロにする」という題材で行ったが、現実社会でも解決できない問題に取り組むので、合意形成は非常に難しい。題材が簡単すぎると、学びが浅くなってしまふ。また合意形成したクラスの「提案」のレベルが必ずしも高いものとは限らないし、その国の立場になりきれていないからこそ合意できた場合もある。逆にあまりにもその国の立場になりきってしまったせいで、合意できなかった場合もあった。我々教員の指導には絶妙なさじ加減が求められる。

指導する教員側の温度差についても、なかなか解消することができない問題になっている。「どう指導していいかわからない」「テーマが文系で指導しづらい」という意見も多い。

しかし、この模擬国際会議の活動が、生徒にとって非常に有意義なものであることは確信している。そして「汎用性」「全ての生徒が参加」がこの研究のキーワードである。本校の模擬国際会議を見て、似たようなプログラムを組まれた学校もある。今後も、社会に還元できるような学びの形を研究していきたい。

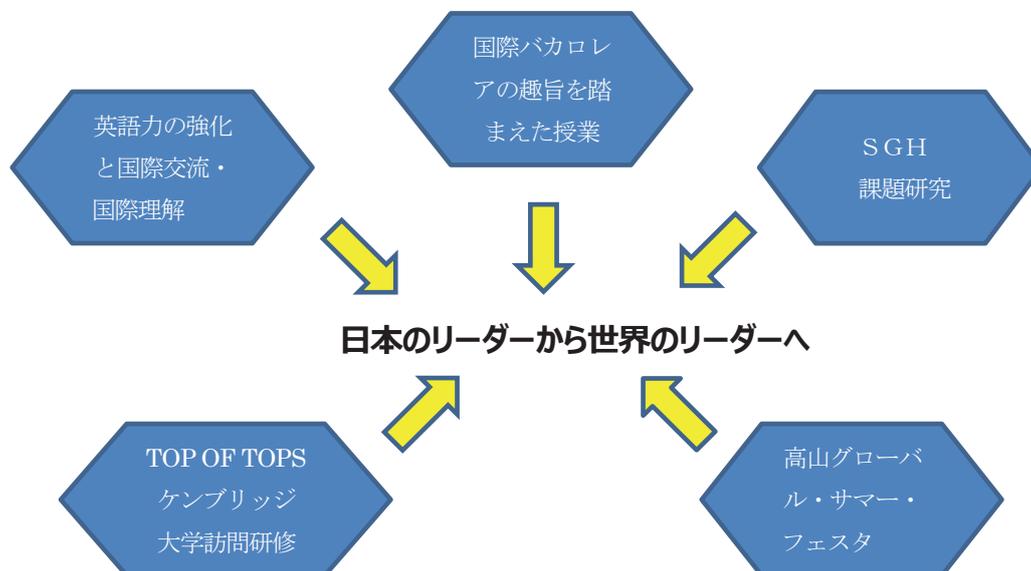
愛知県立旭丘高等学校

日本再興戦略を支える 若手グローバル・リーダー育成に関する研究開発

【構想の概要】

○研究開発の目的

「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」により獲得した批判的思考力と県立学校アクティブチャレンジ事業で行った課題研究をもとに、英語によるコミュニケーション、ディスカッション、論文作成能力を獲得するためのカリキュラムを開発し、海外でのフィールドワークを行う課題研究に取り組み、国際性に富むグローバル・リーダーを育成する。



○教育課程表（普通科） ※（ ）内の数字は単位数を表す。

1年	2年	3年
国語総合(4)	現代文B(1)	現代文B(2)
SG地理(2)	古典B(3)	古典B(2)
数学Ⅰ(2)	世界史A(2)	政治・経済(2)
数学Ⅱ(1)	日本史A(2)	数学Ⅲ(1)
数学A(2)	倫理(2)	数学B(1)
生物基礎(2)	数学Ⅱ(2)	体育(2)
地学基礎(2)	数学Ⅲ(2)	コミュニケーション英語Ⅲ(3)
体育(3)	数学A(1)	英語表現Ⅱ(1)
保健(1)	数学B(1)	SG総合(探究)(1)
芸術Ⅰ(2)	物理基礎(2)	選択科目(15)
コミュニケーション英語Ⅰ(2)	化学基礎(2)	
コミュニケーション英語Ⅱ(1)	体育(2)	
英語表現Ⅰ(2)	保健(1)	
家庭基礎(2)	芸術Ⅱ(1)	
情報の科学(2)	コミュニケーション英語Ⅱ(2)	
	英語表現Ⅱ(2)	
	SG総合(思考・表現)(1)	

○ 国際バカロレアの趣旨を踏まえた授業

本校では、全校生徒が課題研究に取り組むための3年間を見通した教育課程を構築している。第1学年では「SG地理」を課題研究の入門と位置づけ、社会への視野の広がりを目指し、第2学年では、「SG総合（思考・表現）」を通して課題研究力の向上と社会と自分との接点を見つけることをねらいとしている。また、第3学年の「SG総合（探究）」では、これまでに培ってきたスキルと社会への意識を活かし、各自が設定した課題に対する探究活動、さらには具体的な今後の学びにつなげる行動を目指している。

【1年：SG 地理】

地球的課題の中から具体的なテーマを選び、グループ研究を通して、友と協力し、主体的に学ぶ探究的な学習スタイルを確立することを目標とする。情報を収集する力や、効果的に情報を発信する能力と、討論を通して幅広い考え方を身に付け、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質の育成を目指す。

【2年：SG 総合（思考・表現）】

思考を深め、発信力を高めることを目的に、社会の仕組み、地域の課題、人々の生活をより良いものに変えるプランをグループで協働作成し、さらに英語のポスターにして全体の前で発表する。また、社会問題を取り上げて個人で英語論文（約1000語）作成する。



2年 SG 総合(思考・表現)発表



3年 SG 総合(探究)発表

【3年：SG 総合（探究）】

客観的な文献・論文や資料等をもとにしながら、物事を批判的・論理的に捉え、考える機会とすることを目的とする。3年普通科生徒全員が10講座からいずれか1つを選択し、担当教員（全教科）の指導のもと、探究活動を行う。進路につながる分野のテーマについて少人数のグループに分かれ、調査研究したものを発表するとともに、総括として論文・レポート集（冊子）を作成する。

○ SGH発展的事業

(1) SGH課題研究

「共生と調和のグローバル時代を目指して～アジアから世界へ～」をコンセプトに、研究対象国（韓国・台湾）の文化や歴史、政治、経済などを研究する。1、2年生希望者（25名）を対象に、以下の①から⑩の内容を実施する。



高陽国際高校との意見交換

①授業後の課題研究ゼミ

②国内巡検（6月）

③海外巡検（12月）

④研究者との討議

⑤論文作成

⑥外国人留学生と討論

⑦高陽国際高校（韓国）、師範大学附属高級中学校（台湾）の生徒と意見交換

⑧国際コンクールでの発表

⑨UNWomenでの資生堂とタイアップしての発表

⑩模擬国連出場

(2) SGH Top of Tops ケンブリッジ大学訪問研修

世界最先端の研究環境を体験させることでグローバルリーダーへのステップとすることを目的とする。2、3年生希望者（12名）を対象に、約2週間（7月～8月）英国ケンブリッジ大学を基点として、以下の①から④の内容を実施する。

①各自の研究テーマに沿った探究活動

②世界各国（イギリス含む）の高校生とグローバルリーダー講座への参加



ケンブリッジ大学研究室訪問

③研究室見学・講演

④英語論文（約4000語）、

英語ポスター作成（帰国後）

(3) SGH 高山グローバル・サマー・フェスタ

SGH校の生徒が集い「グローバルリーダーとは何か」について考える機会とする。旭丘・名城大附属・四日市・高岡・高山西の希望生徒を対象とする。8月に3泊4日の日程で、旭丘高校林間学舎を利用し、最先端の科学技術や企業経営などの講演、SGH校生徒同士の討論を実施する。

資生堂・UN Women のジェンダー平等啓発事業とタイアップした SGH 課題研究ゼミの運営

SGH 事業のけん引役として、生徒 25 名を募集し、1 年間、グローバル化で生じた課題の解決策を考えるゼミを開いている。29 年度は「女性の社会参画」のテーマで、資生堂・UN Women のジェンダー平等啓発事業とタイアップしたプログラムを作成した。

◆ステップ1 (インプット+探求と発表+討論)

ゼミは毎週火曜日の授業後 100 分、地歴公民科の教員 5 名の指導で講義、25 人の生徒の研究発表、討論をおこない、その他に講演会、国内巡検を実施した。この中で、資生堂のサステナビリティ戦略部の方と、「資生堂インパクト」に代表される、現在、企業内で進められている男女平等の働き方改革についてのワークショップも開いた。

ゼミでの探求の成果は、10 月、国連大学でおこなわれた啓発事業全国大会で発表した。そこでは本校生徒へのアンケートに基づき、「男は仕事、女は家庭」の考えに対し、ほとんどの生徒はそれを否定しているが、自分の働き方と、配偶者に対する希望は性別役割分担意識に縛られており、ホンネとタテマエが乖離していることを示した。しかし、母親が働く家庭の生徒は共働きに対して理解があり、性別役割分担意識が抜けないのは、身近なところにロールモデルがないためではないかと考え、男女平等の働き方が模索されている企業の実態を知ることの重要性を指摘した。また、将来は仕事で活躍したいと考える女子生徒が、男子生徒の考えを変えてゆくことが大切で、そのためのロールプレイングゲームを開発することを提言した。



◆ステップ2 (海外からの視点)

日本人だけでは気づかなかった見方を確認するため、韓国の交流校・高陽国際高校の生徒に同じテーマで課題解決策を考えてもらい、年末に韓国を訪問して英語で意見交換をおこなった。韓国も女性の社会参画が進んでいないが、仕事と家庭を天秤にかけた時、日本の女子生徒が家庭をとると答えたのに対し、韓国の女子生徒は仕事をとるという答が多く、そのために非婚化・少子化が日本以上に進行していることがわかった。儒教の伝統に基づいた、教育に対する親の多額の投資と、子供の親への恩返しに近い気持ちが背景にあり、「女性の社会参画」の推進のためには、社会・文化面からのアプローチが必要なことも気がついた。

◆ステップ3 (アウトプット)

3 月にゼミの生徒が講師役となり、全校生徒を相手にワークショップを開き、日韓ともに進まない「女性の社会参画」の問題を一緒に考えた。ここでは開発したロールプレイングゲームを実施し、「男は仕事、女は家庭」と「夫婦共働きで家事分担」とで、世帯あたりの生涯収入はどちらが多いか、男女ペアになり、漢字の書き取りを有償の仕事、折り紙を無償の家事労働に見立てて試してもらった。わかりやすく楽しかったと好評だった。

一連の取組みを通じ、生徒は今の企業で進められている、グローバル化に対応した男女平等の働き方改革のことを知り、自らの進路設計に対しても見方を変えることになった。また、企業側にとっても、高校生の意見は社内の働き方改革を考える上での参考になるとされ、互いに Win - Win の関係を作ることができ、メリットが大きいと感じられた。

日本政策金融公庫と連携した総合的な学習の時間 SG総合(思考・表現)

1. 日本政策金融公庫との連携

「総合的な学習の時間」での出張授業

(1) 出張授業(年間3回)

◆<第1回目「ビジネスアイデアの発想」>(6月)

以下を重点としてビジネスアイデアについて学んだ。

- ①高校生としての豊かな発想や着眼点で、世の中の仕組みの改善、または地域・社会に貢献する事業内容。
- ②ニーズ、顧客(ターゲット)、広告・宣伝などの具体化。
- ③経営資源であるヒト、モノ、技術、方法等の工夫。
- ④収支計画でのビジネスの継続性。

◆<第2回目「ビジネスプランの作成の仕方」

～実践編～>(7月)

第1回目の出張授業を踏まえ、プランをより具体的に練ったものへ改良するためのポイントを学んだ。

日本政策金融公庫担当者の講義の後に前回の出張授業で出されたビジネスプランの課題を各グループの代表がプレゼンテーションし、担当者から具体的なアドバイスを受け、次のステップであるビジネスプランシート作成へと繋がった。

◆<第3回目「ビジネスプランプレゼンテーション」>(10月)

学年合同発表会を実施し、第2回目の出張授業から、さらに改良したビジネスプランの詳細案を全グループがプレゼンテーションした。

(2) 日本政策金融公庫主催「第5回高校生ビジネスグランプリ」に8クラス×8グループ=64グループがエントリーし、ビジネスプランシートを提出した。

(3) 日本政策金融公庫主催「第5回高校生ビジネスグランプリ」の各プラン審査結果とフィードバックで振り返りを実施した。

2. 校内での取組

出張授業の事前・事後指導

- ・日本政策金融公庫と本校の担当者の連絡、打ち合わせを徹底し、出張授業の前後に本校担当者が生徒の活動を円滑に進められるようにした。
- ・批判的思考力を用いること、協働して活動することなどのスキルを高めるものとした。

・ビジネスプランシートを完成させた後に以下の活動を行った。

- ①各グループがそれぞれのプランを英語ポスターにし、そのポスターを用いて全体発表会を実施した。
- ②名古屋大学大学院の留学生を各クラスに4名ずつ招き、留学生の出身国と日本が抱える経済問題などをグループで意見交換した。
- ③日本の経済を取り巻くグローバル問題を考え、自分の意見や考えをまとめた。具体的には、「なぜ日本は有能な外国人にとって働くには魅力のない国なのか」についての英文記事とデータをクリティカルに読み解き、グローバルな人材育成の課題解決策を生徒各自が英語論文(1000語)を作成した。

3. 学校内外での発表

成果の普及と共有

- ・校内「SGH成果発表会」において代表生徒が全校生徒へビジネスプランのプレゼンテーションを行った。
- ・「あいち イングリッシュフォーラム」において、代表生徒がビジネスプランを英語でポスタープレゼンテーションした。
- ・日本政策金融公庫主催「第5回高校生ビジネスグランプリ」全国ベスト100に選出されたチームが東海3県Awardにて他校の代表グループや東海財務局等の方にプレゼンテーションした。
- ・「第一回 京都大学ポスターセッション」において、代表生徒が全国のSGH、SSH校の生徒および京都大学関係者にプレゼンテーションを行った。



校内発表会



東海3県Award発表会

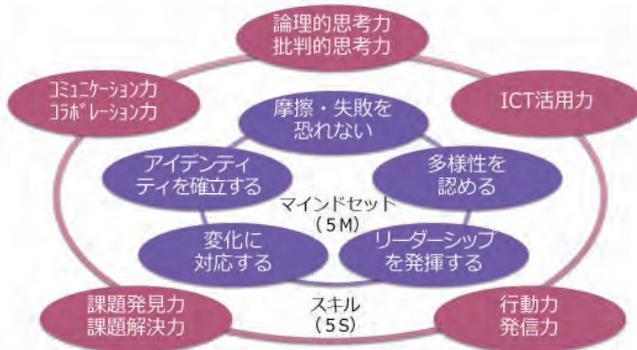
名城大学附属高等学校

高大協働による愛知県産業を基盤にした グローバルビジネス課題の探究

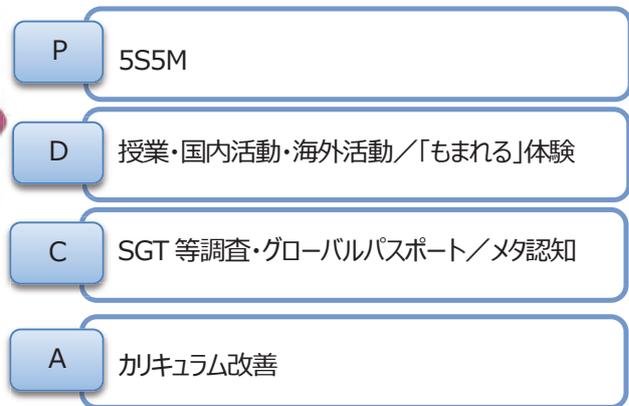
【構想の概要】

愛知県産業から派生する様々な課題について、高大・産学協働の探究活動を行う。授業と課外活動とを融合させたサービスラーニング等を通して、スキルとマインドセットを育成し、グローバルシチズンシップを獲得させる。評価・検証には、ルーブリック等を用いたパフォーマンス評価、定期的なアンケートによる統計的手法を用いる。

グローバルシチズンシップを獲得するために
必要なスキルとマインドセット（5S5M）の相乗効果



本校でのPDCAサイクル



教科	科目	標準単位	第1学年		第2学年		第3学年	
			一般	国際	一般	国際	一般	国際
国語	国語総合	4	4	4				
	現代文B	4			3	2	3	3
	古典B	4			3	2	4	4
地理歴史	世界史A	2	2	2				
	世界史B	4			□3	3	□4	3
	日本史A	2	2	2				
公民	日本史B	4			□3		□4	
	地歴演習						▲2	
	倫理	2					2	2
数学	政治・経済	2			2	2		
	数学I	3	3	3				
	数学II	4			4			
	数学III	5						
	数学A	2	2	2				
	数学B	2			2			
	数学演習A				2	4	2	
理科	数学演習B							
	物理基礎	2	2				2	
	物理	4						
	化学基礎	2			2	2		
	化学	4						
生物	生物基礎	2	2	2				
	生物	4						
	理科課題研究	1						
理科演習						3		

教科	科目	標準単位	第1学年		第2学年		第3学年	
			一般	国際	一般	国際	一般	国際
保健体育	体育	7~8	2	2	2	2	3	3
	保健	2	1	1	1	1		
芸術	音楽I	2			■2	■2		
	美術I	2			■2	■2		
	書道I	2			■2	■2		
外国語	コミュニケーション英語I	3	3	4				
	コミュニケーション英語II	4			3	4		
	コミュニケーション英語III	4					3	4
	英語表現I	2	3	3				
	英語表現II	4			2	3	3	4
家庭情報	家庭基礎	2	2	2				
	社会と情報	2	2	☆				
グローバル	国際教養				2		2	
	イングリッシュプレゼンテーション				2		2	
	G7'ウォークスデー				☆2			
	科学英語							
グローバル	スモール・プロジェクトI							
	スモール・プロジェクトII							
	スモール・プロジェクト*							
	数理探究基礎							
総合的な学習の時間	数理探究							
	探究基礎			1				
	多文化共生	3~6		2				
	グローバル概論				2			
特別活動	課題探究					4	▲2	2
	ホームルーム活動	3	1	1	1	1	1	1
	合計		32	34	32	34	32	34

SGHとSSH

本校は普通科と総合学科全 53 クラス、1,984 名の生徒を有する。SGH 事業は普通科国際クラスを主対象、一般進学クラス第 1 学年・一般進学クラス第 2 学年文系選択・第 3 学年文系選択の課題探究選択者を準対象とし、SSH 事業の対象生徒と分けている。

		＜クラス数＞			
		1年	2年	3年	
普通科	特別進学クラス	3	3	4	
	スーパーサイエンスクラス	1	1	1	
	一般進学クラス	理系	8	4	5
		文系		3	3
国際クラス	1	1	1		

SGH と SSH は、文系と理数系に分かれ探究的学習の開発を担うが、分掌「教育開発」を中心に、連携して探究手法や成果検証等を検討し、情報交換を行うことで、全校的な探究的学習へと繋げている。

学校設定教科の設定

課題研究を進める科目を「総合的な学習の時間」に、課題研究を支える科目を学校設定教科の「グローバル」に設置している。一方で既存教科の授業時間を確保・充実するため、主対象クラスでは 4 単位の増単を行った。

授業と課外活動の連携、その段階的設計

本校では、探究活動を柱として、各取り組みが 3 年間を通して一連の流れとなるよう設計している。具体的には、「総合的な学習の時間」と「グローバル」を探究活動の軸としながら、国内外での課外活動で体験的に学びを深め、その成果を校内外の研究発表会において発表し、フィードバックするという形である。各取り組みは、相互に補完するよう構成している。(図 1)

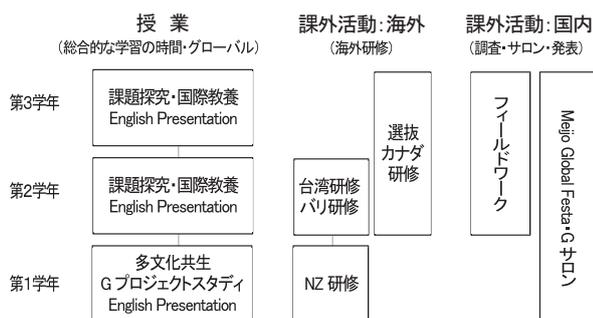


図 1 3年間の取り組みの流れと連携

(1) 授業：総合的な学習の時間・グローバル教科

「総合的な学習の時間」や「グローバル」は、相互に連動しながら専任教諭によるチームティーチングで担当する。さらに適宜「社会」や「英語」、外部とも連携して進めている。「総合的な学習の時間」及び「グローバル」の授業は、グローバル教科主任及び教育開発副部長、国際クラス担任団が授業開発の中核を担うが、担当する教員は 7 教科 26 名に渡っており、科目毎に担当者会議を開催して対応する。

この中でも中心的な授業となる「課題探究」は、第 2、3 学年合同で行い、ゼミ形式で行っている。

これらの科目を基盤として国内外の課外活動を行うとともに、国内外の課外活動での経験により、科目における学習の深化を図っている。

(2) 課外活動：海外（海外研修）

SGH 事業では 3 つの研修を実施している。

1 つ目は、1 年時に実施するニュージーランド研修で、エスニックダイバーシティや日系企業のマーケティング戦略、ソーシャルビジネス等についての講義を受ける。2 つ目は 2 年時に選択制で実施する台湾もしくはインドネシアバリ州を研修で、現地でグループでの調査活動・現地生徒との議論等を行う。3 つ目は、SGH 対象生徒から選抜のうえ行うカナダ研修である。

全ての研修は、事前に課題を設定して、大学教員からの指導等を含めて学習する。現地では設定した課題を元に学習を進め、事後はその成果を各自の研究にフィードバックする。これらの研修は短い期間ではあっても探究のエッセンスを体感できる機会となり、生徒の様々な学習に対する意欲を高めている。

(3) 課外活動：国内（調査・G サロン・発表等）

授業と海外での活動と連動して、国内でもフィールドワークや G サロン、Meijo Global Festa (以下、MGF)、研究発表会等を開催している。

フィールドワークは、第 2、3 学年ではゼミを基本単位として各自の研究課題の調査を行う。2017 年度は県内の様々な企業・団体の協力により 67 箇所を実施した。

「G サロン」は、月に 1 度、土曜日に開催する

ワークショップ型の学習機会である。大学教員、起業家、国際機関職員等、様々な講師を招聘し、全校生徒・保護者・近隣の生徒たちが自由参加で集って話し合う。

その他、本校生徒のみが参加する生徒研究発表会や、名城大学のキャンパスで中部圏の高等学校や外国人学校を招いて開催する MGF を開催している。

国内での課外活動は、研究課題を「海外の問題」で終わらせることなく、日本がどう関わるのか、どのように関わっている人がいるのか等を知り、世界の問題を日本に置き換えて検討し、グローバルとローカルを往還する視座を身に付ける機会となっている。また、これらの活動は社会との接点を持つきっかけともなっており、国内での課外活動をきっかけに活動団体を立ち上げたり、参加したりする生徒が増えてきている。

生徒の変容をどうつかむか

SGH 事業の取り組みの効果に関しては、生徒の変容を中心に検証している。

生徒の変容は、対象生徒全員にスーパーグローバルテスト（以下、SGT）を実施して測定している。

また、SGT を補完するものとして、「5S5M 等における向上実感」、「向上実感の要因」、「各因子における目標設定の変更状況と理由」、「次年度の活動意欲」等に関する各調査を実施し、「リフレクションシート」と「グローバルパスポート」での記載を使って、事業の評価とした。

SGT は、5S5M の 10 の因子とグローバルなキャリア設計に関する因子を元に設計した 46 項目からなるアンケートで、4 月と 1 月に実施している。2017 年度末の第 3 学年の結果を見ると、以下の結果が見られた。（図 2）。

- ① 1 月の各因子の平均は 4.3 ポイントである。前年の 1 月と比較すると全ての因子のポイントが上昇しており、「思考力 (+ 0.4)」、「ICT 活用能力 (+ 0.3)」、「発見・解決 (+ 0.5)」、「リーダーシップ (+ 0.5)」において有意差が認められた。(p<0.05)
- ② 入学時の 4 月から比較すると、平均して 0.8 ポイント上昇しており、全ての因子で有意差がみられた。特に「思考力 (+ 1.1)」、「ICT (+ 1.3)」、「発見・解決 (+ 1.0)」が大きく

上昇した。

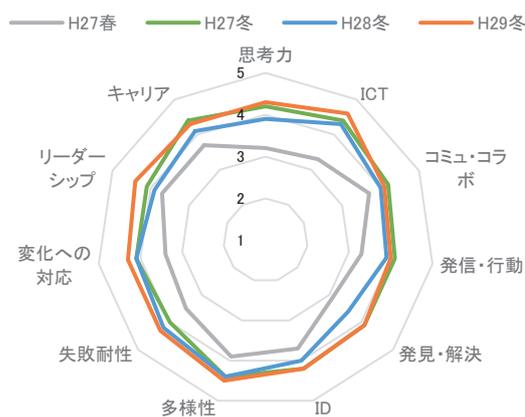


図 2 国際クラス第 3 学年 SGT 結果の変化

このような達成度と同様に、向上実感とその要因についても分析を進めている。向上実感を持っている生徒のうち、どの取り組みが向上実感に影響したかと問う調査では、以下のような結果が見られ（図 3）、探究型授業と海外研修の効果が大きいことがわかった。

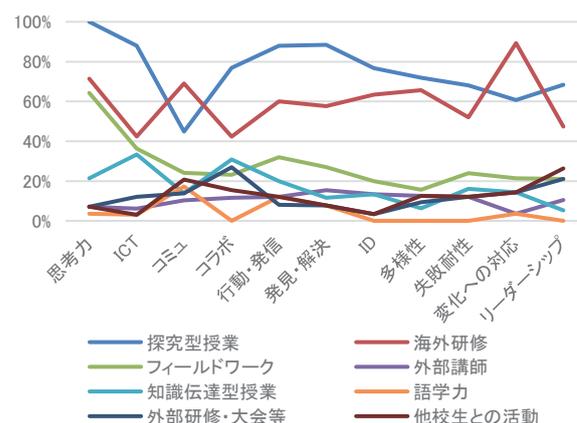


図 3 国際クラス第 3 学年 各因子の向上実感の要因

この調査は、8 つの選択肢を設定しているが、それぞれの選択肢は不可分の部分もある。しかし、それらが総じて生徒のスキルとマインドセットの向上につながっている様子が見受けられ、それぞれの取り組みに一定の効果があったと考える。

また、本校ではグローバルパスポート制度を導入している。グローバルパスポートとは、SGH 事業に関する各自の様々な取り組みの実績・成果を記録するポートフォリオである。記録する実績や成果は、付与されたマイル数によって換算され、蓄積する。

生徒のマインドセットやメタ認知を重視して事業設計するなかで、SGT やリフレクションシート、グローバルパスポート等、生徒自身が見える形での重層的な振り返りが必要だと考える。

GサロンとMGFを通じた学びの形

本校の特徴的なSGH事業には、GサロンとMGFがある。両事業とも、名城大学との連携と世代や学校の枠を越えた多様な人々による議論、生徒が運営や進行に参加することが特徴である。

特にMGFでは、名城大学文系全6学部との連携のもと中部圏の各校が集い、フォーラム部門とプレゼンテーション部門を開催している。大学の教授陣は、フォーラム部門では事前課題の設定と議論への助言をするとともに、プレゼンテーション部門では発表に対する講評を行う。

昨年度のMGFは、SGH指定校やブラジル人学校を含め、12校が参加し、参加生徒は延べ142名、聴講生徒を含めると250名以上の参加となり、年々拡大してきている。

【MGF2017の内容】

●フォーラム部門（ ）内は連携学部

- 分科会 A 「多文化共生の課題と展望」(法学部)
- 分科会 B 「国民国家とは何か」(経営学部)
- 分科会 C 「日本企業の海外展開からグローバル化を考える」(経済学部)
- 分科会 D 「インバウンドツーリズムと地域」(外国語学部)
- 分科会 E 「多文化共生と言語」(人間学部)
- 分科会 F 「グローバル時代の名古屋の魅力を考える」(都市情報学部)

●プレゼンテーション部門

- Aパート 参加各高校による探究活動発表
- Bパート フォーラム部門の成果発表

本校での課題研究活動の到達目標とは、探究活動で得た知識・技能・経験・マインドセット等を結び付け、あらゆる場面において応用できるようになることである。

Gサロン・MGFの活動を通して、生徒たちは探

究自体が即ち学問であることを知り、様々な人との共同作業を通して自分の知識や技能等を連関させ活用しようとする。

この効果をSGTで検証したところ、運営・進行を担った実行委員生徒と参加生徒、不参加生徒で次のような結果が見られた。

- ・実行委員生徒：「思考力 (+0.4)」、「コミュ・コラボ (+0.5)」、「リーダーシップ (+0.4)」に有意差があり ($p < 0.05$)
- ・参加生徒：「多様性 (-0.3)」に有意差あり。
- ・不参加生徒：有意差なし。

意欲の高い生徒が実行委員となりやすいという事実はあるものの、MGF以前でのSGT結果には他の生徒とそれほど差は見られない。数か月間にわたる準備期間と当日の活動が彼らの自信となった様子が見える。また、参加生徒のマイナスとなった因子については今後の変容を注視する必要があるが、「MGFを通して、自分の知識が少なく、閉鎖的になっていたと感じた」というリフレクションシートの記載から見て取れるように、MGFは生徒にとって「もまれる」経験であり、自分自身の状況を客観視する機会となっている。

これらの結果を踏まえ、今後もさらにGサロンやMGFを継続し、その深化・普及に努め、生徒の向上実感に結びつくよう工夫する。

また、他校への普及活動の一環として、本年度から「MGFを通じたこれからの探究型学習についての教員研究会」を開催する。



立命館宇治中学校・高等学校

社会貢献とイノベーションの志で 問題解決に挑む人材の育成

【構想の概要】

「宇治・京都・世界をつなぐグローバルアントレプレナーシップの研究」の統一テーマに基づき「世界の環境・社会問題を解決するソーシャル・ビジネス」「グローバル企業におけるCSR」「宇治・京都の文化を世界に発信するビジネス」の3テーマを英語で追求する課題研究科目「Global Leadership Studies」を研究開発し、従来の本校のカリキュラムの一層の強化に繋げる。

< IM コース3つのステップ>

IM コースでは①充実した留学、②イマージョン授業、③課題解決型学習の3つを柱としたカリキュラム構成になっている。特に③の課題解決型学習がSGHの研究対象であり、他の2本の柱の効果を高めることにも繋がる。



< Global Leadership Studies の流れ>



< IM コースのカリキュラム>

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
高1	保健	体育	国語総合		現代社会		数学I	数学A	生物基礎	地学基礎	芸術I	C英語I	英語表現I	家庭基礎	IM総合	GLS	HR																
高2	保健	体育	日本語I		世界史B	日本史A	数学総合A	化学基礎	芸術I	社会と情報	リーディング	ライティング	PDEnglish	TOK	IM総合	GLS	HR																
高3	体育	日本語II		世界史B	数学総合B	Natural Science	プレゼン	エッセイ	リーディング	ライティング	第二外国語	TOK	IM総合	GLS	HR																		

立命館宇治高等学校概要

IB（国際バカロレア）、IM、IG コースの3コースからなる本校は、帰国生、スポーツ推薦生徒、全国から入学する寮生、外国籍生徒など多様なバックグラウンドを持つ生徒が集い、約40人の外国人教員が教鞭をとる多様性に溢れる学校である。

各コースそれぞれ特徴がある中、多様化するグローバル社会で活躍し、確かな学力の上に異文化を理解できる柔軟な思考力をそなえた生徒の育成を目指している。また、立命館学園の附属校としての優位性を活かし、中高大が連携したプログラムが充実しており、社会に出た時を見据え、主体的にキャリア形成をするための授業を科目として展開している。また、探究型の学力形成を迫るため、今年度よりカリキュラムを改定しコア科目を設定し学習へ主体的、さらには発展的に取り組む生徒の育成を目指している。

IM コース概要

SGHの研究ターゲットであるこのコースでは日々成長を重ね、社会に貢献できる力を身につけた真の国際人の育成を目指し、3つの柱となる教育プログラムを展開している。①充実した留学：1学年約80人の生徒が高校1年時に、3か国1人1校の留学先に1年間の留学をする。②英語によるイマージョン教育：入学時から一部の授業を英語で行い、帰国後は留学中に身につけた英語力の維持と向上を目的として、イマージョン授業を実施している。③課題解決型学習：他教科と連携した探究科目として総合科目にGLS（グローバルリーダーシップスタディーズ）を開講している。

グローバルリーダースタディーズ

3年間の流れ

前項でも触れたように、SGHのターゲットコースであるIMコースは①充実した留学②イマージョン授業③課題解決型学習の3つの柱からなっている。SGH事業ではこの中の3本目の柱である③課題解決学習に焦点を当てて取り組んできた。この課題解決型学習に取り組むにあたり、グローバルリーダーシップスタディーズ（GLS）を学校設定科目として置いた。このGLSを3年間を通して学

ぶことで、IMコースが従来から行ってきた留学とイマージョン授業をさらに充実させたものになっている。

GLS第1ステージでは「Re-Discover yourself」をスローガンに自分を知るため、日本文化再発見講座を行っている。留学前に日本文化を学び、現地での文化交流を行う狙いになっている。

GLS第2ステージでは「Expand your horizons」をスローガンに社会を知るための活動を行っている。具体的には社会の第1戦で活躍する方々を招いてのグローバルリーダーシップ講座と香港研修旅行である。留学先で広げた視野をさらに身近なものにしていく。

GLS第3ステージではこれらの活動の総まとめとして、「Make a difference in the world and yourself」をスローガンにグローバル課題研究を行う。高校生が興味をもつ社会課題を選択し、自分たちができることを考え、実行していく取り組みである。社会課題は地元宇治もしくはSGH認定以降年間3回程度の交流を続けているラオスをフィールドに考えていく。

これらの課題解決型学習の学びを経て、生徒達は留学を充実したものにすると同時に留学で得た学びを生かすことに繋がっている。

GLS 第3ステージの年間計画

GLSのうち特に力を入れて取り組んでいるのは第3ステージである。以下に年間計画を示す。

2年時	9月～3月 マインド 醸成時期	グローバルリーダーシップ講座 香港研修旅行 起業家精神と社会貢献の マインド醸成
3年時	4月～6月 テーマ決定の 時期	社会課題の事例・現状の調査 淡路島へ地方創生FW マイプロジェクトシート作成 興味の近い生徒同士で グルーピング テーマごとにフィールド ワーク テーマの決定・解決策の提案
	5月～9月 PDCA サイクル 1巡目	中間発表 アクションプラン発表 アクション実施期間 (夏季休業中を活用) アクションの評価

10月～12月 PDCA サイクル 2巡目	アクション検討 2回目のアクション実施期間 2回目のアクション評価
1月～2月	SGH 研究発表会 最終論文提出

GLS 第3ステージ実践例

GLS 第3ステージでは実際に社会課題に対する解決策を提案し、実施することを目標としている。SGH 指定の5年間で継続して実施されてきたプロジェクトを2つ紹介する。

<ラオスコffeeプロジェクト>

ラオス農村部では安定した収入を得るためにそれぞれの村の特産品を作る運動が起こっている。ラオス南部ボラベン高原にある村では有機栽培で品質の高いcoffeeを栽培しており、これを地元宇治のcoffee店にて委託販売。ラオスコffeeの魅力伝えると同時に利益を全額教育支援金として寄付している。

<Wakka プロジェクト>

「教育でこそ世界が変わる」をモットーに、開発途上国で就学が困難な現地生徒に対する就学支援のために行うチャリティーイベントである。IM コースがカナダ・オーストラリア・ニュージーランドに持つ広範囲なネットワークを活かし、留学中の生徒が世界で同じ目標を持ったチャリティーイベントを実施し、共感の輪を広げる。3年生が企画を担当し、留学中の2年生が各国でチャリティーを実施する。また地元宇治のお祭りでもベークセールを実施し、昨年度は日本円にして23万円の寄付を集め、全額を教育支援金として寄付した。

以上の2つの取り組み以外にも、宇治市での観光客を対象とした足湯。日本のファッションと海外のファッションの融合を発信するファッションショー。宇治の夜空にランタンを飛ばす地域のお祭りであるスカイランタン祭りなどを実施してきた。

GLS 第3ステージの成果

GLS 第3ステージの効果を測定するために、ルーブリック評価を行った。このルーブリック評価は「自ら課題を見つけて、解決に向けて動いていく力」を評価するように設定されており、今後の社会

人に必須の能力の測定ができると考えられている。今回、GLS 第3ステージにおいて、生徒達が自らプロジェクトを計画し、取り組む中でどのような力が身に付いたのかを測定した。

それぞれの評価項目について、設問と5段階の評価項目をつけ、自己評価形式で実施し、平均点を算出した。アンケートはGLS 第3ステージ導入フェーズが完了した2年次1月をPreテストとして、すべてのプログラムを終了した3年次1月をPostテストとして実施した。結果を最終頁にレーダーチャートで示す。

2年次と3年次の変化率を算出し、変化率の大きかったものから順に10項目を抽出したところ以下のようになった。()内は増加率。

- | | |
|-----|--------------------|
| 1位 | 文書作成力 (140%) |
| 2位 | 情報収集の仮説構築 (128%) |
| 3位 | 自ら学ぶスタンス (126%) |
| 4位 | 論理的思考力・課題分析 (124%) |
| 6位 | 知識の応用・創造的思考 (122%) |
| 8位 | 自らの役割の達成 (121%) |
| 9位 | 情報収集の実施 (120%) |
| 10位 | 仮説の構築 (119%) |

これらの中で、「自ら学ぶスタンス」「仮説の構築」「論理的思考」「知識の応用」「情報収集の実施」などの力は全て、「なぜ？」を問い、自ら課題を発見し、0から1を生み出すために必要なマインド・スキルであり、GLS 第3ステージを通して生徒達に身につけてもらいたいと期待していたものである。

SGH 取り組みの成果のまとめ

SGHの取り組みは従来の留学+イマージョン授業という2本柱に3本目の柱である課題解決型学習を加えることで、英語力の育成に重点をおいたカリキュラムから真の国際人の育成を目的としたカリキュラムへの変容することができたと考える。課題解決型学習の導入は生徒に広い視野・社会貢献のマインド・新しいものを生み出すスキルを与えた。

SGH終了後はいくつかのプログラムは金銭的な問題から次年度以降の見直しが必要だが、課題解決型学習の枠組みとノウハウは残る。生徒だけでなく、教員のスキルの向上が見られた。

SGH 校に限らず、同様の取り組みを行なっている学校は日本各地に存在している。これらの学校が繋がり、高校生同士が会うことで教育に新しい風が巻き起こると考える。高校生 SR サミット FOCUS のような取り組みを通して、SGH 終了後も本校だけでなく、日本全体の教育の向上に努めたい。

成果普及の取り組み

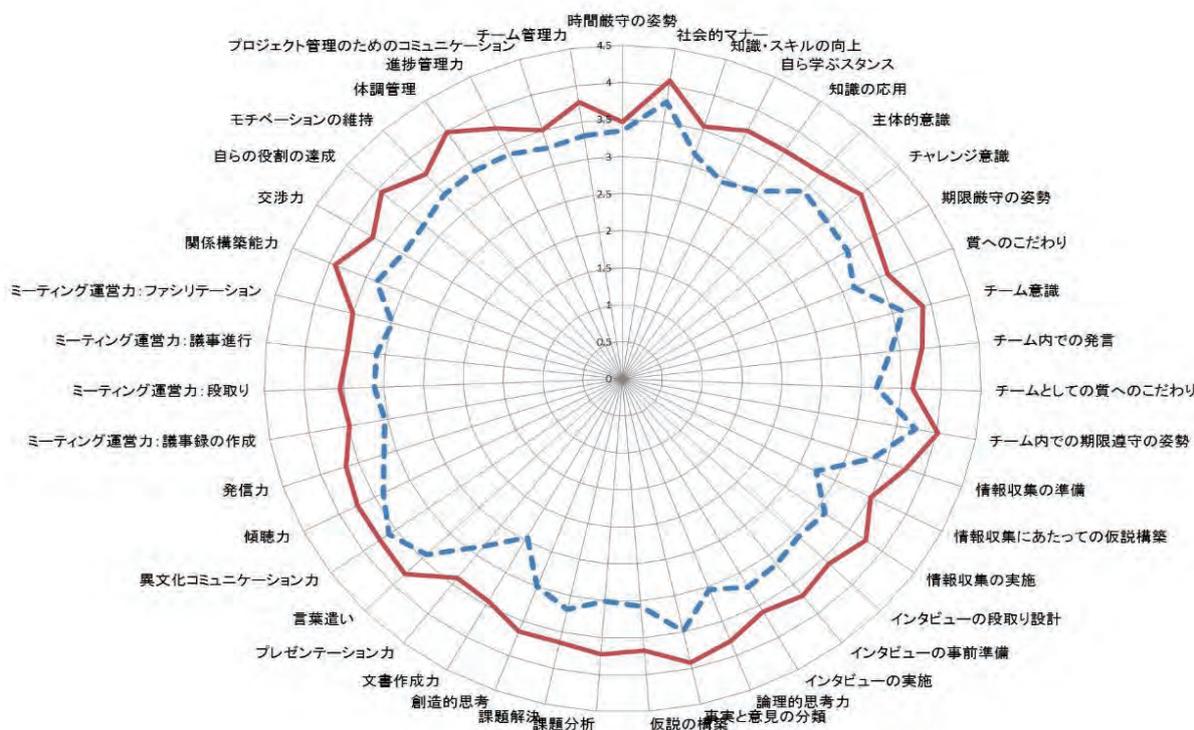
SGH の後継企画として『高校生 SR サミット～ FOCUS ～』（Forum on Creating Unified Societies）を立命館アジア太平洋大学（APU）にて今夏開催する。大学におけるUSR（University Social Responsibility）

のように、高校生も社会的責任を意識するために高校生 SR（High School Social Responsibility）

を普及させる取り組みにしたい。この取り組みでは、参加校を SGH 校等に限定せず、国際貢献や地域貢献など多種多様な取り組み実践をする生徒が、互いの意見を交換し、そこから持続可能なプロジェクトへ発展させることを目指す。生徒が主体となり互いの実践を共有し学び高め合いながら社会の一員としてどのように社会貢献できるか考える機会としたい。APU の国際学生がファシリテーターとして加わり、議論を活発化させる。また、企業が各プロジェクトを多角的に評価する立場として参加することで産学協同プロジェクトと位置付ける。

この高校生 SR サミット FOCUS の開催を通して、SGH 終了後も SGH のみならず日本の学校が繋がり、高校生同士が会うことで、高校生 SR（High School Social Responsibility）を根付かせ、教育現場に新しい風を興したい。

第3ステージの効果（2年次・3年次の比較）
 <生徒の自己評価>
 — Pre(2年次) — Post(3年次)

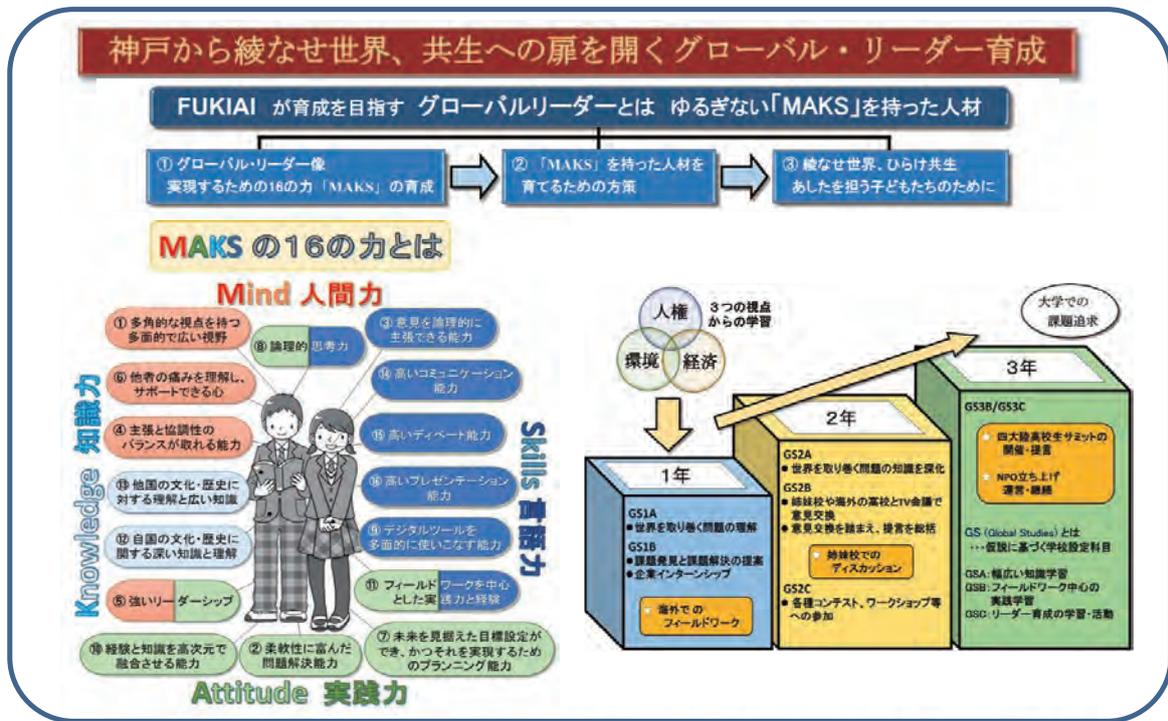


神戸市立葺合高等学校

神戸から綾なせ世界、共生への扉を開く グローバル・リーダー育成

【構想の概要】

国際科の生徒を対象に、「子供」をキーワードとし、「世界の共生」のために人権・環境・経済の視点から学習し、活動を通してグローバル・リーダーの育成を目指す。1年時で世界を取り巻く諸問題を学習し、海外フィールドワークを行う。2年時では「世界の共生のために、私たちが子供にできること」の提言をまとめ、スウェーデン、オーストラリア、アメリカ、台湾等の各姉妹校を訪問し、現地で協議し、共同での活動を計画し、調査研究を開始する。3年時ではこれらの取組に基づき、海外姉妹校生徒を招き、「KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」を開催して実践報告と討議を行い、共同提言を発信する。5年間の事業終了後も NPO 活動を含め、継続した取組ができる体制を目指す。



○ 国際科 教育課程展開図

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33				
1年	国語総合				現代社会		数学Ⅰ		数学A		生物基礎		体育		保健	芸術Ⅰ	家庭基礎	情報の科学								総合英語		英文化理解		GSⅠA		GSⅠB	HR				
2年	現代文B		古典B			世界史B		科学と人間生活		体育		保健	総合英語	GSⅡB		英語理解		英語表現		時事英語		選択1		選択2		選択3		選択4		選択5		選択6		選択7	GSⅡA	GSⅡB	HR
3年	現代文B		古典B			世界史B		日本史A		世界史A		体育		総合英語		英語表現		時事英語		ER		選択4		選択5		選択6		選択7		選択8		選択9		GSⅢA	GSⅢB	HR	

※ GS: グローバル・スタディーズ ※ ER: エキステンシブ・ラーニング

2年選択科目		
選択1	選択2	選択3
COM A	GSⅡC	中国語Ⅰ
	日本文化紹介	スペイン語Ⅰ
数学Ⅱ	化学基礎	国語表現
		数学B

3年選択科目				
選択4	選択5	選択6	選択7	選択8
古典研究	アジア地域研究	COM B	現代文探求	GSⅢC
	中国語Ⅱ			
数学Ⅰ・A探求	スペイン語Ⅱ	生物探求	倫理政経	化学探求
	数学Ⅱ・B探求			

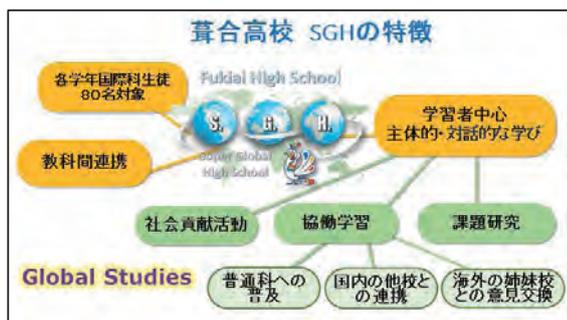
本校 SGH の特徴

1 目指すグローバル・リーダー像

本校が SGH の取り組みを通して育成を目指すグローバル・リーダー像を「ゆるぎない MAKS (マックス) を持った人」とし、MAKS を MIND 「人間力」、ATTITUDE 「実践力」、KNOWLEDGE 「知識力」、SKILL 「言語力」と定めた。MAKS をさらに 16 に分類し、グローバル・リーダとして身につけるべき力を示した。

2 課題研究

課題研究に取り組むにあたり、本校では「綾なせ世界、ひらけ共生、あしたを担う子供たちのために」をスローガンに掲げ、キーワードを『子供』とし、子供達が夢を持って平和に暮らせる世界にするために私たちは何をすべきかについて、『人権』『環境』『経済』の 3 つの視点から考察することにした。



教科「グローバルスタディーズ」

SGH の取組の核となる教科として学校設定教科「グローバルスタディーズ」(以下 GS) を設け、人文科学・社会科学分野の先進的な教育課程の開発、並びに実践を行うことを意図し、「課題研究」「国際協働学習」「社会貢献活動」の 3 つの柱を立て、総合的な力の育成を目指す。

1 科目構成

GS は国際科生徒が 3 年間を通じて学ぶ教科であり、その特徴から A・B・C の 3 つの分野に分けられている。知識型の GSA、ワークショップ・研究・インターンシップ・フィールドワークからなる実践型の GSB、ディベート・模擬国連参加などで学びを言語化し表現力をつけ、リーダーシップの素地を養うリーダー育成型の GSC から成り立っている。

各学年で GSA、GSB、GSC の各科目が連携することで、生徒たちは効果的に知識や技能を身につけることができる。

1 学年	GS I A (3 単位)、GS I B (1 単位)
2 学年	GS II A (1 単位)、GS II B (2 単位) GS II A (選択: 2 単位)
3 学年	GS III B (1 単位)、GS III C (選択: 2 単位)

2 各科目の特徴

(1) 1 年次

① GS I A

教育課程の特例措置として、「現代社会」より一単位を拠出し 3 単位で設定。地歴公民科、国語科、英語科教員が担当し「世界の現状とは」をテーマに各教科の特性を生かした授業を展開している。

地歴公民分野 (GS I A - S) では世界の様々な地域、国々の現状を多角的な視点で学習する。国語分野 (GS I A - J) では論文を読む中で課題発見の方法や、研究・調査の方法などについて学ぶ。英語分野 (GS I A - E) では地歴公民分野と連携しながら英語で学び、アウトプット活動に繋げていく。2 学期後半からは国語分野と連携して 4 人グループで研究テーマを決定しリサーチを進める。

② GS I B (総合的な学習の時間)

リレー講義として、産・官・学より講師を招き、講義・ワークショップ等を通して、様々な分野における知識を深め、多角的な視点から物事を分析する力を養う。また学年末に実施するフィリピンフィールドワークに向け Ateneo de Manila 大学より講師を招聘し、事前指導を実施する。

③ コンピュータリテラシー

教育課程の特例措置として、「情報の科学」より一単位を拠出し設定。GS におけるアウトプット活動を支える科目として、コンピュータの操作、インターネットによる情報収集の方法、文書作成法、プレゼンテーションソフトの活用法などについて学習する。

(2) 2 年次

① GS II A (総合的な学習の時間)

フィリピンフィールドワーク報告会を含め、講義、専門家に課題研究への助言をもらうワークショップ、ディスカッション等を通して学習を深める。

② GS II B (課題研究)

課題研究の中心科目としてリサーチペーパーの作成に取り組む。授業は英語で行う。

リサーチペーパーの書き方に始まり、SDGs 17の目標より絞り込んだ5つの分野から、各自が関心のあるテーマを選び、課題研究に取り組み、論文作成を行う。

国際協働学習として、次年度実施の「四大陸高校生サミット」に向けた参加各国へのSGH提言ツアーや台湾修学旅行時のプレゼンテーション・ディスカッション準備にも取り組む。

③ GS II C (国際科選択科目)

地歴公民科教員、英語科教員、ALTによる英・日2カ国語のチーム・ティーチング。

地歴公民科教員主導の講義により知識を深め視野を広げた上で、英語科教員、ALT主導のプレゼンテーション・エッセイライティング・ディベート活動へとつないでいく。

④ 日本文化紹介 (国際科選択科目)

国語科・地歴公民科・芸術科(美術)・英語科・情報科教員が担当する。日本文化、日本の美術・建築、神戸紹介等の学習やリサーチを行った後、プレゼンテーションやビデオの作成を行う。

(3) 3年次

① GS III B (総合的な学習の時間)

「四大陸高校生サミット」に向けたプレゼンテーションの準備、企画・運営にかかる取組、及び事後の振り返りと冊子の作成作業を行う。さらに、共同宣言の実現に向けて活動する。

② GS III C (国際科選択科目)

「四大陸高校生サミット」に向けたプレゼンテーションの準備、企画・運営にかかる取組、及び事後の振り返りと冊子・ビデオの作成作業、及び姉妹校生徒・教員来校時の日本文化紹介等を行う。

カリキュラム上の体験的活動

GSを中心とした教科科目と関連付け、各種体験的な取組をカリキュラム上に配置している。

1 大学・企業・国際機関等との連携授業

外部連携授業を年間計画上に配置し実施。

「グローバル社会と子どもたち」

「人権の視点から国際問題を考える」

「社会と共生する企業」

「課題研究 上達編 スタディーツアーとは」

“Young People in the Philippines”

「国際保健最前線」

他

(平成29年度実績：23回)

2 課題研究コンテスト・発表会

校内発表会に加え、有志生徒による校外の課題研究コンテスト・発表会等に参加。

「関西学院大学 リサーチフェア」

「ひょうご・こう

べワールド・ミー

ツ for youth ×

国際問題を考える

日」

「ひょうご・こうべ保健・医療ハイスクールサミット」

「防災世界こども会議」

「関西学院大学明石塾」

「全国SGH甲子園」

「京都大学 日本と東南アジアに共通の課題を考える高大連携国際ワークショップ」

「大阪大学国際公共政策コンファレンス」

他

(平成29年度実績：34回)

3 英語・外国語関係 コンテスト・発表会

各種・各団体主催スピーチコンテスト、ディベートコンテスト、エッセイコンテスト等に参加。

(平成29年度実績：26回)

4 海外フィールドワーク・提言ツアー等

フィリピン フィールドワーク (1年次)

オーストラリア提言ツアー (2年次)

スウェーデン研修ツアー (2年次)

アメリカ提言ツアー (2年次)

台湾修学旅行 (2年次)

※台湾、スウェーデン、オーストラリア、アメリカ生徒・教員来校

5 その他 (校内外の行事に有志生徒が参加)

JICA インターンシップ

ユニセフ協会 国際理解講座

日本大学英語模擬国連

他





四大陸高校生サミット

1 取組概要

本校の考えるグローバル人材育成に必要なMAKS (16の力) を育成するための取組の3つの柱は「課題研究」「国際協働学習」「社会貢献活動」である。その中心となりSGHにおける生徒3年間の取組の集大成となるのが、5つの海外姉妹校からの招聘生徒が集う「KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」であり、指定3年目から最終年度まで3回実施している。

サミットでは生徒が1年生後半より取り組む課題研究についてポスターやパワーポイントを用いて発表し、海外生徒とも意見交換、議論を重ね、互いに協力してローカルな視点とグローバルな視点を取り入れて共同宣言にまとめる。サミット後は、それぞれの国や地域で宣言内容を具体化していくことを目指している。

2 経費

実施にかかる経費については、海外生徒招聘費用はSGH委託費からの支出が認められていないため、管理機関である神戸市教育委員会事務局で政策予算として計上していただき、実施が実現した。

3 プログラム概要 (平成30年度予定)

(1) 7月12日 (木)

- 開会行事、各校紹介、歓迎パフォーマンス
- 基調講演
- 分野別プレゼンテーション セッション
- 分野別会議、分野別代表者会議

(2) 7月13日 (金)

- 代表者会議 (Final Presentation 作成、共同

宣言準備)

ポスタープレゼンテーション セッション
四大陸高校生サミット 全体会
Final Presentation・共同宣言発表



成果と課題

(1) 成果

①生徒アンケートより (抜粋)

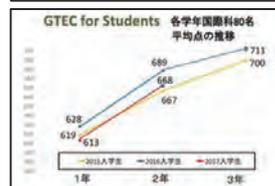
「課題研究が大学の進路決定に影響を与えた生徒」・・・92%
「将来の留学希望、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒」・・・77% ⇨ 86% ⇨ 83% ⇨ 90% 等

②教員アンケートより (記述より抜粋)

- ・視野の広さ、思考の深さが以前と比べ伸張した
- ・自ら課題を発見し解決策を見出そうとする主体性に伸張が見られる 等

③各種コンテスト、検定等

平成29年度		
第11回	全国高等学校英語スピーチコンテスト	優勝
第66回	チャーチル杯争奪全日本高等学校英語弁論大会 西日本予選	準優勝
第38回	神戸市長杯英語と日本語によるスピーチコンテスト	金賞
第25回	日米協会主催高校生英語暗誦大会	準優勝
第2回	高校生パラメンタリーディベート世界交流大会	準優勝
第11回	兵庫県高等学校ディベートコンテスト	優勝
(大会6連覇達成!)		



実用英語検定取得状況 2018年3月末				
SGH対象国際科生徒 各学年90名				
	1級	準1級	2級	
1年 国際科	1	12	67	
2年 国際科	5	39	72	
3年 国際科	5	61	75	
合計	11	112	214	

(2) 課題

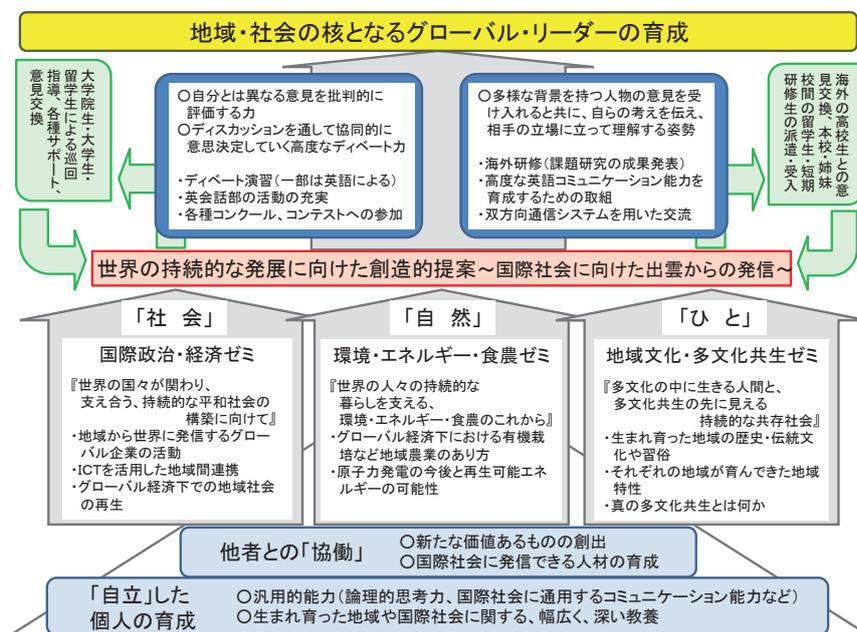
- ・課題研究の校内 (普通科) への普及と作業段階に応じた必要知識・スキルの習得を目的とした教授法や教材の開発と教員間での共有
- ・課題研究の他の市立高校・中学校等への普及
- ・SGH 事業で培った課題研究の理論やスキルの事業指定終了後の持続可能な形での取組継続

島根県立出雲高等学校

「自立」と「協働」により、地域・社会の核となるグローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

『世界の持続的な発展に向けた創造的提案～国際社会に向けた出雲からの発信～』をテーマに、「社会」「自然」「ひと」の三つの切り口からアプローチする。質の高い英語教育・教養教育による「自立」した個人の能力育成と、海外の高校生との意見交換等「協働」的な学習により、「地域・社会の核となるグローバル・リーダー」を育成する。



教育課程(平成29年度1～3年生用)(SGH対象生徒のみ)

科・学科・類型	科目	授業単位数	普通科			備考
			1年	2年	3年	
国語	各科目		5	6	6～8	17～19
地理歴史	各科目			5	4～8	9～13
公民	各科目		2		0～4	2～6
数学	各科目		6	6	0～5	12～17
理科	各科目		4	2	4	10
保健体育	体育	7～8	3	2	2	7
	保健	2	1	1		2
芸術	各科目I	2	2			2
外国語	各科目		6	7	6～9	19～22
家庭	家庭基礎	2	2			2
情報	社会と情報	2		(2)1	(2)1	学校設定科目「SG探究」で1単位を代替
共通教科・科目単位数計			31	30	28～31	87～92
音楽/美術	各科目				0～5	0～5
SS	SS基礎	準必修	1			1
SG	SG探究	準必修		2	1	3
専門教科・科目単位数計			1	2	1～6	4～9
単位数計			32	32	32	96
総合的な学習の時間	3～6		(1)	(1)	(1)	(3)
総合的な学習の時間	3		1	1	1	3
合計			33	33	33	99

SGH・SSH対象生徒の区分け

	理数科	普通科		合計
		理系	文系	
3年	1 (39名)	3 (136名)	4 (142名)	8 (317名)
2年	1 (40名)	4 (143名)	3 (132名)	8 (315名)
1年	1 (37名)	7 (268名)		8 (305名)

SSH対象生徒 (H25年度入学生から) SGH対象生徒 (H26年度入学生から)

地域・社会のリーダーとして貢献できるグローバル人材の育成を目指して

本校では平成26年度から表題の構想を掲げて研究に取り組んできた。構想中に挙げる「リーダー」、「人材」を本校では次のように定義している。

- ・「グローバル人材」－急速に発展するグローバル化社会をたくましく、しなやかに生き抜く人材。
- ・「地域・社会のリーダー」－地元地域が抱えている課題（人口減少・過疎化への対応、外国人増加に伴う多文化共生社会の構築、など）の解決を、国際的な視点で考えることのできる人材

このような人材を育成するため、本校ではこれまでの「知識習得型」に極端に偏る学びから脱却し、新たな出雲高校の「学びのスタイル」を確立すべく、研究を進めてきた。この新たな「学びのスタイル」を以下のように定めている。

①協働的な学習

- ・教えあい、学びあいによる「新たな価値あるもの」の創造
- ・地域、国際社会への発信

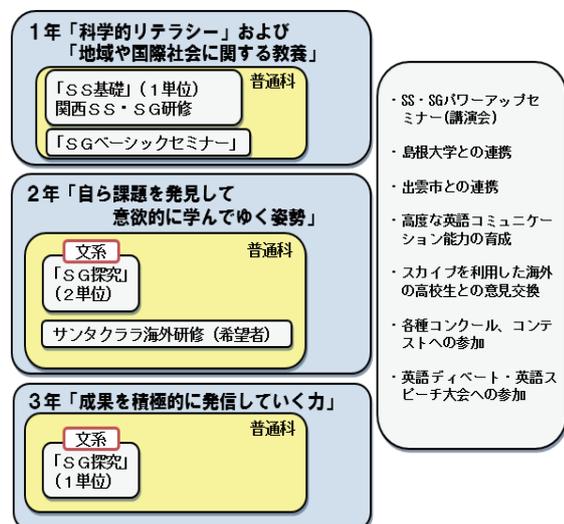
②客観的根拠に基づく思考

- ・論理的に考える (Logical Thinking)
- ・多角的・多面的に考える (Critical Thinking)
- ・事実に基づいて考える (Data-based Thinking)

このような「学びのスタイル」の確立を目指し、本校では事項に挙げる形で3年間の取組を進めている。

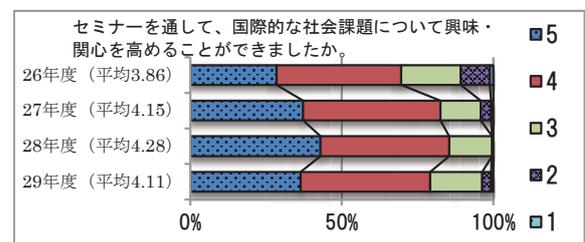
出雲高校 SGH / 高校3年間の取組

本校SGH3年間の図表化したのが以下である。



本校はSGHに加えてSSHの指定も受けている。普通科と理数科を設置しているが、そのうち普通科でSGHの取組を行っている。1年次は普通科7クラス全員を、2～3年次は普通科文系(3～4クラス)を対象としている。

1年次におけるSGHの中心的な取組としては、教育課程上の特例により、科目「現代社会」の授業時数の一部を減じて、「SGベーシックセミナー」を行っていることである。このセミナーでは、「国際的な社会課題についての関心を高め、主体的・積極的に学習する態度を養う」こと、「生まれ育った地域や国際社会に関する、幅広く、深い知識を身に付けさせる」こと、「第2学年で取り組む課題研究に向けた動機づけを行うとともに、研究テーマ設定のための基礎となる知識の定着を図る」ことを目的とし、大学教員や地域人材を講師として講義やフィールドワークを行っている。以下に示すとおり、生徒からの評価も高い。限られた時間ではあるが、このようなセミナーを1年次に行うことは探究的な学習を進める上で非常に有用であると考えている。



※生徒アンケートより抜粋。5段階評価で、5が最高

また、1年次には全員がSSHプログラムを受講している。このプログラムで科学的素養を身に付けることは、2年次以降のSGHプログラムを進めるうえでも有効である。

2年次からは普通科文系を対象としてSGHプログラムを行う。2年次には年間2単位で課題研究を進め、毎年2月には成果発表会を行っている。

3年次には2年次に行った研究をもとに、自らの考えを発信する。7月末には約半数の生徒が出雲市役所を訪れ、市長や市の職員へ政策提言を行う。残りの半数は島根大学を訪問し、外国人教員や留学生に対して英語によるプレゼンテーションを行う。3年次にこのようなゴールを設定することで、2年次の研究にも自分のこととして取り組むことができる。

これまでの主な成果

これまでの4年間を通じての主な成果として、以下のようなものが挙げられる。

- ①出雲高校の「学びのスタイル」（協働的な学習、客観的根拠に基づく思考）（多面的指導体制）の確立
- ②生まれ育った地域や国際社会が抱える諸課題についての興味・関心の醸成
- ③将来のグローバル・リーダーとして、地元や国際社会のために貢献すべきだという使命感や留学等を含めた国際社会での活躍を求める意識の醸成
- ④情報モラルを基盤とした情報収集・活用能力育成
- ⑤英語コミュニケーション能力向上への意識の醸成と4技能バランスのとれた能力の育成
- ⑥高大連携の推進
- ⑦グローバル人材育成に関する、保護者をはじめとした地域全体の理解の醸成
- ⑧公的機関から表彰された生徒数等の増加
- ⑨プレゼンテーション能力の育成

これらについては、各年度末に本校から各指定校等へ配布している報告書に詳しく記載しているので、そちらをご参照いただきたい。

また、自ら主体的に研究に取り組み、社会へ還元しようという意識も高まりつつある。実験やフィールドワーク、アンケートやインタビュー等を行うことで、より客観的なデータを集めて研究を進めようとする班が増えてきた。また、学校で準備した発表の機会だけでなく、地域のNPOと協力してイベントに参加するなど、行動を起こす者も増えてきた。これらの主体的な行動はまだ限定的であるが、より多くの生徒の行動へとつながるよう、研究を進めたい。



※地元NPOと協力して。平成29年6月13日付島根日日新聞

新たな取組

最後に、ここ最近の新たな取組について記載する。

①課題研究と他教科との結びつき

課題研究を意識した既存教科の展開が進みつつある。例えば課題研究と教科「家庭」におけるホームプロジェクトの連携、学校設定科目での「論理性の育成」と教科「国語」の連携などである。また、学校設定科目内で日本語による「ディベート演習」を行っているが、教科「外国語」でもこれまで英語ディベート指導を行ってきた。「外国語」における英語ディベートで扱うテーマはこれまであまり客観性や根拠を重視していなかったが、日本語「ディベート演習」の取組も参考にし、これまで以上に調べた資料、根拠に基づく、論理的な展開を重視した内容へと発展してきた。

②教科のSG化

先に述べたように、課題研究において出雲高校の「学びのスタイル」が確立された。各教科でもこの実践を目指す取組を進めてきたが、平成29年度に新たに全教室にプロジェクタを設置し、ICT機器を活用しながら一層教科のSG化を進めようとしている。

平成30年3月にとったアンケートでは、約64%の教員がICT機器を活用した、と回答した。国語、外国語に限れば、前者で80%、後方で91%の教員が活用していた。ICT機器の活用をすることによって、直接的に機器を活用して「協働的な学習」や「多面的な評価」が進むだけでなく、事項の説明等にかかる時間を短縮させ、その分生徒の活動時間を増やすことができる、といった効果もある。

紙面の都合によりここまでとするが、今後も新たな取組を進め、他の学校等へも還元したい。



※「コミュニケーション英語Ⅱ」での英語による発表の様子

広島女学院中学高等学校

成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による 高大連携型グローバル人材育成

【構想の概要】

教員集団が成長目標を共有すること、大学と連携して生徒が国内外の他者と出会う場を提供することで生徒が成長する。この2つの軸を組み込んだ平和構築をテーマに課題研究を行い、グローバル人材に不可欠な3つの力＝平和観・対話力・リーダーシップを育成する。これを可能にするため、教員の意識を変え組織を改編する。



課題研究の教育課程(総合的な学習の時間 1単位)						
学年	中1	中2	中3	高1	高2	高3
研究内容	広島原爆被害 : グループでリサーチしてポスターセッションを行う。市内のモニュメントをマッピングして冊子を作成、広島市に提言	多様な原爆観 : アメリカの世論変化を分析し、原爆をめぐる議論の変化を読み取る。分析結果をもとに留学生とディスカッション。	核兵器を廃絶すべきか : 核兵器廃絶条約を締結すべきかどうか、模擬国連形式で交渉ゲームを行い、体験・考察を小論文にまとめる。	平和共創プロジェクト : ケーススタディとしてカンボジアをリサーチした後、社会課題について自由にテーマを決めプレゼンテーション	沖縄ケーススタディ : 国内の社会課題として沖縄を取り上げ、論点を整理してフィールドワーク実施。現地高校生とディスカッション	核兵器を廃絶すべきか : 中3より複雑な状況を設定し核軍縮交渉ゲームを行う。現実の状況をリサーチした後、小論文作成

教科間の連携と高大連携

事例	連携内容
中3	<p>課題研究：核軍縮交渉ゲームを体験したあと、核軍縮をめぐる理想と現実について小論文を作成する。</p> <p>国語：文献の探し方、引用の仕方、論理的な文章の組み立て方など、小論文作成に必要な作法を教授。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高大連携：作成した小論文は、広島大学川野教授に読んでいただき、表彰と講評を行っていただく。 <p>英語：小論文に英語のサマリーをつける。</p> <p>公民：核軍縮交渉ゲームのルール、状況説明、核軍縮のオプションなどを国際政治の分野と関連付けて教授。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高大連携：交渉ゲームの状況設定は、広島市立大学広島平和研究所の水本教授に監修していただく。
高1	<p>課題研究：個人（チーム）で国内外の社会課題をリサーチし、プレゼンテーションを行う。</p> <p>現代社会：貿易ゲーム、ソーシャルビジネスプラン作成など、年間を通じた体験型授業で社会課題解決策を考察。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高大連携：ビジネスプラン作成にあたり、県立広島大学から助言をいただく。第一線で活動している方をゲストに招き講演会を開くことも多い。
高3	<p>課題研究：核軍縮交渉ゲームを体験した後、核軍縮をめぐる歴史と現状をリサーチし、小論文を作成する。</p> <p>現代文：小論文の書き方について、改めて作法を教授。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高大連携：作成した小論文は、広島市立大学広島平和研究所の水本教授に読んでいただき、表彰と講評を行っていただく。 <p>英語：小論文に英語のサマリーをつける。</p>

いくつかの教科では、それぞれの学年の課題研究と連動するかたちで横断的な授業を展開している。その授業の中に、助言、監修、生徒成果物の審査というかたちで大学の専門家と協力している。

このような取り組みは、生徒の思考・知識を有機的につなげるものであり、深い学びにつながる。しかし、課題も多い。まず、このような授業は担当者の個性によるところが大きく、組織的に教科横断的

に課題研究と連動した授業が始まったわけではない。有志で開始した取り組みが前例として蓄積され、徐々に定着しつつあるという段階である。連携教科が偏っており、数学・理科などのかかわりが薄いのも実情である。

高大「連携」を「接続」に発展させることも大きな課題である。SGH課題研究が始まったことで、大学の先生・学生と協力し合って学び合う機会が大幅に増加した。SGH指定を受けたことで大学からの注目度も高まり、本校に大学生を派遣したいという依頼も増えた。しかし、それらの多くが単発の授業や講演、小論文審査、ある単元の監修という「連携」であり、年間を通じて同じ生徒・学生・教員が継続的・定期的に学び合うプログラムは少ない。

有志活動、選抜授業と高大接続

「接続」と言えるほど濃密に高校・大学がつながっている成功事例は「ヒロシマ。アーカイブ」作成と選抜授業「Global Issues」である。

本校には有志の課外活動として「ヒロシマ・アーカイブ」を作成するチームがある。これは、被爆証言動画や写真をGoogle Earth上の現在・被爆時の広島の地図にマッピングしたアプリケーションである。制作は、渡邊英徳東京大学大学院教授（首都大学東京客員教授）・大学院生と本校生徒が共同で行っており、年間を通じて何度も直接ミーティングを重ねている。生徒たちは被爆者と信頼関係を築きながら証言を丁寧に記録、編集する。定期的に本校を訪れる渡邊教授らとともにPCを操作して証言をマッピングしていく。集めた写真はAIによる自動色付けを活用してカラー化し、より実相に近いかたちで記憶を継承していく。本校からも毎年東京研修



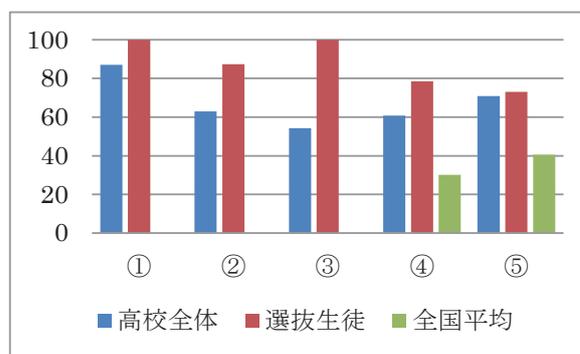
（研究室でプロジェクトに取り組む生徒の様子）

を実施しており、渡邊教授の研究室で最新の機器を操作しながら学生たちと共同作業を行っている。このチームに属している生徒は、活動を通じて非常に高い意識を持つようになり、グローバルな進路を選択する者や大学でも高校の課題研究の延長線上で専攻分野を選ぶ生徒が多い。

もうひとつの高大接続は「Global Issues」である。これは、高1～3までに開設している希望者選抜授業（20名前後 1単位）で、海外の大学で学んでいるような空間をめざしてデザインした。授業は、広島市立大学で核軍縮が専門のジェイコブズ教授が年間を通じて展開する。もちろんオールイングリッシュであり、エッセイ課題、文献読解、プレゼンテーションなども課される。授業以外にも、放課後は英語での言語活動やTOEFL対策授業に臨む。ジェイコブズ教授が毎週生徒たちを指導して下さることで、生徒の現状に合った授業展開が可能であり、徐々にレベルを引き上げて下さっている。年度末には英語で核軍縮交渉ゲームを行う合宿もある。このような濃密な大学レベルの学びを通じて、生徒たちの英語力はもちろん、自分から積極的に発言し議論を戦わせるなどマインドが育っている面も非常に大きい。これが、自己研鑽活動などへの参加率や投票率の高さなど、現実の行動変化につながっている。



(ジェイコブズ教授による授業)



H29年度の数値比較

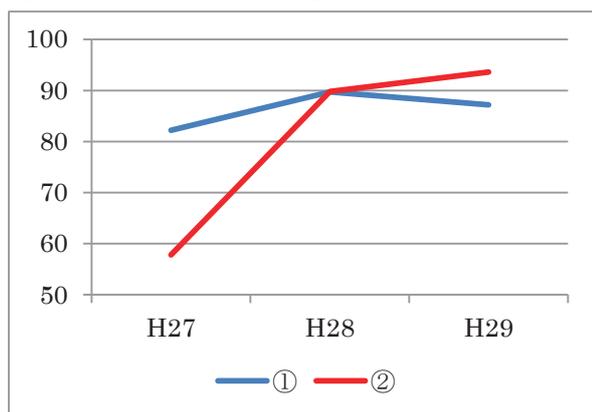
- ①以前より国際問題や多文化共生に興味をもつようになった(%)
- ②将来留学したり仕事で国際的な場で活躍したいと思うようになった(%)
- ③自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に参加した(%)
- ④私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない(% H26内閣府の調査と比較)
- ⑤2017年衆院選の投票率(% 10代の全国平均と比較)

運営体制と教員の変化

新しいカリキュラムを作成し教育を実践するためには、教員集団の意識改革が欠かせない。従来本校では、平和・国際・人権の各校務分掌が独立していた。生徒を成長させたいと願いながらも、いつ、誰が、何を、何のためにしているのか共有し、教員の力を一体化させて発揮するシステムが存在しなかった。教育の刷新にともない、特色教育の開発・実施を一体的に行う新組織、グローバル教育推進部（以下GEC）を編成した。学校全体で各学年の成長目標・課題研究内容・授業手法を共有することができるようになった。GECは各学年に1～2名配置され、課題研究授業の教案を作成する。それ以外に、国内外研修の事前事後指導・引率を行う係、公文書を作成する係、留学支援係など、総勢約30名の教員で構成されている。課題研究は、中1から高3まで総合的な学習の時間（1単位）で行い、「Peace Studies」と呼んでいる。担当する教員はクラス担任である。

このような体制が通常授業の刷新にもつながった。課題研究の授業を主体的・対話的な構成で実施するようになったことが、課題研究以外の授業にも波及し、いわゆるアクティブ・ラーニング化が一気に進んだ。

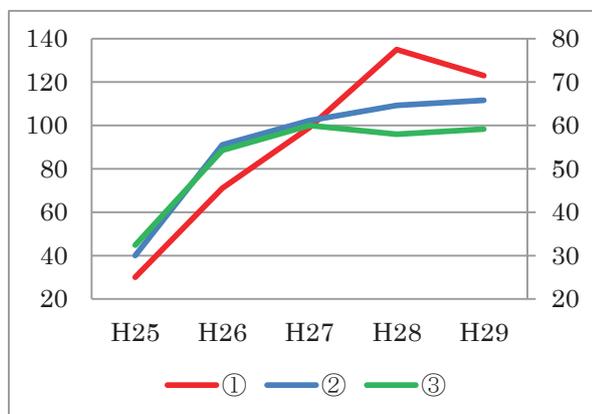
【教員アンケート結果抜粋】



- ①SGH諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導方法、内容に何らかの影響を与えた。(強くそう思う、そう思うの合計 %)
- ②SGH諸活動の計画立案や運営に関して、教員間での連携や協力関係が築かれていた。(強くそう思う、そう思うの合計 %)

生徒の成長・変容

アウトプット・アウトカムの指標や本校独自のアンケート結果からは、生徒のグローバル社会で活躍したいというマインド、行動の変容が見て取れる。

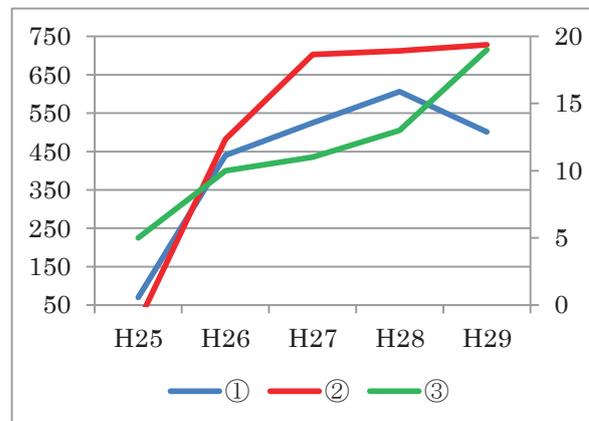


- ①自主的に留学または海外研修に行く生徒の人数(左目盛り)
- ②将来留学したり仕事で国際的な場で活躍したいと思うようになった(右目盛り)
- ③卒業時CEFR B1~B2レベルの生徒の割合(右目盛り)

海外研修への参加者数や英語力の向上の背景として最も重要なのは、「チャレンジしたい」という開かれたマインドの育成、意欲の伸長であると考え。①③の基盤として、SGHの取り組みの中で②が年々伸びていっていることが大きな成果であると考え

えている。

このような意欲の伸長が、日々の課外活動・外部大会への参加者数の伸びにもつながっている。③は結果として伸びているが、①②の大幅な増加が生徒の開かれたマインドの形成を示している。



- ① 自主的に社会貢献活動または自己研鑽活動に取り組む生徒数(人、左目盛り)
- ②グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数(人、左目盛り)
- ③ ②における入賞者数(人、右目盛り)

今後の課題

現在直面している課題は、2019年度SGH指定明け以降の教育ビジョンを確立することである。SGH指定期間が明けた2019年度以降の教育ビジョンをどう策定するか。本校では、2年目が終わった2016年度より、指定明けのグランドデザインを考える校務分掌が設置された(現在、教育構想検討委員会という名称となっている)。SGH事業の何を残すか残さないか、何が成果で課題であるのかを個別に検討するよりも先に、どのような理想を掲げてこれからの本校の教育をつくっていくのか、そのビジョンを教員の協働で作成しかたちになりつつあるところである。現在、大学が策定している3つのポリシー(アドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー)とキーコンピテンシーを本校でも作り上げ、どのような生徒を育成したいのか明確になりつつある。ここから、具体的なカリキュラム作りに入っていくところである。

仙台白百合学園中学・高等学校

白百合が開発する『グローバル・サーバント・リーダー』プログラム

【構想の概要】

従来の総合的な学習の時間をベースに修道会の3つの活動を加え、テーマを【医療福祉・教育・企業・食・環境】の5領域とし、国内外で課題解決型の探究活動を実践。合わせて奉仕の精神で生きる女性と繋がりながら、人を支え、人を活かし、人を繋げるグローバル・サーバント・リーダー（GSL）を育成。更に、生徒自らGSL教材を開発。多言語化に挑戦し、白百合の目指すリーダーが持つ精神と行動を分析・提示・継承。共生社会の実現に向けて、課題解決策の実践を、培ってきた英語力、プレゼンテーション力を駆使して行いつつ、磨かれた思考力・判断力・表現力等でキャリアの形成を確立する。

仙台白百合学園中学・高等学校

白百合が開発する『グローバル・サーバント・リーダー』育成プログラム

～すべての人が大切にされる世界を築くために～

仙台白百合学園高等学校は「人を支え、人を活かし、人をつなげる」グローバル・サーバント・リーダー（Global Servant Leader）を育てます。GSLとは、社会から忘れられがちな人々に共感し、他者に尽くす奉仕の心を持って、問題の解決のために行動できる人です。1893年の創立以来培ってきた宗教・福祉教育を土台に【環境・食・医療福祉・教育・企業】について、国内と国外（台湾）で探究活動を実践し、すべての人が大切にされる世界の構築を実現するGSLを育成します。

目標	奉仕の精神	主体的な行動	GSLが持つ4つの資質
高校3年 「発信から行動へ」 GSLの確立 アクションプラン 実践・報告・発信	＜奉仕の精神を持って行動する＞ ・社会から忘れられがちな人々に共感する ・他者に尽くす奉仕の心を持って行動し、社会とダイレクトにつながるGSLの確立	＜課題解決型探究活動の実践（国内、そして世界へ）＞ ・共生社会の実現に向けた、課題解決策の実践 ・社会とつながるリーダーの確立 ・ウェブによるアクションプランの発信 ・各種大会・コンテスト等への出場 ・台湾での成果発表や実業女性フォーラムの開催 ・論理的思考力と英語力、プレゼンテーション力の駆使	◆【意図・知識・視点】 Global perspective 多様性・多文化社会の現状把握、共生社会建設のためのグローバルな視野 ◆【技能・スキル】 Flexibility and adaptability 異なる言語、文化、価値観を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協働する力
高校2年 「探究から発信へ」 GSLの自立 合産 フィールドワーク	＜奉仕の精神に触れる＞ ・国境を越えてリーダーの神髄に触れる ・奉仕の精神を持って生きる女性に出会う	＜課題解決型探究活動に挑戦（国外）＞ 問題解決に向けて、アジアや世界のの人々と連携するサーバント・リーダーとしての姿勢を台湾の人々から学ぶ	◆【態度・姿勢・意欲】 Commitment to society 地球市民として、問題解決のために地域から社会に働きかける行動力
高校1年 「気づきから探究へ」 GSLの目覚め 国内 フィールドワーク	＜奉仕の精神を学ぶ＞ ・本校独自のリーダー学を学ぶ（人を支え、人を活かし、人をつなげるリーダーシップ） ・奉仕の精神を持って生きる女性について知る	＜課題解決型探究活動を展開（国内）＞ 5つの研究領域：【環境】【食】【医療福祉】【教育】【企業】 ＜アジア史学習＞ アジアの連携のために戦争と平和の問題を共有する	◆【精神・価値観・意思・行動】 Servant Leadership 奉仕の精神を持って生きる人々に倣い、自己を他者のために生かそうとする力
中学校 ベーシック・グローバル 「自分と世界のつながりに気づく」	3年生「生かす喜び」 2年生「生きる喜び」 1年生「生かされている喜び」	3年生「世界の諸問題について考える」 ～UNICEF ワークショップ・NGO 支援～ 2年生「身近な生活と世界のつながりを考える」 ～世界の食糧事情～ 1年生「世界に目を向ける」 ～各国事情～	

つながる力：ネットワーク、発信力、問題解決力、視点・思考

行動力：協働、表現力、知性

シャトルループパワーカー修道会 ～その歴史～
 白百合学園の経営母体であるシャトルループパワーカー修道会は、17世紀フランスの絶対王政の時代に、戦争や貧困にあえぐ人々への奉仕と教育活動から始まりました。日本での活動は、明治初期に、フランスから3人の修道女が函館へ派遣されたことから始まり、養護施設などを開設して、すべての人々にわたっての「サーバント・リーダー」として奉仕してきました。

学年	1年	2年	3年	4年
英語	英語	英語	英語	英語
数学	数学	数学	数学	数学
国語	国語	国語	国語	国語
社会	社会	社会	社会	社会
理科	理科	理科	理科	理科
体育	体育	体育	体育	体育
音楽	音楽	音楽	音楽	音楽
美術	美術	美術	美術	美術
特別活動	特別活動	特別活動	特別活動	特別活動
総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間
保健体育	保健体育	保健体育	保健体育	保健体育
職業教育	職業教育	職業教育	職業教育	職業教育
外国語	外国語	外国語	外国語	外国語
キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育
情報教育	情報教育	情報教育	情報教育	情報教育
総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間
特別活動	特別活動	特別活動	特別活動	特別活動
保健体育	保健体育	保健体育	保健体育	保健体育
職業教育	職業教育	職業教育	職業教育	職業教育
外国語	外国語	外国語	外国語	外国語
キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育
情報教育	情報教育	情報教育	情報教育	情報教育

◆SGH プログラム対象者

	1年目	2年目	3年目	4年目
	2015(H27)	2015(H28)	2015(H29)	2015(H30)
LS	28	56	81	81
LI	0	0	0	18
全体	465	456	414	365
%	6	12.3	19.6	27.1

学びのエンジン強化と必修海外研修の導入で大きくブラッシュアップを狙ったLS(特進)コースで、SGHプログラムの開発を行い、キャリアの形成と語学のスキルアップを検証し、構想通り4年目にLI(総合進学)コースへ内部波及させた。LSにおけるSGHプログラムの教育効果は高く、細やかな広報も功を奏し、4年目のLIにおける受講者18名はLI母集団の約3分の1を占めている。

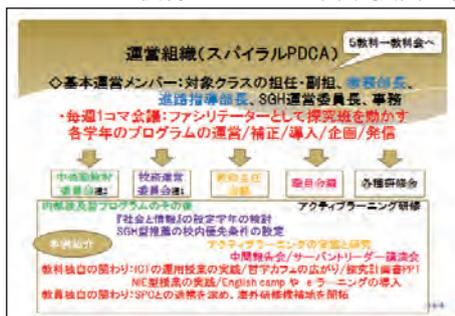
探究課外の設定と教科・科目の連携

本校では総合的な学習の時間と HR・行事を連動させて、SGH プログラムを実施。1年目の取組から問題点を洗い出し、翌年のカリキュラムでは『社会と情報』を3年次から1年次へ移動させた。その後、日課時間の変更に伴い4年目には必修課外に『探究』を設定。毎週の実施により、計画性を損なうことなく、更に HR との連動により幅広い運用に繋がった。また各教科アクティブラーニング型授業の実践を教務部主体に全教科で励行。探究活動との関係性では以下の教科の取組が特徴的。

- ・**家庭基礎**では1年次に『命を育む』をテーマにポスターセッションを実施。グループワークで多角的な視点を形成。
- ・**世界史 A**では1年次に『台湾と日本』についての特別授業を実施。台湾研修のベースを構築。
- ・**社会と情報**では1年次に『PPTの活用』『ポスター作成スキルの習得』を実習。活動内容の効果的な提示を学ぶ。
- ・**数学 I**ではデータの分析の中で『データの活用と有用性の提示の仕方』を実習。論理の展開に関する根拠としてのデータ・統計の扱い方を学ぶ。
- ・**コミュニケーション英語 I ⅡⅢ**では3年間を通じ、英語4技能の実力を養成。検定試験及び英語発表や探究成果における英語の運用についても対応。
- ・**宗教**では一貫したキリスト教哲学の中で、社会的弱者に対する眼差しと、サーバント（奉仕者）としての役割の必要性、更に修道女の活動を通じた学びから、人を支え、人を活かし、人をつなぐリーダーとしての資質を養成する。

プログラム運営上の組織図

5領域（企業・食・医療福祉・教育・環境）からテーマを決定し、ファシリテーター役の教員の基にグループを形成しながら、各班独自の計画でそれぞ



れが活動するスタイルのプログラムを運営する上では、毎週の運営会議は必須。

3年間の探究の様子(例:2702班)

『震災時における支援体制』をテーマに、1年次の6月に探究計画書を完成させ、下調べを行いながらタブレットを活用して有識者へのコンタクトを取り始める。8月、宮城大学看護学部吉田教授に災害時看護について、また仙台国際センターでは東日本大震災時の各種データを調査。被災地域の現状と課題を分析しつつ未解決な問題を探り、脆弱な災害時の連絡体制と弱者への視点を重ね、仙台防災枠組みへの定期的な参加を通して1月に東北大学災害科学国際研究所長の今村文彦教授の基を訪問。これまでの調査探究から、立ち遅れていた外国人への支援体制の一つとして**減災パンフレットの作成**に挑む。3月、台湾研修では台中の921地震教育園区を訪問し防災・減災のシステムや連携、台湾版災害時パンフレットを学ぶ。更に研修先の東海大学や暁明女子校で探究セッションとアンケート調査を実施。**2年次**の4月



から探究を論文にまとめつつ、不足しているデータの分析を進め、10月には外国人避難訓練に参加。災害時の意識・行動に関する調査を実施し、外国人への優しい日本語講座でパンフレットの言葉使いを学び、アドバイザーの最終監修を経て、11月英語版減災パンフレットを完成。これまでの活動が評価され12月FM仙台的防災番組で活動を報告。3月、仙台防災未来フォーラムで発表。第一回SGH甲子園本選出場。更に仙台ニューズレター『えーる』の表紙を飾るその後、パンフレットの使い心地調査を反映させ改良を施し、**3年次**の8月にはホテルや領事館に配付。NHKの取材を受け、9月に活動が放送される。11月、毎日新聞全国版に掲載。内閣府と仙台市の要請によりぼうさいこくたいに参加。吉野復興大臣に減災パンフレットを手渡す。2月、中国語版を完成させ、3月には学生防災サミットにて仙台市長らと共に会議・発表を行った。現在、後輩たちがこの活動を引き継いでいる。



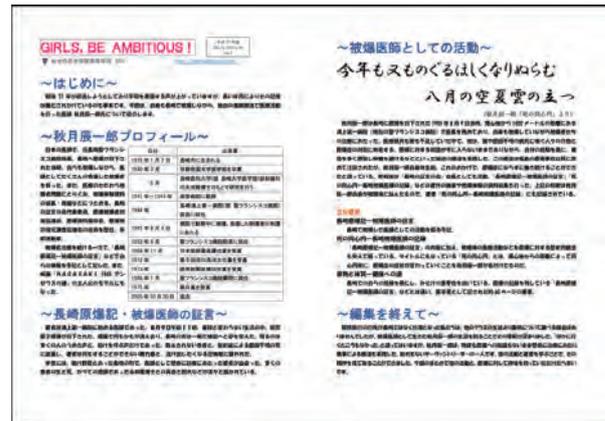
GSL プロジェクト

① **GSL リーダーとの出会い**：国内外でリーダーとの出会いの場を企画・運営・実施。リーダーの精神や思考、行動力を直に学び、物事の本質を見極め新たな視点を形成し、自らの生き方に反映させる。過去3年間のGSLリーダーとの出会いで講演された方は以下である。

氏名	所属等
内田伸子	元お茶の水女子大学副学長・現同大学教授
スندا・ミカ	ネパール大衆歌謡歌手・ネパール日本語学校校長
IPP常子	オーストリア政府公認通訳・ガイド
ハービー・ビーズリー	札幌米国税領事館 広報文化交流担当領事
新妻香織	NPO法人フー太郎の森基金代表
羅芳華(Juanelva Rose)	台湾私立東海大学音楽部教授
片倉佳史	台湾在住作家『旅の指さし会話帳・台湾』著者
河野美奈子	外務省 大臣官房文化交流・海外広報課 課長補佐
伊藤淳	カトリック清瀬教会主任司祭
加藤美紀	仙台北百合女子大学教授
竹内修一	上智大学神学部教授・イエズス会司祭
シャルマ・ヴィン	インド旅行・ビジネスメディアサービス会社社長
白木朋子	国際協力NGO ACE事務局長
Sharad Rai	ネパールYoume school創業者

② **GSL10 (生徒による教材開発)**：本校が選定したGSL (年間10名) を広く一般の人々へ伝える報告書の作成活動は、現在30名を終了。1年次は日本語版、2年次は英語版を作成し、3年次はブラッシュアップを行ってから広く内外に提示する。

◆H27 GSL10 プロジェクト
・シャルトル 聖パウロ修道女会『女性外科医Sr.エヴァ(フィリピン)』
・大蔵建設ダム設計技師『八田與一(台湾)』
・シャルトル 聖パウロ修道女会『シスター・末吉(カメルーン)』
・世界のスチール王で義守大学総長『林義守(台湾)』
・同世代の人権活動家『マラー・ユスフザイ(パキスタン)』
・アウシュビッツ収容所の日本人ガイド『中谷剛(ポーランド)』
・アンジェラスの鐘の主人公で医師『秋月辰一郎(日本)』
・現ローマ教皇『フランシスコ(バチカン)』
・モッポ(3000人の孤児の母)『田中千鶴子(韓国)』
・元国連高等難民弁務官『緒方貞子(日本)』
◆H28 GSL10 プロジェクト
・NPO法人フー太郎の森代表『新妻香織(福島)』
・助産師『菊池陽(東地チモール)』
・外交官『杉原千蔵』
・大統領『ホセ・ムヒカ(ウルグアイ)』
・ベシャワール会会長・医師『中村哲(アフガニスタン)』
・NPO法人地球のステージ・医師『桑山紀彦(日本)』
・スラム街の宣教と教育『市橋隆雄・サラ夫妻(ケニア)』
・大学教授・グラミン銀行創設者『ムハンマド・ユヌス(バングラデッシュ)』
・蟻の街のマリア『北原怜子(日本)』
・大同生命・日本女子大学創設者『広岡浅子(日本)』
◆H29 GSL10 プロジェクト
・教育者『マリア・モンテッソーリ(イタリア)』
・南アフリカ政治家『ネルソン・マンデラ』
・医師『日野原重明』
・日本紛争予防センター『瀬谷ルミ子』
・料理研究家『辰巳芳子』
・シャルトル 聖パウロ修道女会創立者『ルイ・ショーベ神父』
・日本のプラネタリウム開発者『大平貴之』
・ビタミンCの研究でノーベル賞『ライナス・ポーリング博士』
・児童労働を撲滅NPO法人ACE事務局長『白木朋子(日本)』
・女性初ノーベル平和賞ヘルタの足跡を伝える『IPP常子(オーストリア)』



(日本語版：第7号より)

高大連携

本校の探究活動では、探究班の要請や活動のつながりから班毎に有識者と連携するスタイルを取っている。日程を決めて全体が一堂にそろう有識者から探究のアドバイスを頂くような設定はしていない。そのため、班毎にアドバイスを受けに出向くのであるが、この様なスタイルで社会とダイレクトに関わり、知見と常識を養い、次のステップへと移行する生徒の様子には、

- ・精神的にポジティブになり、学習に対しても意欲を増す
- ・時間の活用に工夫が見られ、集中力が増す
- ・対外的な関係性の中で、常識やマナーがアップするなど、顕著な変化が日々の生活や感想等に現れている。

◆主な連携先・アドバイザー等 (順不同)

東北大学 / 宮城大学 / お茶の水女子大学 / 東洋英和女学院大学 / 仙台北百合女子大学 / JICA 東北 / NPO 法人日本・ネパール文化交流クラブ / (株)ダッシュ / 一般財団法人日本国際飢餓対策機構 / (株)オルター・トレード・ジャパン政策室 / 台湾私立大同大学 / 台湾私立東海大学 / 台湾久順茶業公司 / 台湾中央研究院近代史研究所 / 社会福祉法人仙台市手をつなぐ育成会ホープすずかけ事業所 / コープフードバンク / 宮城県国際化協会 / 高瀬元気会

◆ディスカッションフォーラムの開催

東北大学共修ゼミの学生リーダーによるナビゲートを受けながら、世界共通の課題に対し、最新のニュースやデータを得つつ対話を通して互いの意見を学び合い、問題を明確にし、具体的な解決策や自身の意見形成を目指した。今年度のテーマは、**難民問題 / 安楽死 / 死刑制度 / 夫婦別姓 / 子どもの貧困 / 人工妊娠中絶** であった。

評価方法と評価に伴う開発物について

◆総合学習の単位認定における判断材料：以下の項目で各班の担当者がチェックし会議の中で審議する。

1年前期	個人調査まとめ/探究計画書/班への貢献度/発表/感想
1年後期	発表原稿(個人)/PPT作成シート/プレゼンテーション/感想
2年前期	台湾研修個人レポート/ポスター作成/班別活動状況/感想
2年後期	発表原稿(個人)/PPT作成シート/プレゼンテーション/感想
3年全期	GSL10(英語版・日本語版)/解決策の提示活動/感想

◆GSLが備える4つの資質の到達度評価：年間2回(3年次は1回)自己アセスメントを実施。28項目について5段階の評価を行い分析。結果は以下の通りとなった。

カテゴリー	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年全期
1 グローバルな世界を理解するための知識と視点	35.0%	56.2%	68.5%	66.0%	78.3%
2 問題を解決するためのスキル	28.7%	50.9%	62.8%	62.1%	68.6%
3 地球の一員としての行動への意欲	19.0%	38.8%	51.7%	58.6%	64.6%
4 サーバントリーダーとしての自覚と行動	37.9%	63.8%	74.1%	71.1%	82.8%

(5段階評価の4以上の割合)

探究活動を本気で行うと、実は自分自身の不十分さに気付くことになる。その意味も含めて本校が開発したアセスメント28項目は、正確であったと判断された。

◆プレゼンテーション評価表：探究成果の報告におけるプレゼンテーションに対し、『プレゼンテーションとは何か』を国内外の有識者からワークショップの形式で学び、実施における評価表も開発。これにより、自己の意見を他者に伝える際、必要とされるスキルが身に付き、発表の場数が増えるに従って、評価のステップアップも行われた。

	テーマ	講師
日本	プレゼンテーションの極意	淵ノ上英樹APU教授
台湾	プレゼンテーションスキルを学ぶ	Jung-Han Chen, Ph.D.

◆GPS - Academicの様子：課題発見・解決に必要な3つの力(批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力)を客観的に測定。自己評価の振り返りを通して主体的に深く学び続ける能力を育成する。(3年生8月の結果)

総合評価(客観)			
	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力
SAゾーン	35%	76%	71%
Bゾーン	53%	24%	24%
CDゾーン	12%	0%	6%

自己評価(主観)			
	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力
5・4ゾーン	47%	89%	47%
3ゾーン	47%	12%	47%
2・1ゾーン	6%	0%	6%

*難関大学に合格した生徒はSゾーンであった。

英語力の養成と結果等

『留学しなくても英語を自在に使い、意思を持って話す生徒を育成する』をコンセプトに一貫して4技能の養成に取り組みさせた3年間の主な結果は以下である。

- ・第69回宮城県英語弁論大会第1位、東北大会出場
- ・第70回宮城県英語弁論大会第2位
- ・実用英語技能検定1級1名、準1級3名
- ・実用英語技能検定2級以上・・・82.8%

◆SGHから波及した班・個人の主な取組結果

- ・ネパール大震災チャリティーコンサート企画・運営・実施
- ・企業とのコラボ商品(紅茶・中国茶)開発・販売
- ・介護職地位向上イメージアップビデオ・教材作成
- ・(株) Good Try Japan キャリアプログラム東北代表
- ・東北大学科学者の卵研究基礎コース最優秀賞
- ・東北大学科学者の卵研究重点コース最優秀賞
- ・Beyond Tomorrow ジャパン未来リーダーズサミット優勝

発表の場の設定

『東北地区 SGH 課題研究発表フォーラム in 杜の都』

主催：仙台白百合女子大学 共催：東北大学・宮城大学

後援：青森/岩手/秋田/山形/福島/宮城の各県教育委員会、仙台教育委員会

目的：東北地区のSGH校とアソシエイト校が取り組んでいる課題研究等を発表し、大学教員のアドバイスを受けながら、研究の深化・意欲・スキル等をアップさせつつ、生徒間の交流を深める。

- ▶本校はホスト校として大学と各高校を繋げる役割
- ▶仙台二華高の協力で模擬国連(2日目交流会)実施

◆参加校9校 (チーム・個人 どちらでも可能)
◆発表形態：口頭発表(日本語/英語)15分質疑応答&講評5分~10分
ポスター発表 10分質疑応答5分(2回)

学校名(採択年度)	プレゼンテーション		ポスター発表
	日本語	英語	
青森県立青森高等学校(H26)	1	1	3
岩手県立盛岡第一高等学校(H27)	2	0	0
盛岡中央高等学校(アソシエイト)	1	1	0
宮城県仙台二華高等学校(H26)	3	4	3
仙台白百合学園高等学校(H27)	3	3	1
宮城県気仙沼高等学校(H28)	2	0	3
秋田県立秋田南高等学校(H27)	1	1	3
山形県立山形東高等学校(アソシエイト)	2	0	1
九里学園高等学校(アソシエイト)	1	0	2
計(発表数)	16	10	16

生徒参加人数130名

(第一回2017.3.16の参加状況)

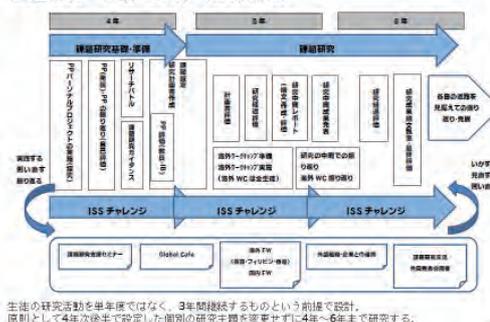
「課題研究」テーマ設定の理由

本校の課題研究のテーマは「リスク」「葛藤と軌轍」「教育」である。これら概念的なテーマを設定したことにはいくつか理由がある。一つは現代社会の問題が非常に複雑であり、それらの解決は一側面からの単純なアプローチでは見込めないということがある。例えば世界が抱える「リスク」はそのカテゴリーさえも難しいほど多岐に亘りしかもあらゆる分野のリスクが影響し合っている。問題の解決はリスクマネジメントやリスクに対するレジリエンスを備えることにあると言われるが、特定の領域のリスクを見ているだけでは問題の大きさは見えてこない。要は包括的な視野の広さや多様な文脈でリスクをとらえることが必要なのである。本校があえて概念的な研究テーマを設定しているのは、本校が包括的な学びを理念とするIB校であるということもあるが、生徒にそのような視野や姿勢を獲得させるためである。さらに言えば、概念的な研究テーマは生徒の課題意識を焦点化させることはあっても矮小化しない。生徒が関心を持つ事柄や問題意識は常に動的な状態にある。それらが散漫になったまま希薄にならないように焦点化する必要はあるが、狭小な枠にはめてしまうことは課題意識を削ぎ狭める危険性もはらむ。そうした意味で本校の課題研究テーマは生徒一人一人が持っている関心や問題意識を尊重しながら、それらを「課題」として焦点化することに役立っている。

「課題研究」を支えているカリキュラム

本校のSGH「課題研究」は総合的な学習の時間を軸として実践されている。3年間の「課題研究」がどのように展開していくのかは図①に示す。本校が特に重視しているのは課題研究ガイダンスである。IBのパーソナルプロジェクト（PP）の実施によって研究の基礎は経験するが、本校ではさらに研究倫理についての理解の徹底や論文作成の基本などを追加し、再度ガイダンスを行っている。これはPPを終えた生徒にとっては振り返りの機会ともなる。この振り返り→改善へというサイクルを持つ指導カリキュラムが課題研究の深化を促していると言える。

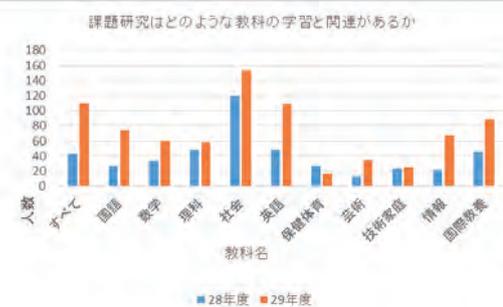
課題研究 指導モデル（後期課程）



生徒の研究活動を単年度ではなく、3年間継続するものという前提で設計。原則として4年後半で設定した個別の研究主題を変更せずに4年～6年まで研究する。

（図①）

また生徒はすべての教科の学びは課題研究の支えとなっていると認識している（図②）が、特に外国語科の科目・社会科の科目・学校設定教科「国際」の科目「国際A」「国際B」の役割は大きい。



（図②）

外国語科の取組としては英語の授業や学校設定科目 Global Issues で国際的な社会問題などを取り上げ、プレゼンテーションやディスカッションといった活動を通して学んでいる。こうした授業においては英語を学ぶこともさることながら調査などの方法を学ぶことも可能になっている。多言語による資料分析を通して自分たちとは違う観点（Perspective）で問題を捉えている世界の人々の意見に触れることもできている。これは後期課程の授業に限ったことではなく、前期課程から取り組まれていることである。

「国際A」や「国際B」では「国際協力と社会貢献」「ファシリテーション実践」などの講座を備え、外部講師を積極的に招へいし、校外の組織とも連携することで企業の事業評価を実際に行い、寄付金の行先を自分たちで決定するなど実践的な学びができるような年間の指導プログラムを設計している。

・「余白」の時間の重要性

前掲の教育課程表にある通り、本校では5年生・6年生の段階で非常に多くの選択履修を可能として

いる。もちろん卒業認定に必要な単位数の下限は設定しているが、生徒は自分で自分の時間割を作ることが可能である。また、授業日数は週5日であり、土曜授業は行っていない。こうしたカリキュラムのあり方には賛否両論あろうが、本校の特色はこうした点にあり、また主体的で責任感のあるグローバルリーダーもこうした自由さが生み出すと考えている。時間割を自分で作るということは自分で学びを構築するということに他ならない。こうして生み出された余白の時間や放課後の僅かな時間そして自由になる土曜日や日曜日を駆使して、生徒は自由に発想し、外部の組織とつながりを作り、校外で様々な体験をする。本校の生徒にとっては余白の時間があることが学びを深め進化させることにつながっている。

海外研修の意義

課題研究を支えるための重要な取組の一つが海外研修である。本校で行っている海外研修は以下の通りである。

- ・夏季（7月～8月）英国研修
- ・春季（2月～3月）フィリピン研修
- ・春季（3月）香港研修

このほかに、5年次11月に学年全員が参加するカナダへのワークキャンプを行っている。カナダワークキャンプについてはSGHやSSHの経費支援を受けない学校独自の研修であるが、プログラムの内容面ではSGH課題研究と連動している。



左：フィリピン教育
大学でのワークショ
ップ



左：フィリピンにて
路上の子どもたちだ
った現地の青年たち
が自分たちで立ち上
げた事業を訪ね、合
同ワークショップを
開催

それぞれの研修は次のように運営されている。

(1) 実施目的

・SGH海外研修は、課題研究のフィールドワークおよび海外での研究発表の機会を得ることを目的としている。カナダワークキャンプではSGH指定校となってからは現地校でのディスカッションテーマに課題研究テーマや国際社会問題が盛り込まれている。

(2) プログラムの内容

・英国研修はUCL (University college London) が主催するプログラム UCL Grand Challenge の一部に参加する。このプログラムのテーマは本校の課題研究テーマとも強い親和性があり、生徒は現地の高校生たちとディスカッションを行い、現地のシンポジウムで発表を行う。

・フィリピン研修での大きなテーマは「貧困のリスクと新興国の葛藤」である。生徒は各自の具体的な研究課題に応じて現地でフィールドワークやインタビューを行う。また現地校や現地の大学とのワークショップも開催しており、フィリピンの学生と討論を行うことで課題研究を振り返る機会ともなっている。

・香港研修のテーマは「先進国の抱えるリスクと軋轢」である。主としてフィールドワーク（インタビュー）と現地校・大学でのワークショップを実施している。政治的な複雑さを持つ地域でチャレンジングな問い（例えば民主化運動や原発問題など）について現地の学生と討論することで思考の深まりと社会的政治的な問題に対する視野の拡大をねらいとしている。

ISSチャレンジ

課題研究を支える取り組みとして校内コンペティション「ISSチャレンジ」を開催している。毎年年度当初にエントリーを行い、1年間の研究の成果を審査し最終的に4組のファイナリストが全校の前でプレゼンテーションする公開審査会が年度末に行われている。参加資格は1年生から6年生までの全員であり、課題研究への強い動機づけともなっている。

外部連携

課題研究を支えている存在として外部の有識者や

組織がある。当初は学校が外部連携先を探してきて生徒に情報提供していたが、研究開発が進むにつれて生徒がその存在に重要性を自覚し、自ら外部に連絡をとり協力や助言を依頼し、連携受諾を得てくるケースが増えている。2017年度からはJICA・日本マイクロソフトが生徒の活動を直接支援してくださっている。また学校としても指導カリキュラムの開発を外部組織と連携して構築することを開始しており、2018年度からはチームラボ株式会社と連携して指導プログラム構築を行う。

課題研究の評価

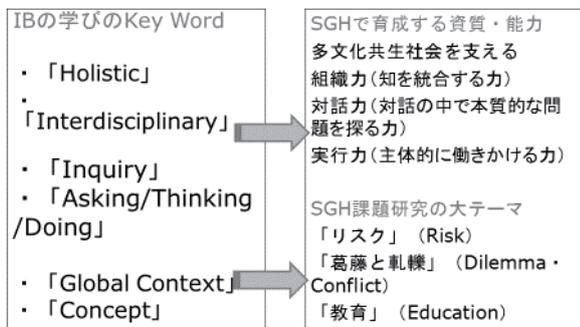
課題研究の評価は「計画・経過・最終成果」の3段階で行い、基本的にはそれぞれの段階におけるルーブリックを用いて評価する。ただし、昨年度ISSチャレンジにおける課題研究の評価を分析した結果としてメンターや外部評価者（外部連携者）の評価コメントが生徒の課題研究の質的向上に強い影響を与えることが分かっている。本校ではISSチャレンジに参加している生徒については各評価段階で必ず2名以上の評価者からコメントによるフィードバックが受けられることになっており、外部の専門家などから助言を受けられる「外部評価会」も設けている。

SGH×IBの学び

本校におけるIBの学びとSGH研究開発は図③に示すような親和性がある。

IBMYPによる学びは本校の教育の基盤であり、

SGH研究開発とIBの学び



(図③)

「理念」「指針」「フレームワーク」と言える。その役割は探究的な学びを実現するための方向性を示すことである。一方SGH研究開発はIBの理念や方針を基盤としながら探究的な学びをどのような実践によって組み立てていくかを考える実践的教育研究開発と言える。例えば本校では年度末に課題研究を通してどのようなスキルが身に付いたと実感するかという調査を生徒に対して行っている。この時に使う指標はIBのATL (Approaches to learning) スキルである。教科の単元設計や学習指導で使用されているものと共通する指標を使うことは教科学習との連動性をより高め、教員間の連携や意識共有の助けともなる。また課題研究テーマの概念的性質がIBの包括的な学びと関わっていることは前掲の通りだが、さらに言えば、課題研究の過程において問題や課題を「文脈：Context」によってとらえるようとする姿勢が見えることもIBの単元設計の要素であるGlobal Contextの影響があるだろう。文脈的な捉え方を鍛えていくことは他者理解・異文化理解にもつながる。多文化共生社会においてグローバルリーダーとしての役割を担うには欠かせない素養である。

数字に見るSGH×IBの成果

- ・大学院を含めた海外進学の意志を持つ生徒の増加
指定1年次 9% (28名)
→指定3年次 21% (72名)
- ・将来海外で働きたいという生徒の増加
指定1年次 25% (77名)
→指定3年次 30% (105名)
- ・海外大学進学者の増加
合格数：30大学・33人
進学者数：13名
- ・海外大学進学者向け奨学金獲得数の増加
JASSO 日本学生支援機構海外留学支援制度：6名
グルーバンクロフト奨学金：2名
柳井正海外奨学金プログラム：3名+学校推薦枠増

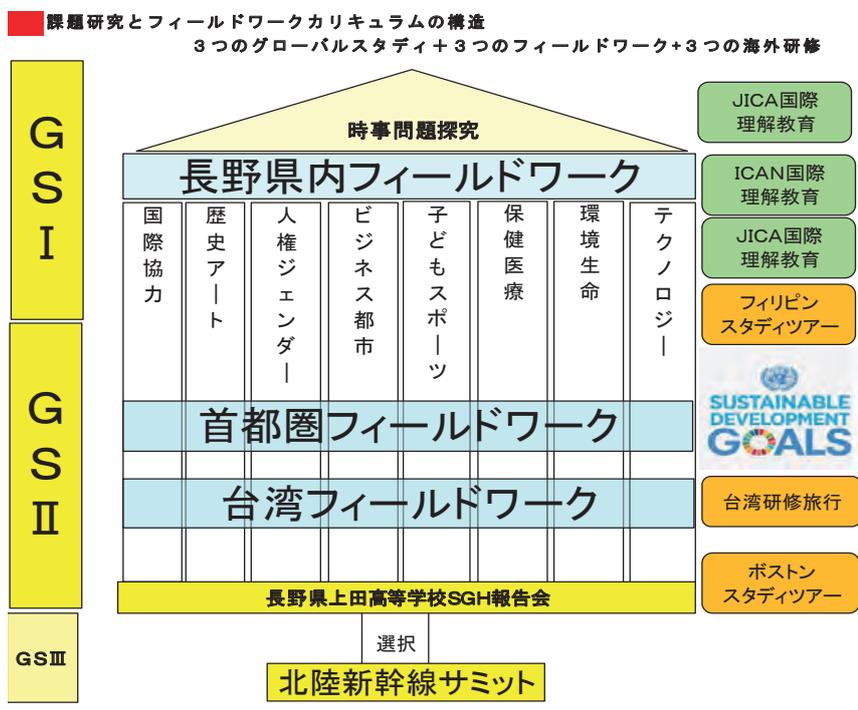
上図に示したものの他、2017年度の特徴的な成果としては後期課程のみで英検1級保持者が102名・準1級保持者が120名となったことがある。SGHの活動に取り組む生徒にとって英語がコミュニケーションのツールとなっていることを示す数字である。

長野県上田高等学校

長寿県 NAGANO から世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成

【構想の概要】

3つのグローバルスタディ（GSⅠ、GSⅡ、GSⅢ）、3つのフィールドワーク（県内、首都圏、台湾）、3つの海外研修（フィリピン、台湾、ボストン）を軸として、プレゼンテーションやディスカッションの機会を多くおりませた探究活動、課題研究、国際交流活動に取り組む本校では、長寿県 NAGANO から世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成を目指している。



(本校の教育課程表)

単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
1年次	国語総合		国際関係論			数ⅠAⅡ						物理基礎		生物基礎		体育		保健		芸術		コミュニケーション英語Ⅰ		英語表現Ⅰ		家庭基礎		GSⅠ		総合学習		HR				
2年次	文Ⅰ 現代文B		古典B		体育		保健		コミュニケーション英語Ⅱ		英語表現Ⅱ		GSⅡ		地歴(世・日・地・倫から2科目)		数学Ⅱ		数学B		地学基礎		簿記Ⅰ		総合学習		HR									
3年次	文Ⅱ 現代文B		古典B		体育		保健		コミュニケーション英語Ⅲ		英語表現Ⅲ		GSⅢ		地歴(世・日・地・倫から2科目)		数学Ⅲ		数学探究		化学		理科(物・生)から1科目		芸術		総合学習		HR							

※1選択 国語・公民(倫・政)数学・理科(生・地)英語、家庭科より2科目

※2選択 公民(倫・政)数学・理科(生・地)英語、家庭科より2科目

学校設定教科「SGH」

本校の教育課程におけるSGH活動の柱となるのは、学校設定教科「SGH」で、各学年に学校設定科目グローバルスタディ（以下「GS」と略）を設置する。1、2年次での必修3単位と3年次自由選択の1単位となる。以下にそれぞれの概要を提示する。

GSⅠ（1年次必修、1単位）

グローバル課題を題材としてレポートのまとめる力とICTスキルを身につけ、県内フィールドワークにより、自らのキャリアプランを通して協働力を養成する。自らの設定した課題に沿って、課題研究を個人研究として開始し探究力を養う。

GSⅡ（日本語と英語、2年次必修、2単位）

（日本語）GSⅠで課題設定した内容をさらに探究し、課題解決型提言ができる21世紀型スキルを身につける。首都圏フィールドワークでは、研究課題について発表し、専門家より指導を受ける。さらに、台湾フィールドワークを経て、課題研究発表会では全員ポスターセッションを行う。

（英語）GSⅠで課題設定した内容を英語で探究し、課題解決型提言ができる英語コミュニケーションスキルを身につける。台湾研修旅行により、課題を発信し、現地高校生とカテゴリー別に英語ディスカッションをする。帰国後その成果についてディベートを実施する。

GSⅢ（3年次自由選択、1単位）

SGH全員カリキュラム（GSⅠⅡ）で実施した課題研究をキャリアに応じて更に深化させる。課題解決のアクションプランを地域で考案するため、地域で自主的にフィールドワークを実施し、論文を作成する。6月には北陸新幹線サミットを主催し、他県のSGH高校生らと課題研究をカテゴリー別にプレゼンテーションし、ディスカッションする。

GSⅢの授業は、英語部門を水曜日、日本語部門を木曜日の放課後にそれぞれ実施する。4月中に課題研究の計画を提出させ、以後各自の計画に基づい

て調べ学習やフィールドワークを実施する。フィールドワーク先は企業、医療機関、官公署など、自らの問題意識に基づいて設定し、基本は自分でアプローチする。

北陸新幹線サミット開催までの経緯

平成26年度、アソシエイト校時代に先進校を視察した係職員が感じたのは、「もっと生徒にプレゼンテーションの機会を与えたい」、「多くの生徒のプレゼンテーションに接して切磋琢磨される機会を作りたい」、「指導者間の研究交流の場を作りたい」、「大学も近隣に少なく、専門家の指導を仰ぐ機会が少ない」といった思いだった。それを補うため1、2年次のGSでも個人レベル、グループレベルでプレゼンテーションの機会を多くとよう心がけている。GSⅠでもⅡでも年間最低1回はプレゼンテーションを行い、2年次2月の「SGH報告会」では、2年生全員が1日ばかりでポスターセッションを行うようにした。

GSⅢ選択者については平成29年度10名、同30年度14名で、自らが発表者となり、かつスタッフとなれば、そこでさまざまな成長の機会となる…、そんな思いから一大プレゼンテーション大会の構想が浮上した。その実現のため係職員は筑波大学附属坂戸高校主催の「SGH校生徒成果発表会」や「SGH甲子園」などへの参加を通じて他校職員との交流を深め、その一方で、長野県内の同様の悩みを抱えるSSH校、SPH校にも声をかけた。

思えば北陸新幹線は東京から金沢までが228kmで、その中間地点は長野だが、駅の数で数えると上田がほぼ中間地点となる。首都圏や北陸地方のSGH校、さらには県内のSSH校、SPH校が初夏の信州上田に集結するならば…そんな思いで準備に努め、平成29年6月に第1回北陸新幹線サミットが開催された。第1回参加校は下記のとおりだった。（第2回もほぼ同様）。

（県外）福島県立ふたば未来学園、筑波大学附属坂戸、東京学芸大学附属国際中等教育学校、新潟県立国際情報、石川県立金沢泉丘、石川県立七尾（長野県内）飯山、長野、屋代、諏訪清陵、諏訪実業、上田

北陸新幹線サミットの概要

分科会は以下の4つを設置した。

I 信州発いのち・健康フォーラム

テーマ：世界の人々のいのち・健康を守る

保健、医療、衛生、福祉、栄養、健康、寿命などの分野で、保健・医療・寿命に関する課題研究テーマ

II 地域の課題から地域創生を提言

テーマ：高校生から発信する地方創生～地域と町づくり

地域創生、教育、生態系、経済ビジネス、起業CSR、観光、食と農業、資源、防災復興などの分野で、地域の課題解決に関する課題研究テーマ

III グローバル課題から解決策を提言（日本語）

テーマ：課題解決～グローバル課題を考える（日本語）

多文化共生、哲学、宗教、芸術、法と人権、ジェンダー、外交、安全保障、平和、貧困、国際協力、国際開発、持続可能な発展などの分野で、グローバル課題に関する課題研究テーマ

IV グローバル課題から解決策を提言（英語）

（内容はⅢと同様：使用言語がすべて英語）

助言者にも、地域医療で全国的にも注目される佐久総合病院の医師や地域のNPO活動家、本校と連携関係にあるJICAの職員、本校と連携関係にある東京外国語大学の学生など、地方のこうした大会としては重厚な布陣を敷いたものと自負している。GSⅢ選択生徒には自らのプレゼンテーション発表以外にも会場設営や遠方からの来客の案内などの仕



（写真：SGH 運営指導委員大井恭子先生による記念講演）

事を任せた。また司会進行役などは未来のGSⅢ選択者として1、2年生徒から希望者を募った。

各分科会では基本的には6人のプレゼンターが出席して、8分間のプレゼンテーション、2分間の質疑応答後、10人程度のグループに分かれて8分間のディスカッションを行った。最後の全体会では、分科会ごとに選ばれた代表者から数分間の報告をしてもらい、成果を共有することとした。



（写真：分科会でのディスカッション）

準備段階、運営上の試練

もちろん、準備段階、運営面での悩みは尽きない。遠方から本当に参加してくれるのか？プレゼンテーションの希望数が多すぎたらどうするのか？少なすぎたらどうするのか？……

結果的に、旅費も昼食も出せないのにもかかわらず、今年度も県外から多くの学校が参加してくれ、本校GSⅢ選択者の分と併せ、ほぼ昨年度並みのプレゼン数33がそろった。また、校外からの参加生徒数は70名となり、昨年度よりも10名以上増加した。

SGH予算に限りがあるなか、助言者をどのように確保するのも課題だったが、今年度はOB、OG学生や管理機関の指導的立場の方々によることで講師を引き受けて下さった。

また、昨年度のJICA駒ヶ根に続いて、今年度は「北陸新幹線サミット」の名に相応しく、JR東日本長野支社の後援を得ることも成功した。上田駅長さんからの「お土産」に頬をゆるめた高校生の表情が忘れられない。



(写真：上田城跡公園での昼食風景)

評価

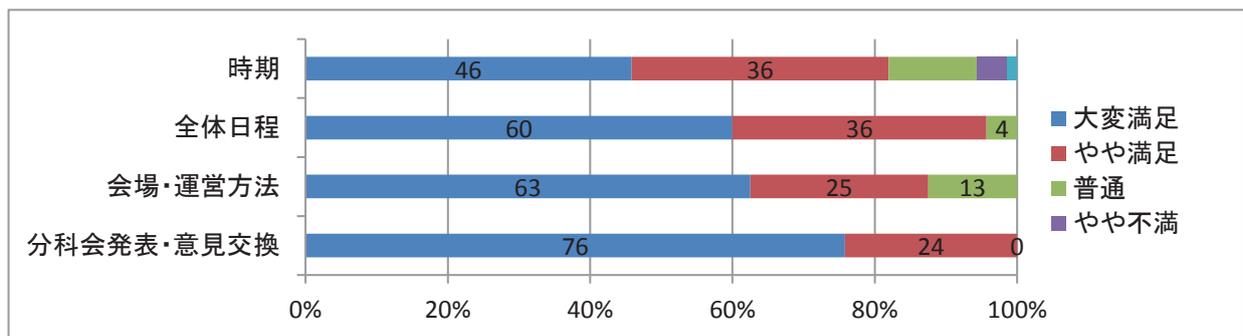
実施後の生徒アンケートのまとめは図のとおりである。開催時期や当日の日程よりも、分科会の発表・討論に対する満足感が高かったことに注目したい。その点で「新幹線がつなぐ高校生間の切磋琢磨」という目的は達せられたと思われる。「講師の先生のアドバイスがとても参考になった」、「同じ日本国内でも自分とは異なる環境で生活している人たちの意見は新しい見方をもたらしてくれて、聞いて楽しかった」といった声はそれを物語るものである。もちろん「もっと討論の時間を増やしたほうが良い」など、運営面に関する要望もあった。今後

の検討課題としたい。今年度は、地域創生に関する分科会に参加希望者が多く2分割して実施した。なお、昨年度「スクリーンが見えづかった」との意見が多かったが今年度は全教室に電子黒板が設置されてこちらを使用できたため、この問題は解決された。他校からの引率者からは「一人ひとりの生徒が生き活きと責任感を持って業務にあたっていた」といった声が寄せられ、生徒主体の運営は概ね好評を得た。

今後の展望

今後もこの取り組みを続け、新幹線がつなぐ域内連携に努めたい。その際の検討課題として、文字通り北陸新幹線が繋ぐ地域の共通課題（例：道州制、北陸新幹線や、その開通に付随してJRから切り離された線路と地域の関係テーマの課題研究）の共同研究があげられよう。

長野市から上田市にかけての地域は、戦国時代の名将がしのぎを削った激戦地が散在するとともに、フォッサマグナも近く、正月料理における「サケ文化圏」と「ブリ文化圏」の混在地でもある。日本海と太平洋、西日本と東日本の境界線としてのこの地で、各地の高校生がプレゼンテーションにしのぎを削るこの大会を今後も大切にしていきたい。



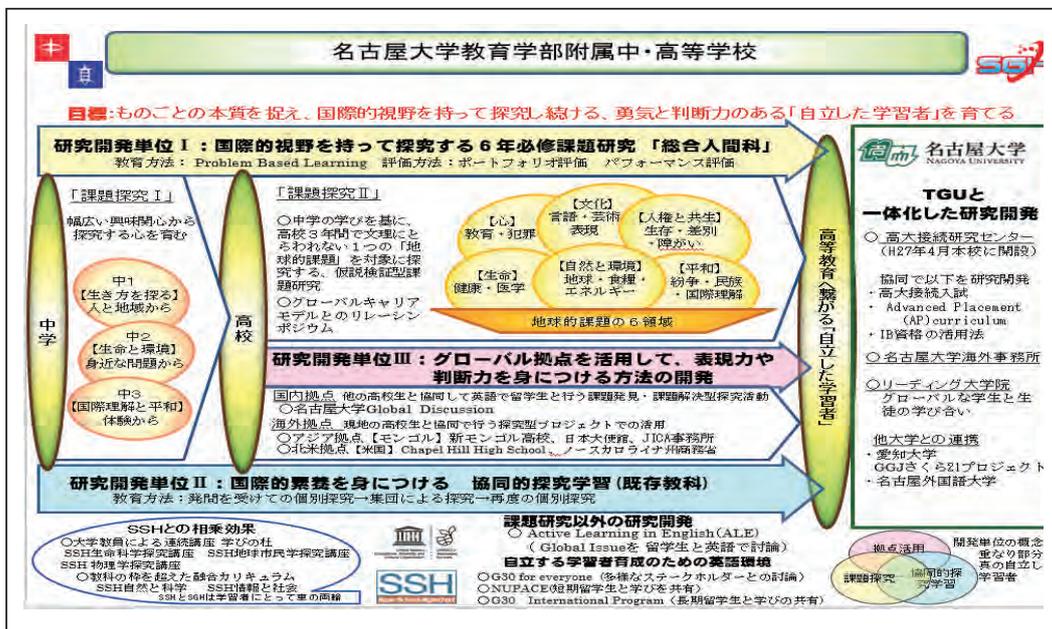
図：終了後に高校生に対して実施したアンケートのまとめ

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

トップ型 SGU と一体化して「自立した学習者」を育てる探究型カリキュラム構築

【構想の概要】

中高一貫教育により、心豊かで主体性のある人間形成を目指す。加えて名古屋大学の理念である「勇気ある知識人」や「名古屋大学から Nagoya University へ」という方針を組入れ、生徒の国際的視野を拡大する教育を実践する。グローバル化が進んだ現代に世界で活躍する「自立した学習者」を育てることが目的である。「自立した学習者」とはものごとの本質を地球規模で捉え、自分の力で探究し続ける勇気と判断力のある人間であり、本校はこれを魅力的なグローバル・リーダー像と定義する。



平成30年度入学生用 高等学校教育課程表

名古屋大学教育学部附属高等学校

教科	科目	学年			
		第1学年	第2学年	第3学年	選択
国語	国語	4	4	2	2
	国語(文)	2	2	2	2
	国語(理)	2	2	2	2
	国語(英)	2	2	2	2
地理歴史	地理歴史	2	2	2	2
	地理歴史(文)	2	2	2	2
	地理歴史(理)	2	2	2	2
	地理歴史(英)	2	2	2	2
公民	公民	2	2	2	2
	公民(文)	2	2	2	2
	公民(理)	2	2	2	2
	公民(英)	2	2	2	2
数学	数学	4	4	2	2
	数学(文)	2	2	2	2
	数学(理)	2	2	2	2
	数学(英)	2	2	2	2
理科	理科	4	4	2	2
	理科(文)	2	2	2	2
	理科(理)	2	2	2	2
	理科(英)	2	2	2	2
保健体育	保健体育	2	2	2	2
	保健体育(文)	2	2	2	2
	保健体育(理)	2	2	2	2
	保健体育(英)	2	2	2	2
芸術	芸術	2	2	2	2
	芸術(文)	2	2	2	2
	芸術(理)	2	2	2	2
	芸術(英)	2	2	2	2
外国語	外国語	4	4	2	2
	外国語(文)	2	2	2	2
	外国語(理)	2	2	2	2
	外国語(英)	2	2	2	2
家庭	家庭	2	2	2	2
	家庭(文)	2	2	2	2
	家庭(理)	2	2	2	2
	家庭(英)	2	2	2	2
総合学習	総合学習	2	2	2	2
	総合学習(文)	2	2	2	2
	総合学習(理)	2	2	2	2
	総合学習(英)	2	2	2	2
SSU	SSU	1	1	1	1
	SSU(文)	1	1	1	1
	SSU(理)	1	1	1	1
	SSU(英)	1	1	1	1
特別	特別	2	2	2	2
	特別(文)	2	2	2	2
	特別(理)	2	2	2	2
	特別(英)	2	2	2	2
合計		30	25	6	20

平成29年度・30年度 教育課程(中学校)

教科	第1学年	第2学年	第3学年
国語	140 (4)	140 (4)	105 (3)
社会	105 (3)	105 (3)	140 (4)
数学	140 (4)	105 (3)	140 (4)
理科	105 (3)	140 (4)	140 (4)
音楽	52.5 (1.5)	52.5 E.S.P	35 (1)
美術	52.5 E.S.P	52.5 E.S.P	35 E.P.P
保健体育	105 E.P.P	105 E.P.P	105 E.P.P
技術・家庭	70 (2)	70 (2)	70 (2)
外国語(英語)	140 E.S.P	140 E.S.P	140 E.S.P
道徳	35 E.P.P	35 E.P.P	35 E.P.P
特別活動	35 E.P.P	35 E.P.P	35 E.P.P
総合的な学習の時間	総合人間科 (2)	35 E.P.P	35 E.P.P
	SSU課題研究 I	35 E.P.P	35 E.P.P
合計	1050 (30)	1050 (30)	1050 (30)

育成する生徒像

本校は、SGH 研究開発を通じて以下のように「育成する生徒像」を設定した。

I) ①ものごとの本質を捉え、^(ア) 既存の問題と潜在的な問題の発見を行い、論理的・多角的に考える力を持ち、^(イ) 探究し続ける生徒を育成する。

II) 個別探究と集団による探究を通して、他者と協同して問題解決ができる^(ウ) 国際的素養を身につけた生徒を育成する。

III) 自らの考えを適切な方法で論理的に他者に表現し、^(エ) 勇気と判断力のある生徒を育成する。

①～④に関しては、生徒の意識調査（5件法）、（ア）に関しては、生徒の思考力を測る記述型課題を実施した。天井効果がでない工夫として、「どちらとも言えない」という回答を2とし、生徒の意識の変化を明確に捉えるための改良を加えた。その結果、高校1年生の①～④の意識調査に関して、SGHを附属中学から経験している内進生（統制群）の方が、中学でSGHを経験していない外進生（対象群）よりもすべての項目において意識が高いことが分かった。これは中学生も含めてSGH対象生徒としているからであると分析した（資料1参照）。記述型課題問題に対する生徒の回答を、評価するための水準を完成させた。同じ水準を使い、生徒の回答を経年で評価できる準備が整った。また、生徒の意識調査の結果と、記述型の思考力調査をクロス集計して分析することができた。その結果意識の高い生徒は思考力も高い傾向にあることが分かった。（資料2参照）

資料1) SGH 研究開発で育成する生徒の力「生徒の意識を測る調査（生徒の情意的側面の調査）」（ものごとの本質理解・探究し続ける力・国際的視野・判断力）を測るための意識調査結果（H28年度）



資料2) SGH 研究開発で育成する生徒の力「生徒の意識を測る調査（生徒の情意的側面の調査）」と「思考過程を測る調査 問2（本校の基準による、生徒の認知的側面の調査）」の相関関係



教科をつなぐ～協同的探究学習～

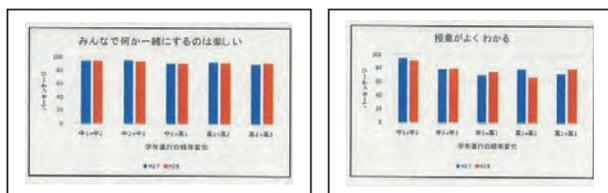
国際的素養を身につけるために、既存教科すべてに「協同的探究学習」を取り入れ、他者とコミュニケーションを取りながら協同して問題解決する学習方法を開発した。学校カリキュラム全体を暗記・再生の中心の教育方法から理解・思考型学習方法に変換することを目的として実践している。

本校が実践する「協同的探究学習」では、問題を解決するための方法は多様であり、自分の持っている知識と他者が持っている知識を活用しながら、問題解決法を自分で考案することである。その思考プロセスを他者に表現し、共有することで問題の本質を理解し、問題解決にあたる「わかる学力」を育成する。

「協同的探究学習」は、SGHで「育成する生徒像」に大きな効果を与えるだけでなく、下記に示すように生徒の自己肯定感を高める効果も併せ持つ。H28年12月に、生徒にアンケート調査を実施した。対象は全校生徒（中学・高校）の生徒であり、回答者は無記名で実施した。回答率はおおむね100%であった。

グラフは「そう思う」以上の回答をした生徒の割合である。協同的探究学習などの協同的な学び（ア

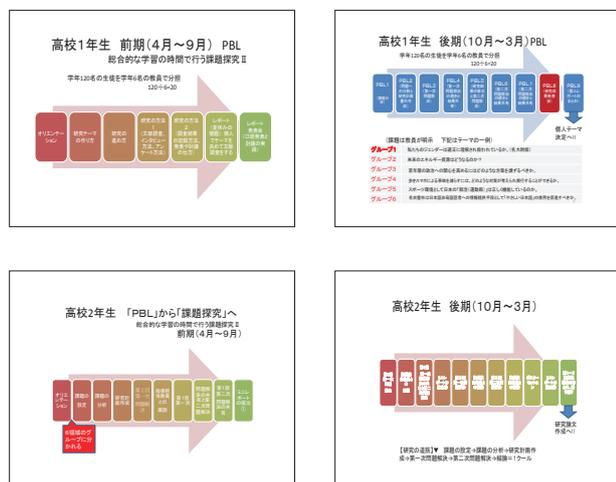
クティブラーニング) は、学校やクラスの雰囲気や生徒の学びへの姿勢と大きな関連がある。下記のグラフは H27 年度と H28 年度に実施したアンケート結果の経年変化である。



大学受験を迎え、自分のことのみ集中しがちな高校3年生でも H27 年度 (高2) から H28 年度 (高3) では、両項目とも上向きに変化していることがわかる。

3年間継続的に行う課題探究

SGH「課題探究Ⅱ」で PBL (Problem Based Learning) を使って仮説検証型課題研究を実践している。高校1年は、PBL の基礎基本を身につけることを目的とし、高校2年で本格的に PBL を行う。そのため、高校1年では、PBL のテーマを PBL 指導教員が決定し、生徒に明示する。高校1年の学年担当教員全員が PBL 指導を行う。生徒120名を学年担当教員6名で均等に割るため、1人の教員が生徒20名を受け持つ。以下はそのプロセスである。本校では二期制を採用しているため、左が前期、右が後期の指導過程である。高校2年からは、生徒が個人で探究テーマを設定し、仮説検証型で研究を推進する。研究の成果を高校3年で論文にまとめる。探究テーマを設定することが、PBL を効果的にすすめるカギとなるため十分な時間をかけて行う。



ALE (Active Learning in English)

仮説検証型課題研究「課題探究Ⅱ」での探究と「協同的探究学習」で身につけた国際的素養を海外で活用するために英語によるコミュニケーション能力を向上させることを目的に実施。規定の水準をクリアした生徒には、高等学校での1単位として単位認定される。プロジェクトはすべて英語で行われるが、スキルとしての英語力向上を目指すのではなく、英語を通して論理的に他者に表現できることを目指す。

世界の国々で実際に起こっている Global Issue をテーマにし、本校生徒と名古屋大学留学生が同じ目線でディスカッションを行う、10回連続のセッションである。それぞれのセッションでは、世界各国から来ている名古屋大学留学生が、母国で実際に起こっている社会問題について報告する。参加生徒は、他の国の TA 留学生と小グループを作り、その社会問題についての理解を深め、解決法を議論し、発表する。

下記は実施内容の一例である。

		内容
1	11月3日(火) 9:30~12:30	Refugee crisis: Syrian perspective
2	11月3日(火) 13:30~16:30	Refugee crisis: European perspective
3	11月7日(土) 9:30~12:30	Multiculturalism in Australia
4	11月7日(土) 13:30~16:30	Russia vs EU on the Ukrainian crisis
5	11月15日(日) 9:30~12:30	Eco-tourism in Central and South America
6	11月15日(日) 13:30~16:30	Security challenges in Nigeria
7	12月6日(日) 9:30~12:30	Corruption, unemployment and education in Lesotho and S. Africa
8	12月6日(日) 13:30~16:30	Air Pollution in Ulaanbaatar, Mongolia
9	12月12日(土) 9:30~12:30	Food safety plan and food security in Vietnam
10	12月12日(土) 13:30~16:30	Election year in USA



高大連携による調査分析

名古屋大学 Skills and Knowledge for Youths プロジェクトと協力して、生徒(中学3年生~高校2年生)に対し独自の英語力試験と意識調査を H30 年3月に実施した。英語力試験は (Part ①: 教科書的な英文読解 Part ②: メール会話文読解 Part ③: 長い文章からの情報収集) の3部構成。試験内容はすべての学年で同じである。下記は学年別の結果である。

	中3			高1			高2		
	平均点	正答率	標準偏差	平均点	正答率	標準偏差	平均点	正答率	標準偏差
Part I	25.8	(85.9)	2.3	26.6	(88.5)	2.1	27.5	(91.6)	1.9
Part II	12.4	(88.9)	1.3	12.5	(89.4)	1.5	12.8	(91.4)	1.3
Part III	13.4	(66.9)	2.5	14.1	(70.5)	2.8	15.0	(75.0)	2.7
合計点	51.6	(80.6)	5.0	53.2	(83.1)	5.3	55.3	(86.4)	4.7

注目すべきは、標準偏差である。高校1年で一度拡大し、高校2年生になるともとに戻る。本校が併設型中高一貫校であり、高校1年生は附属中学校からの内進生と受検を経て入学した外進生が混ざることが理由だと考える。しかし、本校での学習活動を1年間経験することで、高校2年では、標準偏差がもとに戻る。本校での取組みを経験していない外進生が、本校での取組みを経験することによって起こる効果的な現象だと考える。今後も継続的に調査を行う。

併せて、テストの得点と英語に関する質問項目の相関関係を調査した。その結果を以下に示す。

学年	テストの合計点	英語に関する質問項目との相関関係							
		英語や海外への関心	英語の必要性	外向性	協調性	勤勉性	神経傾向	開放性	
中3	テストの合計点	-0.522**	0.318**	0.422	0.091	0.166	-0.016	0.042	
	英語や海外への関心		0.684**	-0.253*	0.158	0.133	-0.333	-0.243*	
	英語の必要性			0.487**	0.303*	0.221	-0.142	-0.302*	
	外向性				-0.093	0.117	-0.266*	0.300**	
	協調性					0.220**	-0.382**	-0.176	
	勤勉性						-0.164	0.145	
	神経傾向							-0.017	
	開放性								
高1	テストの合計点	-0.226*	0.272**	-0.074	0.020	0.037	-0.194*	-0.064	
	英語や海外への関心		0.730**	0.245*	0.193	0.080*	0.005	-0.205*	
	英語の必要性			0.193*	0.189	0.038	0.106	0.130	
	外向性				-0.161	-0.061	-0.028	-0.301**	
	協調性					0.130	-0.126	0.018	
	勤勉性						-0.142	0.092	
	神経傾向							-0.176	
	開放性								
高2	テストの合計点	-0.413**	0.356**	-0.214*	-0.303**	0.248**	-0.181	0.154	
	英語や海外への関心		0.752**	0.226*	0.168	0.295**	-0.259**	-0.264**	
	英語の必要性			0.139	0.133	0.195*	-0.226*	0.164	
	外向性				-0.035	0.109	-0.001	-0.302**	
	協調性					0.116	-0.213*	0.121*	
	勤勉性						-0.348**	0.238*	
	神経傾向							-0.043	
	開放性								
全体	テストの合計点	-0.349**	0.288**	0.030	0.091	0.155**	-0.009	0.016	
	英語や海外への関心		0.732**	0.242**	0.164*	0.281**	-0.189**	-0.237**	
	英語の必要性			0.159**	0.189**	0.118*	-0.055	0.167**	
	外向性				-0.094	0.041	-0.009	-0.348**	
	協調性					0.150**	-0.229**	-0.007	
	勤勉性						-0.171**	0.131**	
	神経傾向							-0.052	
	開放性								

テスト得点が高い生徒は、英語や海外への関心や英語の必要性が高いと答える傾向があった。反対に、英語や海外への関心や英語の必要性が高いと答える生徒は、テスト得点が高い傾向にあった。

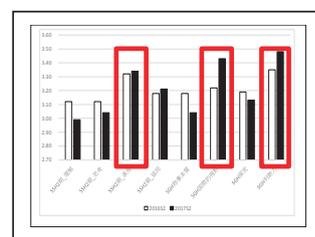
生徒に対するフィードバックも、プロジェクトチームと協同で開発した。フィードバック内容に興味関心を持ってもらうように、性格テスト的な要素も加えた。結果は生徒個人にフィードバックした。下記は、そのフィードバック用紙の一例である。



SGH と SSH

本校は、すべての生徒が SGH と SSH 対象である。文系人間、理系人間ではなく、理系に強い文系生徒、文系のセンスを持った理系生徒を育てることが本校の目標であるからだ。SGH と SSH は車の両輪であると考えている。その片鱗を示す初期値を示す。

年度	SGH	SSH	SGH/SSH プロジェクト授業学年			
			高校1年	高校2年	高校3年	高校4年
2007			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2008			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2009			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2010			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2011			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2012			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2013			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2014			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2015			SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2016	SGH		SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年
2017	SGH	SSH	SSH 1年	SSH 2年	SSH 3年	SSH 4年



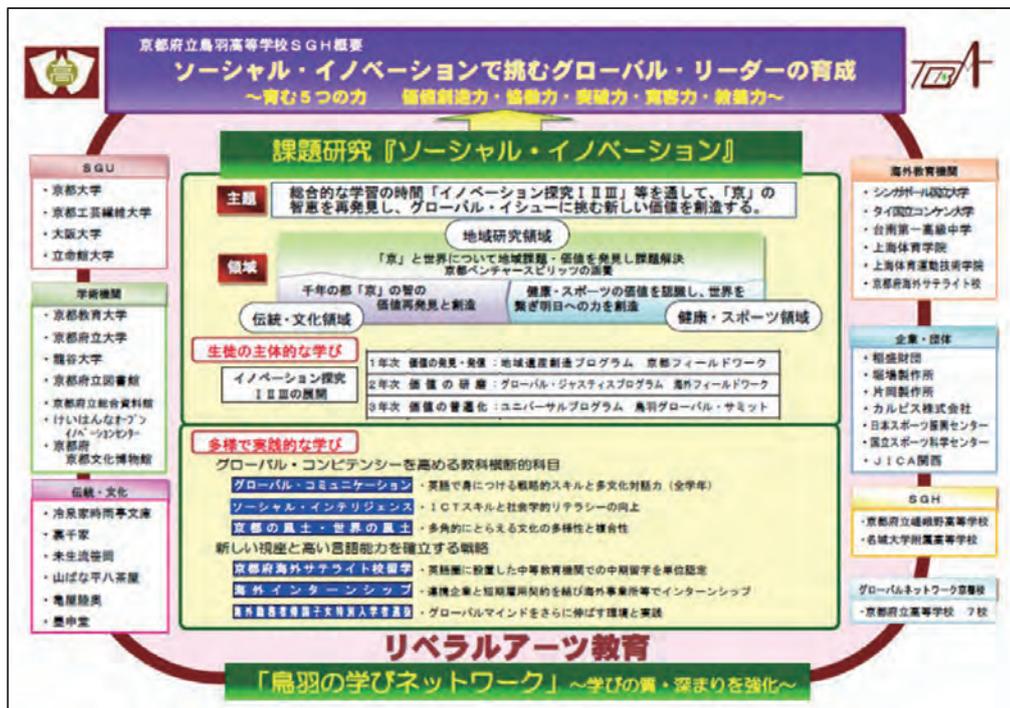
上記(右)のグラフは2016年度と2017年度の高校2年生を比較したものである。2016年度はSGH 1年目の年のためSGHの影響力がさほど大きくないと考えたため、当該学年で比較を行った。SGHを本格的に開始(2017)したことで、SGHでの力、特に「国際的視野」と「判断力」に関する力が大きく伸びた。これまで実施してきたSSHのみでは、これら2つの力を十分に伸ばせていなかったこともSGH実施で判明した。「協同して課題解決」にあたる力は、SSHのみの時よりもさらに強化されたことが解る。

京都府立鳥羽高等学校

ソーシャル・イノベーションで挑む グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

リベラルアーツ教育を基軸に、国内外の学術機関や企業等と連携した鳥羽の学びネットワークを活用して、グローバル・イシューに挑む新しい価値創造を目指す課題研究「ソーシャル・イノベーション」により、価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力を備えたグローバル・リーダーを育成する教育システムを研究開発する。



【平成 27・28 年度入学生 普通科（理数人文 G）教育課程】

年次	5	10	15	20	25	30
1	国際総合	現代社会	数学Ⅰ	数学A 化学基礎 体育 芸術 芸術Ⅰ	グローバル・コミュニケーションⅠ	グローバル・コミュニケーションⅡ
2	現代文B 古典B	数学Ⅱ	数学Ⅲ 数学B	生物基礎 化学 地学基礎 生物基礎	グローバル・コミュニケーションⅢ	グローバル・コミュニケーションⅣ
3	現代文B 古典B	地理B	数学Ⅳ 数学探究Ⅰ	倫理 政治・経済 数学探究Ⅱ 理科探究	グローバル・コミュニケーションⅤ	グローバル・コミュニケーションⅥ

【平成 30 年度 S-GH 対象生徒数】

第1・2学年 640名（普通科、グローバル科）、第3学年 124名（普通科） [全校生徒 960名]

SGH研究開発概要

京都府立鳥羽高等学校は、明治33年創立の京都府第二中学の歴史を受け継ぎ、文武両道・質実剛健の校風を持っている。平成27年度から普通科を対象にSGH研究開発を開始し、価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力の5つの力を備えたグローバル・リーダーの育成を目的とし、総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核とした教育課程を研究開発している。平成29年度に専門学科「グローバル科」を開設した。

教育課程表、時間割上の工夫

1・2年次の「イノベーション探究ⅠⅡ」については、隔週で行われる土曜授業において2時間連続の授業を行い、まとまった課題研究の時間を確保している。また、土曜日を活用しながら、高大連携による探究活動を実施している。

3年次の「イノベーション探究Ⅲ」については、英語論文の作成が主な活動となることから、SGH対象3クラスの生徒がICT機器を効率的に活用するために平日に授業実施している。

また、各学年1単位の「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」における課題研究を効果的に行うために、学年ごとに探究のプロセスにのっとった教科横断的な学校設定科目を設置している。特に、外国語の習得及び活用については、課題研究内容との関連を重視した取組を行っている。

学校設定科目、学校設定教科「グローバル」

1年次の「グローバル・コミュニケーションⅠ」においては、『京の智』を英語で発信することを目的とした英語プレゼンテーション、「ソーシャル・インテリジェンス」においては、課題研究内容に関連づけ、数学の統計的手法を踏まえたICT機器を用いたデータ分析の手法を学んでいる。

2年次の「グローバル・コミュニケーションⅡ」においては、課題研究で扱うグローバル・ 이슈をテーマとした英語ディベートをととした批判的思考力の育成、「京都の風土・世界の風土」においては、伝統・文化領域の課題研究と関連させつつ異なる地域の関係性を見いだす力の育成に取り組んでいる。

3年次の「グローバル・コミュニケーションⅢ」においては、アカデミック・ライティングに取り組み、英語論文作成に必要な表現や構成等を学んでいる。また、平成29年度に開設した「グローバル科」においては、「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核にして、専門教科「英語」、第2外国語（中国語、韓国語、フランス語）、古典Gや化学G等の学校設定教科「グローバル」を含む教育課程を編成し、これまでのSGHの取組をさらに発展させている。

「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」・指導上の工夫

1年次「イノベーション探究Ⅰ」においては、伝統・文化領域に関する課題研究ととして「京の智」の再発見に取り組むとともに、課題発見能力を高める等アカデミック・スキルの向上に取り組んでいる。

2年次「イノベーション探究Ⅱ」においては、伝統・文化、サイエンス、地域研究の3領域に分かれ、価値観の対立が起こるグローバル・イシューについてグループ協働による課題研究を行っている。

3年次「イノベーション探究Ⅲ」においては、2年次に行った課題研究内容に関する英語論文を作成するとともに、7月に行われる鳥羽グローバル・サミットにおいて、シンガポール国立大学や上海の復旦大学の学生、京都大学等の留学生と協働し、課題解決に向けた提言を英語で発表している。

指導上の工夫の1例として、高大連携をととした独自教材の開発がある。仮説を立てる力の育成に焦点化した「リサーチクエスト」の手法を用いた独自教材を、大阪大学や京都光華女子大学とともに開発中である。当初に立てた仮説に対して6つの問いを立て、その問いについてグループ協働でリサーチを行い、その仮説自体が適切かを複数回検討し、



＜「イノベーション探究Ⅱ」課題研究発表会＞

新たな仮説を立てる。仮説の質を高めることにより、以後の課題研究を効果的に行うことを目指している。また、この教材の各章に応じたルーブリック評価表を日本語・英語で作成し、11月に行う「イノベーション探究Ⅱ」課題研究発表会等において国内外の参観者・TAからフィードバックを受け、3学期以降の日本語・英語論文作成へとつなげている。

各教科への広がり、教科間の連携

「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等で研究開発しているアクティブ・ラーニングを軸とした指導法を各教科へ普及するために、学校設定科目・教科に加えて、他の科目においてもアクティブ・ラーニングをテーマとした公開・研究授業を年2回実施している。

教科間の連携を効果的に行うために、異なる教科・分掌の担当者による毎週1時間の「グローバル・リーダー育成推進グループ会議」を行い、研究開発の進捗状況、成果や課題を共有している。

また、「イノベーション探究ⅠⅡ」と学校設定科目・教科の両方を教える教員を増やすとともに、数学と情報の教科横断的な科目である「ソーシャル・インテリジェンス」では数学科と情報科の教員がチーム・ティーチングを行う等、円滑な教科間連携を行う工夫をしている。

学校体制としては、全教職員でSGHの役割を分担する1人1役SGHを推進している。その結果、4点満点のSGH事業に関する教職員アンケートの平均が平成27年度（研究開発1年次）の1.8から平成29年度（研究開発3年次）の3.2へ上昇するなど、SGHの取組が学校全体に広がっている。

SGH海外研修、海外インターンシップ

SGH海外研修を韓国・ソウル、中国・上海、台湾、全生徒対象の海外研修をシンガポールと上海で実施している。ハンヨン高校（韓国）との伝統家屋の保存問題に関する協働研究、国立台湾大学やシンガポール国立大学等と高大連携による課題研究、自治体国際化協会ソウル事務所でのプレゼンテーションやJETRO（日本貿易振興機構）上海でのインタビュー調査など、「イノベーション探究」における課題研究内容と研修先の特徴を踏まえた海外研修プログラムを研究開発している。

また、京都に本社を置くグローバル企業等と連携

し、グローバル社会で働く資質向上を目的とした海外インターンシップを行っている。株式会社片岡製作所、株式会社堀場製作所、村田機械株式会社、オムロン株式会社等に御協力いただいている。

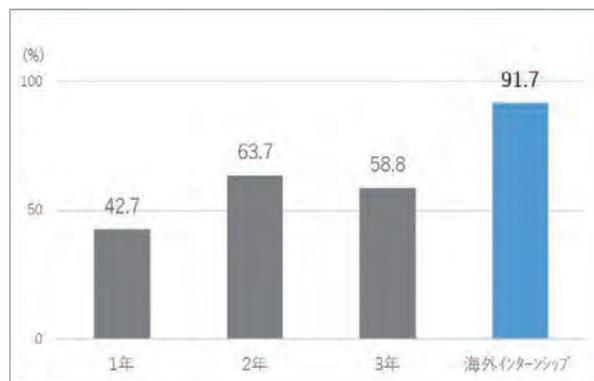
事前学習として株式会社片岡製作所の京都本社においてインターンシップを行い、代表取締役社長の片岡宏二氏からグローバル社会で働く上で大切なマインド・セットについて学ぶとともに、工場内でその基幹技術であるレーザー技術等について学ぶ。

海外におけるインターンシップのプログラム内容は現地社員と共同で作成する。例えば、上海では日本と異なる商習慣、シンガポールでは多文化協働力の重要性、韓国・台湾では日本・京都の技術の現地活用など、実際に海外の現地で働く上で必要とされる資質を向上させる上で、効果的なインターンシップ内容を共同開発している。



<オムロン上海インターンシップ>

平成29年度の海外インターンシップ参加生徒の変容については、帰国後の質問「海外で働くことや国際的な仕事への関心が高まった」について91.7%が肯定的に回答するなど（資料1）、同内容に関する全1年生の42.7%、全2年生の63.7%、全3年生



<資料1：海外で働くことや国際的な仕事への関心が高まった生徒>

の58.8%よりも高い結果となり、海外インターシップがグローバルなキャリア観の育成に結びつく取組となっていることがわかった。

国内における企業連携

国内においても、グローバル・リーダーに必要な教養力等の育成を目的とした企業連携を進めている。

株式会社松栄堂と連携し、国語総合において、日本における「香文化」や「香」の歴史をひもときながら、古典文学の中の「香」の役割を考察させる授業を行っている。生徒は言葉だけでなく文化的背景や歴史を多角的に知ることが古典文学につながることに理解が深まっている。

また、株式会社岡墨光堂と連携し、日本史Bにおいて、国宝「鳥獣人物戯画」の修復方法を学ばせ、その歴史的価値について考えさせる授業を行っている。生徒は歴史的文化遺産の保存と修復方法を知ることとおし、伝統技術の継承と価値を未来へ遺す意義を理解し、日本のみならず世界の文化遺産などを修復し継承することがグローバル社会に求められることを学んでいる。

高大社連携

SGH事業において取り組んできた高大連携と企業等との連携をさらに発展させ、三者合同で行う高大社連携事業を推進している。

京都中小企業家同友会 2017 高大社連携研修事業では、キャリア教育の一環として、グローバルな視点から「働き方改革」や「学び方改革」についてディスカッションを行った。

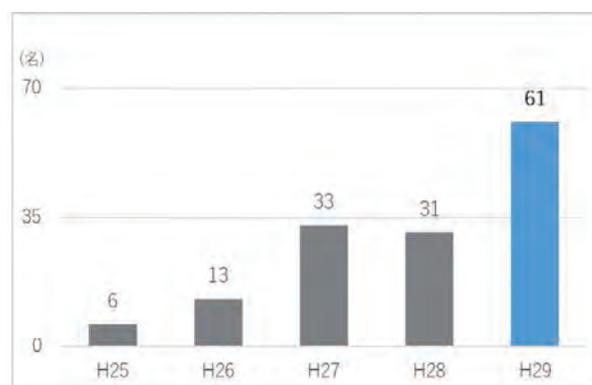
成果と課題

目標設定シートの項目に関しては、SGH指定前の平成25年度と平成29年度（研究開発3年次）を比較すると、「課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ数」が0回から260回へ、「自主的に留学又は海外研修に行く生徒数」が6名から61名に増加するなど（資料2）、グローバル教育を目的とした企業連携等を推進するとともに、

実際に海外に出て自主的・主体的に学ぶ生徒数が増加した。

研究開発中のカリキュラムの教育効果の検証については、本校独自の「仮説を検証するための指標」を用い、科目ごとの独自のルーブリック、生徒自身の相対的成長実感を問うアンケート、校内外からの授業評価、英語4技能の外部検定試験の結果等、様々なエビデンスを収集しつつ、多角的に検証している。

平成30年度（研究開発4年次）の課題はSGHの取組の教材化である。これまで「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」や学校設定科目等で個々に作成してきた教材を集積し、汎用性のある教材に改善したい。



＜資料2：自主的に留学又は海外研修に行く生徒数＞

成果普及の取組

昨年度は本校主催のSGH事業研究発表会等に加え、外部機関が主催する第15回高大連携教育フォーラム等、合計13回の研究発表を行った。

管理機関である京都府教育委員会と連携し、グローバル教育を推進する京都府立高校9校からなる「グローバル・ネットワーク京都」交流会において課題研究の成果やSGHの取組について発表した。

研究開発した教材や指導法をSGH校・SGH以外の高校と共有する「SGH教職員研修」、年3回発行のTOBA SGH NEWS、ホームページ更新（英語74回、日本語115回）等、多様な方法で研究開発の成果普及に取り組んでいる。

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

多面的に“いのち”を考える グローバルリーダーの育成

【構想の概要】

本校の構想の目的は、「多面的に“いのち”を考え、判断し、課題の解決に向けて主体的にアクションを起こすことができるグローバルリーダーの育成」である。その目的を達成するため「課題研究・フィールドワークの充実」「全教科におけるアクティブ・ラーニングの導入」「新たな評価法の構築」の3点を研究の柱とした。課題研究では、3つの研究領域「医療・保健」「防災・減災」「格差・貧困」のいずれかからグループごとに研究テーマを設定させている。また、「教科」「課題研究」の指導ツールとして「平野メソッド」を開発、指導の共通性と課題研究の持続可能性を担保している。



対象：全校生徒 360 名

- 「課題研究」(3年間6単位) 1年：日本・大阪に関する研究+国内FW・海外FW(3単位)、2年：アジアに関する研究+海外研修旅行+海外FW(2単位)、3年：“いのち”に関する総括論文の作成(1単位)
- 他者との協働性の重視：チームによる課題研究や教科における主体的・対話的で深い学びにより育成
- 教科・課題研究・海外研修旅行等の有機的な関連：重視する「4つの力」の育成をめざし、「教科」「課題研究」「海外研修旅行、国内FW、海外FW」が有機的に機能する教育課程を編成、全教員が指導
- 「平野メソッド」の開発：「平野メソッド」により学習ゴールの共通理解、指導の統一性を担保
- 評価開発：グローバル人材評価テスト(GPAT)を開発、生徒の変容とカリキュラム全体を評価

カリキュラムの特徴

1. 「教科」「課題研究」「研修旅行等」の有機的関連 ～各教育課程をとおして育成する「4つの力」～

本校では、「教科」「課題研究」「海外研修旅行等」をとおして「4つの力（課題解決力、コミュニケーション力、多文化理解力、セルフマネジメント力）」の育成を目指している。「海外研修旅行等」は、「教科」や「課題研究」の学習の流れに組み込まれており、現地では、研究課題の本質の追究や、考案したアクションプランの実施・発表などを行っている。

2. 学校設定教科と課題研究の関連

本校では、学校設定科目「生命の倫理」及び「公共と経済」を設定している。

「生命の倫理」は、ディベートを取り入れながら生殖医療・終末医療に関連するテーマ学習を実施し、論理的思考力やコミュニケーション力の育成に重点をおいている。

「公共と経済」は、社会の仕組みを幅広く学び、課題研究のアクションプランの創出に寄与している。特に、社会課題の解決に向けた考察では、自助・共助・公助という3つのフェーズを学び、個人・地域・行政の関わりについて理解を深めている。

3. 教科や課題研究を支えるベースづくり

（チームビルディング）

本校では、1年入学後の約1ヶ月を学習全体のベースづくりの期間と位置づけている。他者との関係性の構築について「多様性」と「コンセンサス」をキーワードに、「平野メソッド」を利用したチームビルディングを学ぶ。他者との違い（多様性）を認識しながら、目的集団としてのコンセンサスの必要性・重要性について時間をかけて学習している。その結果、合意形成の

プロセスでは、多数決による短絡的な合意が極端に少なくなり、多様性と合意形成についての認識が高まっている。これらは、「教科」における主体的・対話的で深い学びや、チームで取り組む「課題研究」の推進基盤となっている。

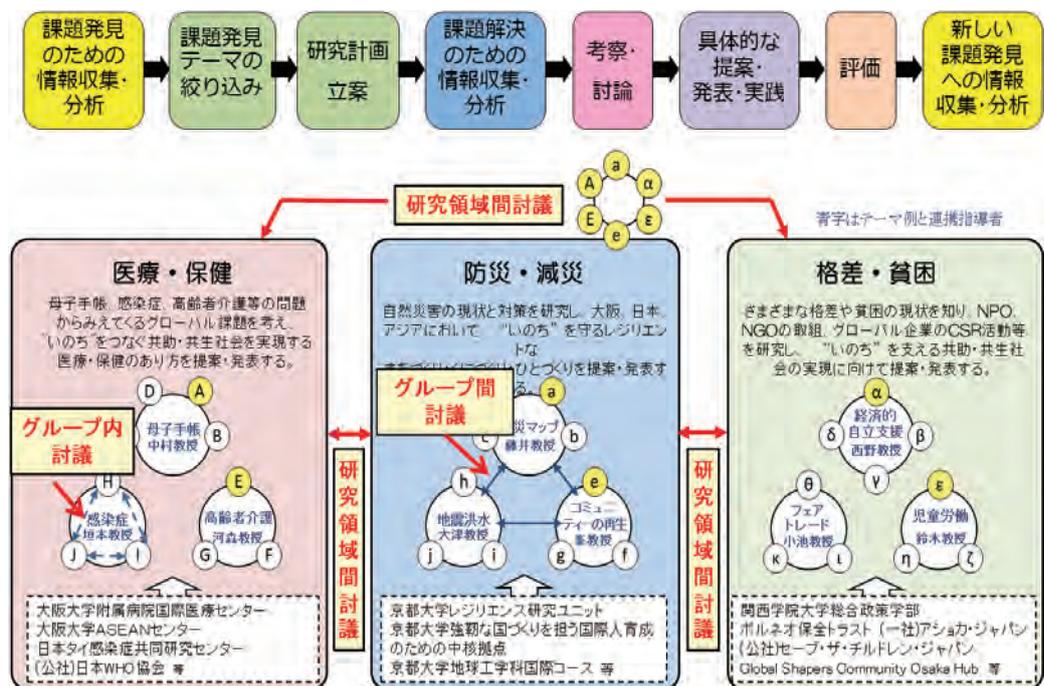
4. ジグソー法を効果的に配置した学習

下図は、本校の「課題研究」の学習プロセスと、多重構造のジグソー法による学習方法を示している。PPDAC*¹による研究プロセスを導入し、その中にジグソー法を組み込み、理解の定着と深化をめざす。「課題研究」においては、「研究領域内」と「研究領域間」でそれぞれジグソー法によるディスカッションを行っている。「研究領域内」では各チームのテーマを超えてその研究領域の課題について討論を行い、「研究領域間」では、それぞれの研究領域を超えて“いのち”に関する課題について討論している。このように、課題を多面的に考察する力も高められている。

* 1 PPDACとは課題解決における各段階をProblem（課題設定）、Plan（計画）、Data（データ収集）、Analysis（分析）、Conclusion（取りあえぬ結論）に分けた考え方である。

平野メソッド

「平野メソッド」とは、本校の「課題研究」の指導実践をもとに開発した指導法・評価法ツールの総称である（次ページ表1参照）。



ツールの機能	名称と内容
チームビルディングツール	「ディケンシント」多様性を体験するゲーム 「命の写真」多様性を認識しながら合意形成へと向かうためのツール 「NASAゲームなど」立場の認識と選択に関するゲーム
課題発見・原因追及ツール	「強み繋がるネットワーク」興味関心から課題へとつながるツール 「QFT」問いかけに特化したブレインストーミング 「4QS」素朴な疑問(問い)を検証可能な仮説へ導くツール
情報収集ツール	「情報カード」収集した情報をまとめるカード、課題研究における反転学習ツール
基本ツール	「ミニマムリスト」論文・ポスター発表に必要な項目内容の整理 「逆引きロジックツリー」ミニマムリストの関係整理図
ポスター作成ツール	「課題研究進捗状況表」各グループの課題研究の進捗一覧表(教員指導用) 「ポスターコード36」ポスター発表に必要な項目をルーブリック形式に表現したもの 「ミニマムからポスター作製へのブリッジシート」 論点を整理し、ポスターにおける内容と配置を決めやすためのツール 「ポスターの各セッションを磨き上げるためのツール」 ポスター作製における具体的な技法を紹介した資料 「ポスター作製後のチェックシート」 作成したポスターで使った技法をまとめて今後の作成に生かすためのツール
評価ツール	ポスター発表のルーブリック 口頭発表のルーブリック

例えば、「ミニマムリスト」は、研究を行っていくうえで必要なプロセス 14 項目をまとめたツールである。これらの内容について調査や考察を行うことで、生徒が主体的に研究を進めていくことができるようになってきている。これを活用することで、各教員が課題研究の指導のポイントを共有し、生徒の研究の質的担保が可能となった。本校は、学年団 3～4 名が約 30 グループの研究を指導しているため、一人あたりの担当グループ数が多い。このツールの導入により、生徒の主体的な活動が進み、少ない指導者での指導も可能となった。

ミニマムリスト

課題研究においてポスターや論文作成に必要な最低限の項目を示し、研究の論理の流れを意識して生徒が研究課程を自己点検し、指導と評価の要となるワークシート

課題研究の論理構法を14項目に細分化

各項目のサマリーを書き込み式のワークシートでモニタリングでき、生徒のグループ内コンセンサスの投資量が容易になり、研究の進捗状況に応じた指導と評価が可能

14項目それぞれの内容が端的に示され、生徒の達成目標と教員による指導の程の共通指針となる

また、「ポスターコード 36」は、「ミニマムリスト」でまとめた研究内容をポスターにするときに使用するツールである。これは、ポスター作成に必要な 36 の項目を色分けして記しており、「黒色」→「青色」→「緑色」→「オレンジ色」→「赤色」というようにポスター作成に必要な事項を段階的・時系列的に生徒に提示している。はじめは「黒色」で記された項目を、次には少し難しい課題（「青色」）が示される。ポスター作成に必要な 36 項目を一気に提示するのではなく、「黒」→「青」→「緑」→

「オレンジ」→「赤」の順で課題を示すことで、取り組む内容を明確にさせていく。このツールによって、生徒がポスターの作成過程を理解し、主体的に取り組むようになった。また、教員も指導のポイントを明確にしながら授業に臨むようになった。

ポスターコード36

ポスター作成の過程を36のコードに分類。さらに指導の時期ごとに到達目標を段階的に明示。カラーコードのステップでポイントが明確になり、緻密な指導が可能

指導の時期に応じて到達目標が一文の中に加算されていく

5枚探りのコードを1枚に集約。教員は色分けされたコードを読み取ることで、現在の到達目標と同時にこれから先の目標がこの1枚で一目で、先を見越した個別指導が可能

生徒は授業発表会の開催に合わせてこのコード分類に基づいて質問することで、議論の質が明確になる

教科の学習と SGH でめざす学力の関係

本校では、全教員がグローバルリーダーとして必要な「4つの力」を意識しながら「教科」の授業を行っている。これまで各教科から約 30 の実践報告があるが、表 2 はその中からピックアップした授業例と「4つの力（A 課題解決力 B コミュニケーション力 C 多文化理解力 D セルフマネジメント力）」の関係を示したものである。例えば、物理基礎での反転授業の実践では、生徒がより能動的に授業に参加するようになり、問題を解く際に互いに教えあう場面が増えた。また、体育では、KJ 法やロジックツリーを活用してゲーム分析を行い、生徒自身がチーム課題を発見し、具体的な練習計画を立てるようになった。

表2「4つの力」の定着をねらった教科学習

教科	単元：テーマ	ねらいとする「4つの力」
国語 総合	「パネルディスカッション」	A・B・D
古典	「4QSによる『土佐日記』の実践」	A・B・D
数学 数B	「円錐曲線におけるピアティエーチング」	B
数I	「校舎の高さを測ってみよう」	A・B
理科 物理	「物理科における反転授業の実践」	A・B
化学	「ジグソー法を取り入れた主体的で協働的な学びの実践」	A・B
地歴・公民	「ルネサンス期の人物・作品についてポスターを作成する」 「課題研究のテーマを歴史的観点からアプローチする」	A・B・C A・B・C
英語	「即興型英語ディベート」 「ショー・アンド・テル(物や写真を見せながら話す活動)」	A・B・C・D A・B・C・D
オーラルサマリー(教科書の要約を作成して発表する活動)	A・B・C・D	
保体 体育	「チームで戦略をたてて楽しむサッカー」	A・B・C・D
保健	「多面的に「いのち」を考えるーハンセン病についてー」	A・B・C・D

SGH に係る評価指標の開発

本校では大阪教育大学アセスメントグループと連

携し、SGHの各カリキュラムや生徒の変容について調査・改善を行っている。

1. 生徒の資質能力変容調査

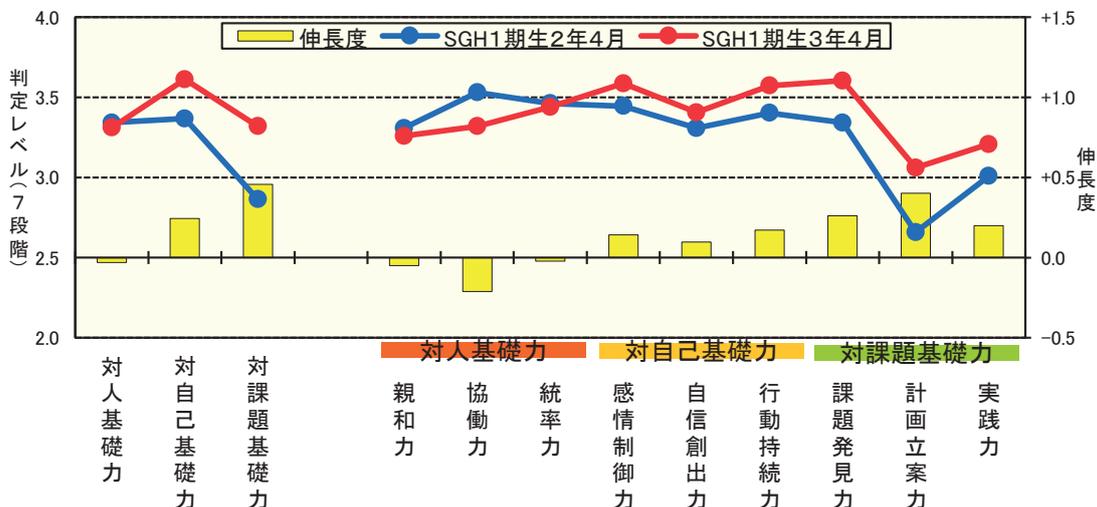
本校では、生徒の「4つの力」の変容を客観的に評価するために、生徒の認知面（自己をどのように認知・評価しているか）と行動面（課題に対してどのような対応・行動を行うか）の2面から継続的に評価を行っている。

生徒の認知面の評価に関しては、「SGH生徒アンケート」を実施（年1回）することで、1年間の認知面の変容を捉えている。SGH1期生の分析結果では、1年次から3年次にかけて、本校の3つの研究領域の課題に対する「興味・関心」の伸び、「問題を議論・把握できる」といった自信が高まった。また、自分が研究していないグローバル課題に対しても、「興味・関心」や「問題を議論・把握できる」の項目が伸びた。このように、自らの研究内容だけでなく、他の研究内容に関する理解も深まっている。

行動面の変容に関しては、PROG調査（知識を活用して問題解決をする力を測る調査）を毎年4月に実施しており、その変容を分析している。PROG調査の評価項目は多岐に渡るが、本校が育成を目指す「4つの力」の中の「課題解決力」「セルフマネジメント力」については、下図の「対課題基礎力」の3つの項目と「對自己基礎力」の3つの項目において変容が見て取れる。

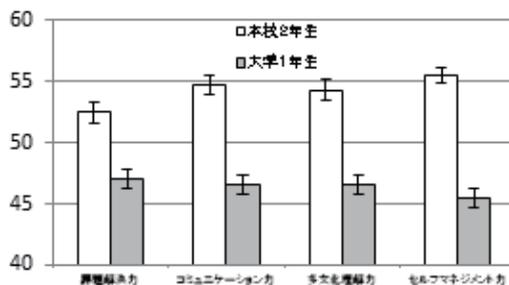
2. グローバルリーダーの新たな評価指標（GPAT）の開発

PROG調査における行動特性の観点は、本校の



「4つの力」と関連するものの、すべて一致しているわけではない。そのため、「4つの力」に焦点を絞った本校オリジナルの評価指標（GPAT）を試作し、実施・分析した。

評価問題は「4つの力」のそれぞれの評価項目に対する25問の多肢選択型問題とした。問題例や点数のつけ方に関しては割愛するが、昨年度、本校の2年生と近隣の大学1年生に同じ問題を解いてもらった。SGHの指導を1年半学習した本校生の方が、「4つの力」すべての項目において高得点だった。



SGH 教員交流・研修会による成果の普及

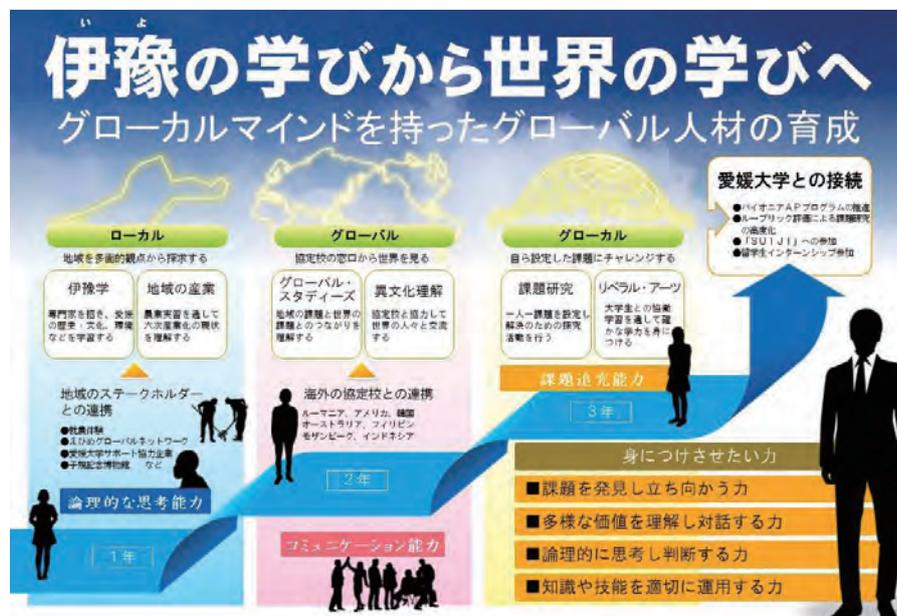
本校は、毎年、研究成果を普及するため「平野メソッド」や課題研究の進め方を紹介する「SGH教員交流・研修会」を実施している。昨年度は全国から64名の学校関係者が参加した。参加者へのアンケートでは「研修会での情報は今後役立つ」という項目では、「そう思う79%」「どちらかといえばそう思う21%」であった。また、100%の方が「今後もこのような研修会に参加したい」と回答した。

愛媛大学附属高等学校

伊豫の学びから世界の学びへ ～グローバルマインドを持ったグローバル人材の育成～

【構想の概要】

- グローバル人材の育成に資する課題研究を中心としたカリキュラムの開発・実践
- 大学や企業、海外の協定校等と連携したカリキュラムの開発・実践
- 地域の課題と世界の課題との繋がりを理解し、生徒自らが設定した課題に失敗を恐れずチャレンジする精神の育成を図るカリキュラムの開発・実践
- 本取組を広く公開し、グローバルな視点で社会課題を解決することにより地域社会の発展を支える人材育成の拠点校としての役割遂行
- 全教職員が主体的に取り組む組織作り



■ 教育課程表 (全日制 総合学科 1学年 120名)

学年	必修科目																	選択科目																
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
1年次	1年全員																	1年全員																
2年次	1年全員																	1年全員																
3年次	1年全員																	1年全員																

※SGH対象生徒：全校生徒（360名）

学校設定科目

本校の目指すグローバル人材は、地域の課題と世界の課題を統合的に捉えるグローバルな視点を持ち、社会課題に対して失敗を恐れずに挑戦し続ける人材である。そこで、上記の教育課程表に示したように、1年次の地域のプロジェクト学習から、2年次のグローバルな協働的課題発見解決学習を通して、3年次で個性豊かでグローバルな探究的課題研究、大学生と共に学ぶ専門性の高い二重単位付与授業の受講へとつながる一貫性のあるステップアップ型のプログラムを開発した。

(1) 1年次設定科目

「伊豫学」では、愛媛大学の全学的組織と連携の下、愛媛大学長をはじめとした大学教員延べ54名による、愛媛の自然環境、文化、産業、歴史、科学技術と情報、医療と福祉、国際社会とのつながり等をテーマとした課題発見解決型の授業を実施できた。さらに、地元企業や外国政府機関と連携した特別授業を実施した。

本授業では、課題をグループで討論し、解決に導く課題解決学習を取り入れ（図1）、主体的に課題を発見し、解決する力を身に付け、論理的な思考力やコミュニケーション力を養った（表1）。教科横断的に教員を配置した指導体制を構築するとともに、愛媛大学教員や、地元企業の有識者による指導を含めて学習をさらに深化させた。



図1：課題解決に向けたディスカッションの様子

表1：具体的能力が身に付いたと回答した生徒の割合（H28年度）

・課題を発見し立ち向かう力	74%
・多様な価値を理解し対話する力	93%
・論理的に思考し判断する力	81%
・知識や技能を適切に運用する力	86%

「地域の産業」においては、PDCAサイクルを利用したプロジェクト学習方式を取り入れ、本校農業科教員（8名）が担当し、農業の六次産業化や国際化の現状を理解し、主体的に身近な地域の課題を発見・探究する授業を行った。校内でプロジェクト学習発表大会を開催し、学習成果（地元企業と連携した商品開発プロジェクト等）を発表することで、全校生徒に研究内容を共有した。SGH報告会においても地域産業に関する研究成果を発表する機会を新設した。

(2) 2年次設定科目

「グローバル・スタディーズ」では、愛媛大学の教員による、課題発見解決型の授業を60時間（全体の74%）実施し、地球環境と倫理、農林業、工業、生態系等をテーマに、1年次に学習した地域の課題と世界で起こっているグローバルな社会課題との繋がりについて学習した。また、愛媛大学の留学生（8名）との共同による新たな教育プログラムを企画・実施（図2）した（トークライブ、ディスカッション、プレゼンテーション、グループワークによる授業実践）。



図2：外国人留学生との共同授業

「異文化理解」では、生徒がグループとなり、海外の生徒とも交流を行いながら、地域の課題と世界の課題との繋がりを学ぶ授業を行った。海外研修では、協定校等（5か国：5高校、2大学）を本校2年生120名中の35名（アメリカ：6名、フィリピン：6名、ルーマニア：6名、韓国：12名、オーストラリア：5名）が現地渡航し（平成28年度実績）、協働的な課題解決学習を行った。他の年度においても同等の人数が海外研修に参加している。

渡航前の学習は、2年生全員が参加し、英語資料を基に課題発見・解決型の意見交換や研究交流を行うための学習を行った。また、事前指導より、本校

教員と対象国や内容に詳しい愛媛大学教員（5か国それぞれに本校教員2名と大学教員2名による指導体制：計20名）とがペアとなって指導する体制を構築し、質の高い実践的な学習になるよう工夫した。ここでも連携大学の留学生によるサポートを受け授業を実施した。海外研修引率においては、地歴・公民科と英語科の高校教員、法文学部と教育学部の大学教員が4名で一組になって指導、研修引率をする等、校外で教科・学問分野を超えた連携を行った。

(3) 3年次設定科目

「課題研究」では、愛媛大学の全学部（7学部）及び大学附属施設・機構等の組織との連携により、本校3年全生徒（120名）に対して、大学教員約50名が指導者、本校全教員がアドバイザーとして研究をサポートし、地域あるいは世界の課題を設定し、1年間をかけて探究型調査・研究を行った。本校の課題研究は、1年次から課題発見・解決能力などを涵養する授業を展開し、生徒が共通テーマを追究するのではなく、各自がその進路を視野に入れつつ一人一課題で自分の興味関心を、広い文脈から深く追究することをその特長としている。また、愛媛大学と連携を図り、次年度の本実施に向けた組織（課題研究コーディネータ会議）を構築することができた。その結果、9月に課題研究成果発表会（一般公開）（図3）を実施し、2月には課題研究代表者発表会（一般公開）を実施することができた。

大学教員のアンケート結果より、高校教員との連携について94%の教員が良好と回答している。（平成28年度）



図3：課題研究成果発表会の様子

「リベラル・アーツ」では、愛媛大学との連携により、高校のカリキュラムの一部として、3年生全

員（120名）が愛媛大学共通教育科目10講座から1講座を選択し、大学生と一緒に受講した。大学生と同じ基準で評価を受け、十分な成績をあげた場合には愛媛大学入学後に正規の単位として認定する高大接続を実質化する制度（デュアル単位付与）を確立できた（単位認定者：平成28年度：106名、平成29年度99名）。

成果と課題の分析検証

(1) 生徒の変容調査

SGH事業の成果を分析するために1年生を対象に入学直後（5月）と3学期中（1月）に質問紙調査を行った結果、以下に示すように留学や海外研修及び国際的に活躍したい生徒の割合が増加した。

（平成27年度）

- ①留学または海外研修に参加したいか
指定前の肯定的回答率：63% → 指定後：82%
（19%増）
- ②将来留学や仕事で国際的に活躍したいか
指定前の肯定的回答率：36% → 指定後：53%
（17%増）

(2) 地域（愛媛）に関する記述式調査

地域（愛媛）に関する知識量を計るために記述式の質問紙調査を1年生全生徒に行った。SGH指定前後ですべての項目において、キーワード数が著しい伸びを示した。（平成27年度）

- ①地域（愛媛）の課題、またその解決方法
指定前：1.1個 → 指定後：5.7個（約5.2倍）
- ②世界の課題、その解決方法
指定前：1.6個 → 指定後：5.3個（約3.3倍）

(3) 海外研修前後の生徒の意識変容調査

海外研修渡航前後に質問紙調査を渡航者全員を対象にして行った。多くの項目で国際交流に関わる自己有能感が大きく上昇した。（平成28年度）

- ①海外の高校生に日本の文化や習慣を説明できる
研修前の肯定的回答率：89% → 研修後：100%
（11%増）
- ②海外の文化や習慣を級友に説明できる
研修前の肯定的回答率：72% → 研修後：100%
（28%増）
- ③世界の様々な国で自分を役立てることができる
研修前の肯定的回答率：44% → 研修後：66%
（22%増）

(4) 教員の意識変容調査

教員の意識変容調査を、全教員対象に実施した。本校SGHの取組によって、ほとんどの教員のグローバル人材育成の重要性に関する意識が変容しており（表3、4）、本校教員はSGH事業の重要性を認識・共有できており、学校の環境や教員本人の意識も、グローバル人材の育成へ向けて変化していた。

表3：グローバル人材育成の重要性に関する意識の変容

意識の変容があった	86%
あまり意識変容がなかった	14%
意識変容がなかった	0%

表4：本取組がグローバル人材育成につながっているか

その様に考えている	86%
あまりそう思わない	14%
思わない	0%

成果の普及

認定（平成27年）以降、平成29年度までに本事業の成果の発信に積極的に取り組んでいる。

(1) 研究成果に関する発表会

- ①課題研究成果発表会（9月） ②SGH報告会（2月） ③課題研究代表者発表会（2月）

参加者総数（①＋②＋③）：約1,180名

(2) 本校HP、管理機関HP、SGH専用HP作成

①本校のHP：本事業の取組みや成果を定期的に情報発信した（更新数：226回）。平成27年度に日本語版及び英語版のHPを開設し積極的に情報発信した。※第1回全国農業高校・農業大学校ホームページコンテスト愛媛県最優秀賞

②管理機関のHP：愛媛大学の広報部局と連携し、愛媛大学のHPにおいても本事業の取組みや成果を積極的に情報発信した。

(3) 生徒による研究発表等（44件、受賞等28件）

(4) 教員による研究発表・論文掲載等（19件）

(5) 報道機関による報道（61回）

先進的・特徴的な取り組み

(1) 国内の大学との定常的な連携

全国的にも数少ない大学の附属高等学校という特色を活かし、組織的で継続性のある専門性の高い連携を行った。

①高大連携事業としての二重単位の付与

3年次の設定科目「リベラル・アーツ」において120人全員が、週1コマ愛媛大学のキャンパスに通って大学生とともに共通教育科目を受講した。大学生と同じ評価基準で十分な学修成果をあげた場合には入学後に大学の正規単位として認定する二重単位付与を実施した。

平成27年度10月から愛媛大学公開授業「英語総合I」を開講し、放課後の時間を利用して大学レベルの授業を受講した。授業は全15回の日程で、愛媛大学の成績評価基準による評価を行い、二重単位が付与された。

②大学と連携・開発したルーブリック評価による「課題研究」の高度化・標準化と入試への活用

「課題研究」で培われた「確かな学力」の測定のため、愛媛大学と協力してルーブリックを新規に開発し、活用した。このルーブリックは、評価の妥当性・客観性を向上させるだけでなく、「課題研究」自体の高度化を促すものであった。

③高大で一貫して汎用的能力を育むICT教材の共同開発

高校から大学への教育の一貫性を高め、汎用的能力を育成するために、「情報リテラシー入門」や「日本語リテラシー入門」等のICT教材を共同開発した。

(2) 国外の大学・高校との交流協定締結・連携

本校独自に2校（平成26年10月：ルーマニア：イオン・クレアンガ高校、平成27年4月：オーストラリア：セント・アンドリュース高校）と交流協定を締結した。また、平成30年度には、新たに姉妹校協定を締結する予定である。さらに、現在国外の大学・高校との定常的な連携を図るための、新たなホームページを作成している（平成30年8月公開予定）。

中村学園女子高等学校

地球規模の課題「食」を通じた グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

グローバル・リーダーに必要な資質を、「食」という地球規模の課題に対し、国内外の機関と連携して解決に取り組むことを通じて育成する。併せて、グローバル・リーダー育成のために必要な教育課程、ルーブリックによる評価法等を開発する。



平成30年度 教育課程表

教科	科目	標準 単位	高 1			高 2			高 3		
			進学	進学 以外	SG	進学	SG	進学	SG		
国語	国語総合	4	5	5							
	現代文B	4			3	3	3	3	3	3	
	古典B	4			4	4	4	3	3	4	
地理 歴史	世界史 A	2	2	2							
	世界史 B	4			4			4			
	日本史 A	2	2	2				5		5	
	日本史 B	4									
地理 B	4			3	3			3	3		
公民	現代社会	2	2	2							
数学	数学 I	3	3	4							
	数学 II	4			4	3	4	4	2		
	数学 III	5							5		
	数学 A	2	2	2						2	
	数学 B	2			3	3	3		2	2	3
	数学演習	2								3	2
理科	物理基礎	2	2	2							
	物理	4									
	化学基礎	2			3	2		3			
	化学	4				2	3			3	
	生物基礎	2	2	2							4
	生物	4									
	化学基礎演習	2							3		
生物基礎演習	2							3			
生物化学基礎演習	2										
保健 体育	体育 7~8	2	2	2	2	2	3	3	3	3	
	保健	2	1	1	1	1	1				
芸術	音楽 I	2									
	美術 I	2	2	2							
	書道 I	2									
	音楽 II	2									
	美術 II	2						2			
	書道 II	2									
英語	英語 I	3	4	4							
	英語 II	4			4	4	4				
	英語 III	4						4	4	4	
	英語表現 I	2	2	2							
英語表現 II	4			3	3	3	3	3	3		
家庭	家庭基礎	2	2	2			2				
	フードデザイン	2								2	
情報	社会と情報	2	1	1				1	1	1	
	総合的な学習	3	1	1	2	2	2	2	2	2	
教科合計単位		36	36	36	36	36	36	36	36	36	
道徳							(1)			(1)	
特別活動	ホームルーム	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
選当りの授業時数		37	37	37	37	37	37	37	37	37	

※SGクラスおよび本校で最も多いクラスのみを記載した。黄色部分がSGH対象。
 ※数学演習・化学基礎演習・生物基礎演習・生物化学基礎演習は学校設定科目
 ※SGコースについては総合学習の時間を探究科にあてる

本校は、福岡市西部の副都心の西新にほど近く位置し、生徒数約 1,350 名（高校：1,250 名、中学：100 名）、創立 58 年の全日制普通科の女子校である。創立者の中村ハルが教育者であり食の専門家であったことから、創立以来充実した食育を行っている。この創立者の精神を受け継ぎ、「食」に焦点を当てた課題解決を通じたグローバル人材の育成をテーマとして、平成 26 年度 SGH アソシエイト、翌 27 年度より SGH 校の指定を受けて事業を展開している。

1. 学年ごとの目標と主な取り組み

本校での SGH 事業における研究開発は、地球規模の課題である「食」に取り組む PBL を主軸としたカリキュラム開発である。また、本校の考えるグローバル・リーダー像とは、①地球規模の課題に対する深い関心を持ち、自主的に学習し教養を深めることができ、②多様性を認めながら、主体性を発揮できるためのコミュニケーション能力を持ち、③自ら課題を設定し、他者と協力して解決にあたることのできる資質を持つ人材である。これらの資質を身につけるために、学年ごとに目標を掲げ、それを達成すべく様々な取り組みを行っている。以下、学年ごとの目標と主な取り組みを挙げる。なお、本校での SGH 対象生徒は、1 年生全員、2・3 年生 SG クラス（各学年約 30 名）である。

1 年次：「グローバルマインドの醸造と広範な知識の獲得」…①グローバルキャンパス（全員参加の外国人留学生との 2 泊 3 日の宿泊研修。食に関する PBL により、ディスカッション、プレゼンテーションなどを英語で行う。）、②海外フィールドワーク（アメリカ・カリフォルニア州にて、食に関わる自己の探究課題について現地調査などを行う、ホームステイを含む約 10 日間の希望者による研修。）

2 年次：「課題解決能力の育成とコミュニケーション能力の飛躍的向上」…①探究科（後述）、②海外フィールドワーク（SG クラス修学旅行。マレーシア・シンガポールでの研修。個人の探究テーマに基づき現地の姉妹校や大学、日系企業と協力して調査などを行う。）

3 年次：「課題解決能力の獲得と世界への発信力の飛躍的向上」…①食のサミット（後述）、②論文（探究活動の成果物）作成

この他にも、SGH 報告会では、SG クラスによ

る活動報告や全校生徒が食のテーマに基づいたポスター発表などを行う。SG 講座・講演では、大学や企業などから講師を招き、グローバルな視点やキャリア形成、食に関するトピックなどを学ぶ機会を年に数回開催し、中学生や SGH 非対象の高校生を含めた学校全体として取り組み、本校のホームページにも掲載して事業成果の波及と向上を図っている。

2. 本校の先進的・特徴的な取り組みとしての「SG クラス」「探究科」および「食のサミット」

(1) SG クラスの特徴

SG クラスは、SGH 事業の核となるクラスであり、2・3 年に 1 クラスを設けている。1 年次での食の学びに興味・関心を持ち、学びをさらに深化させ、グローバル・リーダーとしてのスキルの獲得を目指す生徒のクラスである。1 年 2 学期に希望者がエントリーし、英語面接やプレゼンテーションを課す選考会を経てメンバーを決定する。エントリーシートには、これまでの講演・講座の受講状況、レポートの提出数、資格、受賞歴などのポートフォリオを記すよう義務づけており、本校独自の基準を設けてこれらを点数化し選考資料としている。

また、クラスは、難関大学志望の生徒を集める特進コースの扱いであるが、放課後の課外を探究活動にあてることや、全ての教科指導をアクティブラーニング型で実施しているところに特徴がある。

(2) 探究科

SG クラスでは、総合的な学習の時間を 2 単位に拡大し、教科横断型の「探究科」を設けている。これは、SGH 事業の核となる科目であり、2 年次では年間を 4 つのクールに分けて食に関する 4 領域を教科横断型の PBL で進めていく。これによって、食の知識・理解の深化とともに、問題点とその解決法を見出すためのトレーニングを重ね、特に興味・関心を持った領域の中から独自の課題を見出していく。昨年度の 2 年生で実施した授業内容は次表 1 の通りである。それぞれのクールにおける指導者は、個々の教科での指導内容ともリンクさせながら、探究科の指導チームを組んで専門領域を越えた指導を行っている。また、各クールでの評価にはルーブリックを用いることで、生徒は取り組む前に何が評価されるかを知り、取り組み後もどんな力が身につく、どこを修正・改善すればよいかがよく分かる

ようにしている。

表1 2年次「探究科」の実践計画（平成29年度）

項目	内容	実施月	時間数	教科
オリエンテーション	①活動内容の説明	4月	2コマ	全教科
第1クール 食と社会文化	①食と社会文化に関する講義・ブレインストーミング	4月	2コマ	地理公民科
	②6班に分かれ調査		2コマ	国語科
	③KP法によるグループ発表		2コマ	家庭科
	④各国の食事情の調査・発表	6月	2コマ	道徳科
	⑤茶道実習		6コマ	(外部講師)
	⑥ハラル料理に関する講演・ハラル調理実習		4コマ	
第2クール 食と環境	①食と環境の現状と課題の学習	6月	5コマ	理科
	②英語教材を用いた堆肥化の学習		2コマ	英語科
	③簡易コンポストの製作	9月	2コマ	国語科
	④外部講師による講話「食と農業」		1コマ	情報科
	⑤堆肥化データ計測と分析、課題の個人発表		4コマ	(外部講師)
第3クール 食と経済	①班ごとにテーマを設定	9月	4コマ	国語科
	②ポスターの製作		2コマ	数学科
	③文化祭での発表・実践	10月	—	(外部講師)
海外フィールドワーク	①しおり作成・事前学習	10月	2コマ	担任
	②マレーシア人留学生による講話		2コマ	引率者
	③海外フィールドワークの実践	11月	—	(外部講師)
	④班ごとの発表（スライド）、個人探究レポートの作成・評価		3コマ	
第4クール 食と栄養	①世界の給食	11月	2コマ	家庭科
	②日本の給食とお弁当、献立の作成、栄養価計算	12月	4コマ	地理公民科
	③班ごとの調理実習・相互評価	12月	2コマ	情報科
今年度の活動のまとめ	①ポートフォリオの作成	2月	2コマ	情報科
	②SG報告会準備		4コマ	担任
次年度準備	個人探究	3月	4コマ	担任

3年次は、2年次に決めた自己の探究課題から問題点を見出し、その解決法を探っていく。生徒は、最終的にこれを論文としてまとめて提出する。

(3) 食のサミット

①目的と位置づけ

生徒たちがこれまで取り組んできた一連の探究活動の集大成の場が「食のサミット」である。

第1回大会は、中村学園大学主催の「薬膳EXPO2017」との共催行事として、昨年9月1日に福岡国際会議場で開催した。ここに至るまでに生徒たちは、1年次における食の広範な知識の獲得に始まり、2・3年次のSGクラス探究科において課題設定と問題点の抽出およびその解決法を探ってきた。これと同様の手法で、サミットのテーマに基づいた課題設定と問題点の抽出を行い、チームで考案した解決法を披露する。さらに世界各国から選抜され集まった中高生と意見交換して議論を重ね、共同提言書を作成し、国連関係機関（国連WFP協会など）に提出することで、永続的で協働的な問題解決へのメッセージを国内外へ発信する。

②実施までの流れ（今年度）

- ・テーマ決定・募集要項作成：1月末まで
- ・エントリー開始：2月より
- ・エントリーメット：3月末まで
- ・本選出場者選考：4月末まで

・出場者来校／プレ会議：7月27日（土）

・サミット：7月28日（日）

③サミット概要（下表2）

参加資格は世界各国の中高生であり、エントリーにはチーム名、メンバー名（3～5名）、提言書（大会テーマに基づいたチーム独自のテーマ、課題とその解決法を記入したもの）、主張ビデオ（課題とその解決法をまとめた動画）の提出が必要である。エントリーしたチームの提言書と主張ビデオを実行委員会で選考する予選を行い、本校1チームを含む全6チームを本選出場とする。本選では、主張プレゼンテーションと質疑応答を行い、参加者全員の投票と審査委員によるルーブリック評価により、最優秀チームを選考し表彰する。また、サミット前日にプレ会議を開催し、各チームの提言案をまとめて共同宣言案を作成する。これをサミット当日に最終調整し、共同宣言書としてまとめ、国連関係機関（昨年度は国連WFP協会）に提言する。

表2 食のサミット2018スケジュール（予定）

時刻	内容〔場所〕
1日目：7月27日（金）	
13:30	午前中までに各チーム福岡入り、本校到着 食のサミットプレ会議 〔視聴覚室〕 全体会→分科会→全体会 17:30終了
2日目：7月28日（土）	
出場チーム 参加者（教職員含む）	
9:00	リハーサル〔講堂〕 11:30 生徒登校・HR〔教室〕
12:30	スタンバイ完了 12:20 講堂入場完了
12:00	開場
12:30	歓迎レセプション ①チーム入場 ②生徒代表挨拶 ③参加校・チーム紹介 ④校歌斉唱 ⑤バトン部演技披露
13:00	食のサミット開会 ①開会宣言 ②校長挨拶 ③来賓・審査員紹介
13:10	《第1部：コンテスト本選》開始 第1グループ3校：①主張プレゼン(5分)、②質疑応答(5分) 第2グループ3校：③主張プレゼン(5分)、④質疑応答(5分) ⑤評価・投票(5分) 投票後、休憩
14:30	《第2部：郷土料理ショー》開始 出場チーム各国の郷土料理の紹介と実食
15:15	《第3部：共同宣言策定》開始 ①趣旨・経過説明 ②共同宣言案の提示 ③討論 ※プレ会議のビデオ上映 ④共同宣言
15:40	《閉会行事》 ①記念品授与 ②結果発表 ③表彰 ④講評 ⑤閉会宣言
16:00	閉会
17:30	懇親会（審査員・来賓対象） 20:00終了 フェアウェルパーティー（生徒対象） 19:30終了

④サミットテーマ

世界の中高生に向けて、食に関わる諸問題の解決策を考えるためのテーマを定めている。昨年度は、「グローバルイゼーションと郷土料理」「飢餓と貧困の撲滅」「浪費的な消費の削減」「健康的な食生活」からの選択とした。このような選択形式は、取り組みやすさという面では良かったものの、共同宣言案の

策定において各チームの主張に内容的な隔たりがあり取りまとめに苦労した。したがって、今年度は「水と食を取り巻く諸問題とその解決策」のように1つに絞った形で決定した。

また、このテーマは2月に中学生を含む全校生徒で実施した「SGH 報告会」のポスター発表のテーマと共通のもので、できるだけ早期に食のサミットへの関心を深めさせることをねらいとした。

⑤参加者全員による主体的な活動の場にする工夫

会場内の参加者全員がサミットに関心を持ち、より主体的に臨めるように次のような工夫を行った。

- ・ 予選動画の視聴と本選出場チームを選ぶ投票。
- ・ 本選出場者の最優秀チームを選ぶ投票。
- ・ パネルディスカッションへの参加。(今年度は「郷土料理ショー」への参加を予定)

⑥結果と成果(昨年度)

- ・ 予選エントリー：7ヶ国 27 チーム
- ・ 本選出場チーム：5ヶ国 6 チーム(下表3)

表3 本選出場チームとトピック

チーム名(国名)	トピック
最優秀 The Wonder Kiddoz (マレーシア)	浪費的な消費の削減
R. E. A. C. H (アメリカ)	貧困と飢餓の撲滅
SAN (ウズベキスタン)	食糧との向き合い方
渡来人(韓国)	グローバルゼーションと郷土料理
LOVE FOOD (本校)	浪費的な消費の削減
To Eat (本校)	日本食の衰退

- ・ 審査(評価)項目：表4のルーブリックを5名の審査員が使用し、一般参加者および生徒からの投票数の合計で最優秀を決定し、表彰した。
- ・ サミット前後のアンケート(15項目)の結果分析：これによると、いずれの項目においても事前に比べ事後の方が肯定的に捉えている回答が増加し、サミット実施による期待した効果があった。主な調査項目は次の通り。

途上国に存在する課題や解決策に関する興味/日本社会に存在する解決への意思/「食」に関する課題解決への興味/外国人の価値観に触れることへの興味・関心/海外渡航への意欲

表4 最優秀選考のためのルーブリック評価表

評価項目	非常に良い(5)	さらに上を目指せ(3)	改善を要する(1)
着眼点・一貫性	着眼点が十分に適切かつ明確である。内容にブレが見られない。	着眼点の一部が不適切か不明確。または内容にわずかなブレが見られる。	着眼点が不適切かつ不明確である。かつ内容にブレが見られる。
解決妥当性 ※得点2倍	問題解決に相応しい。かつ客観的に見て十分に実現可能である。	問題解決に相応しいが、客観的に見て実現の可能性がやや低い。	問題解決に相応しくない。または、客観的に見て実現可能でない。
工夫・表現力	理解しやすい効果的な話し方や見せ方などの工夫が随所に見られる。	理解しやすい話し方や見せ方などの工夫が一部に見られる。	理解しやすい話し方や見せ方などに工夫がほとんど見られない。

⑦課題と改善点

- ・ サミット開催により次のような課題があげられ、次回の開催へ向け各部署で改善を図っていく。
- ・ 参加する生徒の英語運用能力を高める。
 - 探究科および英語の授業での英語プレゼンやディベートの機会を増やし、実践力を養う。
- ・ 実行委員(運営する職員)の組織化を進める。
 - 実行委員総務を増員し、負担減を図る。
- ・ エントリー数を増やす方策を考える。
 - ホームページや口コミでの広報活動を強化する。
- ・ プレ会議までに、参加チームの提言について相互に意見交換を進めておく。

→ 6、7月に本選出場チームとのビデオ会議を開催。

⑧今後のサミットへ向けて

- ・ 予算規模縮小により他校チームの誘致が年々困難になってきているが、サミットを継続するために次のような方策を検討している。
- ・ 海外チームには、可能な限りの費用負担をお願いして参加を募る。来日が難しい場合には、ネットによるライブ配信などの代替手段を検討する。
- ・ 参加対象チームの枠を姉妹校や提携校、あるいは県内や九州内の学校に転換し、「福岡(九州)食のサミット」という形で実施する。

このサミットを通じての参加生徒たちの成長は計り知れないものがある。本校のSGH事業で培った特色を出しながら、開催を継続していきたい。

長崎県立長崎東高等学校

世界の「平和と共栄」を目指し、 長崎から世界へ漕ぎ出す人材の育成

【構想の概要】

長崎ならではの3つの視点（国際平和、医療支援、水環境）の1つからグローバルな課題を把握させ、その解決の手立てを考察させる課題研究を中心とした取組を行うことにより、日本及び世界の「平和と共栄」を目指して、グローバルな課題の解決に積極的に取り組むリーダーを育成するためのプログラムを研究開発する。

長崎県立長崎東高等学校 S G H 構想図

世界の「平和と共栄」を目指し、長崎から世界へ漕ぎ出す人材の育成

【長崎の持つ教育資源】

- 被爆地として世界に平和の尊さを発信する取組
- 海外との交流の歴史を背景に持つ文化
- 他のアジア諸国と共通している地理的な特性
- 環境保全の取組を推進している企業・行政の活動
- 感染症等に関する先進的な医学研究

【育成したい資質能力】

- 世界の平和を希求し、人類の持続可能な発展に資する精神
- 自他への思い遣いを持ち、幅広く異文化を理解しようとする態度
- グローバルな課題を自分のものとして捉え、その解決に向けて行動する力
- 責任感や協調性などを養むリーダーシップとフォローアップ
- 世界の人々に対して、自分の考えを効果的に伝える力

3年間の研究の流れ

学年[学科]	1学年[普通・国際科]	2学年[国際科]	3学年[国際科]
教育課程上の位置づけ	学校設定科目[ナガサキタイム] ・特別活動	総合的な学習の時間 ・特別活動	
内容	認識 - 長崎・再発見 - ・長崎とつながるグローバルな課題を 発見する活動 ・留学生等との意見交換会 ・国内フィールドワーク ・SGH講演会 ・SGH講演会 ・課題研究発表会 I	考察 - グローバル課題の解決策 - ・1年次に把握した、グローバルな 課題についての研究活動 ・国内・海外フィールドワーク ・SGH講演会 ・論文作成 ・課題研究発表会 II	鑑賞 - 長崎から世界へ - ・論文作成 ・長崎東SGH+フォーラム(最終発表) ・最終報告書(グループ別)の作成 ・成果の普及

「グローバルスタディ」を学びの軸とした各教科の授業実践
アクティブラーニングを取り入れた授業を、全教科で計画的・体系的に展開

英語によるコミュニケーション能力の向上
研究成果や自分の考えを効果的に伝える英語力の向上

目指す成果(育成したい人物像)
グローバルな課題の解決に向けて積極的に行動できるリーダーの育成
将来的に、国際機関職員、研究者、国際貢献活動に積極的に取り組む企業人等として活躍

平成30年度実施用教育課程表(国際科)

教科	科目	標準 単 位	必 履 修 科 目	高校1年		高校2年		高校3年		
				普通・国際科	国際科	文系	理系	文系	理系	
国語	国語総合	4	○	6						
	現代文B	4			3	2	2	2		
	古典B	4			3	3	4	3		
地理 歴史	世界史A	2	○					★(2)		
	世界史B	4		★3	★(3)	3		(3)	(3)	
	日本史A	2								
	日本史B	4	○		(3)	(3)	(4)	(3)	(3)	
	地理A	2						(2)		
	地理B	4			(3)	(3)	(4)	(3)		
公民	現代社会	2	○	★2						
	倫理	2								
	政治・経済	2								
数学	数学I	3	○	3						
	数学II	4		2	4	2	3			
	数学III	5				2		4		
	数学A	2		2			3	2		
	数学B	2			2	2	3	2		
理科	※科学と人間生活	2	※		2					
	物理基礎	2	※		(2)					
	物理	4	※		(2)			(4)		
	化学基礎	2	※	2						
	化学	4	※		3			4		
	生物基礎	2	※		2	(2)	2			
	生物	4	※		(2)			(4)		
	地学基礎	2	※		2		2			
	英語	総合英語	3~15	※※		4	3	2		
	英語理解	2~8				2	2	2	2	
英語表現	3~10			3			3	2		
時事英語	2~8				2	2				
異文化理解	2~8	※※					2	2		
※日本語探究								★1		
※国際理解	※地歴特論					★1				
※サイエンス特論							★1	★1		
※ナガサキタイム				★1						
ホームルーム	3	○		1	1	1	1	1		
総合的な学習	3~6	○			1	1	1	1		
履修単位数合計				35	35	35	35	35		

- ・1学年の「社会と情報」の1単位は、「ナガサキタイム」で代替する。
- ・2、3学年の「総合的な学習」では、SGH「グローバルスタディ」の内容を実施する。
- ・※※「総合英語」「異文化理解」は、原則履修科目。
- ・文系では、★「現代社会」「世界史B」「地歴特論」「日本語探究」「ナガサキタイム」は、専門科目とみなす。
- ・理系では、★「現代社会」「世界史A」もしくは「世界史B」「サイエンス特論」「ナガサキタイム」は、専門科目とみなす。

SGH研究開発と教科の取組

「長崎の視点からグローバル課題を考察させるためのプログラム開発」（研究開発単位Ⅰ）として以下の取組や活動を行っている。

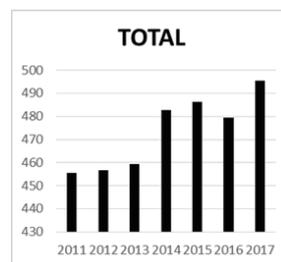
- ① SGH 基調講演会（長崎大学学長）
- ② SGH 講演会（長崎大学，長崎県立大学の教員等）
- ③ 国内FW（長崎大学，長崎県立大学，協和機電工業，長崎市，浦上浄水場，原爆資料館等）
- ④ 大学教員，院生，留学生等との意見交換会（長崎大学，長崎県立大学，長崎外国語大学，マサチューセッツ工科大学，コンコーディア大学等）
- ⑤ 海外の生徒との意見交換（シンガポール国立大学，ホーチミン師範大学，ハーバード大学，ウィスコンシン大学等）
- ⑥ 海外FW（長崎大学熱帯医学研究所ベトナム研究拠点，WHO，JICA ベトナム，国連軍縮部等）

上記プログラムは学校設定教科「国際理解」，「総合的な学習の時間（グローバルスタディ）」，及び「特別活動」において実施している。高校1年生では学校設定科目「ナガサキタイム（1単位）」を設定し，学年全職員が課題研究の指導にあたる。「平和」「医療」「水」に関する課題研究をサポートするため，高校1年次では各教科が連動し，関連する学習内容やスキルの向上に取り組む。具体的には「保健」や「家庭基礎」の授業では疾病や仮想水について教示し，課題研究のテーマ設定や社会問題について考察する力を養っている。様々な視点から平和問題をとらえさせるために「現代社会」の授業では国連，公害，難民について4月当初に取り上げ，「SGH 講演会」との連動性を高める。グローバル人材育成のためには「コミュニケーション能力の向上」（研究開発単位Ⅲ）が必要なことから，日本語や英語での発表技術を高めることを目的とし，「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」「国語総合」等の授業ではプレゼンテーション，ポスター発表，スピーチを実施している。

高校2年次では，学校設定科目「サイエンス特

論」において英語で書かれた教材を用いて生物を学んでいる。生徒は実験や標本作製の過程を論理的なレポートにまとめ，理科教員がレポート評価を行う。こうした学びが，「総合的な学習の時間（グローバルスタディⅡ）」で英文レポートを作成する際に役立つものと考えている。また，「発信力を育成する」（研究開発単位Ⅲ）のために，長崎大学や長崎県立大学の英語教員と本校英語科教員が連携して「パラグラフライティング講座」や「英語論文講座」をリレー方式で実施し，全研究班が英語レポートを作成している。「時事英語」の授業では週に2回，英語ネイティブ講師と日本人英語教師のチームティーチングが行われ，エッセイライティングや模擬国連プログラムに取り組んでいる。こうした活動が，生徒の英語による発信力や課題研究英文レポート作成技術の向上に寄与している。

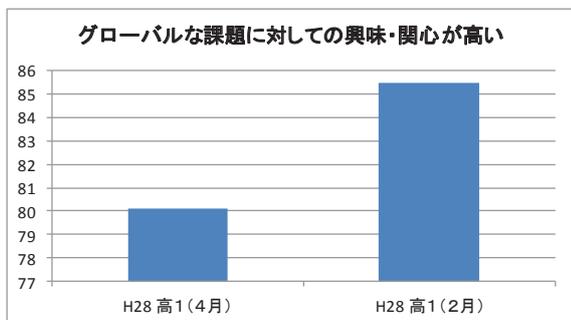
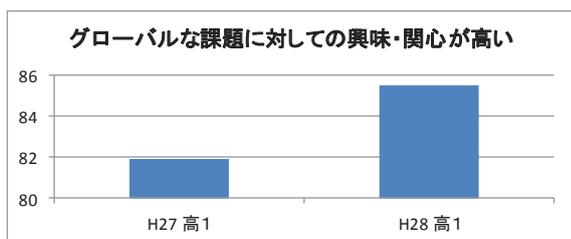
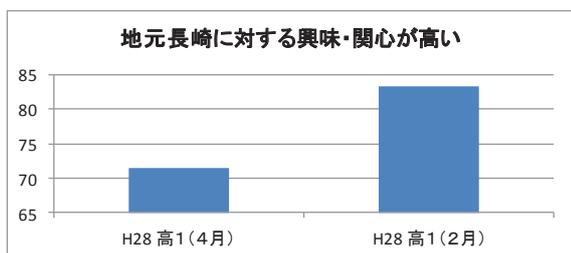
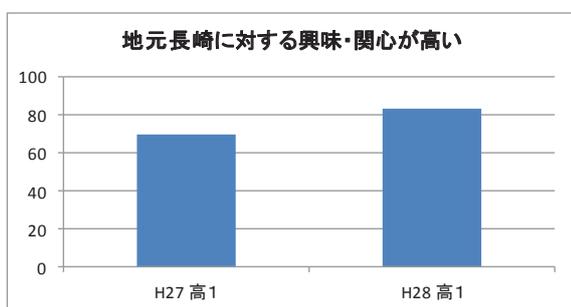
高校3年次の「サイエンス特論」では国際バカロレア対応教材を活用して，英語をとおして数学を学ぶことも行っている。数学的発想力，深い考察力，多面的思考力の育成をねらいとしている。生徒が担当の数学教員に英語で記された問題を解説する場面があり，生徒と教員が協働で学び合う課題解決型学習となっている。こうした合教科型授業はSGH指定以前は見られなかった。英語科の「異文化理解」の授業では，即興ディベートやスピーチ活動が実践されているが，そのねらいのひとつには課題研究プレゼンテーションやポスター発表における質疑応答のやりとりをスムーズにすることがある。生徒の変容を測るエビデンスとしてベネッセコーポレーションの英語技能試験GTECを用いている。2014年にアソシエイト校に指定され，英語の4技能統合型授業に取り組んできた結果，下表のような成果が見られる。



※高校1年次12月実施

また，H30年3月に卒業したSGH対象生徒のうちCEFRのB1以上は91%であり，成果目標の90%を上回る結果となった。

年度末に実施する生徒自己評価では、「地元長崎に対する興味・関心が高い」、「グローバルな課題に対する興味・関心が高い」という項目に肯定的な回答（「あてはまる」、「だいたいあてはまる」）をした生徒がいずれも高い割合を示している。次表で示されたとおり、平成28年度の高校1年生の方が前年度生よりも高い結果となっている。これは指定2年目になり、プログラムの内容が充実したことや高校教員の指導体制が改善されたことが一因であると考察している。特に顕著な結果が見られた「指定1年次（H27）の高校1年生」と「指定2年次（H28）の高校1年生」との比較と、指定2年次における高校1年生の4月から2月の推移を以下に示す。



評価エビデンス

「グループ型探究学習のプログラム開発」（研究開

発単位Ⅱ）を主として次のように行っている。各研究班を4～6名で構成し、班長1名と記録係1名を選出する。班長は指導教員（担任・副担任に加え他学年の教員が関わることもある）に課題研究の進捗状況を報告し、指導教員からの助言を班員に伝える。記録係は探究学習をポートフォリオに記録する。ポートフォリオは班長、個人、指導教員の3人の視点で評価することを試みている。各班員は交代制で講演会、演習講座、意見交換会等に参加し、収集した情報を班内で共有する。こうした役割分担によって責任感が養われ、協働的思考力やコミュニケーション力を向上させることができる。また、自分と他者の意見を比較することで批判的思考力や創造的思考力が涵養されると考える。

指定2年目の平成28年12月から「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」を多面的かつ客観的に測定するために、ベネッセコーポレーションの「GPS - Academic」テストを用いて経年経過を測っている。平成29年度の高校2年生SGH対象生徒（国際科80名）の総合評価は次表のとおりである。

網掛けで示したA評価の数値は全国集計を上回っている。特に協働的思考力と創造的思考力において2年生国際科の数値が高いことがわかる。

※ A評価は高校卒業レベル

思考力	批判的思考力		協働的思考力		創造的思考力	
	全国	国際科	全国	国際科	全国	国際科
S	0%	0%	2%	6%	1%	3%
A	20%	29%	34%	59%	24%	44%
B	58%	62%	51%	35%	58%	54%
C	21%	9%	12%	0%	16%	0%
D	1%	0%	1%	0%	1%	0%

課題研究に必要な主体的で協働的な深い学びを推進するために、AL研修会を年2回実施している。AL週間を6月と10月に設定し、併設の中学校を含めて全職員がAL型授業を実施し、代表者が研究授業を行う。校種と教科を越えた授業参観と授業研究会を毎回行うことで、カリキュラムマネジメントや教科横断型の授業開発視点を醸成している。また、SGH課題研究では論理的思考力、考察力、コミュニケーション力が必要なことから、H29年度は「深い思考につながる発問」、H30年度は「発問・書く」

を全教員の共通テーマとしてAL型授業開発に取り組んでいる。AL型授業はSGH対象生徒はもとより、併設する中学校や高校の非対象生徒全員に実施される。AL型授業に全教員が取り組んで3年目となり、協働学習や発表活動に改善と深化が見られることが指導助言者である京都大学の溝上慎一教授や熊本大学の川越明日香准教授からも指摘されている。AL型授業の浸透は、前述のGPSテストで協働的思考力や創造的思考力の評価が高いことの要因とも考えられる。なお、成果普及として10月の研究授業と研修会は他校教員にも公開している。



H28年度研究授業（外部公開）本校体育館

「第1回九州SGHフォーラム」（成果普及）

SGH事業成果の普及を目的として当初計画どおり指定3年次に「長崎東SGHフォーラム」を開催した。指定4年次の本年度はこれを拡大し、「第1回九州SGHフォーラム」（H30.7/9）の開催準備を進めている。九州内のSGH指定校14校とアソシエイト校4校に参加を呼びかけ、12校の生徒と教員が参加を予定している。プログラムの内容は長崎大学前学長の片峰茂氏による基調講演、8校による英語プレゼンテーション、3校による英語ポスター発表、5校の代表生徒によるパネルディスカッションである。フォーラム前日には「生徒交流会」を企画し、参加校の生徒・教員が情報交換できるよう工夫した。ホスト校として、生徒交流会やフォーラムの運営（司会）、会場案内は高校3年生を中心に行う予定である。

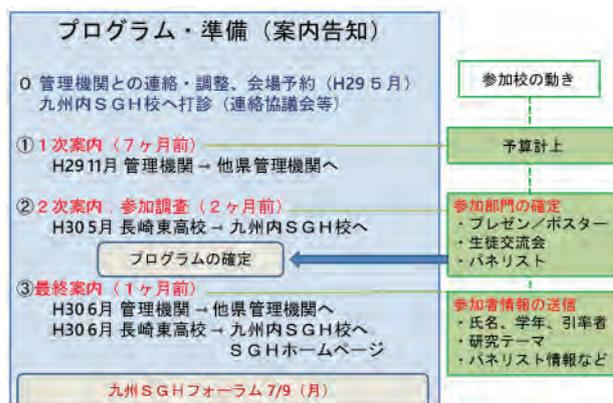
本フォーラムのテーマを「SGHで身につく力と将来への展望」とし、パネルディスカッションのファシリテーターには本校SGH運営指導委員を指定1年次より務める山口大学准教授の陳内秀樹氏にお願いした。なお、案内文書は長崎県内ほぼすべて

の公立・私立高校にも送付し、SGHホームページ及び本校ホームページにも掲載した。主なプログラムと発表校を次にまとめる。

<p>基調講演 長崎大学前学長 片峰茂氏</p> <p>英語プレゼンⅠ（午前） ①大分上野丘 ②五ヶ瀬 ③鞍手 ④京都 ⑤福岡雙葉</p> <p>英語プレゼンⅡ（午後） ⑥明治学園 ⑦長崎東 ⑧甲南</p> <p>英語ポスター ①長崎東 ②佐賀農業 ③水俣</p> <p>パネルディスカッション ・雙葉、明治、長崎東、済々黉、甲南</p>
--

本フォーラムのモデルとしたのは鹿児島県立甲南高等学校（H27指定校）が主催する「高校生国際シンポジウム」である。平成27年度より毎年約12名の生徒と2名の教員を派遣し、さまざまな教育的効果を楽しんできた。ホスト校の生徒が主体的に運営に関わる積極的な姿勢、課題研究の口頭発表やポスター発表での意見交換、生徒交流会での学び合いなど、参加した生徒だけでなく教員の資質向上にもつながる素晴らしいシンポジウムである。

本フォーラムを開催するにあたり、14か月前から管理機関との連絡や調整を進め、会場（長崎ブリックホール）を予約した。平成29年6月に開催された「平成29年度スーパーグローバルハイスクール連絡協議会」等、他の九州内SGH校担当者と会する機会を利用し、周知を図った。開催までの準備を下記フローにまとめる。



H30年6月24日現在、参加者数は未確定ではあるが、600名を超えるものと思われる。他校教員の参加も30名以上が見込まれる。次年度も本フォーラムを改善し、成果普及に努めていきたい。

文部科学省初等中等教育局国際教育課計画指導係
〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
TEL : 03-5253-4111 [内線3300] E-mail : sgh@mext.go.jp

〈幹事校管理機関〉 筑波大学附属学校教育局
担当：筑波大学東京キャンパス事務部企画推進課国際担当
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
TEL : 03-3942-6432 E-mail : sgh-kanjiko@un.tsukuba.ac.jp



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN



筑波大学
University of Tsukuba

発行：2018年7月
<http://www.sghc.jp/>